財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第40集

中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(17)

家ノ城跡

2012

財団法人 広島県教育事業団

家ノ城跡発掘調査後遠景（北東上空から）

例　言

1　本書は，平成15（2003）～19（2007）年度にかけ，５次にわたり実施した中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う家ノ城跡（尾道市木ノ庄町木梨字家城東平所在）の発掘調査報告である。

2　平成17年度までの発掘調査及び整理作業は，日本道路公団中国支社（10月から西日本高速株式会社中国支社が業務継承）との委託契約により財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）が実施し，平成18年度以降の発掘調査及び整理作業・報告書作成は，国土交通省中国地方整備局福山河川国道事務所との委託契約により調査室が実施した。

3　発掘調査の担当者は，次のとおりである。

第１次調査（平成15年度）

梅本健治（主任調査研究員）

東海アナース株式会社が支援業務を行った。東海アナースの調査員は藤田明弘，若林純也である。

第２次調査（平成16年度）

辻満久（調査研究員），山田繁樹（調査研究員）

第３次調査（平成17年度）

岩本正二（事業調整監），唐口勉三（調査研究員）

第４次調査（平成18年度）

唐口勉三（調査研究員）

株式会社イビソクが支援業務を行った。イビソクの調査員は持田透，松田繁である。

第５次調査（平成19年度）

岩本芳幸（調査研究員，現・広島県立白木高等学校），新井真吾（調査研究員，現・北広島町立豊平南小学校）

4　出土遺物の整理・復元・実測・図面の整理・写真撮影は，辻・岩本（芳），賃金職員の氏房晃子・有原ひろみ・大田けい子が中心となって行った。

5　本書は，岩本（芳）が執筆・編集した。

6　本書で使用した遺構の表示記号は，次のとおりである。

ＳＡ：柱穴列，ＳＢ：建物跡，ＳＣ：通路，ＳＤ：溝状遺構，

ＳＫ：土坑，ＳＸ：その他の遺構

7　図版の遺物番号と挿図の遺物番号は同一である。

8　本書に使用した北方位は，すべて世界測地系平面直角座標第Ⅲ座標系北である。

9　第２図は，国土交通省国土地理院発行の１：50,000の地形図（尾道・府中）を使用した。

10　記録類及び出土品は，全て広島県立埋蔵文化財センター（広島市西区観音新町四丁目８番49号）において保管している。

目　次

Ⅰ　はじめに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ (１)
Ⅱ　位置と環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ (５)
Ⅲ　調査の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ (９)
Ⅳ　遺構と遺物（１郭周辺） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ (16)
　１　１郭 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ (16)
　２　１郭東側切岸 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ (77)
　３　北東尾根 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ (81)
　４　北尾根・北西尾根 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ (83)
Ⅴ　遺構と遺物（南東尾根） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ (110)
Ⅵ　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ (115)

挿図目次

第１図　中国横断自動車道尾道松江線路線と調査した遺跡の位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(４)
第２図　家ノ城跡周辺遺跡分布図（1：50,000） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(８)
第３図　調査前地形図　(1：1,500) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(11)
第４図　調査区位置図　(1：2,500) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(12)
第５図　１郭周辺第３次調査トレンチ配置図　(1：600) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(13)
第６図　１郭周辺グリッド図　(1：600) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(14)
第７図　１郭周辺遺構配置図（1：500） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・折込み
第８図　１郭周辺断面図　(1：500) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(15)
第９図　１郭遺構配置図（1：200） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・折込み
第10図　ＳＢ１実測図　(1：80) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(17)
第11図　ＳＢ２・ＳＸ２実測図　(1：80) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(19)
第12図　ＳＢ２・４出土土器類実測図（1：3） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(20)
第13図　ＳＢ３実測図　(1：80) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(22)
第14図　ＳＢ４実測図（1：100） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(24)
第15図　ＳＢ５・ＳＸ１実測図　(1：80) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(26)
第16図　焼土１・３・４実測図　(1：30) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(27)
第17図　ＳＡ１実測図　(1：80) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(25)
第18図　ＳＸ１出土土器類実測図（1：3，1：6） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(30)

第19図　ＳＸ２出土土器類実測図　（1：3，1：6）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(31)
第20図　ＳＸ12・13実測図（1：40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(35)
第21図　ＳＸ13出土土器類実測図　（1：3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(36)
第22図　ＳＫ１・２・12・15・16・22実測図（1：40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(37)
第23図　ＳＫ５・ＳＸ２実測図（1：40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(39)
第24図　ＳＫ８・９・11実測図（1：40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(41)
第25図　ＳＫ10・13・14実測図（1：30）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(43)
第26図　ＳＫ２・５・11・12・14出土土器類実測図　（1：3，1：6）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(45)
第27図　ＳＫ21・24・26・28～30実測図（1：40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(47)
第28図　ＳＫ25・32～34・38実測図（1：40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(51)
第29図　ＳＫ35～37実測図（1：40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(53)
第30図　ＳＫ21・25・27・28～30・33・35・36出土土器類実測図　（1：3，1：6）・・・・・・・・・・・・・(55)
第31図　ＳＫ39実測図（1：40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(56)
第32図　ＳＫ40～42実測図（1：40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(57)
第33図　ＳＫ37～40出土土器類実測図　（1：3，1：6）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(58)
第34図　ＳＤ11・12出土土器類実測図　（1：3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(62)
第35図　１郭ピット出土土器類実測図（1：3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(64)
第36図　１郭トレンチ１出土土器類実測図（1：3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(65)
第37図　１郭トレンチ２出土土器類実測図（1：3，1：6）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(65)
第38図　１郭トレンチ３出土土器類実測図（1：3，1：6）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(67)
第39図　ＳＸ１・１郭遺構外出土土器類実測図（１）　（1：3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(69)
第40図　１郭遺構外出土土器類実測図（２）　（1：3，1：6）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(71)
第41図　１郭遺構外出土土器類実測図（３）（1：3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(73)
第42図　１郭遺構外出土土器類実測図（４）（1：3，1：6）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(74)
第43図　１郭東側切岸実測図（1：200），ＳＣ１土層断面図（1：100）・・・・・・・・・・・・・・・・・(76)
第44図　１郭東側切岸土層断面図（1：100）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(77)
第45図　１郭東側切岸・堀切１他出土土器類実測図（1：3，1：6）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(79)
第46図　北東尾根遺構配置図（1：200）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・折込み
第47図　北尾根・北西尾根遺構配置図（1：200）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・折込み
第48図　堀切１・平坦面４土層断面図（1：100），北尾根・北西尾根土層断面図（1：200）・・・・・・・(83)
第49図　１郭周辺出土土製品実測図（1：2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(86)
第50図　１郭周辺出土瓦実測図（1：4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(87)
第51図　１郭周辺出土石製品実測図（1：2，1：3）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(88)
第52図　１郭周辺出土鉄製品実測図（１）　（1：2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(89)
第53図　１郭周辺出土鉄製品実測図（２）（1：2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(90)
第54図　１郭周辺出土鉄製品実測図（３）（1：2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(91)
第55図　１郭周辺出土鉄製品実測図（４）（1：2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(92)
第56図　１郭周辺出土鉄製品実測図（５）（1：2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(93)
第57図　１郭周辺出土銅製品他実測図（1：2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(94)
第58図　１郭周辺出土古銭拓影（１）（原寸）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(97)
第59図　１郭周辺出土古銭拓影（２）（原寸）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(98)
第60図　南東尾根遺構配置図（1：200）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・折込み
第61図　南東尾根地形図（1：400）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(109)

第62図　南東尾根ＳＸ１・２実測図（1：40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(110)
第63図　南東尾根ＳＸ３実測図（1：40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(111)
第64図　南東尾根ＳＤ１実測図（1：60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(111)
第65図　南東尾根出土遺物実測図　（1：2，1：3，1：4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(112)

表目次

第１表　中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う報告書一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(２)
第２表　１郭周辺遺構別出土古銭一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(95)
第３表　１郭周辺出土土器類観察表１・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(99)
第４表　１郭周辺出土土器類観察表２・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(100)
第５表　１郭周辺出土土器類観察表３・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(101)
第６表　１郭周辺出土土器類観察表４・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(102)
第７表　１郭周辺出土土器類観察表５・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(103)
第８表　１郭周辺出土土製品・瓦計測表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(104)
第９表　１郭周辺出土石製品計測表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(104)
第10表　１郭周辺出土金属製品計測表1・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(105)
第11表　１郭周辺出土金属製品計測表２・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(106)
第12表　１郭周辺出土古銭一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(107)
第13表　南東尾根出土土器類観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(112)
第14表　南東尾根出土瓦・銅製品計測表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(112)
第15表　１郭遺構別中世土器類組成表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(117・118)
第16表　１郭周辺中世土器類組成表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(119)

図版目次

巻頭図版　家ノ城跡発掘調査後遠景（北東上空から）
図版１ａ　家ノ城跡発掘調査後遠景（北東上空から）
　　ｂ　第３・４次調査区調査後全景（北上空から）
図版２ａ　第３・４次調査区調査後全景（直上から）
　　ｂ　１郭東半部（第３・４次調査区）完掘全景
　　（北上空から）
図版３ａ　第５次調査区調査後全景（北西上空から）
　　ｂ　1郭西半部（第５次調査区）完掘全景
　　（直上から，上が東）
図版４ａ　第５次調査前遠景（北東から）
　　ｂ　第５次調査前近景（北東から）
　　ｃ　第５次調査後近景（北から）

図版５ａ　１郭東半部（第３・４次調査区）完掘状況（南から）
ｂ　1郭西半部（第５次調査区）完掘状況（南西から）
ｃ　1郭西半部（第５次調査区）完掘状況（南東から）
図版６ａ　ＳＢ１全景（北東から）
ｂ　ＳＢ１西側根石検出状況（北東から）
ｃ　ＳＢ２・ＳＸ２検出状況（西から）
図版７ａ　ＳＸ２・ＳＫ５土層断面（南西から）
ｂ　焼土１検出状況（南西から）
ｃ　焼土２検出状況（南から）
図版８ａ　ＳＢ３全景（北から）
ｂ　ＳＢ３全景（北から）
ｃ　ＳＢ４全景（北から）
図版９ａ　焼土４・ＳＢ１－Ｐ２土層断面（南西から）
ｂ　焼土４完掘全景（北西から）
ｃ　ＳＢ５・ＳＸ１検出状況（北から）
図版10ａ　ＳＡ１全景（南東から）
ｂ　ＳＫ２粘土部分半裁（南から）
ｃ　SK８礫検出状況（南から）
図版11ａ　ＳＫ９礫検出状況（東から）
ｂ　ＳＫ10・13・14完掘状況（南西から）
ｃ　ＳＫ14遺物出土状況（西から）
図版12ａ　ＳＫ11検出状況（北東から）
ｂ　ＳＫ12礫検出状況（西から）
ｃ　ＳＫ21完掘状況（南東から）
図版13ａ　ＳＫ25礫検出状況（南から）
ｂ　ＳＫ32完掘状況（北西から）
ｃ　ＳＫ33遺物出土状況（東から）
図版14ａ　ＳＫ33・34完掘状況（西から）
ｂ　ＳＫ35完掘状況（西から）
ｃ　ＳＫ36遺物出土状況（東から）
図版15ａ　ＳＫ36・37完掘状況（東から）
ｂ　ＳＫ38完掘状況（南東から）
ｃ　ＳＫ39完掘状況（北西から）
図版16ａ　ＳＫ40完掘状況（南東から）
ｂ　ＳＫ41・42完掘状況（南東から）
ｃ　ＳＸ12・13完掘状況（北から）
図版17ａ　北東尾根完掘状況（西から）
ｂ　北東尾根完掘状況（南西から）
ｃ　北東尾根完掘状況（北から）
図版18ａ　北東尾根平坦面１土層断面（東から）
ｂ　北東尾根平坦面２土層断面（東から）
ｃ　北東尾根平坦面３土層断面（東から）
図版19ａ　北尾根完掘状況（東から）
ｂ　北尾根完掘状況（南から）
ｃ　北尾根平坦面５土層断面（東から）
図版20ａ　北尾根堀切２土層断面（東から）
ｂ　北尾根堀切２・平坦面７完掘状況（南から）
ｃ　北側平坦面４・土橋完掘状況（南東から）
図版21ａ　堀切１土橋部分（北東から）
ｂ　堀切1土層断面（北東から）
ｃ　堀切１北東部（北東から）
図版22ａ　北西尾根完掘状況（南東から）
ｂ　1郭西半部調査風景（南西から）
ｃ　家ノ城跡から鷲尾山城を望む（南から）
図版23　１郭周辺出土土器類（１）（ＳＢ２・４，ＳＸ１）
図版24　１郭周辺出土土器類（２）（ＳＸ１・２）
図版25　１郭周辺出土土器類（３）（ＳＸ２）
図版26　１郭周辺出土土器類（４）（ＳＸ13，ＳＫ２・５・11・12）
図版27　１郭周辺出土土器類（５）（ＳＫ14・21・25・27～30・33・35）
図版28　１郭周辺出土土器類（６）（ＳＫ36～38）
図版29　１郭周辺出土土器類（７）（ＳＫ39，ＳＤ11・12）
図版30　１郭周辺出土土器類（８）（１郭ピット，トレンチ１・２）

図版31　１郭周辺出土土器類（９）（トレンチ３，Ｆ７，Ｇ８区）
図版32　１郭周辺出土土器類（10）（Ｇ８～12区）
図版33　１郭周辺出土土器類（11）（G13，H11・13区）
図版34　１郭周辺出土土器類（12）（H13・14，Ｉ10・11区）
図版35　１郭周辺出土土器類（13）（Ｉ12，Ｊ９・10区　１郭第４次調査区，１郭東側切岸）
図版36　１郭周辺出土土器類（14）（堀切１，北尾根，北西尾根），１郭周辺出土土製品，１郭周辺出土瓦
図版37　１郭周辺出土石製品，１郭周辺出土鉄製品（１）
図版38　１郭周辺出土鉄製品（２）
図版39　１郭周辺出土鉄製品（３）
図版40　１郭周辺出土鉄製品（４）
図版41　１郭周辺出土鉄製品（５），１郭周辺出土銅製品，１郭周辺出土漆紙
図版42　１郭周辺出土古銭
図版43 a　南東尾根南半部（第１次調査区）調査後遠景(南上空から)
　b　南東尾根南半部（第１次調査区）完掘全景（南東上空から）
図版44 a　家ノ城跡（第２次調査後）遠景（北・鷲尾山城跡から）
　b　南東尾根北半部（第２次調査区）調査後遠景（南から）
　c　南東尾根南半部（第１次調査区）完掘全景（北から）
図版45 a　南東尾根南半部（第１次調査区）完掘全景（南から）
　b　南東尾根北半部（第２次調査区）完掘全景（北から）
　c　南東尾根北半部（第２次調査区）完掘全景（南から）
図版46 a　南東尾根平坦面１（北から）
　b　南東尾根平坦面２（北から）
　c　南東尾根平坦面３（北東から）
図版47 a　南東尾根平坦面４（北から）
　b　南東尾根平坦面４・５（北から）
　c　南東尾根ＳＸ１完掘状況（東から）
図版48 a　南東尾根ＳＤ１・ＳＸ１完掘状況（北から）
　b　南東尾根ＳＸ２土層断面（東から）
　c　南東尾根ＳＸ２瓦出土状況（東から）
図版49 a　南東尾根ＳＸ３土層断面（南東から）
　b　南東尾根ＳＸ３完掘状況（北東から）
　c　南東尾根ＳＸ３完掘状況（北西から）
図版50　南東尾根出土遺物

Ⅰ　はじめに

家ノ城跡の発掘調査は，中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴うものである。中国横断自動車道尾道松江線は，中国地方を南北に貫き，瀬戸内海側の広島県尾道市から広島県世羅町・三次市・庄原市を経て日本海側の島根県松江市に至る総延長約 137km の高速自動車国道である。このうち広島県内の路線は約 86 ㎞である。本事業は，山陽自動車道・中国自動車道・山陰自動車道を接続するだけではなく，西瀬戸自動車道（瀬戸内しまなみ海道）と一体になって，中四国地域連携軸構想の推進，経済圏・商業圏の拡大，山陽・山陰間の交流促進，広域観光ネットワークの創造を図ろうとするものである。

当該事業地内の尾道 JCT から世羅 IC までの区間については，本事業を推進する日本道路公団中国支社尾道工事事務所（以下「道路公団」という。）と広島県教育委員会（以下「県教委」という。）は，平成 11（1999）年７月から文化財等の有無及び取扱いについて協議を始めた。家ノ城跡については，県教委は現地踏査後平成 14 年２月 13 日に，道路公団に対しその範囲を回答した。この遺跡の取扱いについて県教委と道路公団は協議を重ねたが，設計変更による現状保存は不可能との結論に達した。

これを受けて道路公団では，平成 15 年３月 10 日に文化財保護法第 57 条の３第１項（現・第 94 条第１項）に基づく埋蔵文化財発掘通知を県教委に提出し，県教委から平成 15 年４月１日に工事着手前の発掘調査が必要である旨の通知を受けた後，工事を優先する部分から順次，発掘調査の実施を財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という。）に依頼した。平成 15 年４月からセンターの業務を引き継いだ財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室（以下「教育事業団」という。）が，家ノ城跡の第１～３次発掘調査を順次実施した。その後，平成 17 年 10 月１日に当該事業は西日本高速道路株式会社（以下「西日本高速」という。）に引き継がれた。

さらに平成 18 年度から当該事業は国土交通省の直轄事業となったため，西日本高速にかわり国土交通省中国地方整備局福山河川国道事務所（以下「国土交通省」という。）が家ノ城跡の発掘調査依頼を行った。これに基づき，国土交通省と教育事業団は委託契約を結び，家ノ城跡の第４・５次調査を行った。

第１次発掘調査は教育事業団から県教委あての文化財保護法第 57 条第１項（現・第 92 条第１項）に基づく埋蔵文化財の発掘調査届（以下「調査届」という。）を平成 15 年７月 29 日に提出し，県教委から発掘調査実施の通知（以下「調査指示」という。）を同年８月 19 日に受けた後，同年９月 16 日から 10 月 31 日まで実施した。第２次発掘調査は調査届を平成 16 年４月 27 日に提出し，調査指示を同年５月 14 日に受けた後，同年５月 17 日から６月 11 日まで実施した。第３次発掘調査は調査届を平成 17 年８月 29 日に提出し，調査指示を同年９月５日に受けた後，同年 10 月 17 日から 11 月 11 日まで実施した。第４次発掘調査は調査届を平成 18 年３月 16 日に提出し，調査指示を同年３月 29 日に受けた後，同年４月 17 日から７月 21 日まで実施した。第５次発掘調査は

調査届を平成19年3月14日に提出し，調査指示を同年3月29日に受けた後，同年4月16日から6月15日まで実施した。

本報告書は，以上のような経緯のもとに行った発掘調査の成果をまとめたものであり，埋蔵文化財の資料として，またこの地域の歴史の一端を知る手がかりとして，少しでも寄与できれば幸いである。

発掘調査にあたっては，国土交通省中国地方整備局福山河川国道事務所，西日本高速道路株式会社中国支社尾道工事事務所，尾道市教育委員会及び地元の方々に多大な御協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

なお，中国横断自動車道尾道松江線は尾道JCTから世羅ICまでの区間が，平成22年11月27日に供用を開始した。

第1表　中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う報告書一覧

報告書	遺跡名		地区名	調査期間	所在地	時期	内容
(1)	牛の皮城跡（北郭群）	第1次	畝状竪堀群	平成15年1月20日～3月14日	尾道市御調町大町字二の丸	中世	城跡
		第2次	1～4郭	平成15年7月7日～10月31日			
		第3次	西竪堀	平成15年11月10日～11月28日			
	曽川2号遺跡			平成15年1月20日～3月7日	尾道市御調町大町字西川	古代末～中世	集落跡
(2)	曽川1号遺跡	A地区	旧・平成14年度調査区	平成14年10月21日～平成15年1月17日	尾道市御調町大町字曽川	弥生時代～中世	集落跡
		B地区	旧・P2第一調査区	平成15年4月7日～5月23日			
		C地区	旧・P2第二調査区				
		D地区	旧・P1	平成16年1月6日～2月5日			
(3)	池ノ奥古墳			平成16年8月23日～10月28日	世羅郡世羅町字津戸字天神	古墳時代後期	古墳
(4)	城根遺跡			平成15年1月27日～3月7日	尾道市御調町大町字城根	古墳時代か	箱式石棺
	牛の皮城跡（北郭群）	第4次	5郭	平成18年1月30日～2月24日	尾道市御調町大町字二の丸	中世	城跡
	曽川1号遺跡	E地区	旧・P4	平成15年12月1日～12月19日	尾道市御調町大町字米田	縄文時代後期～中世	遺物包含層
(5)	曽川1号遺跡	G地区	旧・P3	平成16年6月7日～8月6日	尾道市御調町大町字曽川・米田	弥生時代～中世	集落跡
		H地区	旧・P3側道				
		I地区	旧・P4側道				
		J地区	旧・P2	平成17年1月11日～3月4日			
(6)	曽川1号遺跡	K地区		平成17年4月11日～7月1日	尾道市御調町大町字曽川・米田	弥生時代～中世	集落跡
(7)	札場古墳			平成17年11月21日～平成18年1月27日	三次市後山町字札場	古墳時代後期	古墳
	大平遺跡			平成19年6月21日～10月5日	三次市後山町字大平	弥生時代後期～古代	集落跡
	後山大平古墳			平成19年6月21日～10月5日	三次市後山町字大平	古墳時代後期	古墳

報告書	遺跡名		地区名	調査期間	所在地	時期	内容
(8)	北野山遺跡			平成18年7月3日～8月4日	三次市吉舎町字敷地	平安時代	仏教関連の施設跡
(9)	向江田中山遺跡			平成18年4月17日～6月23日	三次市向江田町字中山	古墳時代末～古代	集落跡
(10)	権現第1～3号古墳			平成17年7月11日～11月11日	三次市向江田町字権現	古墳時代中期	古墳
(11)	大番奥池第1～3・7号古墳			平成18年4月17日～8月4日	三次市吉舎町字敷地	古墳時代後期	古墳
(12)	茶臼古墳			平成20年7月7日～9月5日	三次市甲奴町字賀字茶臼	古墳時代中期～古代	古墳
(13)	瀬戸越南古墳			平成19年6月25日～8月10日	三次市向江田町字瀬戸越	古墳時代中期	古墳
(14)	上陣遺跡			平成19年7月9日～8月31日	三次市向江田町字上陣	古墳時代後期	集落跡
(15)	和知白鳥遺跡(第2次)			平成19年9月25日～12月21日	三次市和知町字白鳥	後期旧石器時代	集落跡
(16)	曲第2～5号古墳			平成19年7月2日～9月21日	庄原市口和町金田字本谷	古墳時代中期	古墳
(17)本書	家ノ城跡	第1次	南東郭群	平成15年9月16日～10月31日	尾道市木之庄町木梨字家城東平	中世	城 跡
		第2次	南東郭群	平成16年5月17日～6月11日			
		第3次	1郭周辺	平成17年10月17日～11月11日			
		第4次	1郭・北尾根	平成18年4月17日～7月21日			
		第5次	1郭・北西尾根	平成19年4月16日～6月15日			
(18)	片野中山第9～12号古墳			平成19年4月25日～8月10日	三次市吉舎町敷地	古墳時代中期	古 墳
	右谷遺跡			平成19年4月25日～8月10日	三次市吉舎町敷地	古墳時代後期～古代	集落跡
(19)	和知白鳥遺跡(第1次)			平成18年4月17日～12月22日	三次市和知町字白鳥・四拾貫町三重	古墳時代中期～古代	集落跡 古墳
(20)	段遺跡	第1次		平成18年9月19日～12月15日	三次市四拾貫町字段	古墳時代	集落跡
		第2次		平成19年9月25日～12月21日		後期旧石器時代	集落跡
(21)	川平第1号古墳			平成20年4月21日～6月20日	庄原市口和町常定字川平	古墳時代後期	古墳
	常定川平1号遺跡					古墳時代中期	集落跡
	常定川平2号遺跡					縄文時代	落し穴・墓
(22)	稲干場第2～4・11号古墳			平成19年10月9日～12月23日	庄原市口和町大月字稲干場	古墳時代後期	古 墳

第１表の報告書一覧

(1)財団法人広島県教育事業団『牛の皮城跡・曽川２号遺跡　中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(1)』　2005年

(2)財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(2)　曽川１号遺跡（Ａ～Ｄ地区)』　2006年

(3)財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(3)　池ノ奥古墳』　2007年

(4)財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(4)　城根遺跡 曽川１号遺跡(Ｅ地区) 牛の皮城跡(第４次)』　2008年

(5)財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(5)　曽川１号遺跡（Ｇ～Ｊ地区)』　2008年

(6)財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(6)　曽川１号遺跡（Ｋ地区)』　2008年

(7)財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(7)　札場古墳・大平遺跡・後山大平古墳』　2009年

(8)財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(8)　北野山遺跡』　2009年

(9)財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(9)　向江田中山遺跡』　2010年

(10)財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(10)　権現第1～3号古墳』　2010年

(11)財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(11)　大番奥池第1～3・7号古墳』　2010年

(12)財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(12)　茶臼古墳』　2011年

(13)財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(13)　瀬戸越南古墳』　2011年

(14)財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(14)　上陣遺跡』　2011年

(15)財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(15)　和知白鳥遺跡（第2次）』　2011年

(16)財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(16)　曲第2～5号古墳』　2011年

(17)財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(17)　家ノ城跡』　2012年

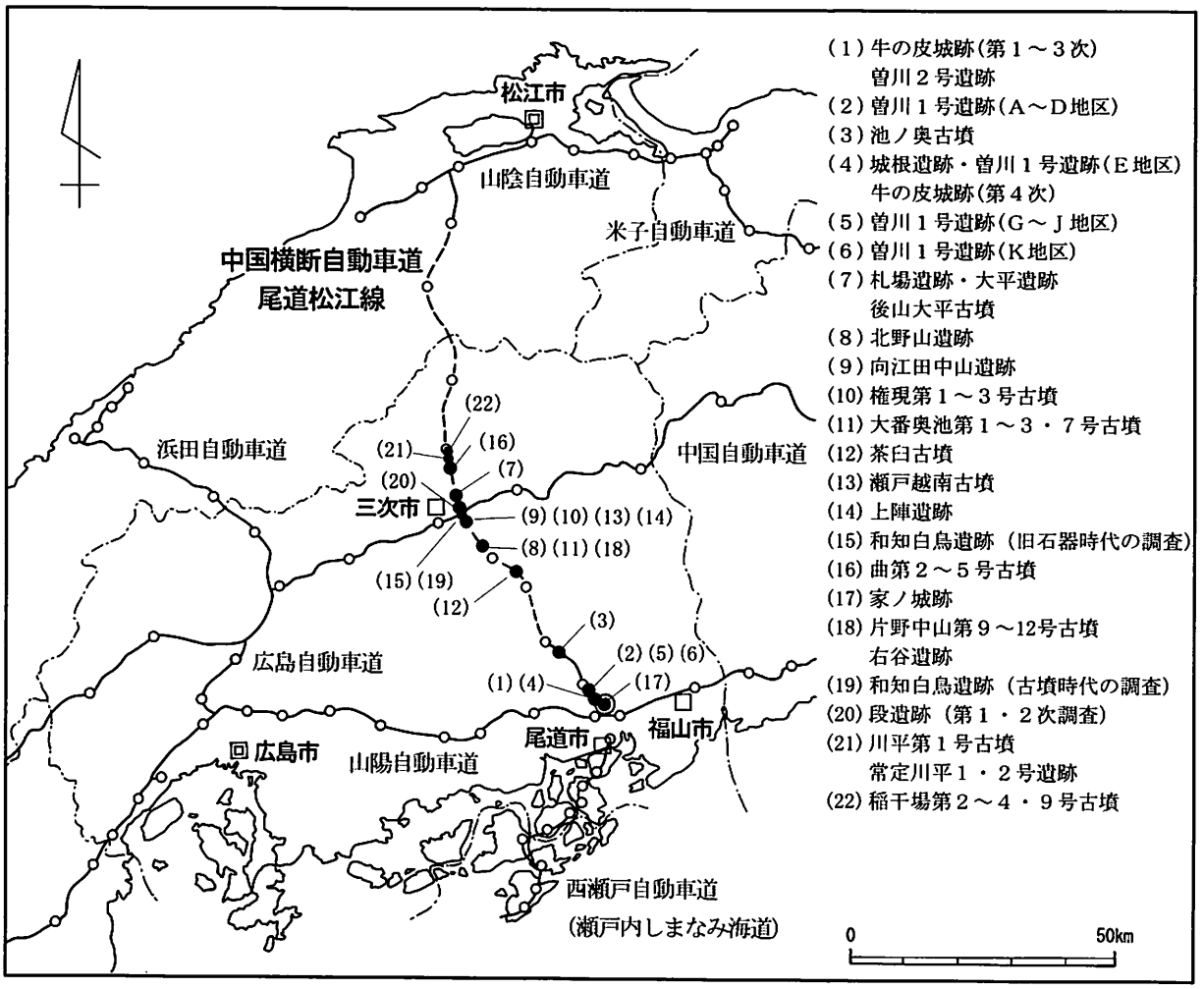
(18)財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(18)　片野中山第9～12号古墳・右谷遺跡』　2012年

(19)財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(19)　和知白鳥遺跡（第1次）』　2012年

(20)財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(20)　段遺跡』　2012年

(21)財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(21)　川平第1号古墳・常定川平1・2号遺跡』　2012年

(22)財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(22)　稲干場第2～4・9号古墳』　2012年



第1図　中国横断自動車道尾道松江線路線と調査した遺跡の位置図（(1)～(22)は報告書番号）

Ⅱ　位置と環境

家ノ城跡は，尾道市木ノ庄町木梨に所在する。尾道市は広島県の南東部に位置し，旧備後国に属していた。古くから瀬戸内海の港町として繁栄してきた。明治 31（1898）年，尾道市は広島県で２番目に市制を施行し，その後周辺部と合併して市域を拡大した。昭和 30 年代までは備後地方の最大都市であった。いわゆる「平成の大合併」により，平成 17（2005）年に御調郡御調町・向島町を，翌年には因島市，豊田郡瀬戸田町を編入し，現在に至っている。東は福山市，北は府中市・世羅郡世羅町，西は三原市，南は海を挟んで愛媛県と接している。面積は約 285 ㎢，人口は約 14 万 5 千人である。

尾道市は「坂の街」として知られ，風光明媚で，多くの古刹があることなどから，多数の観光客が訪れている。著名な作家が居を構えたり，尾道を舞台にした多くの文学作品が発表されていることから「文学の街」としても知られている。また，「映画の街」としても知られており，尾道を舞台にした映画が数多く撮影され，近年でも尾道を舞台にしたテレビドラマなどが撮影されている。

尾道市の陸上交通は，鉄道では山陽本線，山陽新幹線が東西に走り，高速自動車道路では山陽自動車道と西瀬戸自動車道（瀬戸内しまなみ海道），中国横断自動車道尾道松江線が十字に交差している。海上交通を含め，尾道市の利便性が近年急速に高まってきている。

ここでは旧尾道市の遺跡を中心に述べていくこととする。

旧石器時代～縄文時代　この時代の遺跡数は少ないが，大田貝塚[1]（高須町）は，松永湾西岸にある遺跡である。縄文時代前期から晩期まで継続したが，中期の土器が多い。多量の古式土師器・製塩土器が出土した他，約 80 体の縄文人骨が出土した。

弥生時代　弥生時代になると遺跡数は増加する。満越遺跡[2]（浦崎町）では，「木の葉文」をヘラ描きした弥生前期土器が出土する竪穴住居跡が確認された。天満原遺跡[3]（高須町）では，竪穴住居跡３軒を検出し，中期中葉から後期の土器が出土した。堂垣内遺跡[4]（西藤町）では弥生時代後期の土器が多量に出土した。貝ヶ原遺跡[5]（御調町貝ヶ原）では，赤色顔料を塗った特殊器台が出土し，後期の墳丘墓があった可能性がある。

古墳時代　古墳時代になると遺跡数はさらに増加する。黒崎山古墳（高須町）は，独立丘陵上に位置する備後地方最大級の前方後円墳で，全長約 70m である。埋葬施設は竪穴式石室で，須恵器・鉄刀・円筒埴輪などが出土しが，土取り工事により消滅した。大元山古墳（高須町）は，黒崎山古墳の約 300m 西側の独立丘陵上に立地する。未調査のまま浄水場建設により消滅した。全長 50m 前後の前方後円墳と推定されれ，鉄鉾・鉄刀・鉄鏃・円筒埴輪・形象埴輪片などが採取されている。このような大型古墳は５世紀～６世紀前半にかけて築造されたと考えられ，尾道の地理的要因と関係が深いと思われる。天神山古墳（木ノ庄町木梨）からは刀子が出土し，横穴式石室導入以前の古墳と考えられる。横穴式石室を埋葬施設とする古墳は広範囲に認められ，家ノ城跡が所在す

る藤井川流域では，２基からなる猪子迫古墳群（美之郷町），大寺古墳（同），池田山古墳（同），殿山古墳（同）などがある。木ノ庄町には天神山古墳，菖蒲山古墳，実角古墳があるが，詳細は不明である。また，先述の満越遺跡は，古墳時代を中心とする製塩遺跡で，炉跡が検出され，製塩土器が出土している。古墳時代から奈良時代まで製塩が続けられている。

古代　古代の遺跡数はそれほど多くないが，本郷平廃寺[6]（御調町丸門田）は７世紀末に創建された寺院である。中国自動車道尾道松江線建設事業に伴い調査した曽川１・２号遺跡[7]（御調町大町）は縄文時代後期から中世にかけての遺跡で，１号遺跡から古代の掘立柱建物跡や８～９世紀頃の製塩土器が出土し，２号遺跡から 12 世紀前後と考えられる掘立柱建物跡や柱状高台付皿が出土している。

中世　中世になると尾道は高野山領大田庄の倉敷地となり，年貢の積み出し港として一層発展した。大田庄と尾道を結ぶ南北の交通路が重要となり，近世には石州街道に発展していった。尾道市内では多くの城館跡[8]が確認されている。木ノ庄町域の城館跡として，土塁と堀切を有する単郭の城と考えられる門田城跡，３つの郭からなり土塁状の高まりをもつ家政城跡がある。金剛丸持倉氏館跡，木梨城跡については，詳細が不明である。鷲尾山城（木ノ庄町）は本城跡の約１ｍ北側に位置する。標高約 330ｍの最高所の郭を中心にそこから延びる３つの尾根に郭を配している。石垣・土塁・堀切・築山などの遺構が残る。

北部になるが，牛の皮城跡[9]（御調町大町）は 16 世紀の山城で，北郭群と南郭群からなり，両郭群とも大規模な畝状竪堀群を配している。本事業に伴い，北郭群の土塁を伴う郭や竪堀，郭群をとりまく畝状竪堀群などの調査を実施した。建物跡は検出されなかったが，陶磁器や土師質土器などの土器類，石製品，金属製品などが出土した。末近（せちか）城跡[10]（御調町植野）は 15 世紀後半まで築かれたと推定される小規模城跡である。郭・１間×1 間の掘立柱建物跡・堀切などを検出したが，在地領主の拠点と考えられる遺構や遺物が出土していないことなどから，「村の城」と考えられている。

城館跡以外の遺跡としては，7,545 枚という大量の古銭が出土した木梨遺跡[11]（木ノ庄町木梨）がある。尾道遺跡[12]（尾道市中心部一帯）は 1975 年から発掘調査が実施されている中世遺跡である。中世尾道が港町として繁栄したことを示す陶磁器類などの遺物や遺構が多数見つかっている。先述の曽川１号遺跡からも中世の掘立柱建物跡や土器類などの遺物が出土している。

註

（１）広島県教育委員会『広島県文化財調査報告第９集』　1971 年

（２）尾道市文化財協会『満越遺跡』　1984 年

（３）天満原遺跡発掘調査団『天満原遺跡』　1986 年

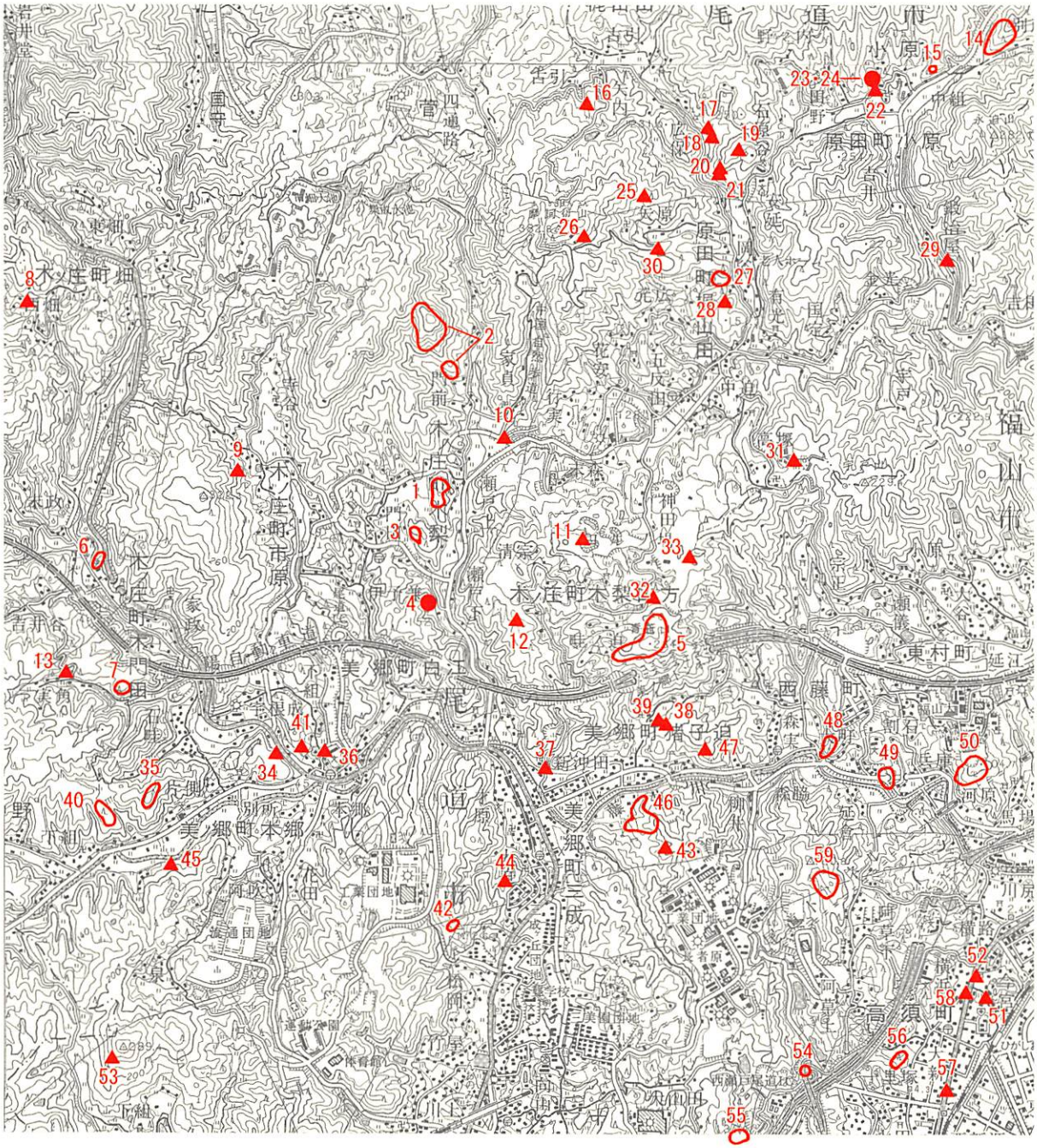
（４）広島県教育委員会『堂垣内遺跡発掘調査報告』　1977 年

（５）広島県教育委員会『広島県文化財調査報告第 17 集』　1991 年

（６）御調町教育委員会『本郷平廃寺』　1986・1989 年

（7）財団法人広島県教育事業団『曽川１号遺跡－大町地区防火水槽設置事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』　2005 年
財団法人広島県教育事業団『曽川１号遺跡（Ａ～Ｄ地区）』　2006 年
財団法人広島県教育事業団『曽川１号遺跡（Ｇ～Ｊ地区）』　2008 年
財団法人広島県教育事業団『曽川１号遺跡（Ｋ地区）』　2008 年
財団法人広島県教育事業団『曽川１号遺跡（Ｌ・Ｍ地区）』　2010 年
財団法人広島県教育事業団『牛の皮城跡・曽川２号遺跡』　2005 年
（8）広島県教育委員会『広島県中世城館遺跡総合調査報告書　第３集』　1995 年
（9）財団法人広島県教育事業団『牛の皮城跡・曽川２号遺跡』　2005 年
財団法人広島県教育事業団『城根遺跡・曽川１号遺跡（Ｅ地区）・牛の皮城跡（第４次）』　2008 年
(10) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『末近城跡』　2002 年
(11) 尾道市教育委員会『尾道市木ノ庄町木梨発掘古銭調査報告』　1964 年
(12) 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編『尾道中世遺跡発掘調査概報－尾道市土堂一丁目所在－』　1977 年
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編『尾道中世遺跡発掘調査報告－尾道市土堂二丁目所在－』　1980 年
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編『尾道－市街地発掘調査概要－1977～1980』　1978～1981 年
尾道市教育委員会『尾道－市街地発掘調査概要－1981』　1982 年
尾道市教育委員会『尾道遺跡－市街地発掘調査－1983・1984』　1984・1986 年
尾道市教育委員会『尾道遺跡－市街地発掘調査概要－1986・1988～1991』　1988・1990～1993 年　など

参考文献
・平凡社『日本歴史地名大系第 35 巻　広島県の地名』　1982 年
・角川書店『角川日本地名大辞典 34 広島県』　1987 年
・広島県教育委員会『広島県遺跡地図Ⅵ（三原市・尾道市・因島市・竹原市・豊田郡）』　1999 年



1 家ノ城跡　2 鷲尾山城跡　3 金剛丸持倉氏館跡　4 木梨遺跡　5 木梨城跡　6 門田城跡　7 家政城跡　8 西畑遺跡　9 大越古墳群　10 天神山古墳　11 山方遺跡　12 菖蒲山古墳　13 実角古墳　14 中山城跡　15 小見山城跡　16 古引山古墳　17 平原雌塚古墳　18 平原雄塚古墳　19 久都原遺跡　20 久都原第１号古墳　21 久都原第２号古墳　22 野々内遺跡　23 野々内第１号古墓　24 野々内第２号古墓　25 矢原山遺跡　26 摩訶衍寺遺跡　27 蛭子城跡　28 安藤古墳　29 小原銅山跡　30 宇戸古墳　31 花伝寺遺跡　32 堂垣内西遺跡　33 堂垣内遺跡　34 殿山古墳　35 古城山城跡　36 本郷古墳　37 大寺古墳　38 猪子迫第１号古墳　39 猪子迫第２号古墳　40 こくぞう山城跡　41 塚迫古墳　42 大迫山城跡　43 小刀遺跡　44 池田山古墳　45 大想田山古墳　46 長者原土居屋敷跡　47 柳井古墳　48 大町山城跡　49 兵庫城跡　50 山王山城跡　51 今宮古墳　52 平山古墳　53 大峰山遺跡　54 天満原遺跡　55 松尾山城跡　56 関屋城跡　57 黒崎山古墳　58 大元山古墳　59 阿草城跡

第２図　家ノ城跡周辺遺跡分布図（1:50,000）（○・●は中世遺跡，▲はその他の遺跡）
（広島県教育委員会『広島県遺跡地図Ⅵ（三原市・尾道市・因島市・竹原市・豊田郡）』　1999 年　による）

Ⅲ 調査の概要

家ノ城跡が所在する尾道市木ノ庄町木梨は，旧尾道市北部にあたる。北は尾道市御調町である。全体的に山がちの地形で，松永湾に流入する藤井川の支流木梨川沿いに平坦地が形成されている。中世には木梨庄という荘園があり，杉原氏が地頭職として支配をしていた。その本拠が木ノ庄町木梨である。西側の木ノ庄町市原には旧石州街道が通っており，交通の要衝でもあった。

遺跡は，木梨川西岸の独立丘陵上の北部に立地する。城跡は北から南に延びる尾根上に郭を並べている（第３図）。中心となる郭は，北端の標高 126～130mの最高所平坦面（以下「１郭」という。）及び１郭から南に延びる尾根上の２つの郭である。１郭は長さ約 60m，幅約 45mの広い平坦面である。１郭と周囲の宅地･水田との標高差は東側で 38m，西側で 68mである。１郭との間に浅い２条の堀切を挟んだ南の平坦面（以下「２郭」という。）は，標高 115～119mにあり，長さ約 60m，幅約 45mの広い平坦面をもつ。さらにその南の標高 110～112mにも長さ約 55m，幅約 30mの広い平坦面（以下「３郭」という。）がある。表面観察で，２郭と３郭の周囲には小郭が認められ，２郭の南東下には竪堀群が配されている。なお，２・３郭がある南側郭は路線からははずれており，今回の発掘調査の対象にはなっていない，

発掘調査は５次にわたり，１郭とその周辺の尾根に広がる小郭群の調査を実施した（第４図）。１郭のうち，南西部は路線外となるため，調査を実施していない。第１・２次発掘調査は１郭から南東に延びる支尾根（南東尾根）を対象に調査を行った。１郭との比高は約 30mである。第３・４次発掘調査は１郭東半部，１郭東側切岸，１郭北側の東西２つの支尾根部（北東尾根・北尾根）を中心に，第５次発掘調査は１郭西半部及び北西支尾根を中心に実施した。第３次発掘調査は，１郭及び周辺の尾根部の状況を確認するためのトレンチ調査で，トレンチの配置は第５図のとおりである。１郭にトレンチ１～３（長さ 21～26m，幅約３m），１郭北側の尾根部にトレンチＡ・Ｂ（長さ 22～28m，幅３～７m）を設定した。また，第４次調査において切岸の調査を行ったが，急斜面であるため，全面発掘ではなく，トレンチ調査にとどめた箇所もある。

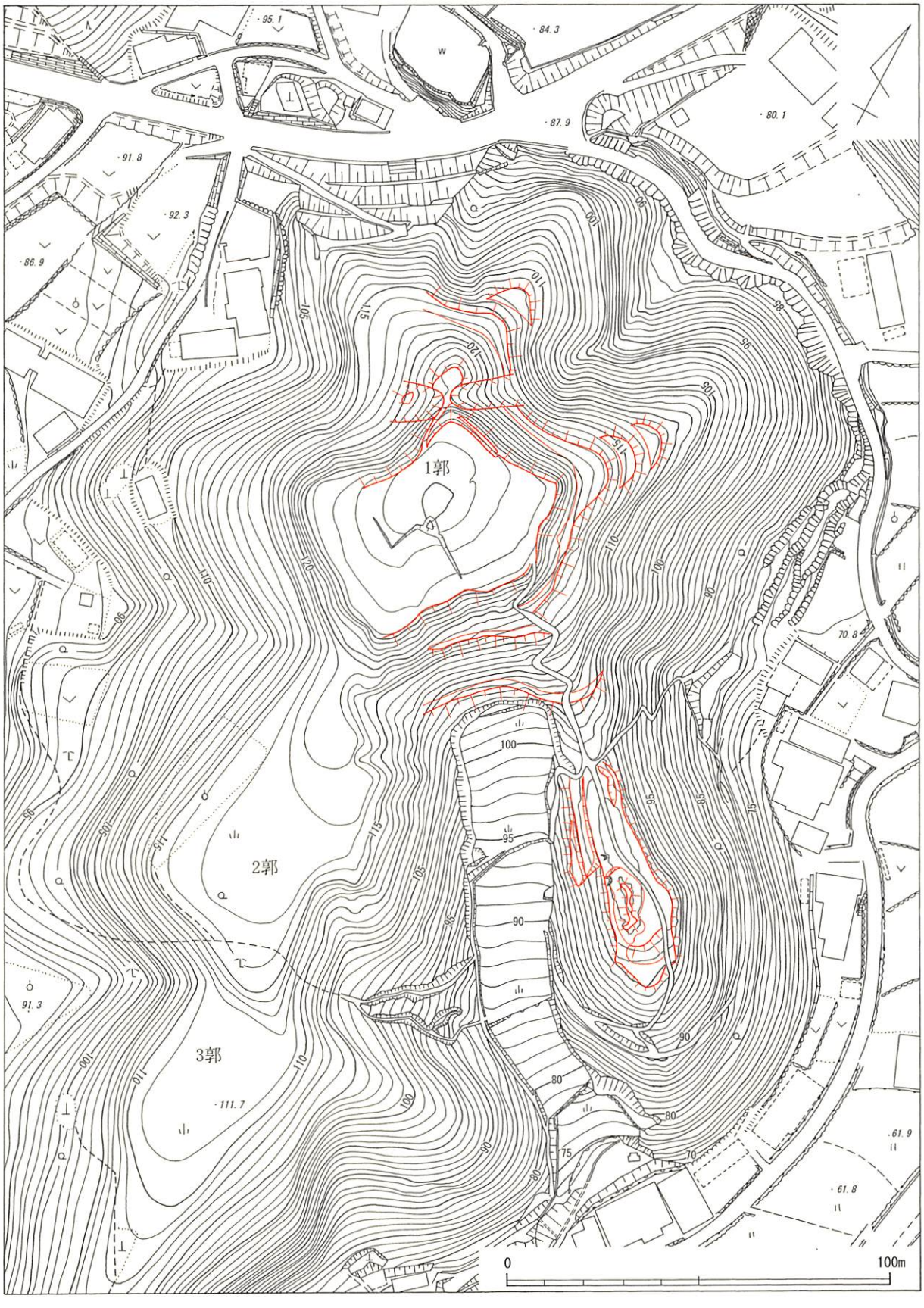
調査面積は第１次調査が 900 ㎡，第２次調査が 450 ㎡，第３次調査が 400 ㎡，第４次調査が 3,518 ㎡，第５次調査が 1,052 ㎡で，合計 6,320 ㎡である。遺跡の現状は尾根部が山林または荒地，１郭が荒地であった。１郭及び尾根部の平坦面は近年までブドウ畑など畑地として利用されていた部分も多い。発掘調査は，試掘調査の状況を基に，重機を使用して表土の除去作業を行った。その後，人力による遺構検出作業と遺構の掘り下げを行った。１郭の遺構面までは基本的に２層あるいは３層である。２層の場合は表土（黒褐色土）と遺構面の間に明褐色土が入り，３層の場合は明褐色土と遺構面の間に黄褐色土が入る。１郭は緩やかな斜面の高所側の地山を削って平坦面を造り出しているため，遺構面は高所側が地山，低所側が造成土になっている。ブドウ畑など畑地として利用されていたことから削平されたり，溝や穴などが掘られて破壊された部分も多い。発掘調査においては，基本的に 10mグリッドに分割し（第６図），グリッド毎に遺物の取り上げを行った。

第３～５次調査を実施した１郭は，尾根頂部の岩盤を削平して平坦面を形成している。東半部を中心に，建物跡５棟（ＳＢ１～５），柱穴列１，溝状遺構 17 条，土坑 37 基，焼土４か所，その他の遺構 12 基，多数のピットなどを検出した。ＳＢ１は２間×４間の掘立柱建物跡で，両側に並行するピット列があり，庇を伴うものと思われる。段状遺構ＳＸ２を伴うＳＢ２は２間×３間の掘立柱建物跡で，南東側に並行するピット列があり，庇を伴う可能性がある。ＳＢ３は３間×３間の掘立柱と礎石を併用した建物跡，ＳＢ４は２間×６間の掘立柱建物跡で，いずれも総柱の建物である。段状遺構ＳＸ１に伴うＳＢ５は，１間×３間の礎石建物跡である。ＳＢ１・３では根石を伴う柱穴が多くみられた。建物跡の周辺に散在する長方形土坑８基のうち５基は，底面や壁面に灰白色粘土を丁寧に塗っており，水溜めの機能が考えられる。また，北端部で３基並んだ円形土坑（ＳＫ10・13・14）を検出したが，底面に備前焼甕が据えられたものがあり，貯蔵施設として使用されたものと思われる。１郭西半部ではピットのほか，北部で不整形の土坑を９基検出した。ほとんどの土坑が性格不明であるが、そのうちの１基（ＳＫ35）からは，銅製懸仏と銅銭６枚などが出土しており，墓壙である可能性も考えられる。

東側切岸では平坦面を２，通路を１，土坑を１検出した。北東尾根では平坦面を３，その他の遺構を１検出した。北・北西尾根では堀切を２，平坦面を６，通路を１，溝状遺構を１，その他の遺構を１確認した。いずれも岩盤を切り込んでいる。堀切１は，幅６～８ｍ，最深部で深さ約２ｍであるが，全体を掘り切るのではなく，中央部は土橋状に高く残して通路として使用していたことが判明した。

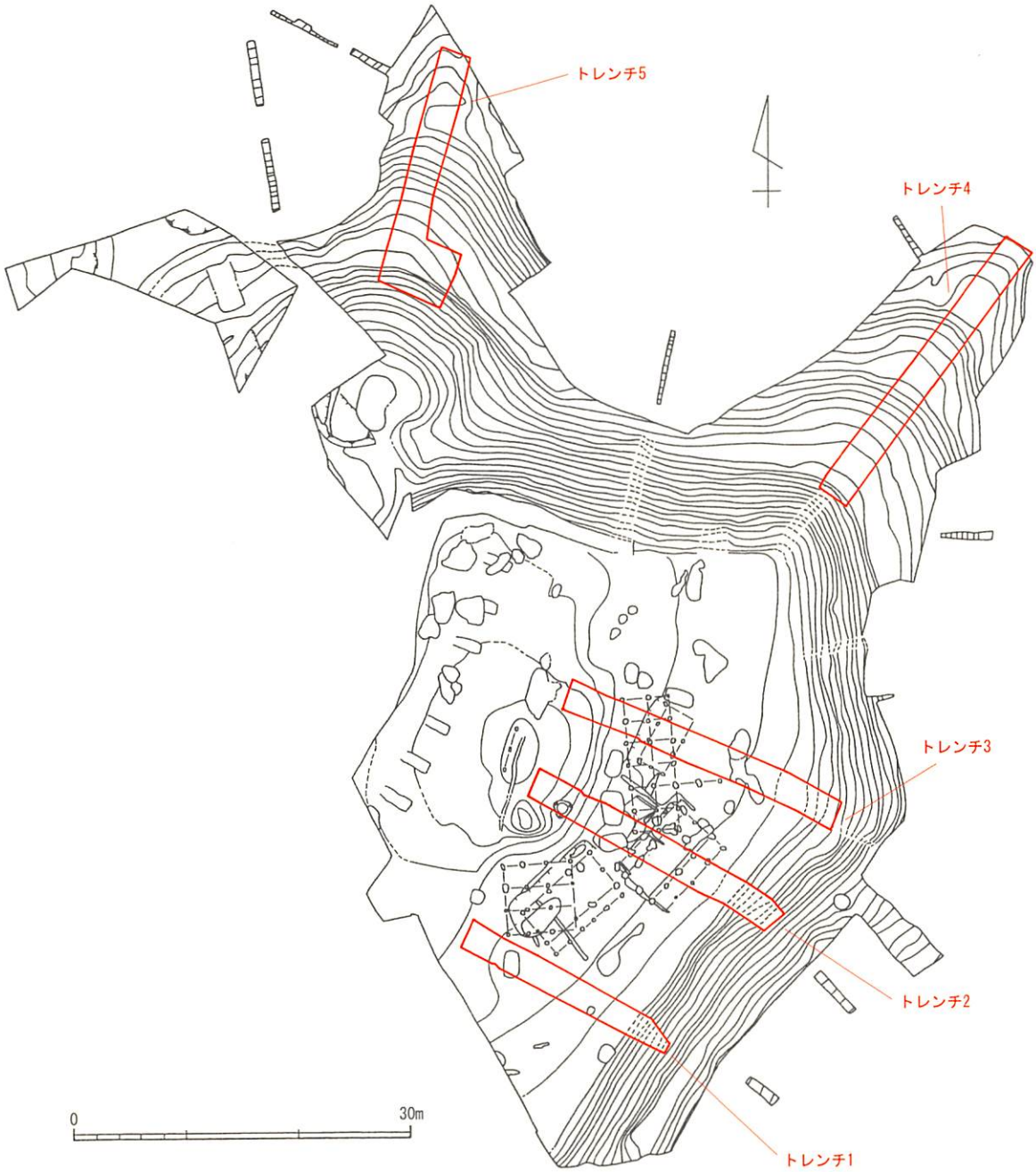
第１・２次調査を実施した南東尾根（標高 104m）では，幅 19m，長さ 63mの尾根頂部と西側斜面を中心に調査を実施した。近年まで畑地として利用されており，遺構面までは基本的には２層である。厚さ３～５㎝の表土があり，その下に暗黄褐色土が堆積している。暗黄褐色土の下が岩盤を含む地山で，この面が遺構面である。尾根頂部中央には南北 10m，東西 7.6m，高さ１.５ｍの小山を残し，その周囲で平坦面を５面確認した。その他，土坑や溝状遺構・焼土面などを検出した。土坑は平面が長方形で，底面に白色粘土を貼っている。

遺物は，１郭を中心に出土した。土器類は，土師質土器（皿・杯・椀・鍋）が多く，瓦質土器（鍋・擂鉢），東播系須恵器（甕・擂鉢），亀山焼（甕），備前焼（甕・擂鉢），常滑焼（甕），瀬戸焼（入子・卸皿），青磁（碗），白磁（皿・四耳壺・水注？），青白磁（梅瓶）などがある。その他，石製品（滑石製石鍋・温石・砥石・サイコロ・碁石など），鉄製品（鉄釘・鏃・兜片・金具など），銅製品（銅製懸仏・金具・古銭など），鉄滓，炉壁などが出土した。土器類は 14 世紀代のものが中心である。

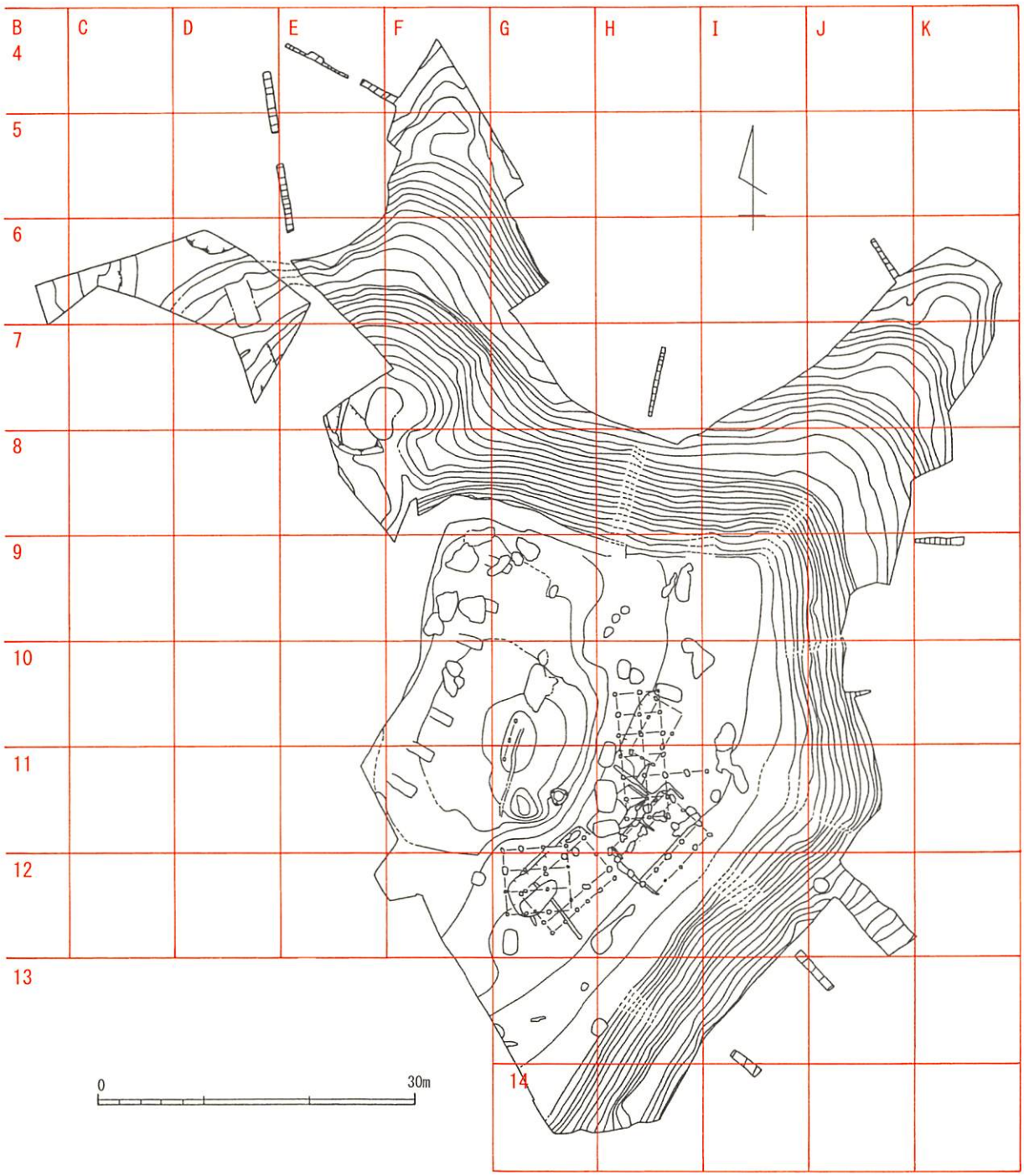


第３図　調査前地形図（1:1, 500）

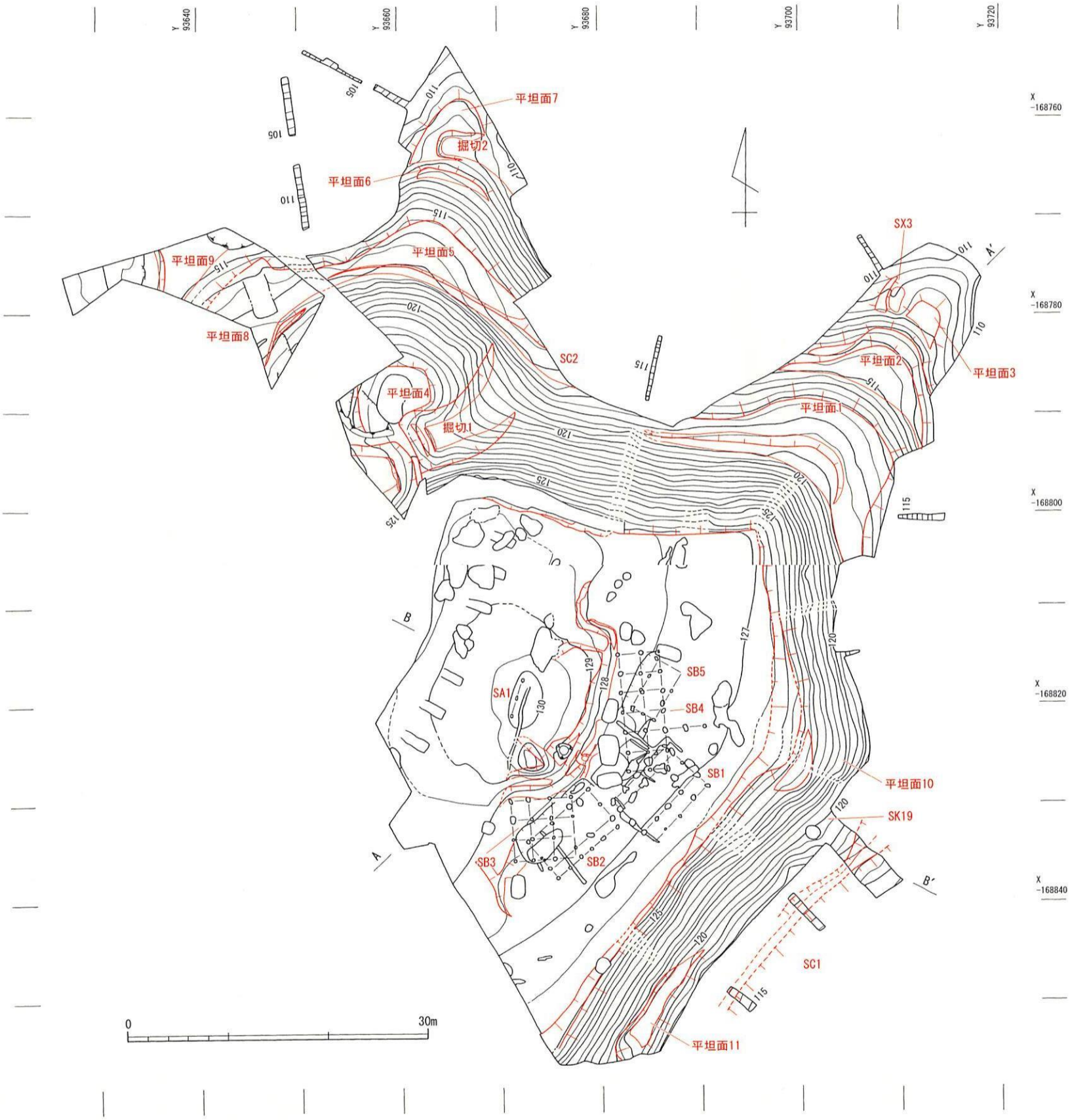
第４図　調査区位置図（1：2,500）（第１次調査区，第２次調査区，第３・４次調査区，第５次調査区）



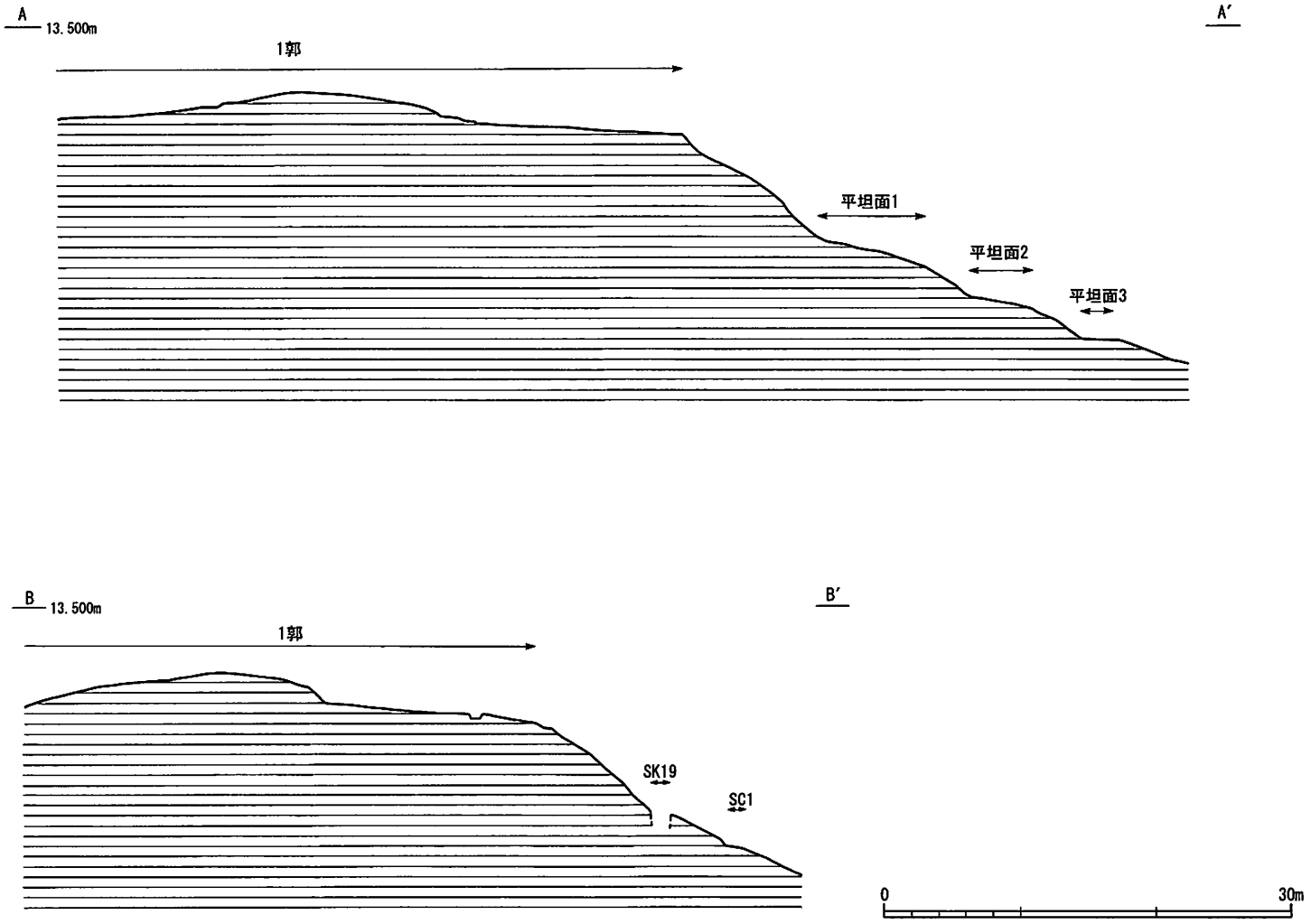
第５図　１郭周辺第３次調査トレンチ配置図（1:600）



第６図　１郭周辺グリッド図（1:600）



第７図　１郭周辺遺構配置図（1：500）



第８図　１郭周辺断面図（1：500）

Ⅳ　遺構と遺物（１郭周辺）

１　１郭

１郭は城跡最高所の郭で，長さ約 60m，幅約 45mの広い平坦面をもつ。後世の耕作などにより，地形が大きく改変されているため不明瞭な部分もあるが，全体を平坦にするのではなく，２～３の段があったものと思われる。中央には長さ約 19m，幅約７mの削り残し部分が見られる。その削り残し部分の南部には一辺 3.5m，高さ 2.5mの三角形の高まりがあり，この部分が本郭の最高所である。後世の耕作等により，地形の改変を受けているとしても，郭の中央部を削り残して高台を作っていたのは間違いない。南東側に長さ 26m以上，幅約 15mの平坦面を造り出している。１郭内で建物跡５，柱穴列１，溝状遺構 17，土坑 37，焼土溜り４，その他の遺構 12 を検出したが，その大部分は南東平坦面に存在する。

なお，以下の記述では遺物の土器類は遺構毎に，その他の遺物は最後にまとめて記述した。

（１）建物跡

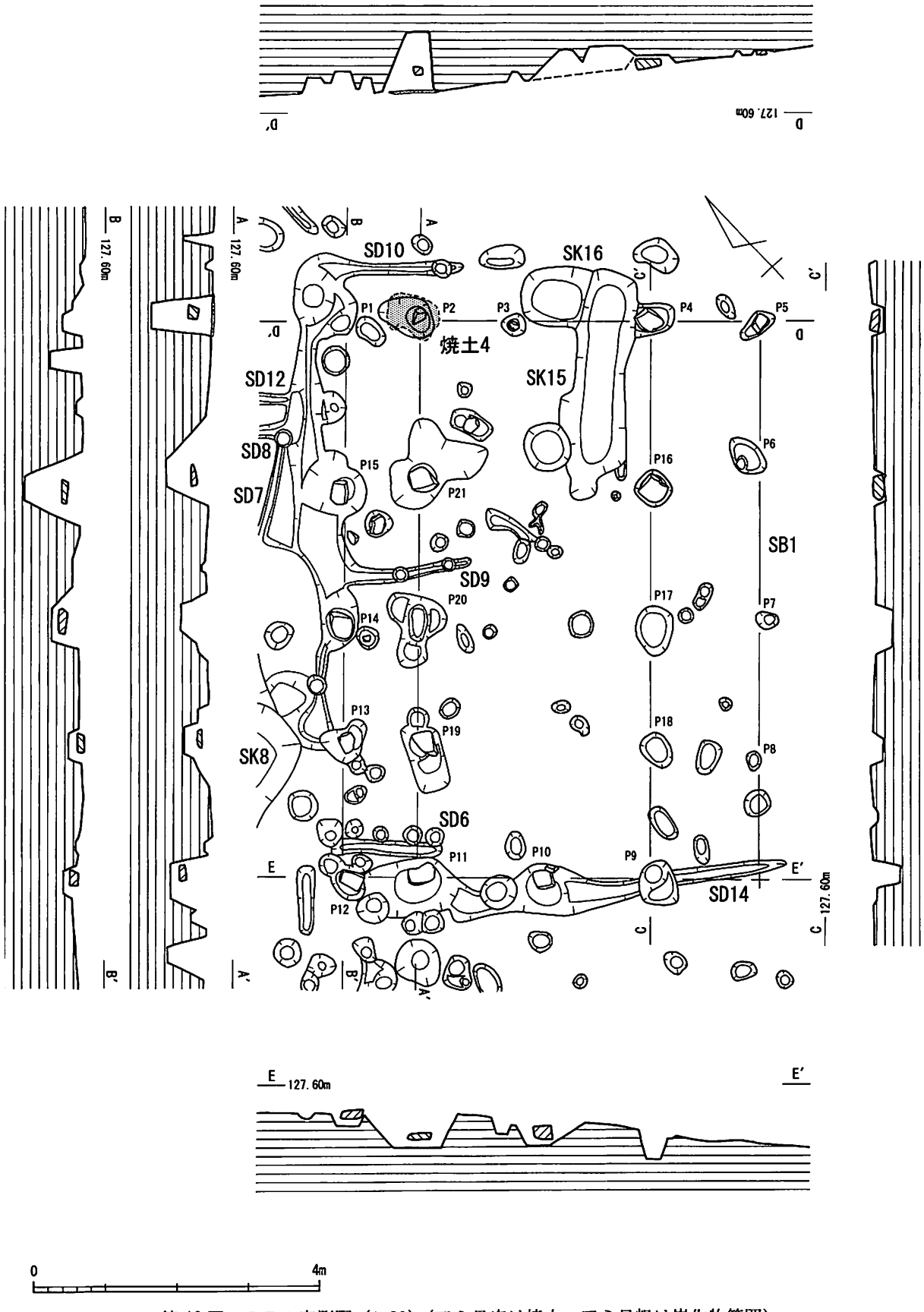
①ＳＢ1

検出遺構（第 10 図，図版６－ａ・ｂ，９－ａ）

ＳＢ１は，１郭東部中央に位置する建物跡である。２間×４間で，両側に庇を伴う。主軸は北東-南西方向で，主軸方位はN43°Ｅである。ＳＢ４と重複し，主軸方向の違いなどからＳＢ１の方が古いと思われる。ピットの中に平らな石が入っているものが多いが，石が底にあるものは少なく，ピットは比較的深く，底から浮いた状態で検出されたものが多い。このことから，ピット内の石は礎石ではなく，根石と判断した。

桁行方向の規模は 7.75m，梁行方向の規模は両側の庇部分を含めると 5.75m，庇部分を除くと 3.2mである。桁行方向の柱間距離は南側のＰ4-Ｐ16 間が 2.3m，Ｐ16-Ｐ17 間が 2.0m，Ｐ17-Ｐ18 間が 1.65m，Ｐ18-Ｐ９間が 1.8mであり，北側のＰ11-Ｐ19 間が 1.85m，Ｐ19-Ｐ20 間が 1.7m，Ｐ20-Ｐ21 間が 2.0m，Ｐ21-Ｐ２間が 2.2mである。平均 1.94mであるが，最短 1.65m，最長 2.3mとはらつきがある。梁行方向の柱間距離は東側のＰ２-Ｐ３間が 1.3m，Ｐ３-Ｐ４間が 1.9mであり，西側のＰ９-Ｐ10 間が 1.5m，Ｐ10-Ｐ11 間が 1.7mである。平均 1.60mであるが，桁行方向の柱間距離より短くなっている。なお，南東側の庇部分の柱間は４間で，庇の出は 1.5mである。北西側の庇部分の柱間は４間，庇の出は 1.05mで，南東側よりも狭い。庇部分の柱間距離は南東側のＰ５-Ｐ６間が 1.9m，Ｐ６-Ｐ７間が 2.3m，Ｐ７-Ｐ８間が 2.0mであり，南端の柱穴は検出できなかった。北西側のＰ12-Ｐ13 間が 1.9m，Ｐ13-Ｐ14 間が 1.65m，Ｐ14-Ｐ15 間が 1.9m，Ｐ15-Ｐ１間が 2.3mである。庇部分の柱間距離は平均 1.99mであるが，最短 1.7m，最長 2.3mとばらつきがある。柱穴の平面形は一定ではなく，大きさも様々である。各柱穴の規模は，Ｐ２が長径 0.83m×短径 0.53m，深さ 0.86mで，ピット上に焼土４がある。建物廃絶後に鍛冶が行われた可能性が高い。Ｐ３は長径 0.35m×短径 0.31m，深さ 0.18mで，内部に 0.14

第９図　１郭遺構配置図（1：200）



第10図　ＳＢ１実測図（1:80）（アミ目密は焼土，アミ目粗は炭化物範囲）

m×0.1mの根石がある。Ｐ４はＳＫ15によって一部削られており，現状で長径0.57m×短径0.45m，深さ0.18mで，内部に0.34m×0.3mの根石がある。Ｐ９～11はＳＤ４と重複しているが，新旧は不明である。Ｐ９は長径0.68m×短径0.63m，深さ0.41mで，底面に長径0.25m×短径0.22mの小ピットがあり，柱痕跡の可能性がある。Ｐ10は現状で長径0.72m×短径0.75m，深さ0.38mで，内部に0.27m×0.26m，0.14m×0.1mの２個の根石がある。Ｐ11は長径1.33m×短径0.75m，深さ0.49mの大きな柱穴で，内部に0.38m×0.22mの根石がある。Ｐ16は径0.47m，深さ0.19mで，内部に0.36m×0.33mの根石がある。Ｐ17は長径0.69m×短径0.53m，深さ0.3m，Ｐ18は長径0.50m×短径0.39m，深さ0.18mである。Ｐ19はいくつかのピットが重なっているものと思われ，現状で長径1.01m×短径0.52m，深さ0.35mで，内部に0.36m×0.28mの根石がある。Ｐ20もいくつかのピットが重なっているものと思われ，現状で長径1.02m×短径0.44m，深さ0.39mである。Ｐ21は不整形の柱穴で，長径1.47m×短径1.13m，深さ0.53mで，内部に0.36m×0.34mの根石がある。

庇部分の柱穴は，北西側が大きく，南東側が小さい傾向にある。Ｐ１はＳＤ９・10の交点付近にあり，これらの溝によって一部削られている。現状で長径約0.6m×短径0.33m，深さ0.3mである。Ｐ５は長径0.57m×短径0.29m，深さ0.07mで，内部に0.27m×0.18mの根石がある。Ｐ６は長径0.63m×短径0.42m，深さ0.19mである。底面には径0.18mの小ピットがあり，柱痕跡の可能性が考えられる。Ｐ７は長径0.33m×短径0.24m，深さ0.18m，Ｐ８は長径0.28m×短径0.21m，深さ0.05mである。Ｐ12は別のピットと重複しており，現状で長径0.5m×短径0.4m，深さ0.07mで，内部に0.27m×0.18mの根石がある。Ｐ13は長径0.67m×短径0.5m，深さ0.4mで，内部に0.27m×0.22mの根石がある。Ｐ14は長径0.87m×短径0.53m，深さ0.39mで，内部に0.41m×0.32mの根石がある。Ｐ15はＳＤ９によって一部削られており，現状で長径約0.93m×短径0.88m，深さ0.79mで，内部に0.33m×0.24mの根石がある。

出土遺物（第57図，図版41）

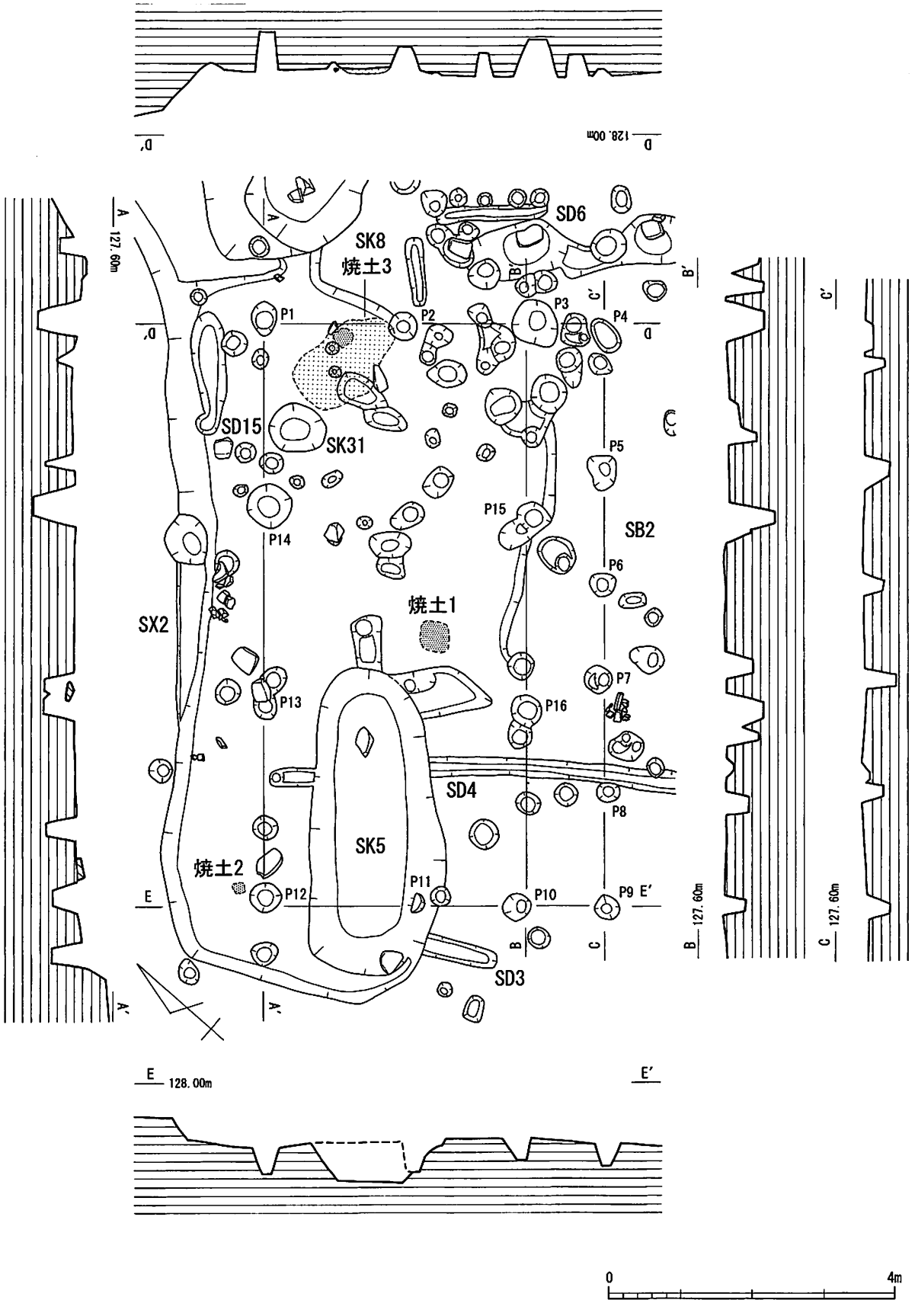
柱穴Ｐ11から用途不明銅製品（292）のほか，銅製品片１点，鉄釘４点が出土している。その他，柱穴から土師質土器，備前焼が出土しているが，細片のため図示できなかった。

②ＳＢ２

検出遺構（第11図，図版６－ｃ）

１郭中央東寄り位置する掘立柱建物である。緩やかな斜面を削って作り出した方形の平坦面ＳＸ２に建てられている。２間×３間の建物跡で，南東側に庇がつく。ＳＢ３と重複するが，ＳＢ３はＳＸ２を埋めた後に建てた建物跡である。

主軸は北東－南西方向で，主軸方位はN49°Ｅである。ＳＢ３とは主軸方向が異なる。桁行方向の規模は8.0m，梁行方向の規模は庇部分を含めると4.75m，庇部分を除くと3.65mである。桁行方向の柱間距離は南側のＰ３-Ｐ15間が2.65m，Ｐ15-Ｐ16間が2.65m，Ｐ16-Ｐ10間が2.7mであり，北側のＰ12-Ｐ13間が2.7m，Ｐ13-Ｐ14間が2.75m，Ｐ14-Ｐ１間が2.55mで，平均2.67mである。梁行方向の柱間距離は東側のＰ１-Ｐ２間が1.9m，Ｐ２-Ｐ３間が1.75mであり，



第11図　ＳＢ２・ＳＸ２実測図（1：80）（アミ目密は焼土，アミ目粗は炭化物範囲）

西側のＰ10-Ｐ11 間が 1.6m，Ｐ11-Ｐ12 間が 2.05mで，平均 1.83mであるが，北西側が長くなっている。梁行方向に比べ，桁行方向の柱間距離が長い。なお，南東側の庇部分の柱間は５間で，庇の出は 1.1mである。庇部分の柱間距離はＰ４－Ｐ５間が 2.0m，Ｐ５－Ｐ６間が 1.6m，Ｐ６-Ｐ７間が 1.3m，Ｐ７-Ｐ８間が 1.55m，Ｐ８-Ｐ９間が 1.55mで，平均 1.60mであるが，最短 1.3m，最長 2.0mとはらつきがある。

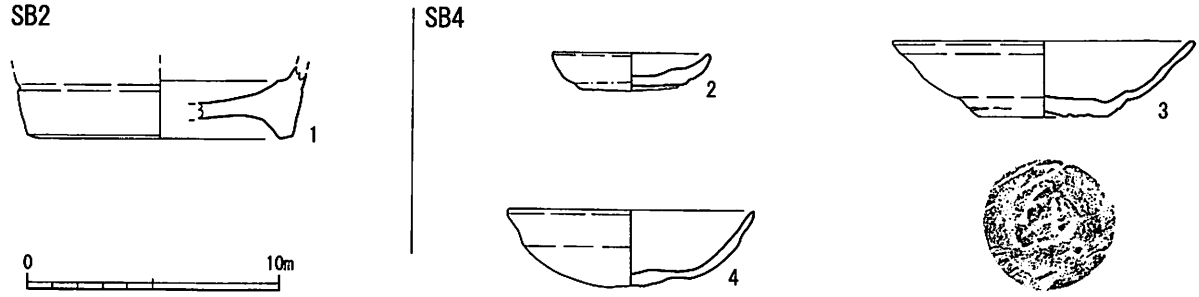
柱穴は地山を掘り込んでおり，径 0.4～0.5mの円形のものが多い。各柱穴の規模は，Ｐ１が長径 0.48m×短径 0.37m，深さ 0.54m，Ｐ２が径 0.39m，深さ 0.33m，Ｐ３が長径 0.71m×短径 0.64m，深さ 0.54m，Ｐ10 が径 0.39m，深さ 0.34mである。Ｐ11 はＳＫ５に切られており，現状で長径 0.28m×短径 0.15m，深さ 0.21mである。Ｐ12 が長径 0.44m×短径 0.42m，深さ 0.35m，Ｐ13 が長径 0.37m×短径 0.32m，深さ 0.44m，Ｐ14 が径 0.62m，深さ 0.6mである。Ｐ15 は別のピットと重複しており，現状で長径 0.47m×短径 0.38m，深さ 0.40mである。Ｐ16 が長径 0.47m×短径 0.44m，深さ 0.53mである。

庇部分の各柱穴の規模は，Ｐ４が長径 0.52m×短径 0.34m，深さ 0.31m，Ｐ５が長径 0.5m×短径 0.43m，深さ 0.34m，Ｐ６が長径 0.38m×短径 0.33m，深さ 0.29m，Ｐ７が径 0.39m，深さ 0.45mである。Ｐ８はＳＤ４によって一部削られており，現状で長径 0.33m×短径 0.27m，深さ 0.3mである。

建物跡周辺で焼土を検出している。中央部で焼土１を検出した。焼土１の平面形は方形で，ＳＸ２埋土を除去した床面で検出したことから，ＳＢ２に伴う可能性が高い。北隅付近で焼土３を検出した。炭化物層が広がり，それを取り除いた床面で検出した。上層に炭化物層から遺物が比較的多く出土した。建物の端に近く，炭化物層がかなり厚く堆積していることから，ＳＢ2 廃絶後に形成された可能性が高い。なお，南西隅のＰ12 付近で焼土２を検出した。建物内ではなく，建物外にあたる。小範囲の焼土である。なお，焼土の詳細については，別項（27 ページの（２）焼土）に記載している。

出土遺物（第 12・49・56・58・59 図，図版 23・36・41・42）

柱穴Ｐ8 から青白磁の梅瓶（１），Ｐ3 から土錘（191），Ｐ1 から板状鉄製品（281）と古銭（294・332）が出土した。



第12図　ＳＢ２・４出土土器類実測図（1：3）

１はＰ８から出土した青白磁の梅瓶の底部である。高台を削り出し，外面底部及び高台端部を除いて，淡青白色の釉がかかる。素地は灰白色である。内面底部に粘土が付着している。ＳＤ11出土の梅瓶（第34図96）と同一個体の可能性がある。

その他，土師質土器（皿など），瓦質土器，亀山焼の甕，青磁，滑石製の石鍋片が出土したが，細片のため図示できなかった。

板状鉄製品（281）は，重量 19.33ｇである。柱穴から鉄釘８点，不明鉄製品１点が出土した。柱穴から出土した鉄製品以外に鉄滓２点（68.73ｇ）が出土している。

③ＳＢ３

検出遺構（第13図，図版８－ａ・ｂ）

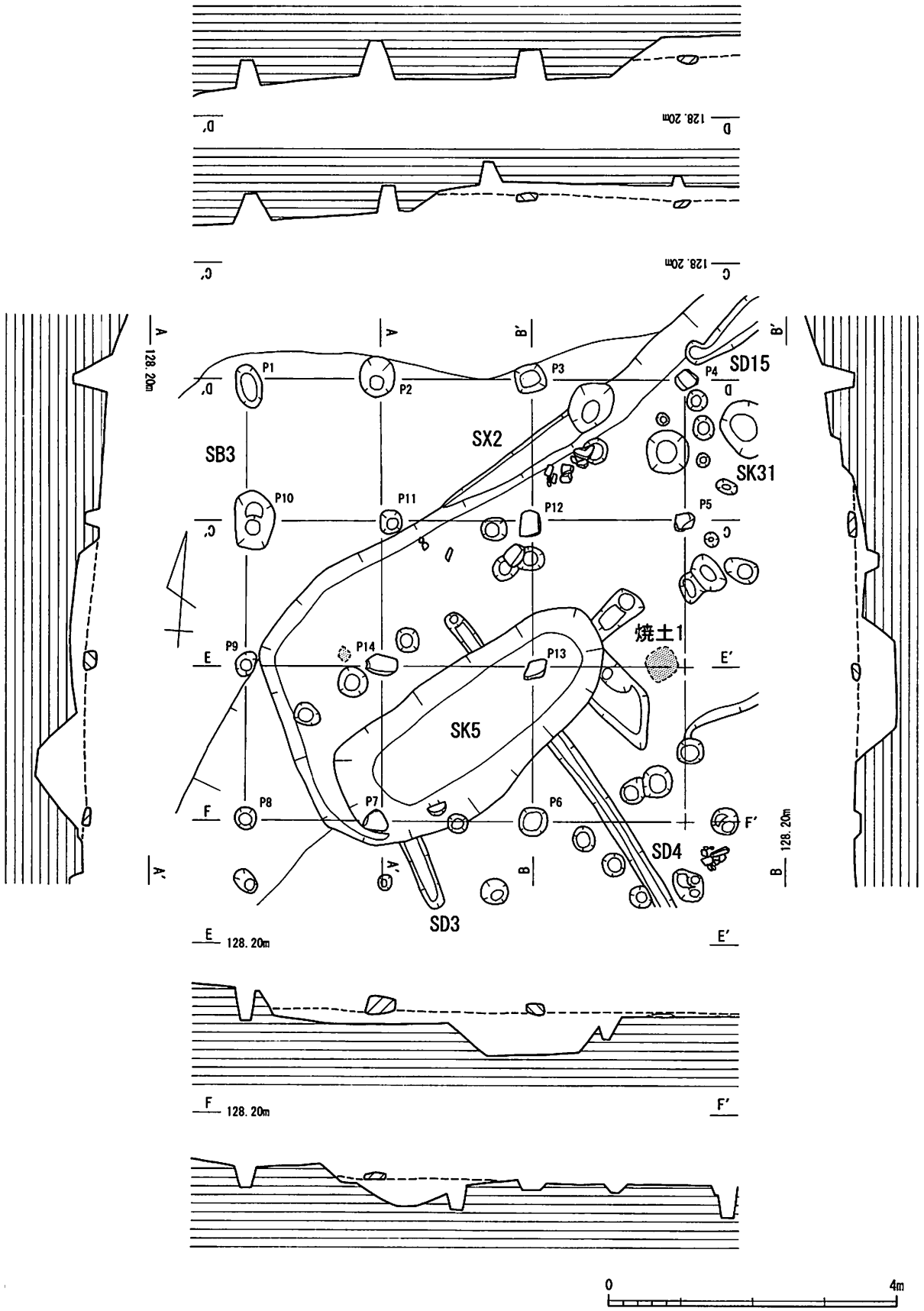
ＳＢ３は１郭中央南寄りに位置する３間×３間の南北方向の総柱建物である。主軸方位はＮ４°Ｗであり，ＳＸ２に伴うＳＢ２とは建物の主軸方向が異なっている。ＳＸ２を埋めて整地した後に建てられている。柱穴と礎石を併用した建物跡である。整地部分については地盤が軟らかいこともあり，礎石立ちとしているが，それ以外の部分については，地山に柱穴を掘り込んでおり，基本的には掘立柱建物跡である。南東部の礎石あるいは柱穴が２か所検出できなかったが，ＳＸ２内にあることから礎石を使用していたと考えられ，後世にその礎石が失われた可能性が高い。ＳＫ５と重複しており，ＳＫ５の上面にＳＢ３の礎石Ｐ７・13があることからＳＢ３本遺構の方が新しい。

桁行方向（南北方向）の規模は6.1m，梁行方向（東西方向）の規模は6.0mで，ほぼ正方形の建物跡である。桁行方向の柱間距離は西側のＰ１－Ｐ10間が2.0m，Ｐ10－Ｐ９間が1.95m，Ｐ９－Ｐ８間が2.15mであり，中央西寄りのＰ２－Ｐ11間が1.95m，Ｐ11－Ｐ14間が2.0m，Ｐ14－Ｐ７間が2.15mである。中央東寄りのＰ３－Ｐ12間が2.0m，Ｐ12－Ｐ13間が2.0m，Ｐ13－Ｐ６間が2.1mであり，東側のＰ４－Ｐ５間が2.0mで，平均2.03mである。

梁行方向の柱間距離は北側のＰ１－Ｐ２間が1.8m，Ｐ２－Ｐ３間が2.1m，Ｐ３－Ｐ４間が2.1mであり，中央北寄りのＰ10－Ｐ11間が1.95m，Ｐ11－Ｐ12間が1.95m，Ｐ12－Ｐ５間が2.1mである。中央南寄りのＰ９－Ｐ14間が1.85m，Ｐ14－Ｐ13間が2.1mであり，南側のＰ８－Ｐ７間が1.85m，Ｐ７－Ｐ６間が2.1mで平均1.99mである。

礎石を使用しているのはＰ４・５・７・12～14の６箇所で，Ｐ６は礎石の抜き取り穴と考えられる。その他は掘立柱建物の柱穴である。礎石の規模は，Ｐ４が0.31m×0.29m，Ｐ５が0.27m×0.24m，Ｐ７が0.34m×0.27m，Ｐ12が0.35m×0.28m，Ｐ13が0.41m×0.26m，Ｐ14が0.44m×0.28mである。礎石の抜き取り穴と考えられるＰ６は，径0.42m，深さ0.12mの浅いピットである。

柱穴は地山を掘り込んでおり，楕円形の大きいものもあるが，径0.3～0.4mの小型円形のものも見られる。各柱穴の規模は，Ｐ１が長径0.61m×短径0.37m，深さ0.39m，Ｐ２が長径0.56m×短径0.49m，深さ0.53m，Ｐ３が長径0.42m×短径0.39m，深さ0.42m，Ｐ８が長径0.32m×短径0.29m，深さ0.3m，Ｐ９が長径0.37m×短径0.28m，深さ0.46mである。Ｐ10は他



第13図　ＳＢ３実測図（1：80）（アミ目は焼土範囲）

の建物の柱穴が重複しているものと思われ，現状で長径0.8m×短径0.55m，深さ0.45mである。P11が長径0.32m×短径0.3m，深さ0.4mである。

出土遺物

柱穴から土師質土器が出土しているが，細片のため図示できなかった。

④ＳＢ４

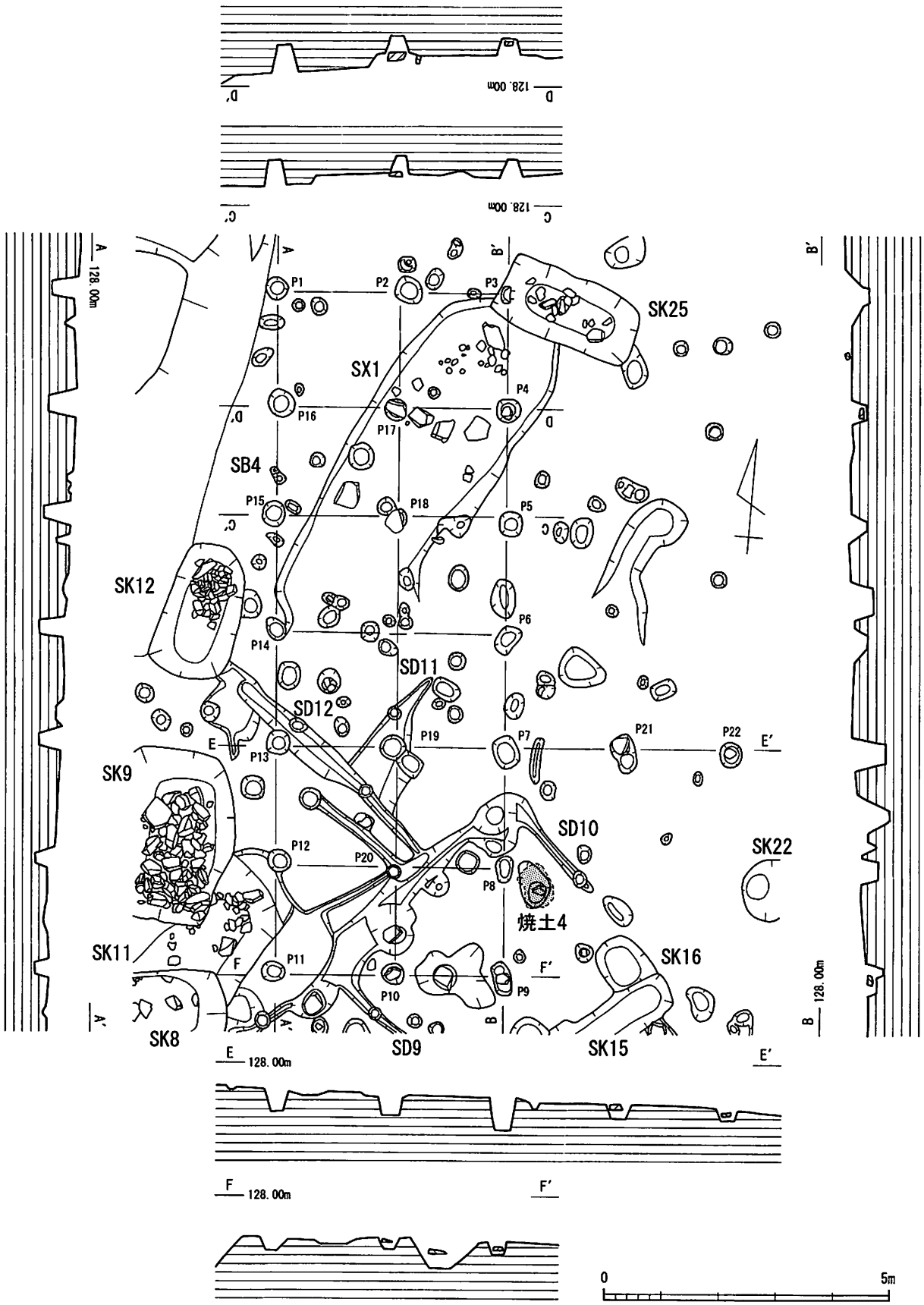
検出遺構（第14図，図版８－ｃ）

１郭中央北東寄りに位置する南北方向の細長い掘立柱建物跡である。２間×６間の総柱建物跡で，建物方位はＮ５°Ｗである。ＳＢ１・５と重複している。主軸方向の違いなどからＳＢ１よりＳＢ４の方が新しいと思われる。また，ＳＢ４の柱穴P18の上にＳＢ５の礎石Ｐ５があることから，ＳＢ５よりＳＢ４の方が古い。なお，ＳＢ４中央部では明確な柱穴を検出することができなかった。

桁行方向の規模は11.85m，梁行方向の規模は3.95mである。桁行方向の柱間距離は，東側のＰ３-Ｐ４間が2.0m，Ｐ４-Ｐ５間が1.95m，Ｐ５-Ｐ６間が1.95m，Ｐ６-Ｐ７間が1.95m，Ｐ７-Ｐ８間が2.05m，Ｐ８-Ｐ９間が1.95m，西側のP11-P12間が1.95m，P12-P13間が2.05m，P13-P14間が1.95m，P14-P15間が1.95m，P15-P16間が1.95m，P16-P1間が2.0mで，中央のＰ２-P17間が2.05m，P17-P18間が1.9m，P19-P20間が2.1m，P20-P10間が1.9mで，平均1.98mである。梁行方向の柱間距離は，北からＰ１-Ｐ２間が2.2m，Ｐ２-Ｐ３間が1.75m，P16-P17間が2.1m，P17-Ｐ４間が1.85m，P15-P18間が2.05m，P18-Ｐ５間が1.85m，P13-P19間が2.0m，P19-Ｐ７間が1.95m，P12-P20間が2.0m，P20-Ｐ８間が1.95m，P11-P10間が2.0m，P10-Ｐ９間が1.95mで，平均1.98mである。桁行方向と梁行方向の柱間距離の平均はともに1.98mである。

桁行方向のP13-P19-Ｐ７の東側の延長線上にP21・22がある。Ｐ７-P21の柱間距離は2.05m，P21-P22の柱間距離1.95mである。桁行方向の延長線上にあり，ＳＢ４の柱間距離とほぼ同じであることから，ＳＢ４と関連することは間違いない。ただ，P21・22の南北方向にはこれに対応する柱穴がないことから，柵や塀などＳＢ４に付随する構造物があったと考えられる。

柱穴は，大部分が円形で，径0.4～0.45mのものが多い。Ｐ１は長径0.42m×短径0.38m，深さ0.46m，Ｐ２は長径0.53m×短径0.45m，深さ0.43m，Ｐ３はＳK25に一部削られており現状で長径0.32m×短径0.16m，深さ0.16mである。Ｐ４は長径0.41m×短径0.38m，深さ0.28mで，内部に根石と思われる0.24m×0.18mの石が入っている。Ｐ５は長径0.44m×短径0.39m，深さ0.31m，Ｐ６は長径0.52m×短径0.37m，深さ0.25m，Ｐ７は長径0.56m×短径0.45m，深さ0.54m，Ｐ８は長径0.47m×短径0.31m，深さ0.4m，Ｐ９は長径0.6m×短径0.32m，深さ0.33mで，内部に根石と思われる0.23m×0.19mの石が入っている。P10は径0.38m，深さ0.2mで，内部に根石と思われる0.29m×0.19mの石が入っている。P11は長径0.41m×短径0.35m，深さ0.25m，P12は径0.39m，深さ0.35m，P13は長径0.43m×短径0.41m，深さ0.4m，P14は長径0.45m×短径0.31m，深さ0.44mで，北西端に長径0.1m×短径0.7mの



第14図　ＳＢ４実測図（1：100）（アミ目は焼土範囲）

焼土塊があった。P15は長径0.44m×短径0.39m，深さ0.47m，P16は長径0.49m×短径0.46m，深さ0.5mである。P17は径0.41m，深さ0.3mである。P17の上に0.41m×0.24mの平らな石が置かれており，礎石と思われる。ＳＢ４以後にＳＢ５以外の礎石建物があった可能性が考えられる。P18は径0.33m，深さ0.31mである。P18の上に0.39m×0.27mの平らな石が置かれているが，ＳＢ５の礎石である。P19は長径0.46m×短径0.43m，深さ0.32m，P20は溝状遺構ＳＤ７～９に一部削られており，現状で径0.23m，深さ0.25mである。

ＳＢ４に付随するP21は別のピットが重なっている可能性があり，現状で長径0.68m×短径0.43m，深さ0.25mで，内部に根石と思われる0.31m×0.28mの石が入っている。P22は長径0.43m×短径0.38m，深さ0.15mで，内部に根石と思われる0.21m×0.18mの石が入っている。

出土遺物（第12図，図版23）

柱穴から土師質土器の皿（２）・杯（３）・椀（４）が出土した。

２は土師質土器の皿である。口径6.0～6.2㎝，器高1.5㎝と小型で，体部は内湾して立ち上がる。底部の切り離しは，回転糸切りと思われる。

３は土師質土器の杯である。復元口径11.8㎝，器高3.0㎝で，体部は斜めにまっすぐ立ち上がる。底部の切り離しは，回転ヘラ切りである。板目痕が残る。

４は土師質土器の椀である。復元口径9.7㎝，器高3.05㎝で，体部は内湾ぎみに立ち上がり，口縁部はやや外反する。口縁端部にススが付着する。

その他，備前焼の甕，鉄釘１点が出土した。いずれも細片のため図示できなかった。

⑤ＳＢ５

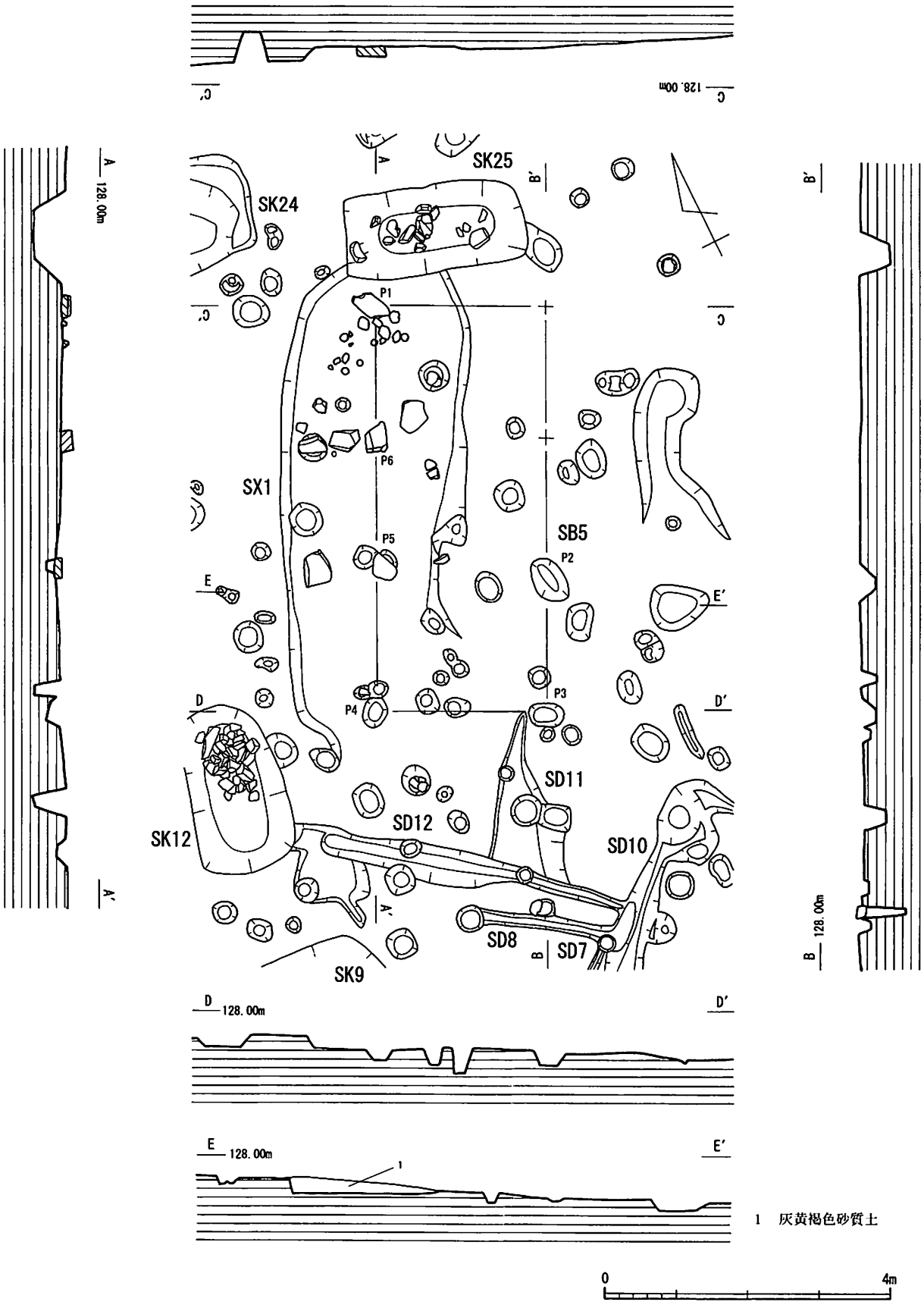
検出遺構（第15図，図版９－ｃ）

１郭中央北東寄りに位置する１間×３間の礎石建物である。緩やかな斜面の高所側である西側の地山を掘削することにより造り出した方形の平坦面である段状遺構ＳＸ１に伴う。主軸は北東-南西方向で，建物方位はN26°Ｅである。ＳＢ４と重複しているが，ＳＢ４-P18の上にＳＢ５の礎石Ｐ５があることから，ＳＢ５の方が新しい。また，ＳＸ１とＳK25ではＳＸ１の方が古い。

東側及び南側の礎石は失われているが，礎石が伴っていたと思われるピットから建物を復元することができる。桁行方向の規模は5.6m，梁行方向の規模は2.35mである。桁行方向の柱間距離はＰ２-Ｐ３間が1.9m，Ｐ４-Ｐ５間が2.0m，Ｐ５-Ｐ６間が1.8m，Ｐ６-Ｐ１間が1.8mで，平均1.88mである。梁行方向のＰ３-Ｐ４間にピット（Ｐ３からの距離1.25m，Ｐ４からの距離1.1m）があるが，長径37㎝×短径24㎝，深さ36㎝と深いため，礎石の抜き取り穴あるいは掘方とは考えにくく，ＳＢ５に伴うものではないと思われる。

礎石の規模は，Ｐ１が0.58m×0.28m，Ｐ５が0.39m×0.27m，Ｐ６が0.4m×0.28mである。礎石が伴っていたと思われるピットは，楕円形で浅い。Ｐ２が長径0.67m×短径0.43m，深さ0.2m，Ｐ３が長径0.49m×短径0.34m，深さ0.19m，Ｐ４は他のピットに切られており現状で長径0.44m×短径0.33m，深さ0.12mである。

出土遺物



第15図　ＳＢ５・ＳＸ１実測図（1：80）

遺物は出土していない。

（２）焼土

①焼土１（第16図，図版７－ａ）

ＳＢ２内中央部で検出した焼土塊である。焼土１の平面形は方形で，長さ0.60m，幅0.32m，厚さ 0.07mで，周囲に炭化物が広がっている。ＳＸ２埋土を除去した床面で検出したことから，建物に伴う可能性が高い。

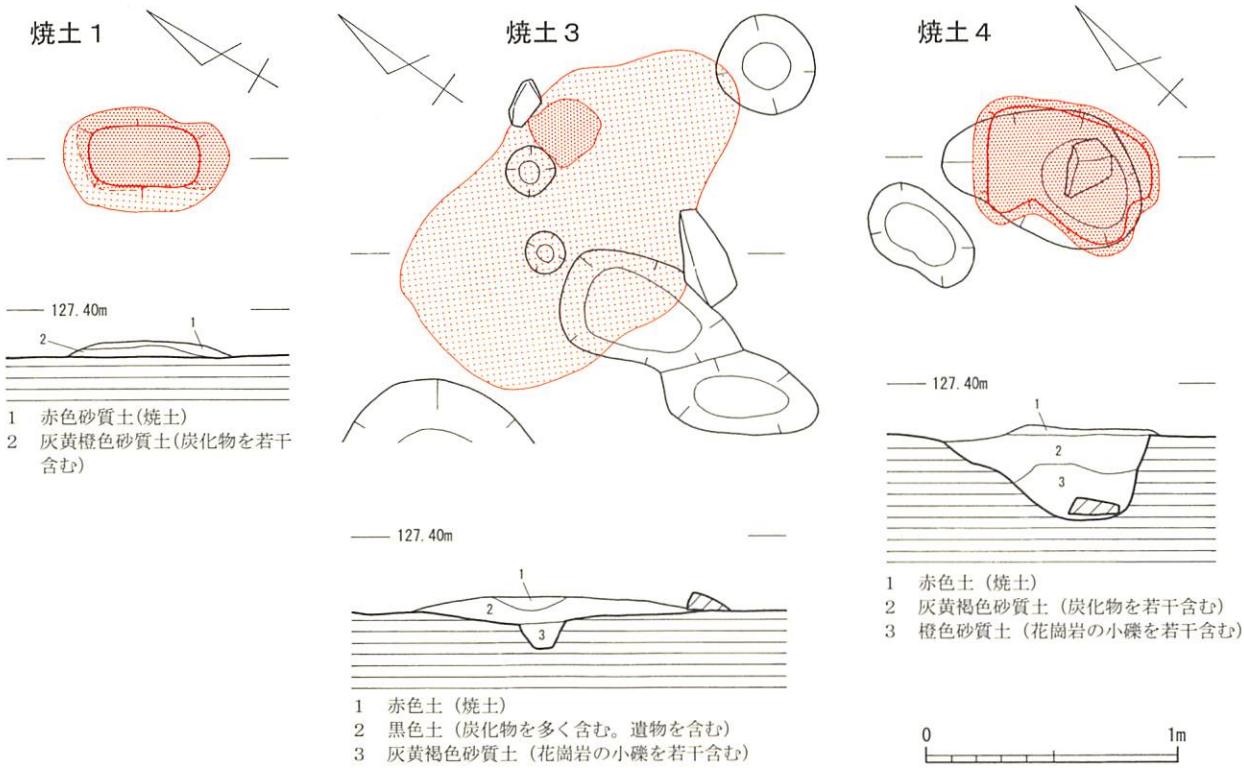
②焼土２（図版７－ｃ）

ＳＸ２内で検出した焼土塊である。ＳＢ２の南西外側にあたる。平面形は方形で，一辺0.17mの小範囲の焼土である。

③焼土３（第16図）

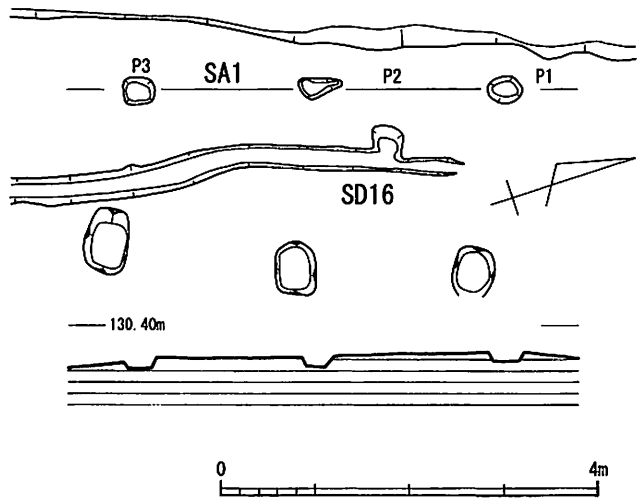
ＳＢ２内北隅付近で検出した焼土塊である。ＳＢ２内北隅付近には炭化物層が広がり，それを取り除いた床面で検出した。炭化物層（炭・焼土層）から遺物が比較的多く出土しており，ＳＸ２出土遺物として取り上げを行った。焼土の規模は径0.24m，厚さ0.05mで，焼土の下に炭化物を多く含む黒色土が長径1.54m×短径0.95mの範囲に堆積している。建物の端に近く，炭化物層がかなり厚く堆積していることから，ＳＢ２廃絶後に形成された可能性が高い。

④焼土４（第16図，図版９－ａ・ｂ）



第16図　焼土１・３・４実測図（1：30）（アミ目密は焼土，アミ目粗は炭化物範囲）

ＳＢ１Ｐ２上面から検出した焼土である。長さ 0.74m，幅 0.55mの範囲に厚さ 0.04mの焼土が広がっている。ＳＤ９・10によって「コ」字形に形成された空間に存在し，東側のＳＫ15という細長い土坑も関連する可能性がある。ＳＢ１廃絶後に形成されたものと思われ，焼土下の灰黄褐色土が炭化物を含むことから，鍛冶炉の可能性が考えられる。



第17図　ＳＡ１実測図（1：80）

（３）柱穴列

①ＳＡ１

検出遺構（第 17 図，図版 10－ａ）

１郭中央西寄りに位置する北北東－南南西方向の柱穴列である。主軸方位はN18°Ｅで，１郭高所部の裾にあたり，柱穴が３基並び，0.6m東にはほぼ同じ方向に延びるＳＤ16 がある。柱間距離はＰ１-Ｐ２間が 2.0m，Ｐ２-Ｐ３間が 1.9mで，平均 1.95mである。柱穴は，Ｐ１は楕円形で長径 0.37m×短径 0.28m，深さ 0.09m，Ｐ２は不整楕円形で長径 0.46m×短径 0.23m，深さ 0.13m，Ｐ３は円形で径 0.33m×0.29m，深さ 0.06mである。いずれの柱穴も浅い。埋土はいずれも単層で，Ｐ１が淡黒褐色土，Ｐ２・３が褐色土である。ＳＡ１周辺は削平を受けていることもあり，東西方向に対応する柱穴が見られないことから柱穴列とした。なお，ＳＤ16 の東側には，ＳＡ１やＳＤ16 とほぼ同じ方向に約２m間隔で並ぶ径 0.4～0.7mの穴が 20 個弱あるが，これは城に伴うものではなく，現代にブトウ畑として使用された際に掘られた支柱用の穴である。

出土遺物

遺物は出土していない。

（４）その他の遺構

建物跡と関連が深いものもあるので，ここで記述することにする。その他の遺構は，１郭で 12 基確認した。ＳＸ４～10 については，ほぼ同規模の長方形の遺構で，2.7～2.9m間隔で平行している。また，新しいブドウ畑に伴う溝に直交していることから，ブドウ畑に伴う新しいものである可能性もあるが，断定できないため，遺構として取り扱った。なお，ＳＸ３については，「３　北東尾根」の項に記載した。

①ＳＸ１

検出遺構（第 15 図，図版９－ｃ）

１郭中央北東寄りに位置する遺構である。緩やかな斜面の地山を削って，ＳＢ５を建てるために造り出した方形の平坦面である，主軸は北東－南西方向で，北端はＳＫ25 によって一部削られ

ている。西半部が約 2.5m幅で掘り下げられており，浅い土坑状になっている。東側は次第に浅くなり，東端は不明瞭である。現状で長さ 6.72m，幅 2.58m以上，深さ 0.22mである。本来はＳＢ５の東端までの幅（約４m）はあったものと思われる。ＳＢ４廃絶後に本遺構が掘られ，ＳＢ５が建てられたものと考えられる。埋土は灰黄褐色砂質土の単層である。

出土遺物（第 18・52・55・57・58・59 図，図版 23・24・37・40・41・42）

土師質土器の皿（５～10）・杯（11）・椀（12～32），瓦質土器の鍋（33），常滑焼の甕（34），鉄釘（210～212），鉄製兜片（277），銅製リング（288），古銭（305・330）が出土した。

５～10 は土師質土器の皿である。５～９は口径 5.5～6.7 cm，器高 0.75～1.65 cmである。10 は口径・器高は不明であるが底径が 6.4 cmあり，他より大きいものである。体部は５・９が内湾気味，６が直線的，10 が外反気味である。底部の切り離しは，７・８・10 が回転糸切り，９が回転ヘラ切りである。７・８は内面底部が盛り上がり，深さがないため，容器としては非実用的である。

11 は土師質土器の杯である。口径 8.8 cm，器高 2.3 cmで，杯としては小型のものである。体部は内湾気味に立ち上がる。底部の切り離しは不明であるが，外部底面はやや窪んでいる。

12～32 は土師質土器の椀である。体部はいずれも内湾して立ち上がる。このうち 12～29 の口径は 8.0～9.7 cmで，器高は 1.95～2.7 cmである。器高 2.2～2.4 cmのものが多い。外面底部をわずかに窪ませるものもある。30 は口径 8.6～8.9 cm，器高 2.9 cmで，口径の割には器高があるタイプである。31・32 は口径 9.6～9.7 cm，器高 3.4～3.5 cmの深い椀である。32 は底部が小さく，外面底部を窪ませている。

33 は瓦質土器の鍋である。体部はやや内湾気味に立ち上がり，外面に断面三角形の突帯を貼り付けている。口縁端部は平坦である。

34 は常滑焼の甕である。肩部が大きく張り，外面肩部に銭のスタンプ文が廻る。内面及び内面にススが付着しているが，割れた後に付着したものである。ＳＸ１から常滑焼甕片は６点出土しているが，同一個体と思われる。

その他，備前焼の甕，青磁が出土したが，細片のため図示できなかった。

277 の鉄製兜片は重量 25.65 g である。また， 210～212 を含め鉄釘９点が出土した。

②ＳＸ２

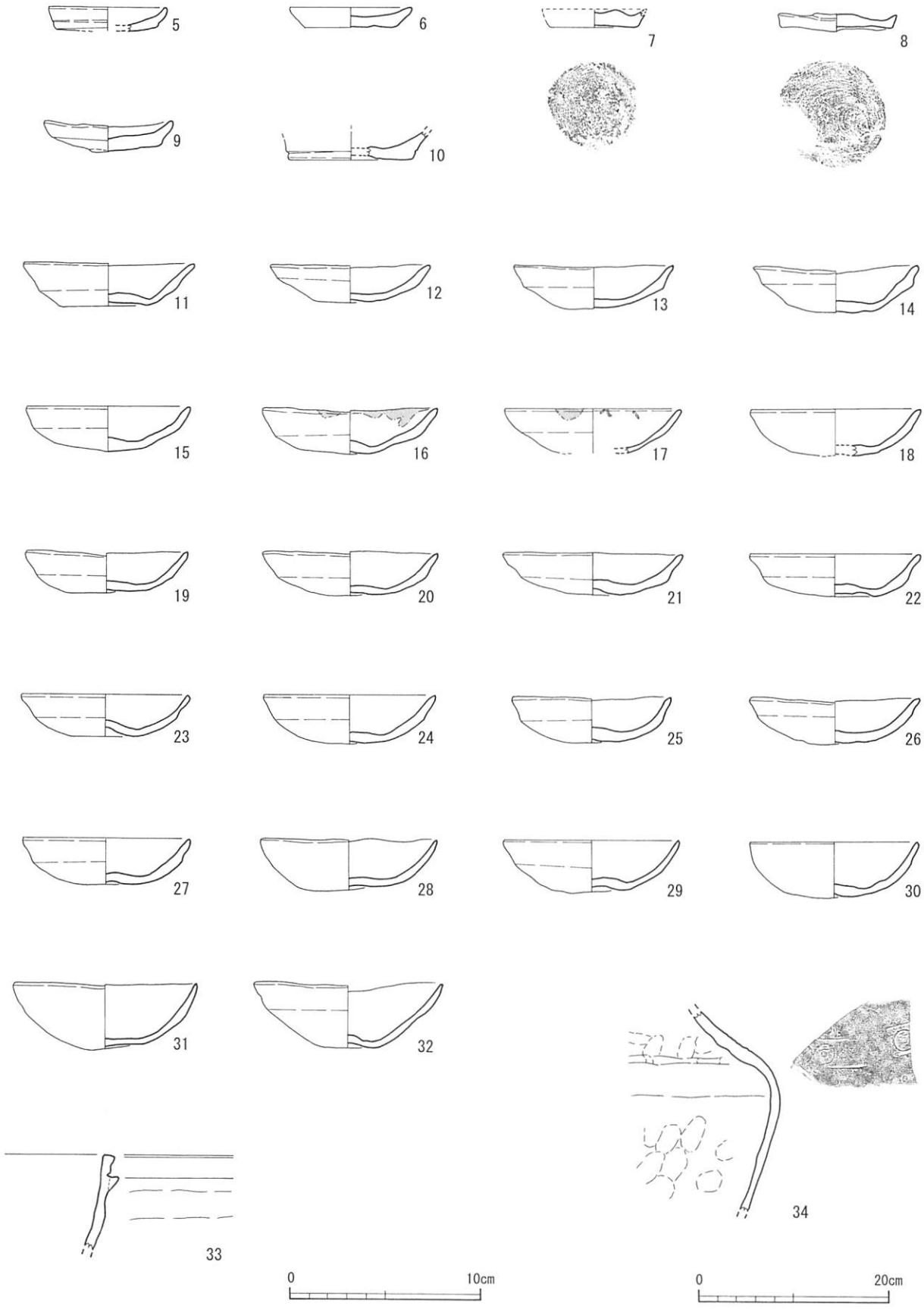
検出遺構（第 11・23 図，図版６－ｃ，７）

１郭中央南寄りに位置する遺構である。ＳＢ２を建てるために，緩やかな斜面を削って作り出した方形の平坦面である。長さ約 10m，深さ 0.64mである。東に向かうにつれ次第に浅くなっているため，幅は不明瞭であるが，幅 4.6～5.4mのところで段差ができて土坑状になっている。

ＳＸ２が埋められた後，ＳＢ３が建てられている。埋土は基本的には３層で，中層の明黄褐色砂質土で一旦整地が行われたようである。

出土遺物（第 19・52・54・58・59 図，図版 24・25・37・38・39・42）

土師質土器の皿（35）・杯（36），瓦質土器の鍋（37～40），東播系須恵器の擂鉢（41・42），亀



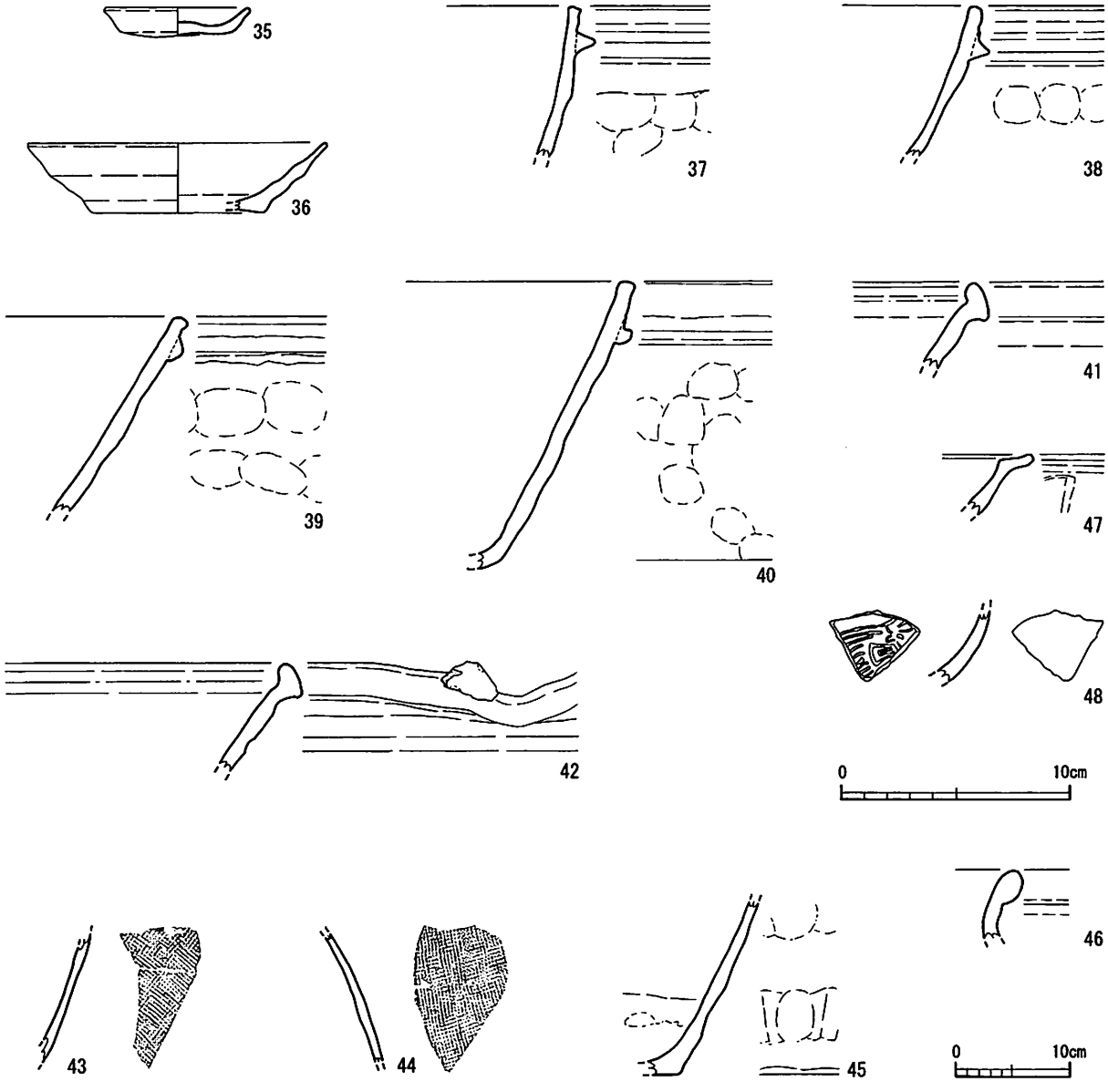
第18図　ＳＸ１出土土器類実測図（1：3，34は1：6）

山焼の甕（43・44），備前焼の甕（45・46），青磁の皿（47）・碗（48），鉄釘（213～229），鉄製掛金（265），古銭（295・296・300・301・303・306～312・314・319・321・325～329・331・333・334・336）24枚が出土した。ＳＸ２の北側の炭・焼土層（灰黄褐色砂質土）から多くの遺物が出土した。

35は土師質土器の皿である。復元口径6.2㎝，器高1.25㎝で，体部は外反気味に立ち上がる。底部切り離しは，回転ヘラ切りである。内面に炭化物が付着している。

36は土師質土器の杯である。復元口径13.0㎝，器高3.0㎝で，体部は直線的に立ち上がる。底部の切り離し方法は，不明である。

37～40は瓦質土器の鍋である。いずれも口縁端部は平坦に近く，外面に突帯を貼り付けている。



第19図　ＳＸ２出土土器類実測図（1：3，43～46は1：6）

外面体部に指頭圧痕が残る。37・38 は体部がやや内湾気味に立ち上がる。39・40 は体部が直線的に立ち上がり，内面体部の調整はナデである。37～39 の突帯の断面は三角形で，40 は方形である。37・39・40 の外面体部にはススが付着している。37 はH13 区盛土出土破片と接合し，39・40 はそれぞれG12 区包含層出土破片と接合した。

41・42 は東播系須恵器の擂鉢である。ともに体部は直線的に立ち上がり，短く直立し端部を尖り気味に納める玉縁状の口縁部がつく。内面に擂り目はない。42 は片口がつき，片口部に粘土が付着している。42 とG13 区包含層出土の破片が接合した。

43・44 は亀山焼の甕の胴部片である。いずれも外面に格子目タタキを施し，格子の単位は３㎜×３㎜である。

45・46 は備前焼の甕である。45 は胴部下半片である。底部から斜め上方にやや内湾気味に立ち上がる。46 は口縁部片である。口縁部は外反し，端部を折り曲げて玉縁を形成している。

47 は青磁の鍔皿の口縁部片である。内湾する体部に，水平に折り曲げた鍔状の口縁部がつく。端部はわずかに立ち上がる。口縁端部を除き，淡緑色の釉がかかる。外面の文様は蓮弁と思われる。二次焼成を受けている。

48 は青磁の碗の体部片で，体部は内湾し，内面に印花文がある。全体に淡緑色の釉がかかる。

その他，須恵器系土器（甕など），青白磁、滑石製の石鍋の体部から底部にかけての破片２点が出土しているが，細片のため図示できなかった。

鉄製品は，213～229 を含め鉄釘 58 点，265 の掛金１点が出土した他に鉄滓 28 点（568.4ｇ）が出土した。

③ＳＸ４

検出遺構（第９図）

１郭西部中央に位置する方形の遺構である。主軸は南東－北西方向で，2.7m北東に同様の遺構ＳＸ５がある。北西端はブドウ畑に伴う新しい溝によって切られているが，現存長 2.94m，幅 0.86～1.08m，深さ 0.04～0.13mである。埋土は淡暗褐色土の単層である。

出土遺物

遺物は出土していない。

④ＳＸ５

検出遺構（第９図）

１郭西部中央に位置する方形の遺構である。ＳＸ４の 2.7m北東にあり，2.8m北東には同様の遺構ＳＸ６がある。主軸は南東－北西方向であり，北西端はブドウ畑に伴う新しい溝によって切られている。現存長 2.61m，幅 0.88～1.06m，深さ 0.04～0.16mである。埋土は淡暗褐色土の単層である。

出土遺物

瓦質土器が出土したが，細片のため図示できなかった。

⑤ＳＸ６

検出遺構（第９図）

１郭西部中央寄りに位置する方形の遺構である。ＳＸ５の 2.8m北東にあり，2.7m北東にＳＸ７がある。主軸は南東－北西方向であり，北西端は次第に不明瞭になる。長さ 2.22m，幅 0.80～0.91m，深さ 0.11mである。埋土は淡暗褐色土の単層である。

出土遺物

遺物は出土していない。

⑥ＳＸ７

検出遺構（第９図）

１郭西部北寄りに位置する遺構である。ＳＸ６の 2.7m北東にあり，2.9m北東にＳＸ８がある。北西側でＳＫ33・34 と重複しているが，ＳＸ７の方が新しい。現状で長さ 1.02m，幅 0.88m，深さ 0.13mである。埋土は暗褐色土の単層である。本来はＳＸ６・８などと同様に南東－北西方向の主軸で，同程度の形態・規模であったものと思われる。

出土遺物

遺物は出土していない。

⑦ＳＸ８

検出遺構（第９図）

１郭西部北寄りに位置する方形の遺構である。ＳＸ７の 2.9m北東にあり，2.8m北東に同様の遺構ＳＸ９がある。主軸は東南東－西北西方向であり，西北西端はブドウ畑に伴う新しい溝によって切られている。現存長 2.63m，幅 0.91～1.03m，深さ 0.05～0.14mである。埋土は淡暗褐色土の単層である。

出土遺物

遺物は出土していない。

⑧ＳＸ９

検出遺構（第９図）

１郭北西部に位置する方形の遺構である。ＳＸ８の 2.8m北東にあり，2.9m北東に同様の遺構ＳＸ10 がある。南西には同方向の溝状遺構ＳＤ17 が隣接している。主軸は東南東－西北西方向であり，西北西端はブドウ畑に伴う新しい溝によって切られている。西北西部はＳＫ35 と切り合い関係にあり，本遺構の方が新しい。現存長 2.87m，幅 0.81～1.07m，深さ 0.07～0.11mである。埋土は底部に一部淡褐色土があるが，大部分は暗褐色土である。ＳＤ17 と隣接して平行し，埋土も同じことから同時期の遺構の可能性が高い。

出土遺物

土師質土器が出土したが，細片のため図示できなかった。

⑨ＳＸ10

検出遺構（第９図）

１郭北西部に位置する方形の遺構である。ＳＸ９の 2.9m南西にある。主軸は南東－北西方向

であり，北西端はブドウ畑に伴う新しい溝によって切られている。ＳＫ40 と重複しているが，ＳＸ10 本遺構の方が新しい。現存長 2.76m，幅 0.87～0.98m，深さ 0.04～0.14mである。埋土は明褐色土の単層である。

出土遺物

遺物は出土していない。

⑩ＳＸ11

検出遺構（第９図）

１郭北西端付近に位置する方形の遺構である。ＳＫ39 の北東 0.4m，ＳＸ10 の北西 1.2mにある。ＳＸ４～10 とは主軸の方向が違い，北東－南西方向である。また，ＳＸ４～10 に比べ，深い。北西端はブドウ畑に伴う新しい溝によって切られている。現存長 1.17m，幅 1.34m，深さ 0.3mである。

出土遺物（第 53・59 図，図版 37・42）

鉄釘（230～235），古銭（335）が出土した。鉄製品は，230～235 を含め鉄釘７点（78.77ｇ），不明鉄製品１点が出土した他に古銭片，鉄滓１点（10.72ｇ）が出土している。

その他，土師質土器（皿など），瓦質土器の鍋・すり鉢，備前焼の甕が出土したが，細片のため図示できなかった。

⑪ＳＸ12

検出遺構（第 20 図，図版 16－ａ）

１郭中央北寄りに位置する遺構である。ＳＡ１の北東にあり，Ｐ１との距離は 1.8mである。北部でＳＸ13 と接する。平面形は不整形で，長円形の北東部が張り出したような形態である。底面は平らではなく，いくつかの段やピット状の窪みが見られる。規模は長さ 4.53m，幅 2.97m，深さ 1.31mである。南側を深く掘り込んでおり，北側は浅くなっている。北部に焼土が集中する部分が見られ，その範囲は 1.27m×0.83mである。焼土の内に 0.05～0.2mの礫が３個認められた。

出土遺物（第 39 図，図版 32）

瓦質土器の鍋（138）が出土した。体部は斜めに直線的に立ち上がり，外面に断面三角形の突帯を貼り付ける。口縁端部は平坦である。

その他，土師質土器が出土したが，細片のため図示できなかった。

⑫ＳＸ13

検出遺構（第 20 図，図版 16－ｂ）

１郭中央北寄りに位置する遺構である。南部でＳＸ12 と接する。平面形は楕円形で，長径 1.48m×短径 0.83m，深さ 0.28mである。西側が深く，東側に向かうにつれ次第に浅くなる。ほぼ全体に焼土が入っている。また，内部の 0.1～0.2mの礫が２個認められた。

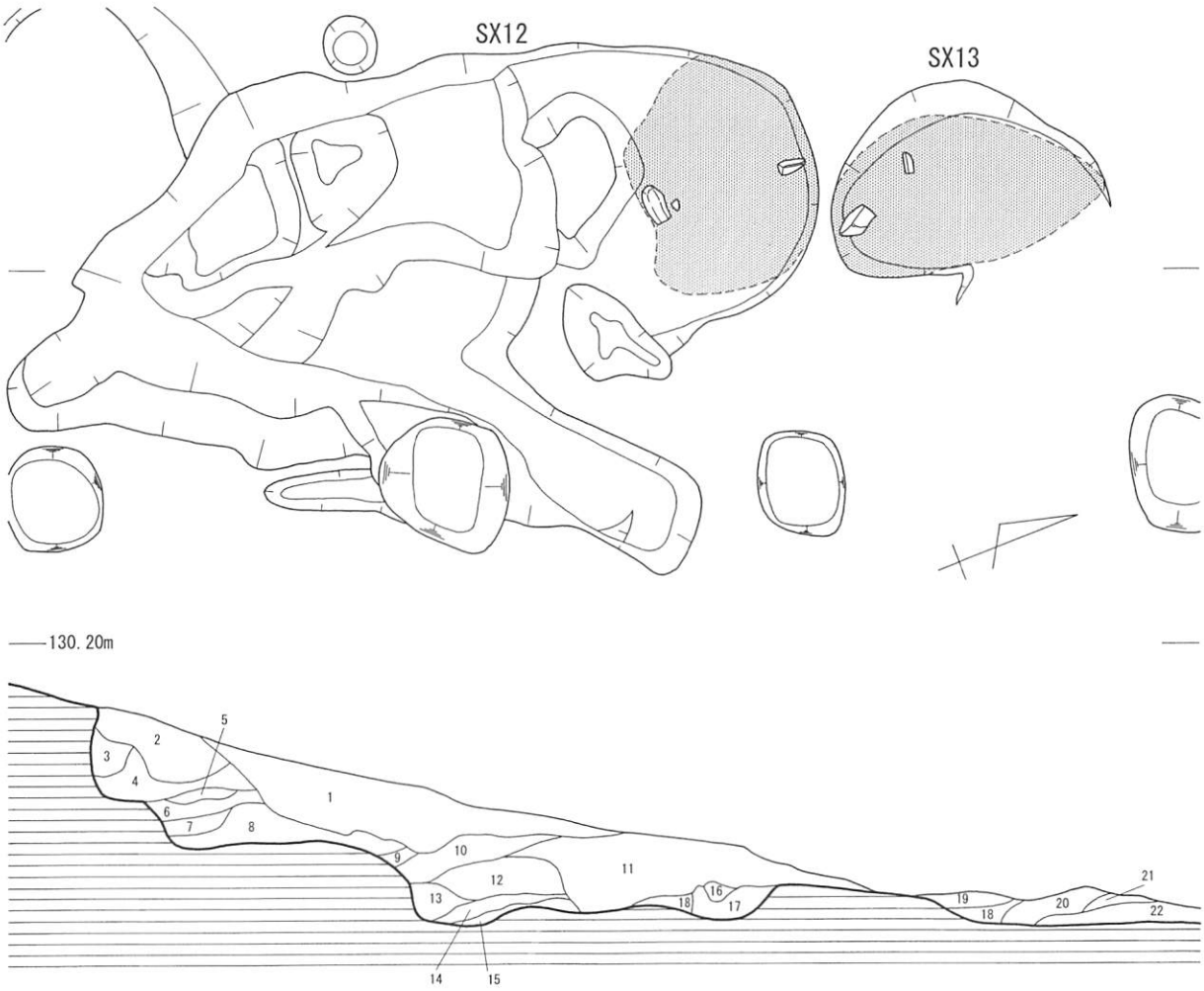
出土遺物（第 21・52 図，図版 26・38）

土師器の椀（49），瓦質土器の擂鉢（50），白磁の碗（51），鉄釘（236）が出土した。

49は土師器の椀である。高台がつく大型の椀で，体部は内湾しながら立ち上がる。底部の器壁が1.3～1.7㎝と厚く，口縁部に向かって次第に薄くなる。高台は貼り付けではなく，粘土から挽きだしたものと思われる。復元口径16.9㎝，推定高台径10.4㎝，推定器高6.35㎝である。

50は瓦質土器の擂鉢である。体部は斜めにまっすぐ立ち上がり，口縁端部は平坦で中央がやや窪んでおり，内側にやや肥厚させている。内面に斜め方向の粗い擂り目があり，擂り目が交差している。擂り目の単位は6条と思われる。

51は白磁の碗である。体部は斜め上方に直線的に立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。器壁は薄く，口縁端部を除き，淡青灰色の釉がかかる。皿の可能性もある。



1　淡褐色土(1㎝大の小礫を少し含む)
2　淡褐色土(1㎝大の小礫を多く含む)
3　淡黄褐色土(淡灰褐色土を含む。1～3㎝の小礫を多く含む)
4　淡黄褐色土(淡灰褐色土を少し含む)
5　淡褐色土(淡灰褐色土を少し含む)
6　淡黄褐色土(淡褐色土・1㎝大の小礫を少し含む)
7　淡褐色土(淡灰褐色土を含む)
8　淡黄褐色土(淡褐色土・1㎝大の小礫を少し含む)
9　茶褐色土
10　淡黄褐色土(淡褐色土を含む)
11　淡褐色土(炭化物を少し含む)
12　淡褐色土(黄褐色土を少し含む)
13　淡褐色土(黄褐色土を含む)
14　淡灰褐色土
15　淡黄褐色土＋淡灰褐色土
16　淡黄褐色土＋淡褐色土
17　淡褐色土(黄褐色土を多く含む。炭化物を少し含む)
18　淡黄褐色土(淡褐色土を少し含む)
19　淡褐色土(茶褐色土を粒状に含む)
20　淡褐色土(茶褐色土を粒状に含む。淡黄褐色土を少し含む)
21　淡褐色土(淡灰褐色土・淡黄褐色土を多く含む)
22　黄褐色土(淡褐色土を少し含む)

0　2m

第20図　ＳＸ12・13実測図（1：40）（アミ目は焼土範囲）

その他，土師質土器，瓦質土器の鍋，備前焼の甕が出土したが，細片のため図示できなかった。鉄製品は236を含め鉄釘２点の出土のみである。その他に鉄滓１点（545.91ｇ）が出土した。

（５）　土坑

土坑は37基検出した。ＳＫ42まで遺構番号を付けているが，調査段階で土坑としていたＳＫ６・７・18・20については，整理を進める過程で，土坑ではなく，礎石掘方あるいは柱穴の可能性が高いと判断した。このため，本報告書では欠番となっている。なお，ＳＫ19については，「２　１郭東側切岸」の項に記載している。

①ＳＫ１

検出遺構（第９図）

調査区南部に位置する円形の土坑である。南東側は調査区外に続いている。規模は現状で長径1.54m×短径0.50m，深さ0.06mである。埋土は暗褐色土の単層である。

出土遺物

土師質土器（皿など）が出土しているが，細片のため図示できなかった。

②ＳＫ２

検出遺構（第22図，図版10－ｂ）

調査区南部に位置する土坑である。ＳＢ３の南にあり，Ｐ８からの距離は1.3mである。底部から側面にかけて灰白色粘土を約0.2mの厚みで貼り付けている。埋土は黄橙色砂質土である。内部から礫は検出されなかった。平面形は方形で，長さ2.38m，幅1.43m，深さ0.65mである。主軸の方向は南北方向で，方位はＮ４°Ｅである。

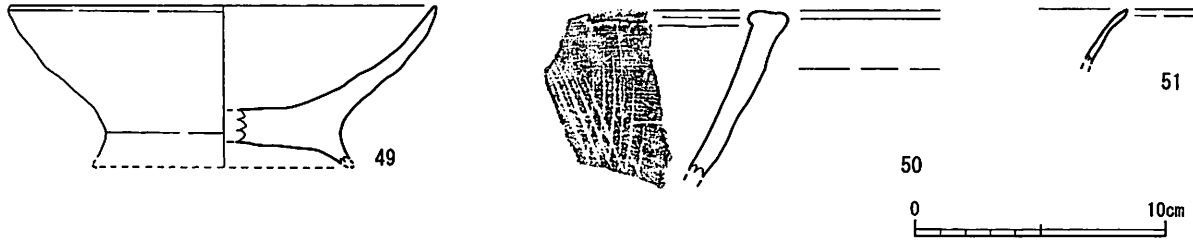
出土遺物（第26図，図版26）

土師質土器の皿が出土した。52は灰白色粘土直上から出土した底径6.8㎝の大型皿の底部である。外面底部は摩滅しているが，回転糸切りの痕跡がかすかに残る。

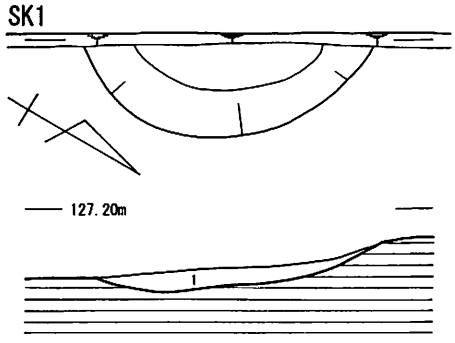
その他，瓦質土器の鍋が出土したが，細片のため図示できなかった。

③ＳＫ３

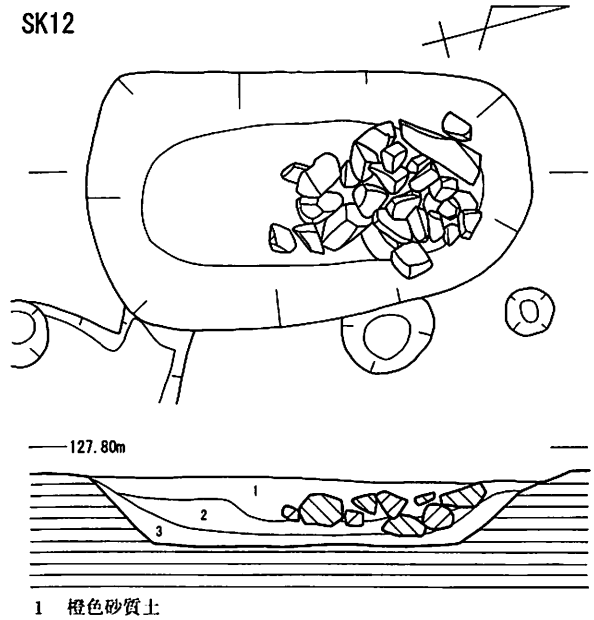
検出遺構（第９図）



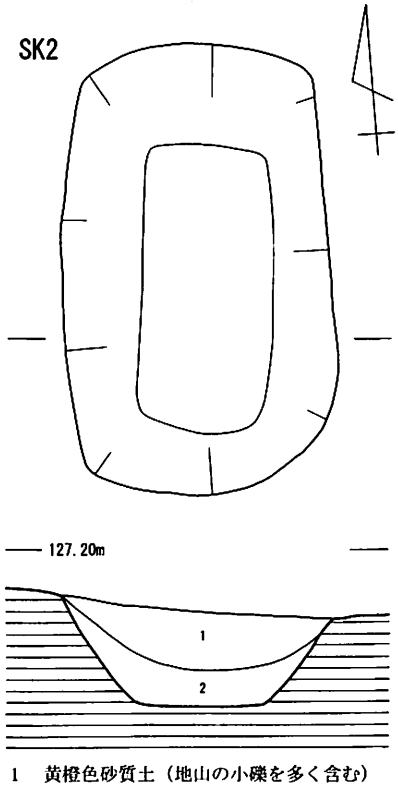
第21図　ＳＸ13出土土器類実測図（1：3）



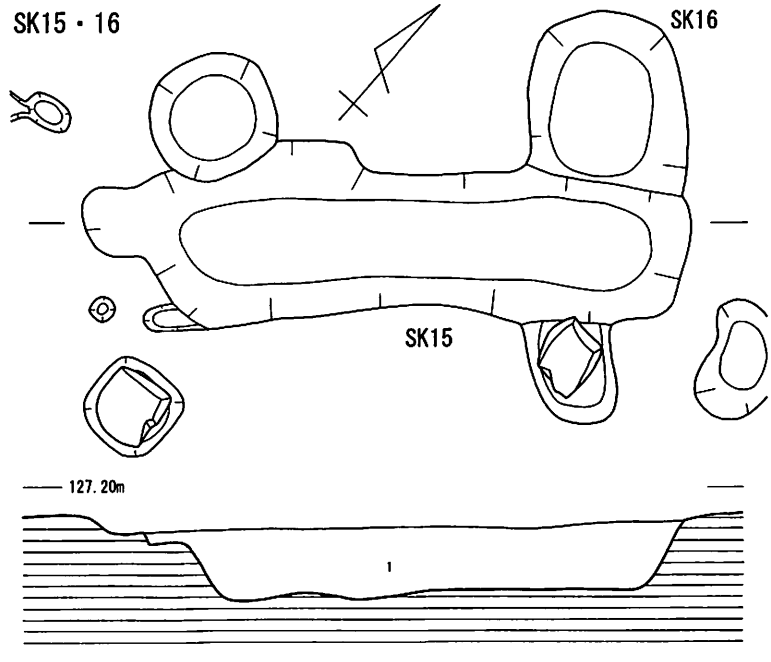
1　暗褐色土（炭化物・土器を少量含む）



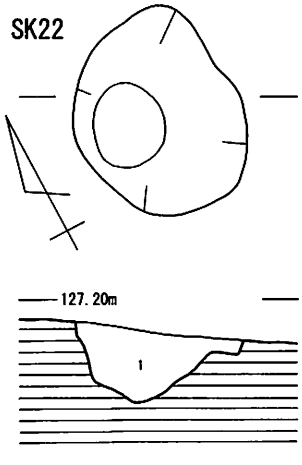
1　橙色砂質土
2　灰黄褐色砂質土（青白色の小粘土塊を多く含み，花崗岩の小礫をわずかに含む）
3　青灰色粘土



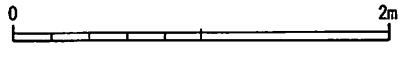
1　黄橙色砂質土（地山の小礫を多く含む）
2　灰白色粘土



1　黄褐色砂質土（炭化物・土器を含む）



1　灰黄褐色砂質土（黄褐色砂質土のブロック・炭化物・土器をわずかに含む）



第22図　ＳＫ１・２・12・15・16・22実測図（1：40）

1郭南部に位置する土坑である。ＳＢ２・３の南東にある。平面形は長円形で，長径0.73m×短径0.58m，深さ0.24mである。

出土遺物

遺物は出土していない。

④ＳＫ４

検出遺構（第９図）

1郭南東部に位置する不整円形の土坑である。ＳＢ２の南東にある。ＳＤ５と重複しているが，新旧は不明である。現状で長径2.17m，短径1.72m，深さ0.11mである。

出土遺物

遺物は出土していない。

⑤ＳＫ５

検出遺構（第23図，図版７－ａ）

1郭南部，ＳＸ２内に位置する方形の土坑である。平面形は長円形で，長径4.26m，短径1.90m，深さ0.63mである。ＳＢ２・３，ＳＤ３・４と重複している。主軸はＳＢ２やＳＸ２と同じ北東－南西方向であり，方位はN49°Ｅである。ＳＸ２が埋められた後に掘られた土坑で，ＳＢ２の柱穴Ｐ11を一部壊していることからＳＫ５の方が新しい。ＳＫ５の上面にＳＢ３の礎石Ｐ７・13があることから，ＳＢ３よりＳＫ５の方が古い。ＳＤ４を一部壊していることからＳＫ５の方が新しい。ＳＤ３との新旧関係は不明である。埋土は橙色砂質土の単層である。

出土遺物（第26・52・56図，図版26・38・41）

土師質土器の椀（53），瓦質土器の鍋（54・55），東播系須恵器の甕（56），鉄釘（237），板状鉄製品（282）が出土した。全体的に土器の出土量は少ない。

53は土師質土器の椀である。体部は内湾して立ち上がる。底部を欠損するが，復元口径9.8㎝，現存器高3.8㎝の深い椀である。

54・55は瓦質土器の鍋である。いずれも口縁端部は平坦に近く，外面に三角形の突帯を貼り付けている。55は体部がやや外反気味に立ち上がり，外面体部に指頭圧痕が残る。

56は東播系須恵器の甕の胴部片である。外面に横方向の平行タタキを施す。内面はハケ目の部分と指頭圧痕が残る部分が見られる。壺の可能性もある。

その他，亀山焼の甕，備前焼の甕・擂鉢，青磁が出土したが，細片のため図示できなかった。鉄製品は，237を含め鉄釘９点，282の板状鉄製品１点が出土した他に鉄滓７点（387.81ｇ）が出土した。

⑥ＳＫ８

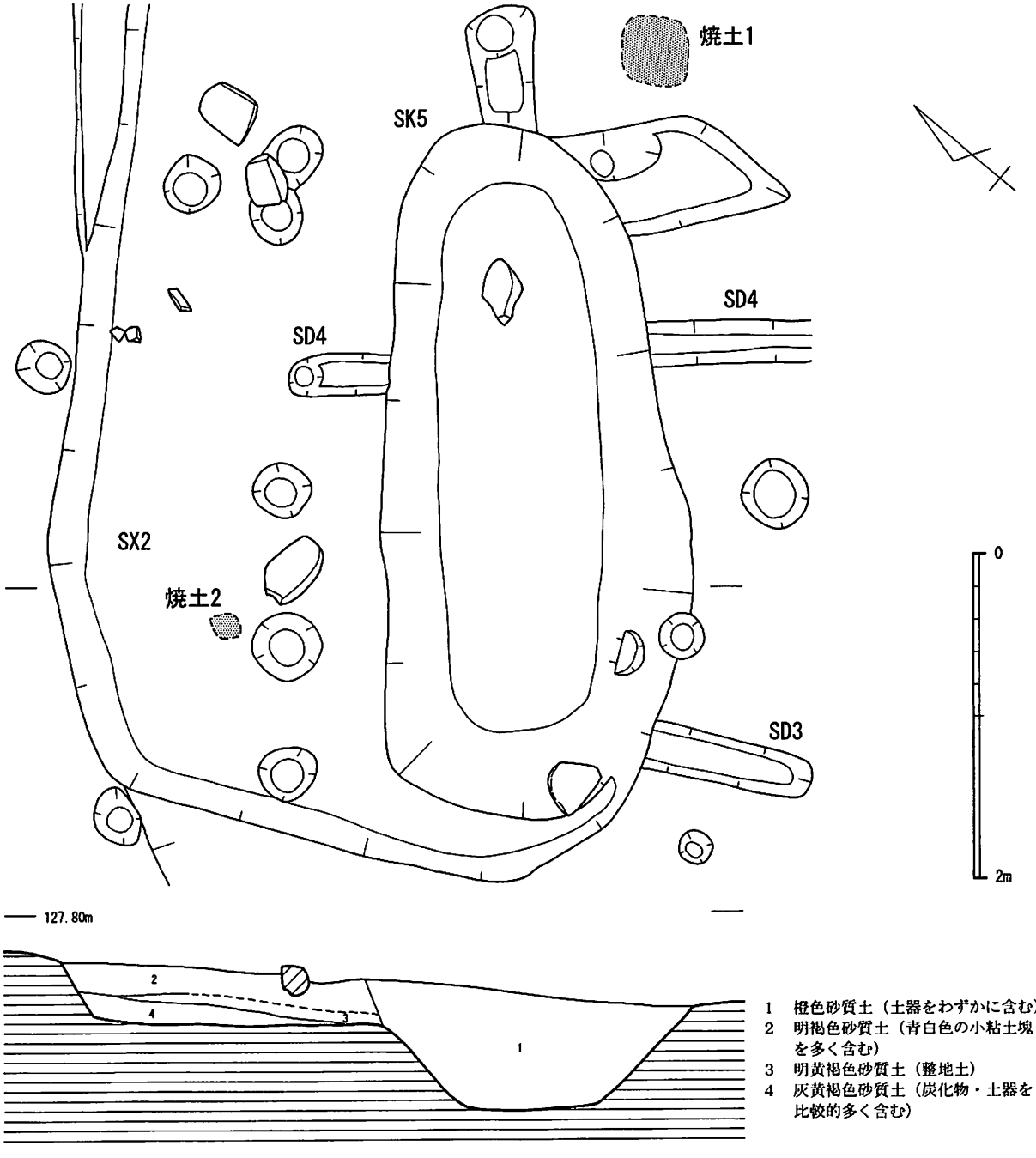
検出遺構（第24図，図版10－ｃ）

1郭中央東寄りに位置する土坑である。ＳＫ11と重複するがＳＫ８の方が新しい。平面形は長方形，主軸方向は東西で，方位はN81°Ｅである。底面に0.05～0.08mの厚みで灰白色粘土を貼っている。規模は長さ2.48m，幅1.52m，床面粘土までの深さ0.60mである。中央の粘土直上

で炭化物が集中する部分が見られた。埋土上層は橙色砂質土である。埋土中に角礫が数個見られた。底面の粘土除去後，0.1～0.35mの角礫が数個出土したが，本遺構に伴うものではなくＳＫ11に伴うものである。

出土遺物

上層の橙色砂質土から土師質土器（皿など），備前焼の甕が，粘土直上から土師質土器の皿が出土した。いずれも細片のため図示できなかった。備前焼の甕片はＳＫ11出土の57と接合した。



第23図　ＳＫ５・ＳＸ２実測図（1：40）（アミ目は焼土範囲）

⑦ＳＫ９

検出遺構（第 24 図，図版 11－ｃ）

１郭中央東寄りに位置する土坑である。ＳＫ11 と重複するがＳＫ９の方が新しい。平面形は長方形，主軸方向は南北で，方位はＮ２°Ｗである。底面に青灰色粘土を約 0.2mの厚みで貼っている。規模は長さ 3.02m，幅 2.14m，床面粘土までの深さ 0.75mである。埋土は橙色砂質土で，粘土上全面で 0.05～0.45mの角礫が２～３層重なる状態で出土した。積み重ねた状態ではないので，土坑が本来の機能を終えた後に廃棄されたものと考えられる。

出土遺物（第 51 図，図版 37）

遺物はすべて埋土である橙色砂質土からの出土である。滑石製の石鍋体部を加工した温石(207)が出土した。

その他，土師質土器（皿など），備前焼の甕，陶器片が出土したが，細片のため図示できなかった。また，鉄釘２点，鉄滓１点（102.15ｇ）が出土した。

⑧ＳＫ10

検出遺構（第 25 図，図版 11－ｂ）

１郭北部中央に位置し，北東から南西方向に３基並んで検出した円形土坑の１つで，ＳＫ10 は南西のものである。３基の土坑は，完全に一直線に並ぶのではなく，ややずれている。0.5m北東にＳＫ14 がある。南側に新しいピットが重なっている。また，北東部にピット状の窪みがある。径 0.81m，深さ 0.41mであるが，北東－南北方向が長くなる可能性がある。埋土は橙色砂質土の単層で，ＳＫ13・14 と同一である。

出土遺物

遺物は出土していない。

⑨ＳＫ11

検出遺構（第 24 図，図版 12－ａ）

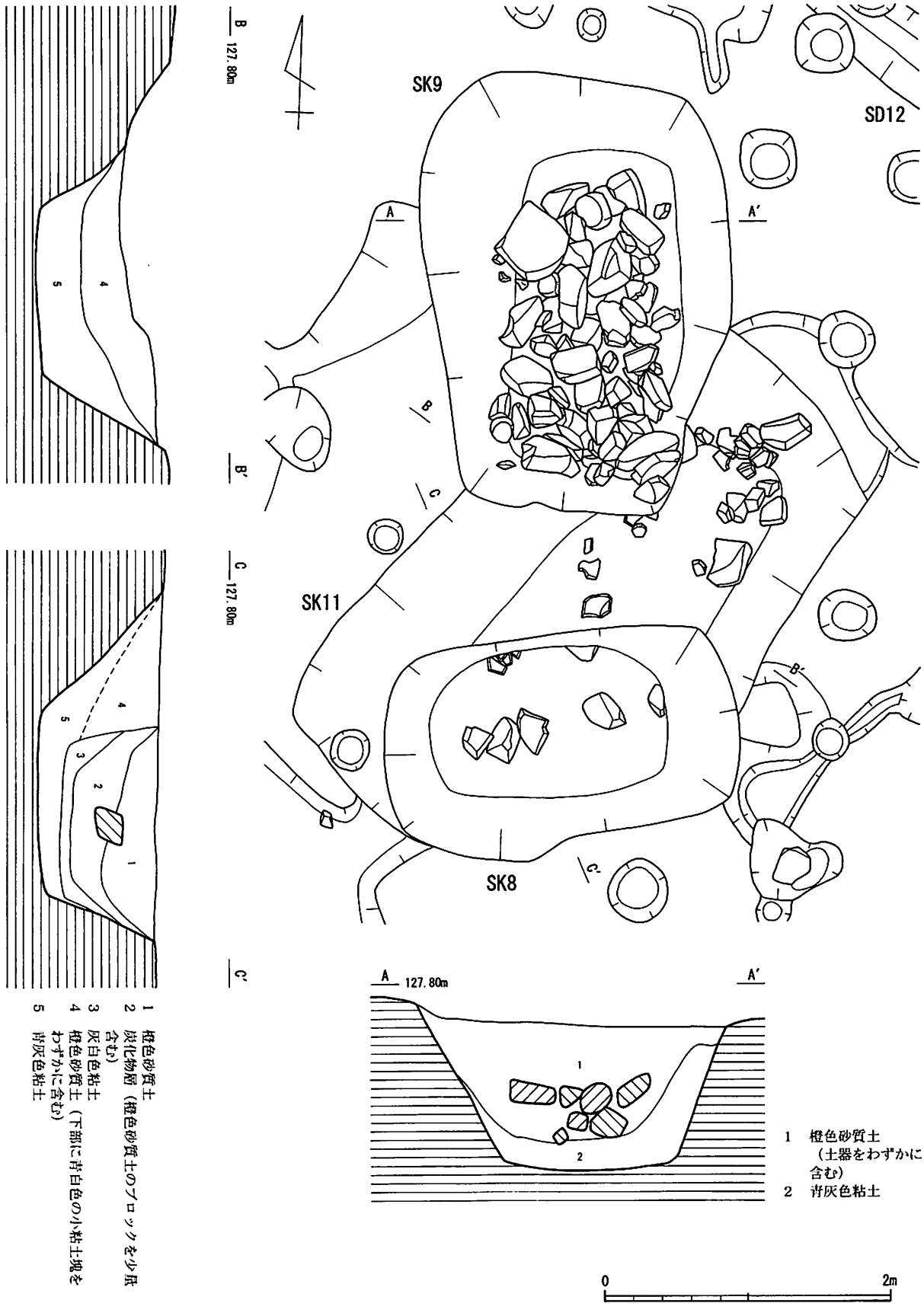
１郭中央東寄りに位置する大型の土坑である。ＳＫ８・９と重複しているが，ＳＫ11 の方が古い。平面形は長方形，主軸方向は北東－南西で，方位はＮ33°Ｅである。底面全体に青灰色粘土が約 0.3mの厚みで堆積している。埋土は橙色砂質土である。規模は，長さ 4.10m，幅 2.46m，深さ 0.78mである。北東端で５～35 ㎝の角礫が比較的多く出土した。

出土遺物（第 26 図，図版 26）

亀山焼の甕（58），備前焼の擂鉢（57）・甕（59）が出土した。亀山焼は橙色砂質土からの出土であるが，大部分の遺物は粘土直上からの出土である。

57 は備前焼の擂鉢の底部から体部にかけての破片である。体部は内湾気味に立ち上がり，内面体部上部に淡黄褐色の自然釉がかかる。内面に擂り目があり，単位は 11 条である。ＳＸ８出土の破片と接合した。137 と同一個体の可能性が高い。

58 は亀山焼の甕の胴部片である。外面に格子目タタキを施す。格子の単位は３㎜×３㎜である。59 は備前焼の甕である。底部から胴部下半にかけて残存し，胴部は内湾気味に斜め上方に立ち上



第24図　ＳＫ８・９・11実測図（1：40）

がる。復元底径 34.8 cmである。ＳＫ８から同一個体と思われる破片が出土している。

その他，土師質土器，須恵器系土器が出土したがいずれも細片のため，図示できなかった。

⑩ＳＫ12

検出遺構（第 22 図，図版 12－ｂ）

１郭中央に位置する土坑である。ＳＢ４の西，ＳＢ５・ＳＸ１の南西にあたる。ＳＢ５-Ｐ14 からの距離は 0.5mである。本遺構の西側は１郭の中で一段高くなっているが，ＳＫ12 はその法面を一部削って造られている。平面形は方形で，長さ 2.38m，幅 1.52m，深さ 0.49mである。主軸は南北方向で，Ｎ10°Ｅである。底面に青灰色粘土が 0.05～0.2mの厚みで堆積している。埋土は２層で，上層が橙色砂質土，下層が灰黄褐色砂質土である。北半部粘土上に 0.1～0.5mの礫が集中して見られるが，遺構に伴うかどうかは不明である。

出土遺物（第 26 図，図版 26）

灰黄橙色土から土師質土器の椀（60）が出土した。体部は内湾気味に立ち上がり，底部はやや窪んでいる。口径 9.0 cm，器高 2.55 cmである。

その他，備前焼の甕が出土したが，細片のため図示できなかった。

⑪ＳＫ13

検出遺構（第 25 図，図版 11－ｂ）

１郭北部中央に位置し，北東から南西方向に３基並んで検出した円形土坑の１つで，北東のものである。0.3m南西にＳＫ14 がある。長径 0.84m×短径 0.76m，深さ 0.44mである。埋土は橙色砂質土の単層で，ＳＫ10・14 と同一である。

出土遺物

土師質土器，鉄釘３点が出土したが，いずれも細片のため図示できなかった。また，古銭片が出土した。

⑫ＳＫ14

検出遺構（第 25 図，図版 11－ｂ・ｃ）

１郭北部中央に位置し，北東から南西方向に３基並んで検出した円形土坑の１つで，中央のものである。ＳＫ10 の 0.5m北東，ＳＫ13 の 0.3m南西にある。長径 0.92m×短径 0.78m，深さ 0.36mである。底面に据え置かれた備前焼の甕が出土した。胴部下位から底部にかけての部分が残存しており，口縁部から胴部中位にかけての破片は出土していない。埋土は橙色砂質土の単層で，ＳＫ10・13 と同一である。

出土遺物（第 26 図，図版 27）

備前焼の甕（61）は，土坑の底面に据え置かれたものである。底部から胴部下半にかけて残存し，胴部は内湾気味に斜め上方に立ち上がる。復元底径 44.3 cmである。

その他，土師質土器（皿など），不明鉄製品１点が出土したが，細片のため図示できなかった。

⑬ＳＫ15

検出遺構（第 22 図）

1郭東部中央に位置する土坑である。ＳＫ16と重複しているが，ＳＫ15の方が新しい。平面形は長円形で，主軸方向はＮ48°Ｅである。長径3.24m，短径0.92m，深さ0.33～0.44mである。埋土は黄褐色砂質土の単層である。ＳＢ１と重なっており，主軸方向はＳＢ１とほぼ同じであるが，同時期に存在したとは考え難い。

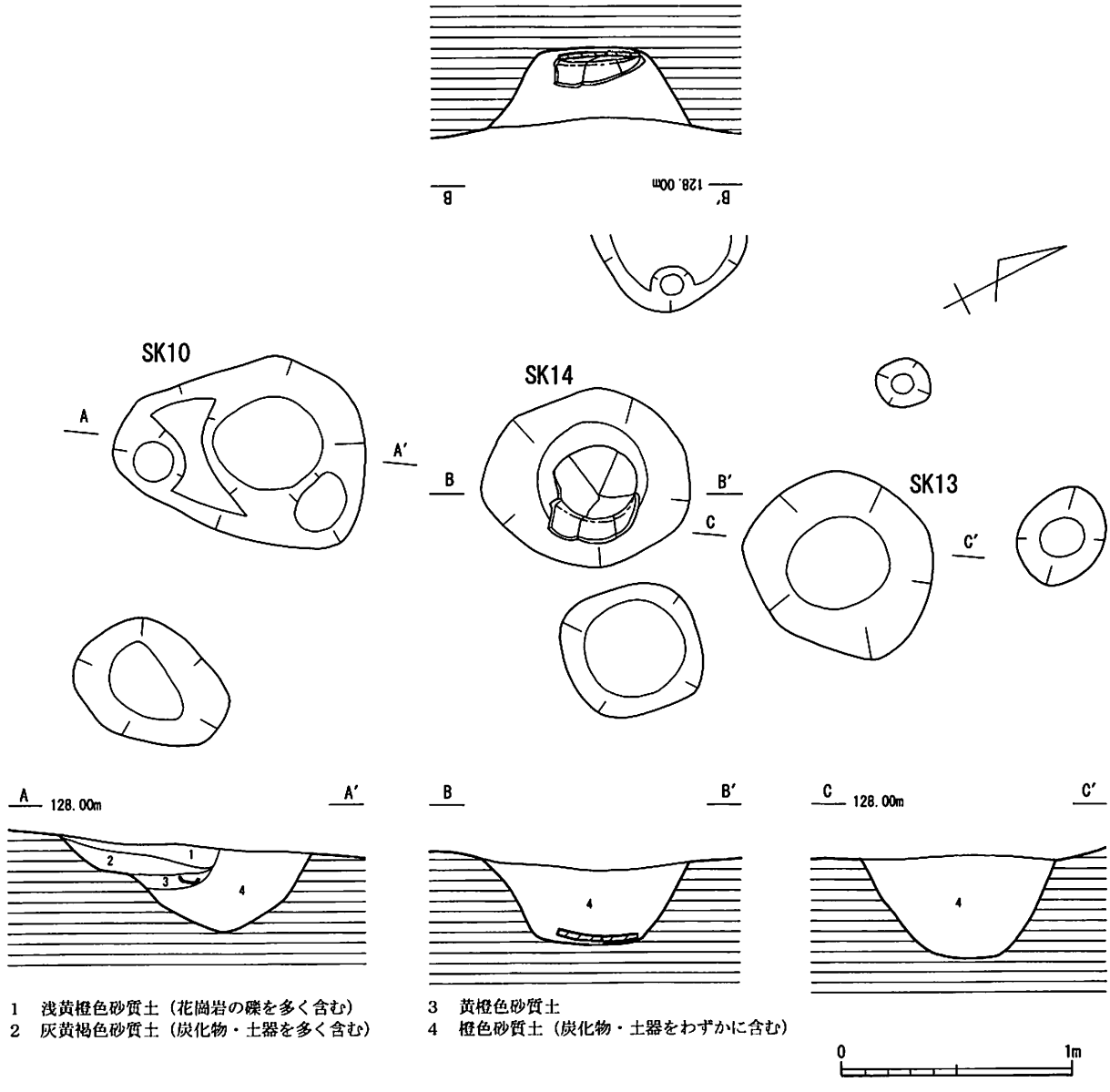
出土遺物

備前焼の甕が出土したが，細片のため図示できなかった。

⑭ＳＫ16

検出遺構（第22図）

1郭東部中央に位置する長円形の土坑である。ＳＢ１と重なっている。ＳＫ15と重複している



1　浅黄橙色砂質土（花崗岩の礫を多く含む）
2　灰黄褐色砂質土（炭化物・土器を多く含む）
3　黄橙色砂質土
4　橙色砂質土（炭化物・土器をわずかに含む）

第25図　ＳＫ10・13・14実測図（1：30）

が，ＳＫ16の方が古い。現状で長径0.90m×短径0.84m，深さ0.45mである。埋土は灰黄橙色土の単層である。

出土遺物

土師質土器が出土したが，細片のため図示できなかった。その他に鉄滓１点（11.48ｇ）が出土した。

⑮ＳＫ17

検出遺構（第９図）

１郭南東端から東側切岸にかけて位置する土坑である。平面形は長円形で，長径1.65m，短径1.29mである。近現代の肥溜と判断し，深さ0.1mしか掘り下げていない。

出土遺物

遺物は出土していない。

⑯ＳＫ21

検出遺構（第27図，図版12－ｃ）

１郭南西部に位置する土坑である。ＳＢ３の西にあり，Ｐ10からの距離は1.6mである。第４次調査区と第５次調査区の境にあたり，第４次調査時には肥溜と考えていた。平面形は隅丸方形で，規模は1.26m×1.23m，深さ1.08mである。南東部は上部が削平され，浅くなっている。断面図には図示していないが，壁面及び底面全体に白色の粘土を薄く貼っている。内部は何層にも土が堆積していた。出土遺物から城に伴うものではなく，新しい遺構と考えられる。

出土遺物（第30図，図版27）

陶器の擂鉢（62）が出土した。体部はやや内湾ぎみに立ち上がり，口縁部は著しく肥厚する。内面には９条単位の擂り目を施す。備前焼系の陶器で，時期は17世紀以降のものである。

⑰ＳＫ22

検出遺構（第９図）

１郭東部中央に位置する土坑である。ＳＫ15・16の1.9m北東にある。平面形は不整長円形で，長径1.07m×短径0.89m，深さ0.45mである。埋土は灰黄褐色砂質土の単層である。

出土遺物

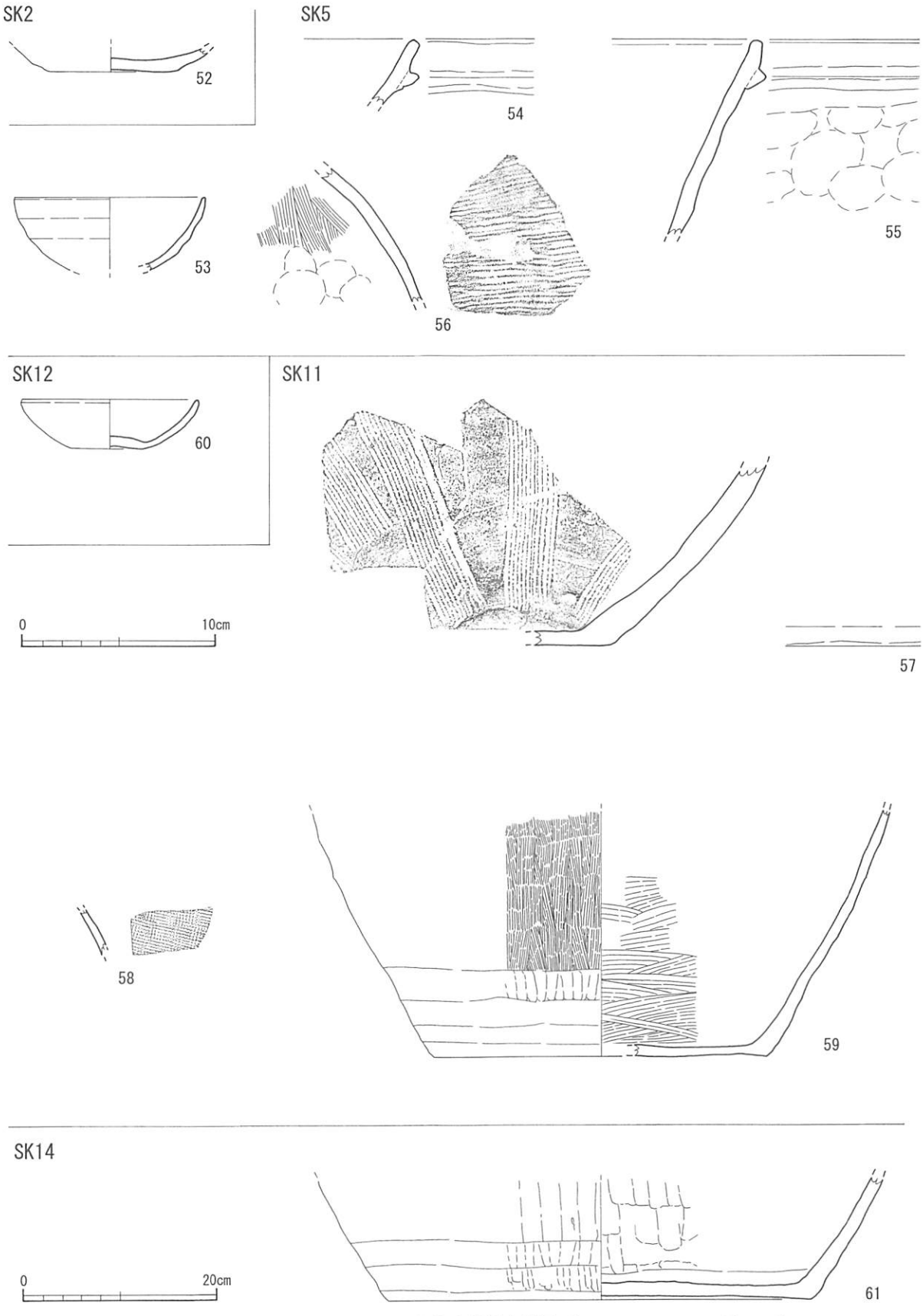
土師質土器，備前焼の甕，青磁，鉄釘１点が出土したが，いずれも細片のため図示できなかった。

⑱ＳＫ23

検出遺構（第９図）

１郭北端中央東寄りに位置する不整形の土坑である。東側にＳＫ27が隣接する。北東端でピットと切り合い関係にあるが，新旧は不明である。長さ約2.1m，幅0.38～0.77m，深さ0.13mである。細長い土坑で，北東部が狭くなる。底面は南西部にピット状の窪みがあり，土坑上面からの深さ0.22mである。

出土遺物



第26図　ＳＫ２・５・11・12・14出土土器類実測図（1：3，58・59・61は1：6）

遺物は出土していない。

⑲ＳＫ24

検出遺構（第27図）

１郭中央北寄りに位置する土坑である。ＳＢ４の北側にあり，Ｐ２からの距離は0.6mである。西側にＳＫ28が隣接する。検出時は１基の大型土坑と考えていたが，掘り進める過程で２基であることが判明した。ＳＫ28との新旧関係は不明である。平面形は不整円形で，長径1.52m×短径1.41m，深さ0.65mである。埋土は黄褐色砂質土の単層である。北部で0.15～0.2mの石を２個検出したが，壁から浮いていることから，ＳＫ24に伴うものではなく，埋没する過程で入り込んだものと思われる。

出土遺物

遺物は出土していない。

⑳ＳＫ25

検出遺構（第28図，図版13－ａ）

１郭北東部に位置する土坑である。ＳＢ４の北東隅にあり，Ｐ３と重複しており，Ｐ３を削っていることからＳＫ25の方が新しい。また，ＳＸ１とも重複しており，ＳＫ25の方が新しい。南東部はピットと重複しているが，新旧関係は不明である。平面形は長方形，主軸は東西方向で，方位はN72°Ｗである。長さ2.60m，幅1.25m，深さ0.51mである。0.8～0.34mの川原石が約15個検出されたが，底面から約10㎝浮いており，また，その配置に規則性もないことから，ＳＫ25に伴うものではなく，廃棄されたものと思われる。底面の一部に灰白色粘土が見られるが，埋土の大部分は黄橙色砂質土である。

出土遺物（第30図，図版27）

黄橙色砂質土から備前焼の擂鉢（63）が出土した。口縁部から体部にかけての破片である。体部は内湾気味に立ち上がり，口縁端部はやや強く外傾させて面を作る。内面に縦方向の擂り目があるが，単位は不明である。Ｉ－11区盛土出土破片と接合した。

その他，土師質土器（皿など），亀山焼，備前焼の甕，常滑焼の甕，不明鉄製品２点が出土したが，いずれも細片のため図示できなかった。常滑焼の甕片は，１郭東側切岸出土のものと接合した。

㉑ＳＫ26

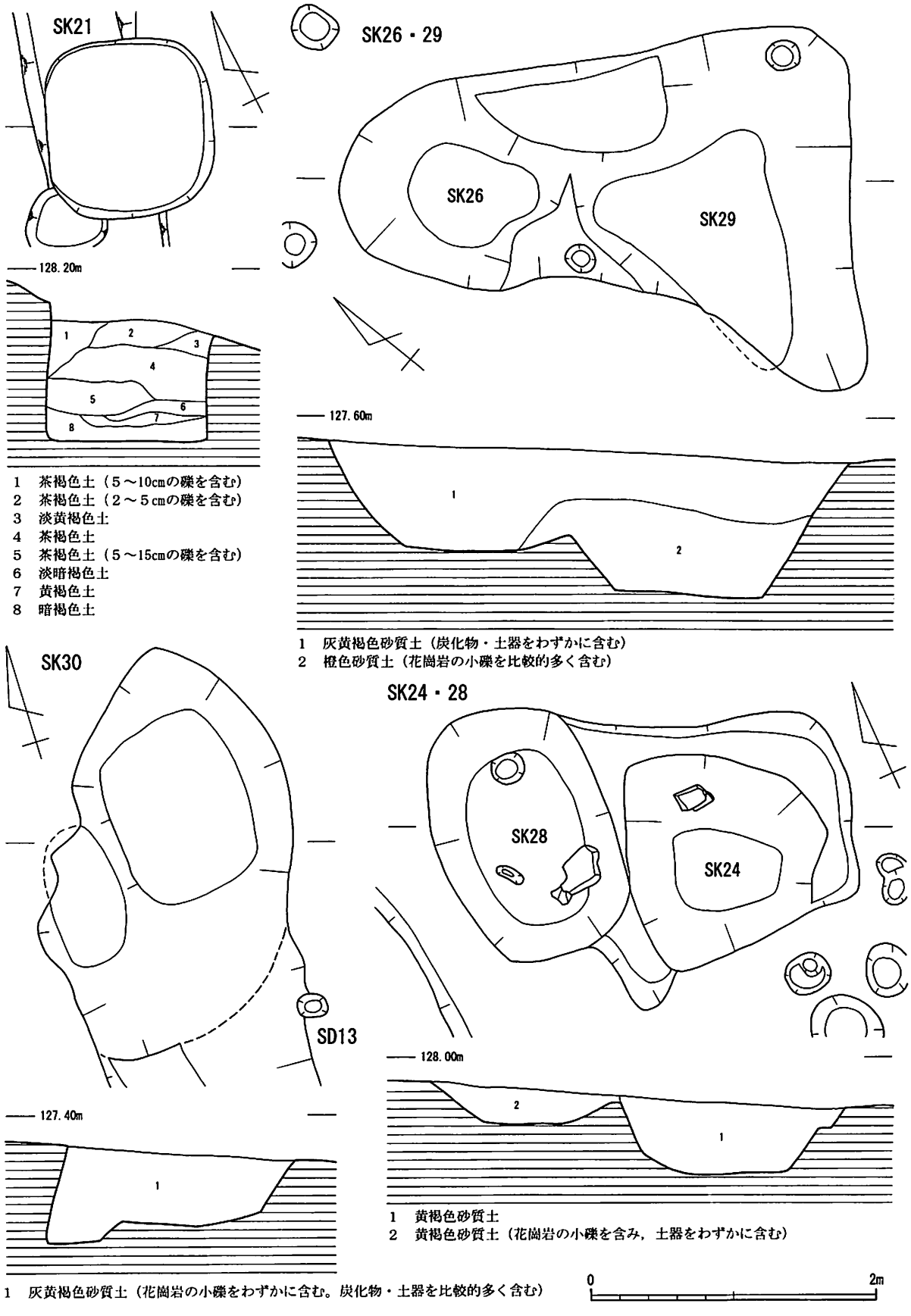
検出遺構（第27図）

１郭北東部に位置する不整円形の土坑である。ＳＫ25の3.5m北にある。ＳＫ29と重複しており，土層断面を見るとＳＫ26の方が新しい。現状で長径1.62m×短径1.52m，深さ0.75mであるが，長径は本来もっと長かったと思われる。

出土遺物

遺物は出土していない。

㉒ＳＫ27



第27図　ＳＫ21・24・26・28～30実測図（1：40）

検出遺構（第９図）

１郭北端中央東寄りに位置する土坑である。ＳＫ23の東側に隣接する。北端はピットと重複しているが，新旧は不明である。平面形は長円形で，長径約 3.0m×短径 1.34m，深さ 0.06mで，北半部にピット状の窪みが幾つか見られ，土坑上面からの深さ 0.30mである。埋土は灰黄褐色土の単層である。

出土遺物（第 30 図，図版 27）

土師質土器の椀（64），備前焼の甕（65）が出土した。

64 は土師質土器の椀である。体部は内湾気味に立ち上がり，口縁部はやや外反する。口径 9.2 cm，器高 2.45 cmである。

65 は備前焼の甕の口縁部片である。口縁部は外反し，端部を折り曲げて玉縁を形成している。

その他，土師質土器の皿が出土しているが，細片のため図示できなかった。

㉓ＳＫ28

検出遺構（第 27 図）

１郭中央北寄りに位置する土坑である。ＳＢ４の北側にあり，Ｐ１からの距離は 1.4mである。ＳＫ24 が東側に隣接する。検出時は１基の大型土坑と考えていたが，掘り進める過程で２基であることが判明した。ＳＫ24 との新旧関係は不明である。平面形は長円形で，長径 1.78m，短径 1.22m，深さ 0.35mである。底面に２つのピット状の窪みがあり，土坑上面からの深さは 0.47 mである。埋土は黄褐色砂質土の単層である。南部で 0.05～0.17mの石を３個検出したが，底から約 0.1m浮いていることから，ＳＫ28 に伴うものではなく，埋没する過程で混入したものと思われる。

出土遺物（第 30 図，図版 27）

備前焼の甕（66）が出土した。口縁部から胴部上半が残存し，復元口径 26.1 cmである。口縁部は外反し，端部を折り曲げて玉縁を形成している。Ｈ－11 区包含層から出土した破片と接合した。

その他，土師質土器の皿，須恵器系土器が出土したが，いずれも細片のため，図示できなかった。その他に鉄滓１点（171.99ｇ）が出土した。

㉔ＳＫ29

検出遺構（第 27 図）

１郭北東部に位置する土坑である。ＳＫ25 の北東 1.8mにある。ＳＫ26 と重複しており，土層断面によるとＳＫ29 の方が古い。平面形は正三角形に近い形をしており，一辺約 2.50m，深さ 1.01mである。底面は西側に寄っており，南西部はオーバーハングしている。埋土は上層が灰黄褐色砂質土，下層が橙色砂質土である。土取り穴の可能性も考えられる。

出土遺物

遺物は出土していない。

㉕ＳＫ30

検出遺構（第 27 図）

1郭東部中央に位置する土坑である。ＳＢ１の北東，ＳＢ４の東。ＳＤ13 と重複しているが，新旧は不明である。平面形は長円形で，底面は二段になっている。現状で長径 2.76m×短径 1.95m，深さは東側が 0.46m，西側が 0.73mである。南西部は一部オーバーハングしている。埋土は灰黄褐色砂質土の単層である。

出土遺物（第 30・50・53 図，図版 27・36・38）

土師質土器の椀（67），白磁の壺？（68），丸瓦（196），鉄釘（238）が出土した。

67 は土師質土器の椀である。体部は内湾気味に立ち上がり，口縁部はやや外反する。底部がやや窪んでいる。復元口径 10.3 ㎝，器高 2.25 ㎝である。

68 は白磁の壺？の胴部片である。素地は淡灰色で，外面には全体に淡青灰色の釉が掛るが，内面は釉が掛らない部分もある。

その他，土師質土器の皿，瓦質土器の擂鉢，亀山焼の甕，須恵器系土器，備前焼の甕・擂鉢が出土しているが，細片のため図示できなかった。また，238 を含め鉄釘５点，不明鉄製品１点が出土している。

㉖ＳＫ31

検出遺構（第 11 図）

1郭中央南寄りに位置する土坑である。ＳＢ２の内部北端付近にある。東側には焼土３が隣接する。平面形は円形で，長径 0.81m×短径 0.68m，深さ 0.41mである。ＳＢ２の内部にあることから，同時期の遺構ではないと思われるが，新旧は不明である。埋土は暗灰褐色砂質土の単層である。

出土遺物

土師質土器，鉄釘２点，不明鉄製品２点が出土したが，細片のため図示できなかった。

㉗ＳＫ32

検出遺構（第 28 図，図版 13－ｂ）

1郭西部中央付近に位置する土坑である。西側は調査区外となるため，正確な形態・規模は不明であるが，平面形は長円形と思われ，底面は平坦ではなく幾つかの段を有する。長径 2.28m，短径は現状で 0.66m，深さは最深部で 0.58mである。埋土は淡褐色土の単層である。

出土遺物

土師質土器が出土したが，細片のため図示できなかった。

㉘ＳＫ33

検出遺構（第 28 図，図版 13－ｃ，14－ａ）

1郭西部北寄りに位置する土坑である。北側にＳＫ34 がある。ＳＫ34 との新旧関係は不明であるが，埋土に大きな違いが認められないことから同時期に存在した可能性もある。ＳＸ７と重複しており，ＳＫ33 の方が古い。平面形は長円形で，２～３の段を有する。長径 1.66m×短径 1.16m，深さ 0.60mである。埋土は上層が淡暗褐色土，中層が明褐色土，下層が淡暗褐色土＋黄褐色土である。中層から 0.1～0.2mの礫が数個出土した。

出土遺物（第30・53図，図版27・38）

土師質土器の皿（69）・杯（70・71）・椀（72），鉄釘（239）が出土した。

69は土師質土器の皿である。体部は内湾気味の部分と外反気味の部分があり，また，器高も一定していない。全体的に雑な作りで，底部の切り離し方法は不明である。口径5.6㎝，器高1.05㎝である。

70・71は土師質土器の杯である。体部は直線的に立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。70は形が歪んでおり，口径10.0～10.6㎝，器高3.3㎝である。71は口径10.7㎝，器高3.35㎝である。

72は土師質土器の椀である。体部は内湾気味に立ち上がり，口縁部はさらに内湾を強める。底部の狭い器形で，口径8.7～9.2㎝，器高2.8㎝である。

その他，備前焼の甕が出土したが，細片のため図示できなかった。また，鉄製品は239の鉄釘1点のみである。

㉙ＳＫ34

検出遺構（第28図，図版14－ａ）

１郭西部北寄りに位置する土坑である。南側にＳＫ33がある。ＳＫ33との新旧関係は不明であるが，埋土に大きな違いが認められないことから同時期に存在した可能性もある。ＳＸ７と重複しており，ＳＫ34の方が古い。平面形は長円形で，北部と東部の底面は二段になっている。長径1.46m×短径1,25m，深さ0.68mである。埋土は下層が淡暗褐色土＋黄褐色土，上層が淡暗褐色土である。

出土遺物

遺物は出土していない。

㉚ＳＫ35

検出遺構（第29図，図版14－ｂ）

１郭北西部に位置する土坑である。西側にＳＫ36がある。ＳＸ９・ＳＤ17と重複しており，ＳＫ35の方が古い。また，西端はブドウ畑に伴う新しい溝によって削られ，下半しか残存していない。平面形は不整円形で，西側が狭くなっている。長径2.64m×短径2.54m，深さ0.72mである。埋土は明褐色土であるが，暗褐色土の含有量によって，上中下の３層に分けることができる。

出土遺物（第30・53～59図，図版27・38・41・42）

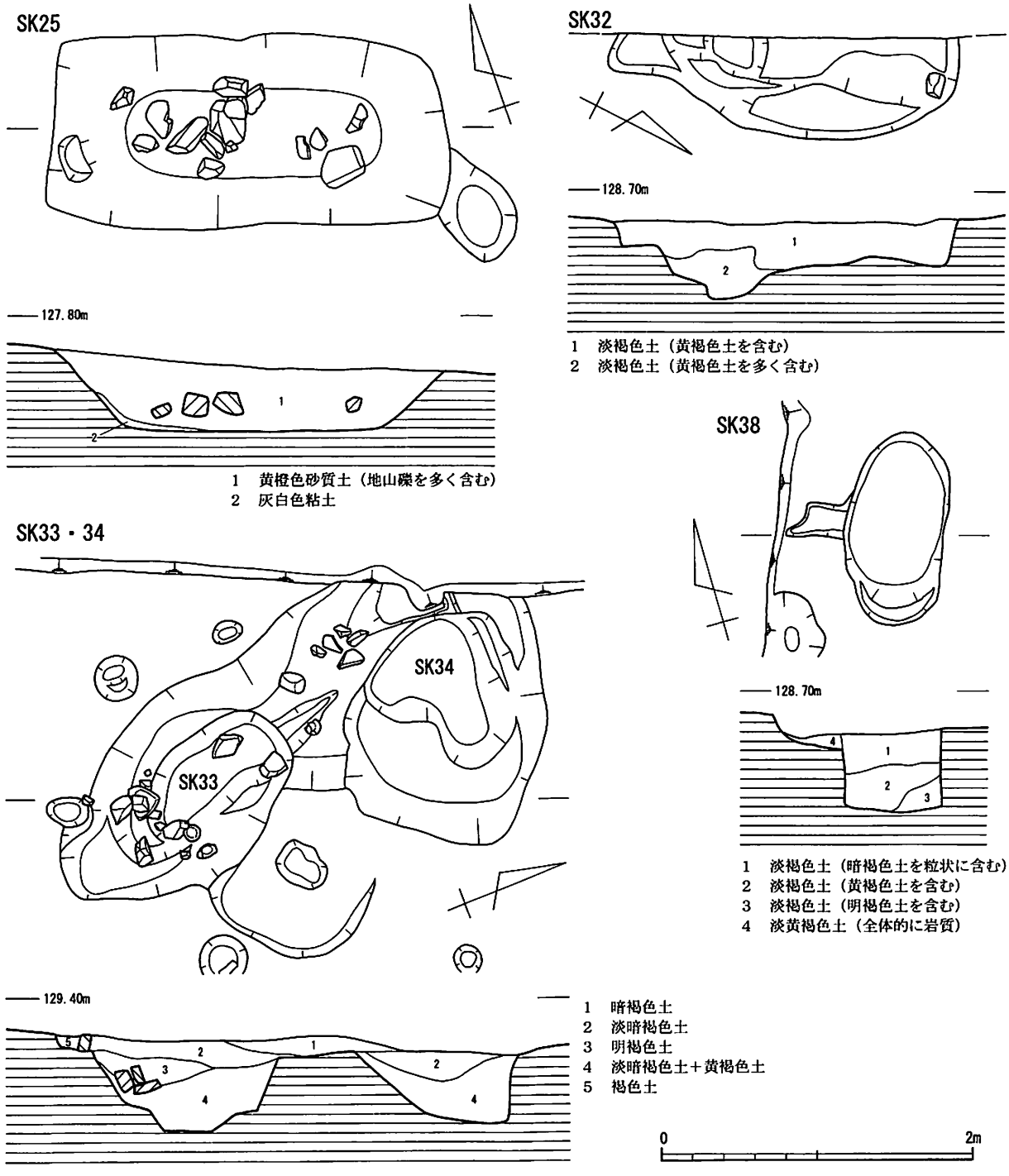
陶器の小壺（73），鉄釘（240～242），板状鉄製品（283），銅製懸仏（287），古銭（297・313・315・317・322・324）６枚が出土した。銅製懸仏は中層から出土した。

73は陶器の小壺である。外面胴部上半に３・４条の沈線がある。胎土は淡灰色で，外面に淡黄褐色の自然釉がかかる。内面は淡褐色であるが，釉ではなく焼成によるものと思われる。内面には暗茶色の物質が付着している。常滑焼の可能性がある。

その他，土師質土器（皿など），亀山焼の甕，須恵器系土器，備前焼，石鍋の可能性がある滑石の小片が２点出土したが，細片のため図示できなかった。

鉄製品は，240～242 を含め鉄釘 6 点，283 の板状鉄製品 1 点，不明鉄製品 1 点が出土した他に，鉄滓が 1 点（61.60 g）出土した。なお，古銭片が出土しているが，322・324 いずれかの破片と思われる。

㉛ＳＫ36



第28図　ＳＫ25・32～34・38実測図（1：40）

検出遺構（第29図，図版14－ｃ，15－ａ）

１郭北西部に位置する土坑である。北東1.8mにはＳＫ39がある。ＳＫ37と重複しており，ＳＫ36の方が古い。東側はＳＫ35と接する。平面形は不整長円形で，現状の規模は長径3.26m×短径2.03m，深さ0.91mである。埋土は基本的には４層である。断面図でみると，本土坑は本来もっと大規模で，長径4.4m，短径2.75m程度の規模で，北側及び西側に段を有していたようである。

出土遺物（第30・53～56図，図版28・38・39～41）

土師質土器の皿（74～78），瓦質土器の鍋（79），亀山焼の甕（80），備前焼の甕（81），白磁の水注？（82），鉄釘（243～248），鉄製金具（266・267），刀状鉄製品（275），用途不明鉄製品（268・278・279），板状鉄製品（284・285），漆紙（339・340）が出土した。土師質土器は上層及び中層からの出土が多く，瓦質土器は上層中心，亀山焼は上層，備前焼は上層から下層，白磁は上層からの出土である。なお，ＳＫ39出土土師質土器の鍋（95）の一部がＳＫ36から出土している。

74～78は土師質土器の皿である。74～77は小型の皿で，口径5.9～6.5㎝，器高0.9～1.2㎝である。74は体部が内湾気味に立ち上がるが，75～77は外反気味に立ち上がる。78は底径5.3～5.8㎝の皿で，体部は内湾気味に立ち上がる。底部切り離しは，74・77が回転ヘラ切りで，板目痕が残る。75・78は回転ヘラ切りと思われるが，76は不明である。

79は瓦質土器の鍋である。体部はやや内湾気味に立ち上がり，外面体部に断面三角形の突帯を貼り付ける。口縁端部は平坦である。

80は亀山焼の甕の口縁部と胴部である。復元口径34.5㎝である。頸部は直立気味に立ち上がり，鋭く屈曲しながら口縁部を外反させている。外面頸部は格子目タタキをナデ消している。接合はしないが，同一個体の胴部と思われる破片が出土している。格子の単位は４㎜×４㎜である。

81は備前焼の甕の口縁部から胴部上半にかけての破片である。口縁部は外反し，端部を折り曲げて玉縁を形成している。ＳＫ37・39，Ｆ９区表土から出土した破片と接合した。

82は白磁の水注？である。削り出しの高台を有し，高台径は4.8㎝である。外面体部及び内面に透明釉がかかる。素地は灰白色である。底部の器壁は1.4㎝あり，かなり厚い。底部を粘土で接いでいることから碗ではなく，袋物である可能性が高く，水注の可能性がある。

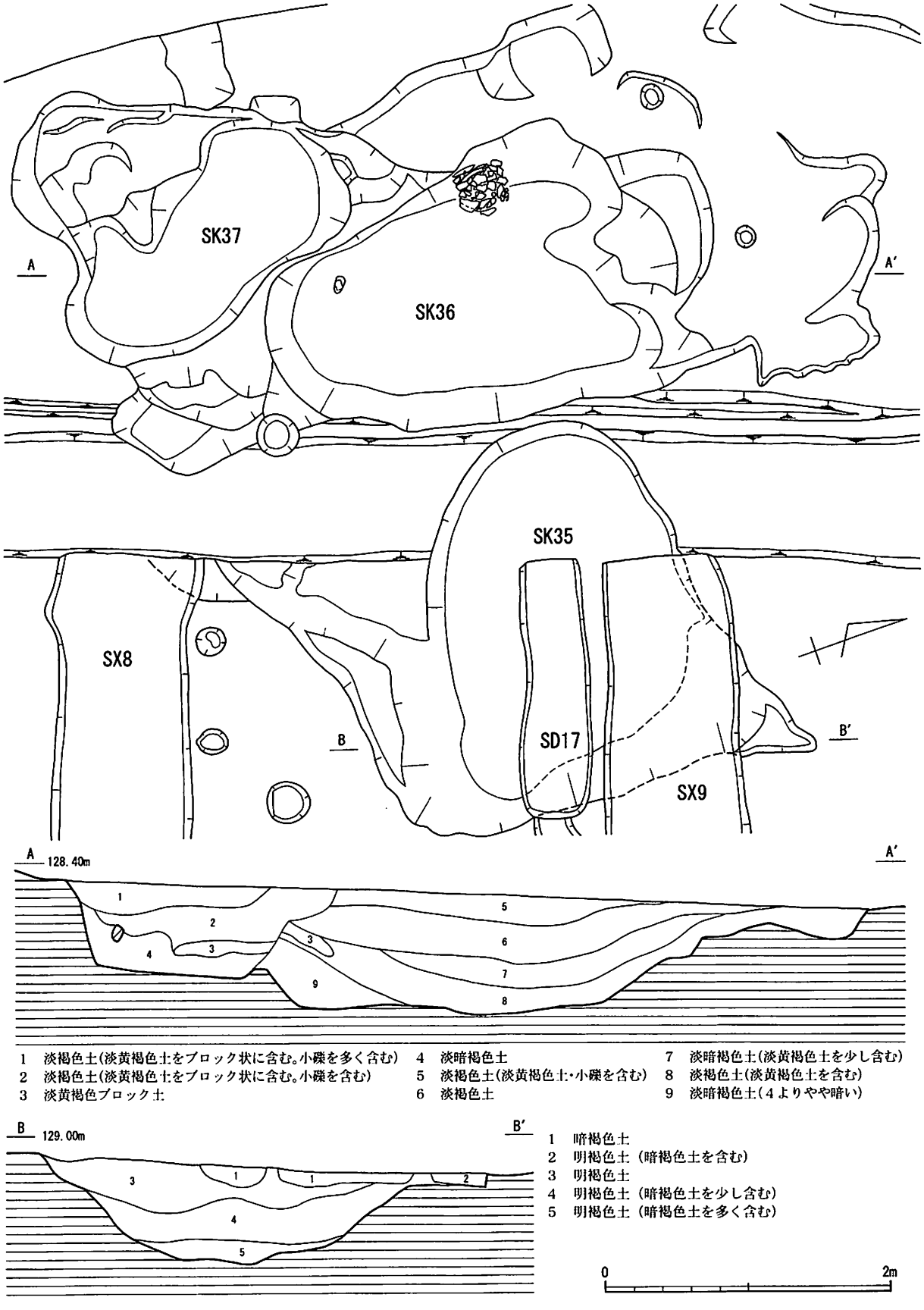
その他，瓦質土器の擂鉢，亀山焼の擂鉢，青磁が出土したが，細片のため図示できなかった。

鉄製品類は上層から下層にかけて出土している。243～248を含め鉄釘36点，266・267の金具２点，275の刀状鉄製品１点，268・278・279を含め用途不明鉄製品７点，284・285の板状鉄製品２点が出土している。また，古銭片と鉄滓１点（133.21ｇ）が出土した。

㉜ＳＫ37

検出遺構（第29図，図版15－ａ）

１郭北部西端に位置する土坑である。ＳＫ36と重複しており，ＳＫ37の方が新しい。平面形は不整円形で，長径2.38m×短径1.95m，深さ1.05mである。南西部にいくつかの段を有し，底面は北西側が深くなっている。埋土は４層である。



第29図　ＳＫ35～37実測図（1：40）

出土遺物（第33・53・56図，図版28・39・40）

瓦質土器の火鉢（83），東播系須恵器の擂鉢（84），鉄釘（249），用途不明鉄製品（280）が出土した。

83は下層から出土した瓦質土器の火鉢の体部片である。体部は内湾気味に立ち上がり，外面に２条の突帯と連続する円形浮文を貼り付ける。

84は東播系須恵器の擂鉢である。体部は直線的に立ち上がり，短く直立し端部を尖り気味に納める玉縁状の口縁部がつく。内面に擂り目はない。

その他，土師質土器（皿など），瓦質土器の鍋，備前焼の甕が上層から下層にかけて出土し，亀山焼の甕が上層から中層にかけて，須恵器系土器が上層から，白磁が中層から出土した。いずれも細片のため，図示できなかった。

鉄製品は上層から下層にかけて出土した。249を含め鉄釘４点，280の用途不明鉄製品１点である。また，中層から古銭片と鉄滓３点（24.19ｇ）が出土した。

㉝ＳＫ38

検出遺構（第28図，図版15－ｂ）

１郭北部西寄りに位置する土坑である。平面形は長円形で，南部は二段になっている。長径1.24ｍ×短径0.64ｍ，深さ0.49ｍである。埋土は３層からなる。

出土遺物（第33・53図，図版28・39）

瓦質土器の鍋（85），鉄釘（250）が出土した。

85は瓦質土器の鍋で，中層から出土した。体部は内湾気味に立ち上がり，外面に断面三角形の突帯を貼り付ける。口縁端部は平坦に近い。

その他，土師質土器（皿など）が上層及び中層で出土した。細片のため図示できなかった。鉄製品は250の鉄釘１点のみで，他に鉄滓２点（18.01ｇ）が出土した。

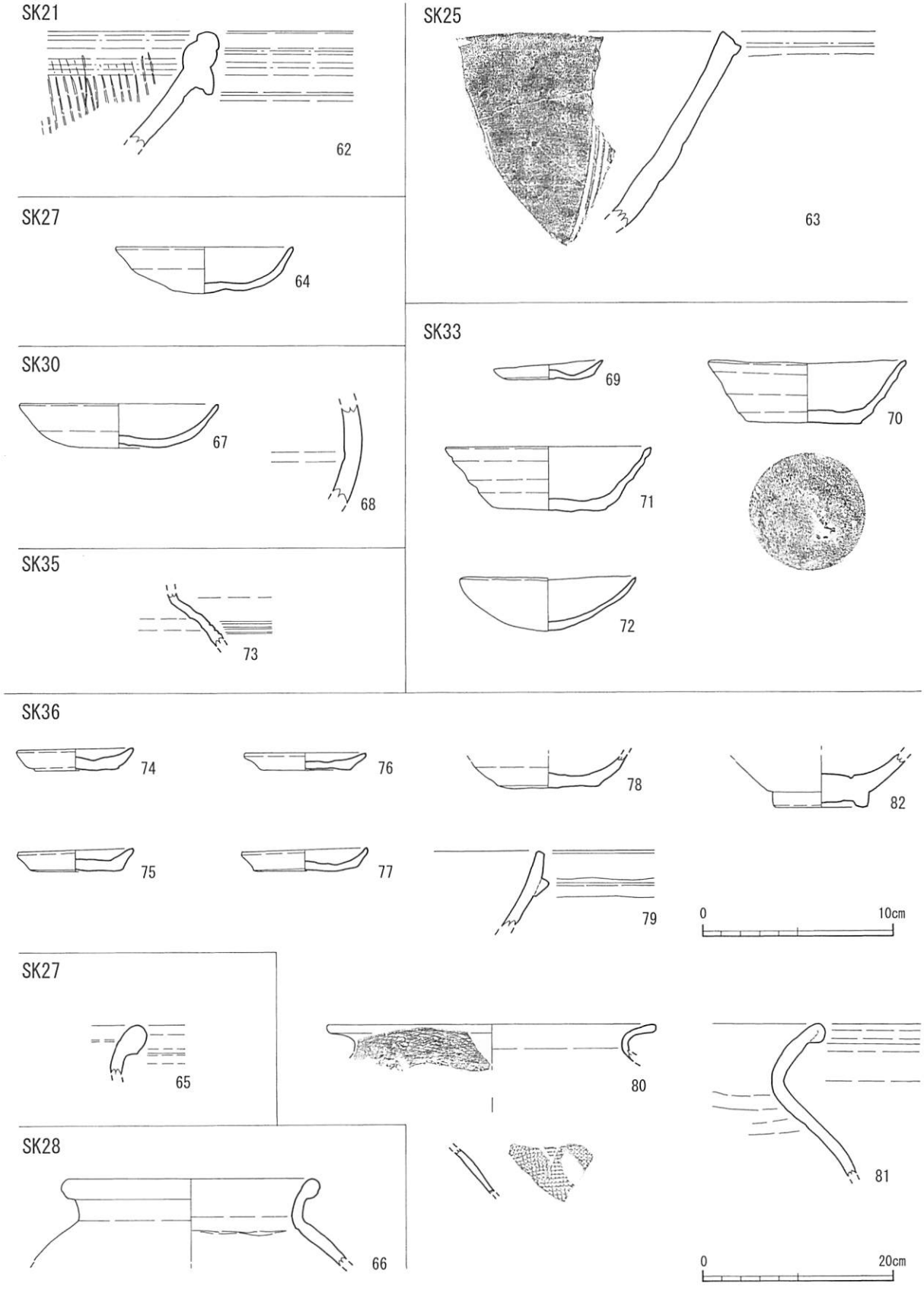
㉞ＳＫ39

検出遺構（第31図，図版15－ｃ）

１郭北西端付近に位置する土坑である。ＳＫ36の1.8ｍ北東にあり，1.5ｍ東にはＳＫ40がある。平面形は不整形で，北部は二段で，西部は幾つかの段が見られる。長径2.76ｍ×短径2.60ｍ，深さ0.95ｍである。断面図を見ると１基の土坑ではなく，数基の土坑が重複している可能性もある。

出土遺物（第33・50・51・54図，図版29・36・37・39）

土師質土器の皿（86・87）・杯（88・89）・小鉢（90），瓦質土器の鍋（91）・擂鉢（92），古瀬戸の卸皿（93），亀山焼の甕（94），軒丸瓦（195），石鍋加工品（206），鉄釘（251～255）が出土した。土師質土器は中層からも出土しているが，下層からの出土が多い。瓦質土器は上・中層から，亀山焼は中層から，軒丸瓦は下層から，鉄製品は上層から下層にかけて出土した。86・87は土師質土器の皿である。86は体部が内湾気味に立ち上がり，底部切り離しは回転糸切りと思われる。口径6.3㎝，器高1.75㎝である。87は体部が内湾気味に立ち上がるが，口縁部はやや外反する。



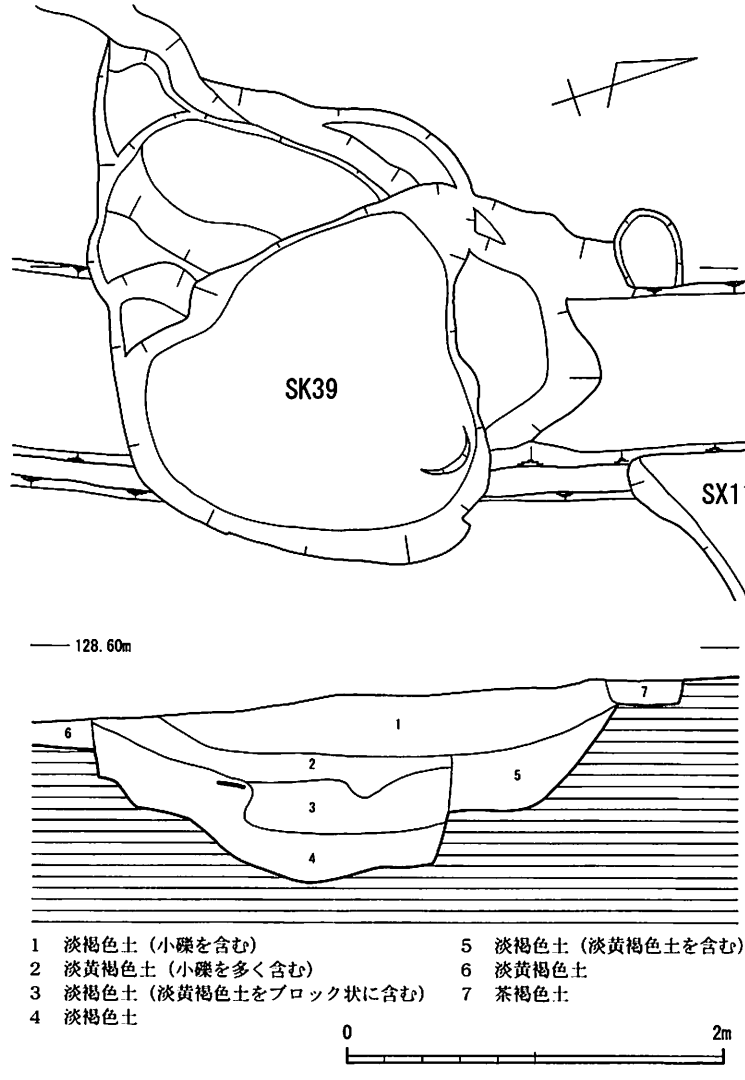
第30図　ＳＫ21・25・27・28～30・33・35・36出土土器類実測図（1：3，65・66・80・81は1：6）

底部切り離しは回転ヘラ切りと思われる。推定口径 7.0 cm，推定器高 1.9 cmで，86 に比べ底部の器壁が厚い。

88・89 は土師質土器の杯である。体部は直線的に立ち上がる。88 は復元口径10.8 cm，器高3.55 cmで，底部の切り離し方法は不明である。89 は復元口径 10.2 cm，器高 3.1 cmで，底部の切り離しは回転糸切りである。

90 は土師質土器の鉢である。口縁部片と体部から底部にかけての破片があるが，2 片に接点はない。体部は内湾しながら立ち上がるが，口縁部は強く外反する。推定口径 13.5 cmである。内面全体に暗褐色の漆が 0.5～2 mmの厚さで付着している。

91 は瓦質土器の鍋である。体部はやや内湾気味に立ち上がり，外面に断面三角形の突帯を貼り付ける。口縁端部は平坦に近い。



第31図　ＳＫ39実測図（1：40）

92 は瓦質土器の擂鉢である。体部は斜めにまっすぐ立ち上がり，口縁端部は平坦に近く，内側にやや肥厚させている。内面に粗い擂り目があり，６条単位と思われる。

93 は古瀬戸の卸皿である。体部はやや内湾気味に立ち上がり，口縁端部は内側にわずかに引き出し，外傾する平坦な面をもっている。内面底部全体に格子状の卸目が鋭く刻まれている。底部切り離しは回転糸切りで，外面底部の一部を除き淡緑黄色の釉が薄く施されている。器高は 2.8 cmであるが，口径は 17 cm前後と推定される。

94 は亀山焼の甕の胴部片である。外面に格子目タタキを施す。格子の単位は４mm×４mmである。

その他，備前焼甕が出土したが，細片のため図示できなかった。

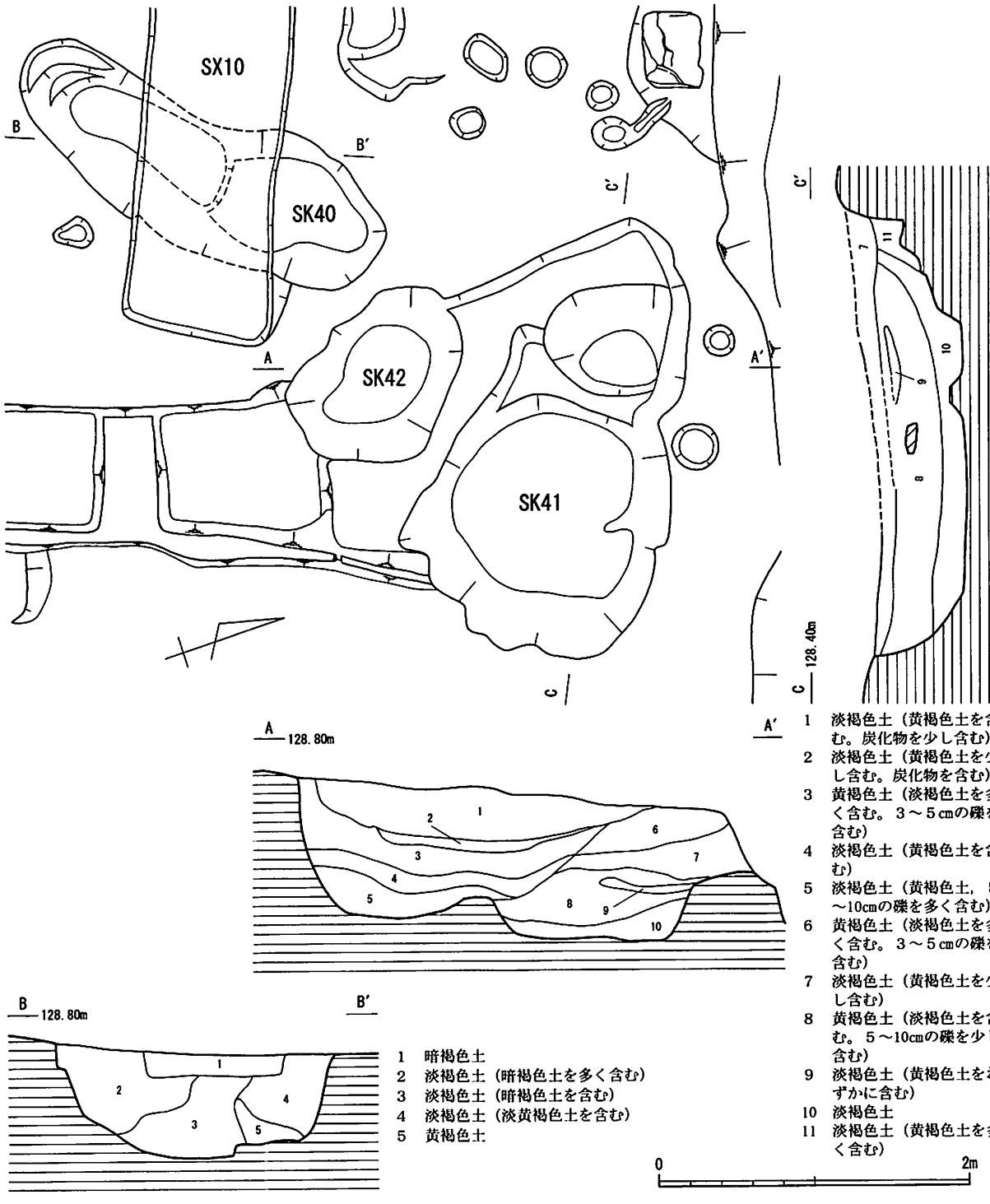
鉄製品は，251～255 を含め鉄釘 14 点，用途不明鉄製品１点が出土した。

㉟ＳＫ40

検出遺構（第 32 図，図版 16－ａ）

1郭北西部に位置する土坑である。ＳＫ39の東1.5mにある。ＳＸ10と重複しており，ＳＫ40の方が古い。平面形は長円形で，北東部は２段，南西部は３段になっている。長径2.59m×短径0.92m，深さ0.80mである。埋土は基本的に３層である。

出土遺物（第33・54図，図版29・39）

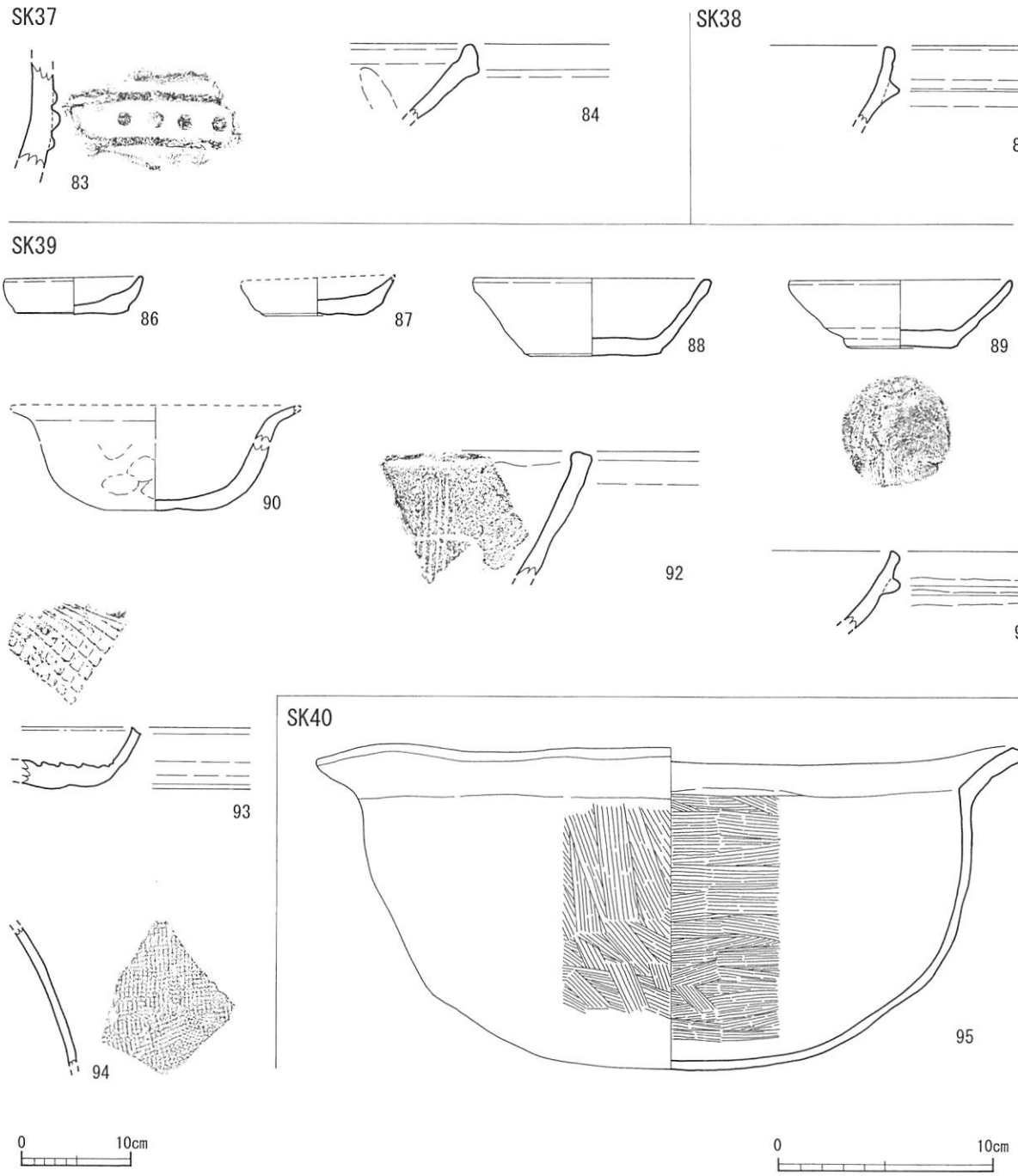


第32図　ＳＫ40～42実測図（1：40）

土師質土器の鍋（95），鉄釘（256～258）が出土した。

95は土師質土器の鍋である。体部は内湾気味に立ち上がり，口縁部は強く外反する。口縁端部は平坦に納め，内面頸部に稜をもつ。形が歪んだ部分もあり，口径32.2～33.5㎝，器高14.9㎝である。外面は底部を除き，ススが付着している。破片がＳＫ36からも出土している。

その他，土師質土器（皿など）が下層を中心に出土しているが，細片のため図示できなかった。



第33図　ＳＫ37～40出土土器類実測図（1：3，94は1：6）

鉄製品は，256～258を含め鉄釘４点が出土した。

㊱ＳＫ41

検出遺構（第32図，図版16－ｂ）

１郭北西端付近に位置する土坑である。ＳＫ40の北東1.0mにある。ＳＫ42と重複しており，ＳＫ41の方が古い。平面形は長円形で，底面は３段からなり，中央北西寄りが高くなり，それを境に北西側と南東側が円形に窪んでいる。長径2.47m×短径1.62m，深さ0.78mである。埋土は基本的に４層である。

出土遺物（第54図，図版38・39）

鉄釘（259・260）が出土した。

その他，土師質土器（皿など），瓦質土器の鍋・擂鉢，亀山焼の甕，磁器が出土したが，細片のため図示できなかった。

鉄製品は中層などから，259・260を含め鉄釘７点，不明鉄製品２点が出土している。

㊲ＳＫ42

検出遺構（第32図，図版16－ａ）

１郭北西端付近に位置する土坑である。ＳＫ40の北東に隣接する。ＳＫ41と重複しており，ＳＫ42の方が新しい。平面形は長円形で，現状で長径1.31m×短径0.95m，深さ0.94mであるが，本来はさらに北方向に拡がり，長径2.3m×短径1.3m以上の規模になると推定される。

出土遺物

遺物は出土していない。

（６）溝状遺構

①ＳＤ１

検出遺構（第９図）

１郭南部東寄りに位置する東西方向の溝状遺構である。北西0.4mにＳＫ１が，北東2.4mにＳＤ２がある。ＳＤ1の西側は調査区外に延びている。現状で，長さ1.28m，幅0.18～0.54m，深さ0.03～0.09mで，西に向かうに従い次第に広くなる。底面はほぼ平坦で，東に向かって下っている。

出土遺物

遺物は出土していない。

②ＳＤ２

検出遺構（第９図）

１郭南部東寄りに位置する南北方向の溝状遺構である。ＳＤ１の北東2.4mにある。長さ1.52m，幅0.21～0.23m，深さ0.09～0.15mの小規模な遺構である。底面は平坦ではなく，ピット状に深くなる部分も見られ，東に向かって下っている。埋土は灰黄褐色土の単層である。

出土遺物

土師質土器が出土したが，細片のため図示できなかった。他に鉄滓２点（14.68ｇ）が出土した。

③ＳＤ３

検出遺構（第11・13図）

１郭南部中央，ＳＸ２内に位置する北西－南東方向の溝状遺構である。ＳＫ５と重複しているが，新旧関係は不明である。現状で，長さ1.03m，幅0.25～0.31m，深さ0.03～0.12mである。底面は平坦である。

出土遺物

遺物は出土していない。

④ＳＤ４

検出遺構（第９・11・13図）

１郭南部中央，ＳＸ２内に位置する北西－南東方向の溝状遺構である。ＳＫ５と重複しているが，ＳＫ５によって削られていることから，ＳＤ4の方が古い。長さ6.92m，幅0.24～0.43m，深さ0.07～0.14mである。南東に向かって次第に広くなる。底面はほぼ平坦であるが，中央部がやや高くなっており，両端が深くなる。埋土は灰黄褐色土の単層である。

出土遺物

土師質土器（皿など），瓦質土器が出土したが，細片のため図示できなかった。

⑤ＳＤ５

検出遺構（第９図）

１郭南東部に位置する北東－南西方向の溝状遺構である。ＳＫ４と重複しているが，新旧は不明である。現状で，長さ3.42m，幅0.13～0.64m，深さ0.01～0.07mである。北東側が広くなり，北東部と南西部にそれぞれ25～30㎝程度の石がある。底面はほぼ平坦である。

出土遺物

遺物は出土していない。

⑥ＳＤ６

検出遺構（第10図）

１郭中央東寄り，ＳＢ１内の南西部に位置する溝状遺構である。北西－南東方向に延び，長さ1.56m，幅0.16～0.22m，深さ0.03～0.07mである。底面はほぼ平坦である。ＳＢ１と同時存在したとは考え難い。

出土遺物

遺物は出土していない。

⑦ＳＤ７

検出遺構（第10・14図）

１郭中央東寄りに位置する溝状遺構である。北東－南西方向に延びるが，ＳＤ８・９・12とは方向がずれている。南東端でＳＤ８・９と重複しているが，いずれも同一の埋土で新旧は不明である。また，南西側はＳＫ11と重複しているが，南西端の形状が不明瞭となり，新旧は不明であ

る。現状で，長さ 1.63m，幅 0.08～0.16m，深さ 0.06～0.12mである。底面はほぼ平坦で，南西方向に向かって下っている。

出土遺物

遺物は出土していない。

⑧ＳＤ８

検出遺構（第 14 図）

１郭中央東寄りに位置する溝状遺構である。北西－南東方向に延び，北東にあるＳＤ12 と 0.3m間隔で平行し，ＳＤ９・10 とも平行または直交する。南東端でＳＤ９と切り合い関係にあるが，いずれも同一の埋土で新旧は不明である。ＳＤ９を越えて南東部に延びていないため，同時期である可能性が高い。また，北西端はピットと重複している。現状で，長さ 1.87m，幅 0.18～0.28m，深さ 0.12～0.14mである。底面はほぼ平坦で，南東に向かって下っており，ＳＤ９に流れ込む溝と思われる。

出土遺物

遺物は出土していない。

⑨ＳＤ９

検出遺構（第 10・14 図，図版６－ａ）

１郭中央東寄りに位置する「Ｌ」字形の溝状遺構である。北東－南西方向に延び，途中で直角に折れ曲がり，北西－南東方向になる。全長約 6.8mで，北東－南西方向の長さ 4.62m，幅 0.25～0.69m，深さ 0.07～0.14m，北西－南東方向の長さ 2.20m，幅 0.13～0.23m，深さ 0.04～0.07mである。北東－南西方向の南西部で幅が広くなっている。底面はほぼ平坦である。北東端はＳＢ１－Ｐ１と重複しているが，新旧は不明である。本来は北東端で北西－南東方向の延びるＳＤ10 とつながっており，「コ」字状の溝であった可能性がある。また，ＳＤ７・８・12 とも重複しているが，いずれも同一の埋土で新旧は不明である。ＳＤ８・12 とは平行または直交しており，関連があるものと思われる。

出土遺物

遺物は出土していない。

⑩ＳＤ10

検出遺構（第 10・14 図，図版６－ａ）

１郭中央東寄りに位置する溝状遺構である。南東－北西方向に延び，長さ 2.33m，幅 0.14～0.19m，深さ 0.06～0.09mである。北西端はＳＢ１－Ｐ１と重複しているが，新旧は不明である。底面はほぼ平坦で，南東方向に向かって下っている。ＳＤ９と直交または平行しており，本来は北西端で「Ｌ」字形のＳＤ９とつながり，「コ」字形の溝であった可能性が高い。

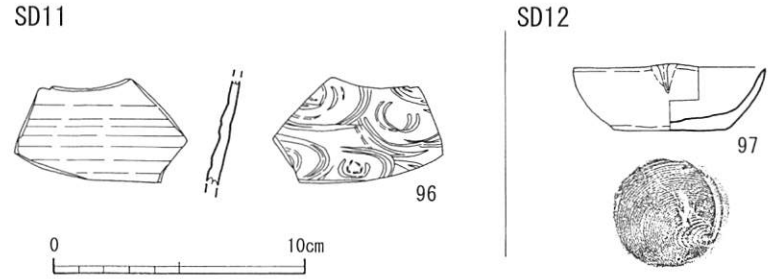
出土遺物

遺物は出土していない。

⑪ＳＤ11

検出遺構（第14図）

１郭東寄り，ＳＢ４内に位置する溝状遺構である。北東－南西方向に延び，長さ2.14m，幅0.13～1.23m，深さ0.02～0.06mである。南西方向に向かって徐々に広くなっている。底面はほぼ平坦である。南西端はＳＤ12と重複しているが，ＳＤ12を超えて南西には延びない。新旧は不明である。また，ＳＢ４－Ｐ19とも重複している。埋土は灰黄褐色土の単層である。



第34図　ＳＤ11・12出土土器類実測図（1：3）

出土遺物（第34図，図版29）

青白磁の梅瓶（96）が出土した。外面に渦巻文を陰刻している。同一個体と思われる破片がＳＸ２から出土している。また，ＳＢ２出土の底部（第12図１）と同一個体である可能性が高い。

その他，滑石製の石鍋の体部片が１点出土しているが，細片のため図示できなかった。

⑫ＳＤ12

検出遺構（第14図）

１郭中央東寄りに位置する溝状遺構である。北西－南東方向に延び，ＳＤ８と0.3m間隔で平行し，ＳＤ９・10とも平行または直交する。長さ4.32m，幅0.13～0.52m，深さ0.03～0.11mである。南東端でＳＤ９と重複しているが，埋土はいずれも同一の灰黄褐色土で新旧は不明である。ＳＤ９を越えて南東部に延びていないため，同時期である可能性が高い。底面はほぼ平坦で，南東方向に向かって下っており，ＳＤ９に流れ込む溝と思われる。

出土遺物（第34・51図，図版29・37）

古瀬戸の入子（97），碁石（201）が出土した。

97は古瀬戸の入子である。体部は内湾気味に立ち上がり，口縁部は輪花になるよう仕上げている。底部の切り離しは回転糸切りで，復元器高7.6㎝，器高2.5㎝である。内面は使用時に擦ったと思われる痕跡が残る。

その他，土師質土器片（皿など），亀山焼の甕，青磁が出土しているが，細片のため図示できなかった。他に鉄滓１点（123.06ｇ）が出土した。

⑬ＳＤ13

検出遺構（第９図）

１郭東部中央に位置する溝状遺構である。ＳＢ１の北東，ＳＢ４の東にある。ＳＫ30と重複しているが，新旧は不明である。北西－南東方向に延び，現状で長さ4.80m，幅0.60～1.57m，深さ0.24～0.34mである。幅は一定ではなく，広い部分や狭い部分が見られる。底部は南東方向に向かって下っている。埋土は灰黄褐色土の単層である。

出土遺物

土師質土器（皿など），備前焼の甕が出土したが，細片のため図示できなかった。他に鉄滓１点（8.07ｇ）が出土した。

⑭ＳＤ14

検出遺構（第10図）

１郭中央東寄り，ＳＢ１の南端に位置する溝状遺構である。北西－南東方向に延び，ＳＢ１の方向とはわずかにずれているが，南端の柱穴列（Ｐ９～11）と重なる。北西端はＰ11と重複しており，現状で長さ4.74m，幅0.18～0.62m，深さ0.03～0.08mである。底面は南東に向かって下っている。

出土遺物

遺物は出土していない

⑮ＳＤ15

検出遺構（第11図）

１郭中央南寄り，ＳＸ２内の北端に位置する溝状遺構である。北東－南西方向に延び，ＳＸ２及びＳＢ２の方向と一致することから，これらの遺構に伴う可能性がある。長さ1.70m，幅0.22～0.48m，深さ0.14mである。底面はほぼ平坦である。

出土遺物

遺物は出土していない。

⑯ＳＤ16

検出遺構（第９・17図，図版10－ａ）

１郭中央西寄りに位置する北北東－南南西方向の溝状遺構である。１郭高所部の西裾付近にあたり，西側0.6mにはＳＤ16と平行するようにＳＡ１が存在する。長さ8.74m，幅0.14～0.34m，深さ0.03～0.23mである。南南西方向に向かって下っている。

出土遺物

遺物は出土していない。

⑰ＳＤ17

検出遺構（第29図）

１郭北西部に位置する東南東－西北西方向の溝状遺構である。北東には同方向のＳＸ９が隣接する。西北西端はブドウ畑に伴う新しい溝によって切られている。西北西部はＳＫ35と重複しており，ＳＤ17の方が新しい。現存長2.55m，幅0.26～0.52m，深さ0.04～0.15mである。底面はほぼ平坦で，西北西方向に向かって下っている。埋土は上層が暗褐色土，下層が淡暗褐色土である。ＳＸ９と隣接して平行し，埋土も同じことから同時期の遺構の可能性が高い。

出土遺物

遺物は出土していない。

（７）１郭出土遺物

①１郭ピット（第35図，図版30）

ここでは土器類のみ記載し，それ以外の１郭ピット出土遺物については，それぞれグリッド毎に記載する。１郭ピットから土師質土器の皿（98・99）・椀（100・101），瓦質土器の鍋（102）が出土した。

98・99は土師質土器の皿である。98はH11区ピット，99はＨ９区ピットから出土した。体部は内湾気味に立ち上がる。98は底部の切り離しが回転ヘラ切りで，板目痕が残る。全体的に丁寧な作りである。口径6.1㎝，器高1.35㎝である。99の底部切り離し方法は不明で，復元口径6.4㎝，器高1.2㎝である。

100・101は土師質土器の椀である。100はＨ９区ピットから，101はG12区ピットから出土した。体部は内湾気味に立ち上がり，口縁部はやや外反する。底をわずかに窪ませている。100は口径8.2㎝，器高2.3㎝である。101は形が歪んでおり，口径8.4～9.1㎝，器高2.5㎝である。

102はF10区ピットから出土した瓦質土器の鍋である。体部はやや内湾気味に立ち上がり，外面に断面三角形の突帯を貼り付ける。突帯の幅は0.7㎝で，他の鍋に比べ，幅がある。口縁端部は平坦に近く，復元口径29.0㎝である。二次焼成を受けている。

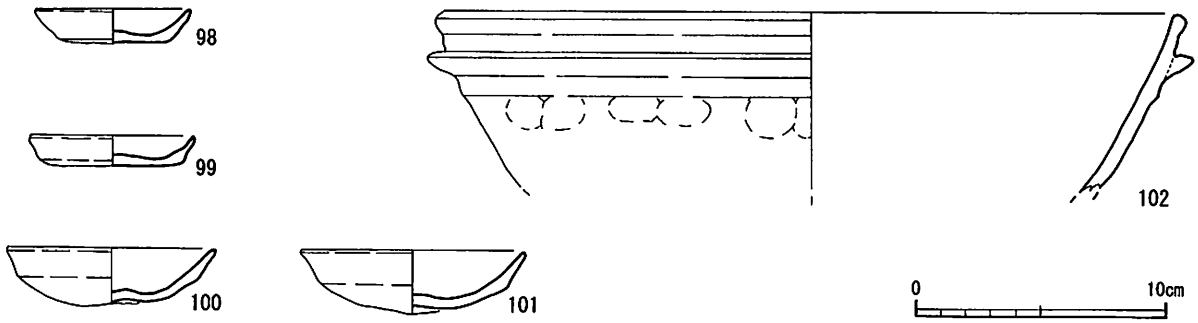
②トレンチ１（第36・51・55図，図版30・37・40）

弥生土器の甕（103・104），土師質土器の椀（105），柱状高台土師器（106），石製サイコロ（199）用途不明石製品（200），鉄鏃（273），刀状鉄製品（274）が出土した。

103・104は弥生土器の甕である。103は複合口縁で，口縁端部の立ち上がりが内傾する。外面口縁部に３条の浅い凹線を有している。胴部は最大径がやや上位にあり，緩やかに湾曲している。104は平底で，底径3.3～3.5㎝である。外面にヘラミガキの痕跡がかすかに残る。103と同一個体である可能性が大きい。

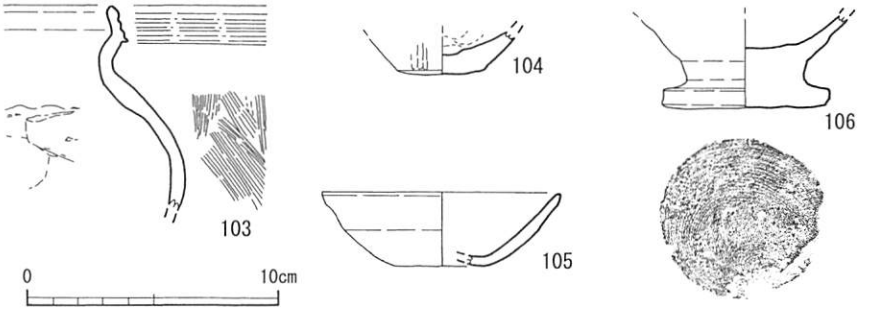
105は土師質土器の椀である。体部はやや内湾気味に立ち上がり，底を窪ませている。復元口径9.5㎝，器高2.9㎝で，内外面に漆と思われるものが付着している。

106は柱状高台土師器である。椀形の器形に径6.5㎝，高さ約1.5㎝の柱状高台がつく。上部を狭めており，柱状というよりは，椀に台を取り付けたような器形である。



第35図　１郭ピット出土土器類実測図（1：3）

その他，土師質土器の皿・鍋，瓦質土器の鍋・擂鉢，須恵器系土器，備前焼の甕，平瓦片が出土したが，細片のため図示できなかった。土師質土器・須恵器系土器は黄褐色土から，瓦質土器・備前焼は黄褐色土及び明褐色から出土した。



第36図　1郭トレンチ1出土土器類実測図（1：3）

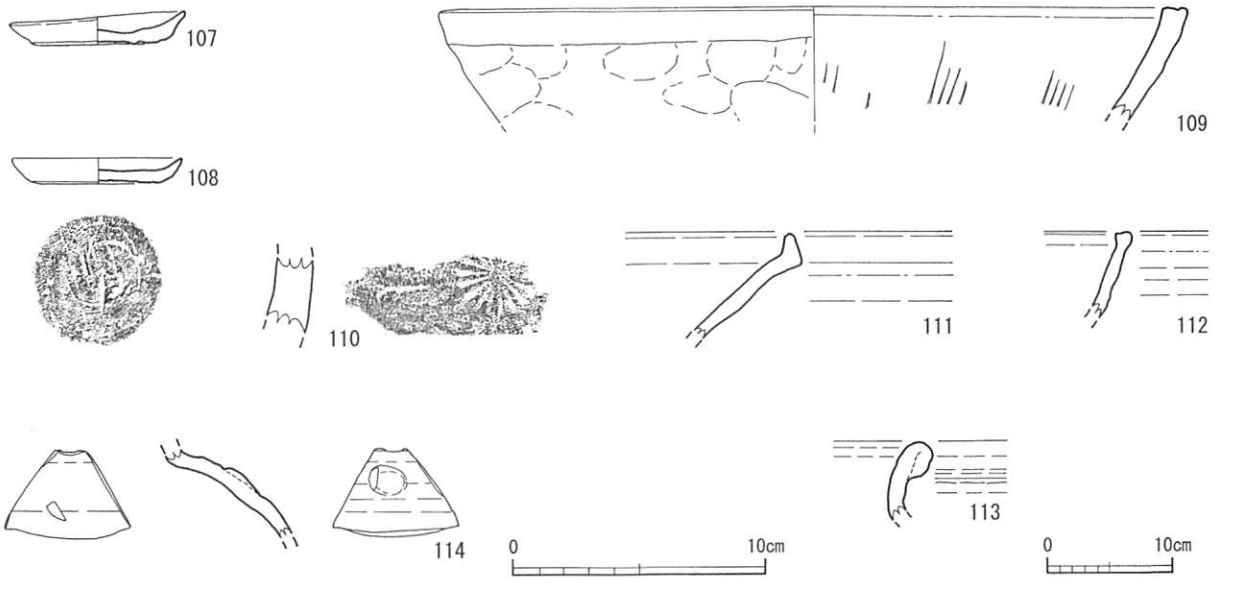
鉄鏃（273）は黄褐色土からの出土で重量 45.28ｇ，刀状鉄製品（274）は暗褐色土からの出土で重量 10.89ｇである。また，黄褐色土を中心に鉄釘８点，板状鉄製品１点，用途不明鉄製品４点が出土しており，他に鉄滓 10 点（395.88ｇ）が出土した。

③トレンチ２（第 37 図，図版 30）

土師質土器の皿（107・108），瓦質土器の擂鉢（109）・火鉢（110），東播系須恵器の擂鉢（111），古瀬戸の卸皿（112），備前焼の甕（113），白磁の四耳壺（114）が出土した。

107・108 は土師質土器の皿である。107 は明褐色土から出土した。体部は内湾気味に立ち上がり，口縁部でやや外反する。底部切り離しは回転ヘラ切りと思われる。口径 6.9 ㎝，器高 1.3 ㎝である。108 は黄褐色土から出土した。体部は内湾気味に立ち上がり，底部切り離しは回転ヘラ切りで，板目痕が残る。口径 6.7 ㎝，器高 1.0 ㎝で，口径の割には浅い器形である。

109 は瓦質土器の擂鉢である。体部はやや内湾気味に立ち上がり，口縁端部は平坦で，中央がわずかに窪んでいる。内面は摩滅しているが，粗い擂り目があり，単位は４条と思われる。復元



第37図　1郭トレンチ２出土土器類実測図（1：3，113は1：6）

口径 29.7 cmである。

110 は瓦質土器の火鉢である。体部は内湾気味に立ち上がり，外面体部に菊花文のスタンプを施す。

111 は東播系須恵器の擂鉢である。体部は直線的に立ち上がり，短く直立し端部を尖り気味に納める玉縁状の口縁部がつく。全体的に器壁が薄い。内面に擂り目はない。

112 は古瀬戸の卸皿の口縁部から体部にかけての破片である。体部は直線的に立ち上がり，口縁端部で肥厚させ，水平の面を作り出している。内側がやや突出している。体部下半を除き，淡黄緑色の釉がかかる。

113 は備前焼の甕の口縁部片である。口縁部は外反し，端部を折り曲げて玉縁を形成している。

114 は白磁の四耳壺の肩部片である。肩部に耳を貼り付けている。素地は淡灰色で，全体に透明釉を施す。

その他，瓦質土器の鍋が黄褐色土から，亀山焼の甕が明褐色土及び黄褐色土から，須恵器系土器が明褐色土から，軒平瓦と思われる瓦片が暗褐色土から出土した。いずれも細片のため，図示できなかった。

また，鉄釘 34 点，鉄滓 1 点（12.29 g）が明褐色土・黄褐色土から出土した。

④トレンチ３（第 38・49・51・54・55・58 図，図版 31・36・37・39・40）

土師質土器の皿（115～119）・杯（120・121）・椀（122～127），東播系須恵器の擂鉢（128），備前焼の甕（129），青磁の碗（130・131），土錘（192），碁石（202・203），棒状鉄製品（263），鉄製兜片（276），古銭（299）が出土した。土師質土器は黄褐色土及び黒灰色土から，備前焼は黄褐色土及び明褐色土から，青磁は明褐色土から出土した。

115～119 は土師質土器の皿である。115 は体部が直線的に立ち上がり，底部切り離しは糸切りと思われる。口径 5.2 cm，器高 0.8 cmである。内面底部が高くなっており，浅く非実用的な皿である。116・117 は口径 5.8～6.0 cm，器高 1.1～1.4 cmである。底部切り離しは回転ヘラ切りと思われる。

117 は口縁部がわずかに外反する。118・119 は底部の切り離しが回転ヘラ切りである。118 は口径 6.5 cm，器高 1.35 cm，119 は口径 7.0 cm，器高 1.4 cmである。119 は口縁部がわずかに外反する。

120・121 は土師質土器の杯である。体部は直線的に立ち上がり，底部の切り離しは回転ヘラ切りである。121 は口径 10.4～11.0 cm，器高 3.5 cmである。

122～127 は土師質土器の椀である。122・123 は口径 9.3～10.0 cm，器高 2.4～2.6 cmであり，器高が低い。124 は口径 9.6～9.8 cm，器高 3.3 cm，125 は底部を欠損するが，復元口径 10.7 cmで器高は高い。125 は口縁部が内湾気味で，外面底部を窪ませていた可能性もある。126・127 は口径 8.7～9.3 cm，器高 2.95～3.0 cmで，底部が窪んでいる。127 の内面にはススが付着している。

128 は東播系須恵器の擂鉢である。体部は直線的に立ち上がり，短く直立し端部を尖り気味に納める玉縁状の口縁部がつく。内面に擂り目はない。復元口径 22.8 cmである。二次焼成を受けて

いる。

129 は備前焼の甕の口縁部片である。口縁部は外反し，端部を折り曲げて玉縁を形成している。

130・131 は青磁の碗である。130 は高台部分を欠損するが，復元口径 17.2 ㎝で，全体に淡緑色の釉がかかる。体部外面に片刃彫りによる蓮弁文を配す龍泉窯系の碗である。131 は体部片であるが，淡緑色の釉がかかり，釉の厚さは約 0.5 ㎜である。内外両面に文様を配し，外面はラマ式蓮弁文である。

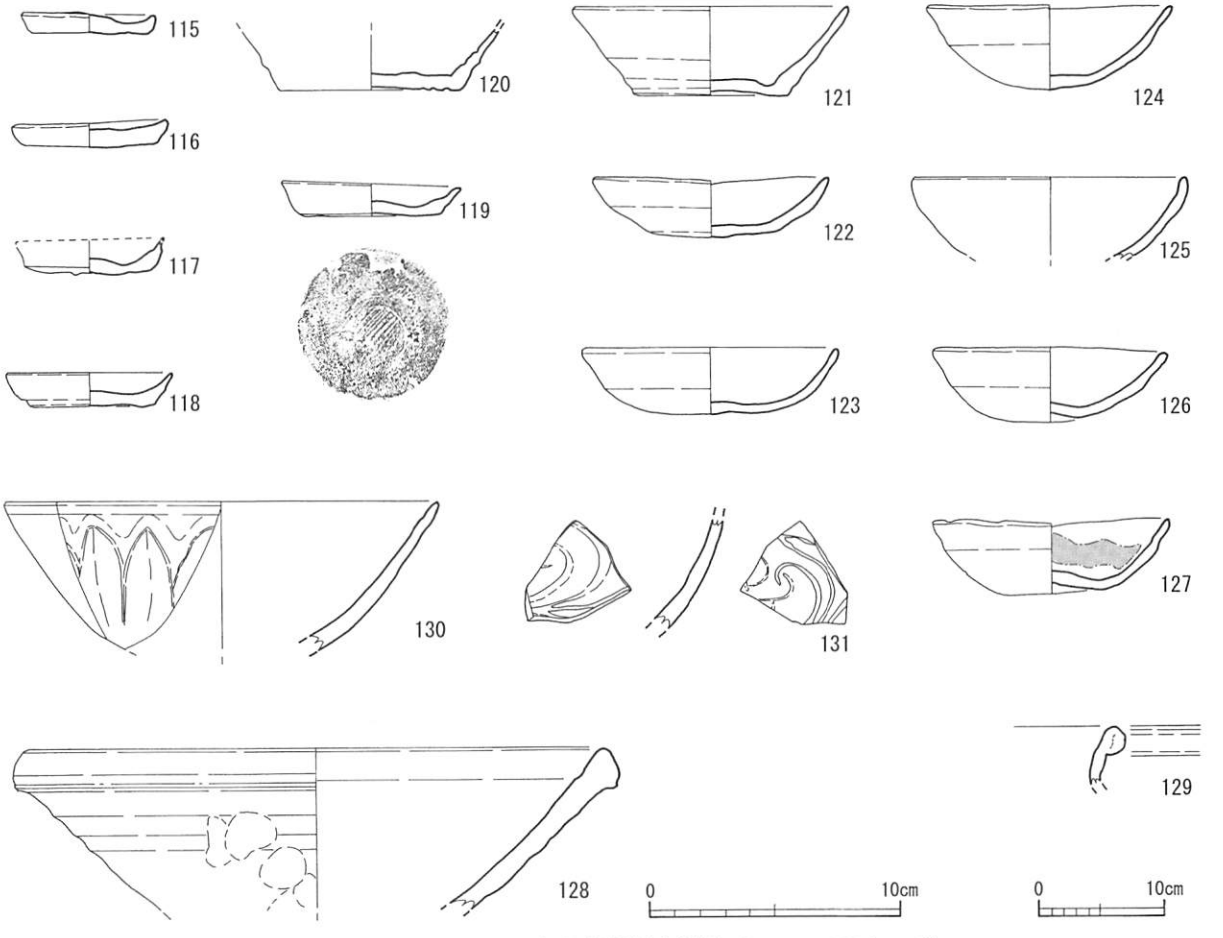
その他，弥生土器が黒灰色土から，瓦質土器が明褐色土から，亀山焼の甕が黒灰色土及び明褐色土から，須恵器系土器が明褐色土から，常滑焼が黄褐色土から，備前焼の擂鉢が明褐色土から，

平瓦片３点が明褐色土などから出土し，滑石製の石鍋加工品と思われる破片も出土している。いずれも細片のため図示できなかった。

鉄製品は，棒状鉄製品（263），鉄製兜片（276）がある。黄褐色土・明褐色土を中心に鉄釘 21 点，用途不明鉄製品１点が出土しており，他に鉄滓２点（89.4ｇ）が出土している。

⑤Ｆ９区（第 56・59 図，図版 41・42）

板状鉄製品（286），古銭（320）が出土した。



第38図　１郭トレンチ３出土土器類実測図（1：3，129は1：6）

その他，土師質土器，瓦質土器の鍋，亀山焼の甕，備前焼の甕，磁器が表土を中心に，須恵器系土器（甕など）が表土から出土した。ピットから平瓦が出土している。いずれも細片のため図示できなかった。

鉄製品類は表土及びブドウ畑に伴う新しい溝から出土した。鉄釘10点，286の板状鉄製品1点，用途不明鉄製品4点が出土しており，他に鉄滓3点（90.73g）が出土した。

⑥F10区（第54図，図版39）

鉄製金具（269）が出土した。

その他，土師質土器（皿など），瓦質土器の鍋，亀山焼の甕，備前焼の甕，磁器，滑石製の石鍋の体部片が表土を中心に出土した。いずれも細片のため図示できなかった。

鉄製品は表土及びブドウ畑に伴う新しい溝から出土した。鉄釘4点，269の金具1点，不明鉄製品3点が出土している。

⑦F11区（第39・58図，図版31・42）

土師質土器の皿（132），古銭（298）が出土した。古銭はピットからの出土である。

132は表土から出土した土師質土器の皿である。体部は内湾気味に立ち上がり，底部の切り離し方法は不明であるが，切り離し後ナデと思われる。全体的に丁寧な作りである。口径5.5㎝，器高0.95㎝である。

その他，瓦質土器が出土したが，細片のため図示できなかった。また，表土から鉄釘2点が出土している。

⑧F12区（第51・57図，図版37・41）

ピットから砥石（209），表土から鉛玉（289）が出土した。

その他，土師質土器が表土を中心に出土したが，細片のため図示できなかった。

⑨G8区（第39・59図，図版31・32・42）

土師質土器の椀（133），瓦質土器の鍋（134），古銭（318）が出土した。土器は1郭北端表土から出土した。

133は土師質土器の椀である。底部を欠損するが，体部は内湾気味に立ち上がる。口径9.4㎝，推定器高3.1㎝である。

134は瓦質土器の鍋である。体部はやや内湾気味に立ち上がり，外面に断面三角形の突帯を貼り付ける。口縁端部は平坦に近い。

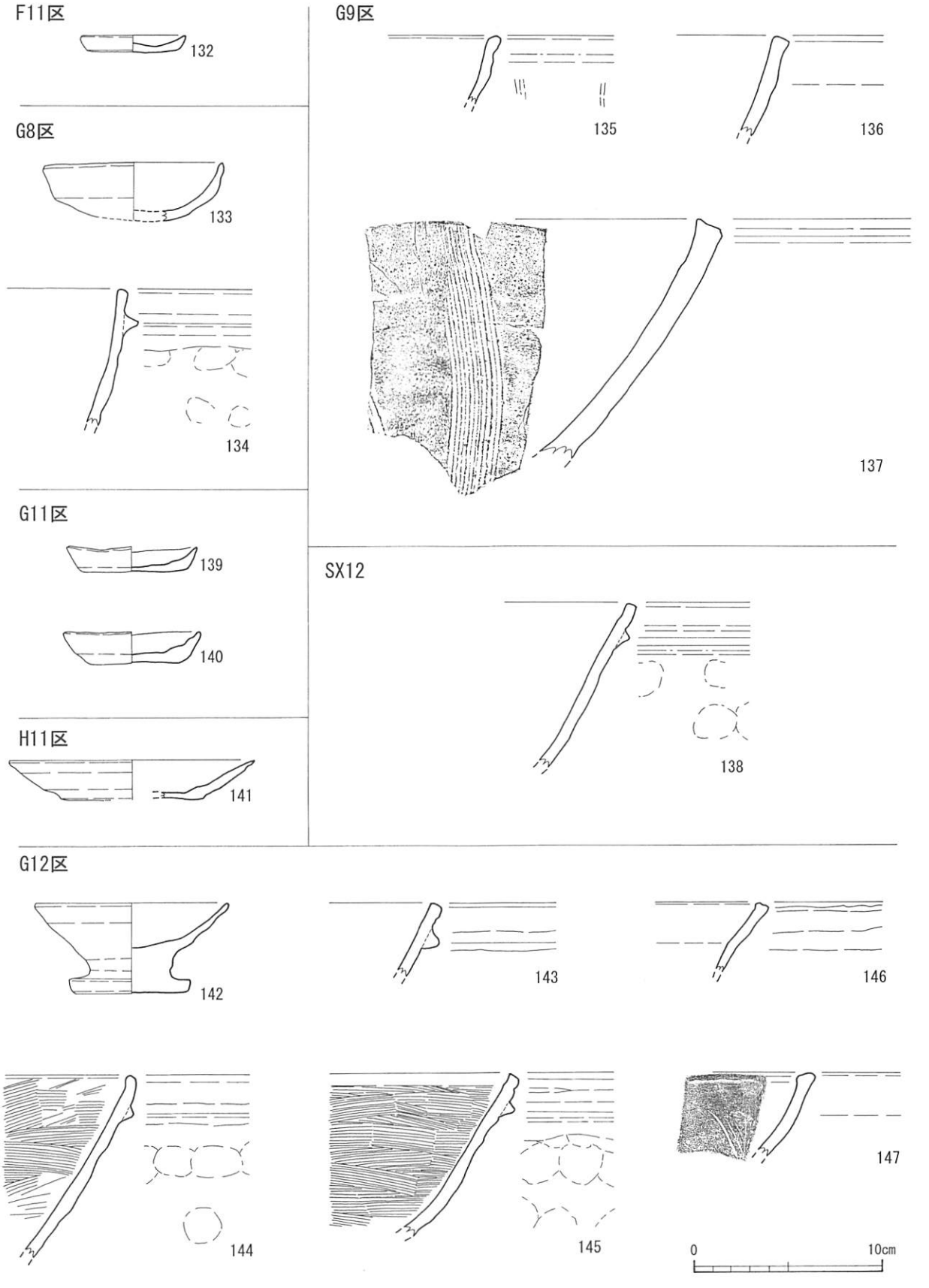
その他，表土から平瓦片3点，北端表土から鉄釘2点が出土した。

⑩G9区（第39・51・58図，図版32・37・42）

土師質土器の鍋（135），瓦質土器の擂鉢（136），備前焼の擂鉢（137），砥石（208），古銭（316）が出土した。

135は土師質土器の鍋である。体部はやや内湾気味に立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。調整は口縁部が回転ナデ，外面体部がハケ目と思われる。

136は瓦質土器の擂鉢である。体部は斜めに内湾気味に立ち上がり，口縁端部は面をなす。本



第39図　ＳＸ１２・１郭遺構外出土土器類実測図（１）（1：3）

破片には内面に擂り目がない。

137 は備前焼の擂鉢である。口縁部から体部にかけての破片である。体部は内湾気味に立ち上がり，口縁端部はやや強く外傾させて面を作る。口縁端部及び内面に淡黄褐色の自然釉がかかる。内面に縦方向の擂り目があり，単位は 11 条である。ＳＫ11 出土の 57 と同一個体の可能性が高い。

その他，土師質土器の皿・鍋，瓦質土器の鍋，亀山焼の甕，須恵器系土器，備前焼の甕，白磁が表土を中心に出土しているが，細片のため図示できなかった。

鉄製品が表土及びブドウ畑に伴う新しい溝から出土している。鉄釘３点，鉄板１点，不明鉄製品３点が出土している。

⑪Ｇ11 区（第 39 図，図版 32）

遺物はすべて包含層からの出土である。土師質土器の皿（139・140）が出土した。139 は口径 6.7～6.9 cm，器高 1.4 cmで，底部切り離しは回転糸切りである。140 は口径 7.2 cm，器高 1.7 cmで，底部切り離しは回転ヘラ切りである。

その他，土師質土器の鍋，瓦質土器が出土したが，細片のため図示できなかった。また，鉄釘３点，鉄滓１点が出土した。

⑫Ｇ12 区（第 39・49・54・55・57・59 図，図版 32・36・39・41・42）

鞴の羽口（193），鉄釘（261）・鉄鏃（272）・用途不明銅製品（291）がピットから出土した。遺構外から柱状高台土師器（142），瓦質土器の鍋（143～145）・擂鉢（147），土師質土器の鍋（146），鞴の羽口（194），鉄製リング（264），鉄製金具（270），銅製金具（290），古銭（323・338）が出土した。古銭のうち 338 は包含層からの出土で，寛永通寶である。

142 は柱状高台土師器である。口径 10.2 cm，器高 4.7 cmである。椀形の器形に径 6.4 cm，高さ約 1.5 cmの柱状高台がつく。椀部と柱状高台の接合部は狭まっており，柱状というよりは，椀に台を取り付けたような器形である。

143～145 は瓦質土器の鍋で，外面体部にススが付着している。体部が斜めに直線的に立ち上がり，外面に断面三角形の突帯を貼り付ける。口縁端部は平坦に近い。143 はＧ11 区出土の破片と接合した。145 は口径 33.7 cm程度と思われる。

146 は土師質土器の鍋である。口縁部が緩やかに外反し，口縁端部は平坦に近い。

147 は瓦質土器の擂鉢である。体部は内湾気味に立ち上がり，口縁端部は内傾して面をなす。内面に斜め方向の粗い擂り目があるが，単位は不明である。

その他，土師質土器の皿，亀山焼の甕，須恵器系土器（甕など），備前焼の甕，青磁，滑石製の石鍋片，銅製品片３点が出土しているが，いずれも細片のため図示できなかった。遺物は包含層からの出土が多い。滑石製の石鍋片には煤が付着している。

ピットを含め本グリッドから出土した鉄製品は，261 を含め鉄釘 87 点，264 のリング１点，270 の金具１点，272 の鉄鏃１点，用途不明鉄製品 12 点の他，鉄滓 14 点（332.34ｇ）が出土した。

⑬Ｇ13 区（第 40・55 図，図版 32・40）

土師質土器の椀（148），瓦質土器の擂鉢（149），鉄鏃（271）が出土した。

148 は土師質土器の椀である。体部は内湾しながら立ち上がる。口径 9.1 cm，器高 2.85 cmである。

149 は瓦質土器の擂鉢である。体部は直線的に立ち上がり，口縁端部は面をなす。復元口径は 36.0 cmである。内面に斜め方向の粗い擂り目があるが，摩滅のため単位は不明である。G14 区出土の破片と接合した。

その他，土師質土器の皿，瓦質土器の鍋，亀山焼の甕，須恵器系土器，備前焼の甕などが包含層から出土しているが，細片のため図示できなかった。

鉄製品は，包含層から鉄釘８点，271 の鉄鏃１点が出土しており，他に鉄滓２点（32.09 g）が出土した。

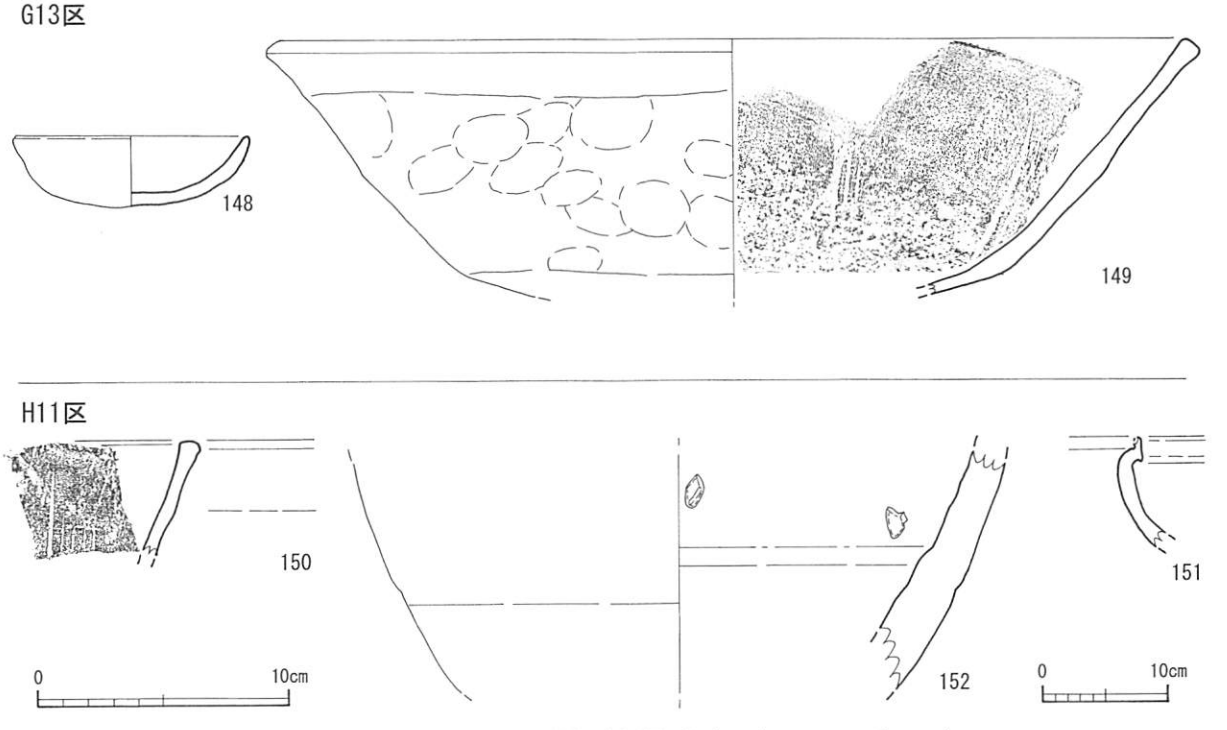
⑭H11 区（第 40・54・57 図，図版 32・33・39・41）

鉄釘（262），用途不明銅製品（293）がピットから出土した。遺構外の包含層から土師質土器の皿（141），瓦質土器の擂鉢，常滑焼の甕，白磁の四耳壺が出土した。

141 は土師質土器の皿である。体部は直線的に立ち上がり，底部切り離しは回転ヘラ切りである。。復元口径 12.9 cm，器高 2.05 cmで，口径の割に器高が低いタイプである。

150 は瓦質土器の擂鉢である。体部は斜めにまっすぐ立ち上がり，口縁端部は面をなす。内面に粗い擂り目があるが，単位は不明である。

151 は常滑焼の甕の口縁部片である。頸部は内傾し，口縁部は短く外反する。口縁端部を上下に拡張している。



第40図　１郭遺構外出土土器類実測図（２）（1：3，151は1：6）

152 は白磁の四耳壺の体部片である。外面に透明釉，内面に淡青灰色の釉がかかる。内面に粘土が付着している。器壁が厚く，1.4～2.0 cmである。

その他，亀山焼の甕，瓦質土器の鍋，須恵器系土器，備前焼の甕・擂鉢，青白磁が出土したが，細片のため図示できなかった。

ピットを含め本グリッドから出土した鉄製品は，262 を含め鉄釘 39 点，293 を含め用途不明鉄製品 5 点の他，鉄滓 19 点（152.94 g）が出土した。

⑮H12 区（第 50 図，図版 36）

包含層から丸瓦（197），土師質土器，鉄釘，鉄滓が出土した。ピットを含め，瓦質土器の鍋，備前焼の甕，鉄釘 2 点，鉄滓 2 点（5.83 g）が出土している。

⑯H13 区（第 41 図，図版 33・34）

盛土から弥生土器の甕（153～159）・高杯（160）・鉢（161・162），土師器の椀（163）が出土した。

153～159 は弥生土器の甕である。153～157 は複合口縁で，口縁端部の立ち上がりは 153 が外傾し，155 が直立し，それ以外が内傾する。外面口縁部に凹線を有している。157 は胴部最大径がやや上位にあり，胴部はかなり張っている。158・159 は底部である。平底で，159 の外面はヘラミガキである。

160 は弥生土器の高杯の脚部である。脚端部を上下に拡張し，その外面に 2 条の浅い凹線を有する。摩滅のため調整は不明である。脚部にいくつかの円孔が見られる。

161・162 は弥生土器の鉢である。胴部が「く」の字に屈曲し，161 は口縁部を大きく外反させ，162 は口縁部を若干拡張し，ともに口縁上端部に浅い凹線を有する。外面胴部はヘラミガキである。

163 は土師器の椀である。高台がつく大型の椀で，体部はやや内湾気味に立ち上がる。底部の器壁が 1.4～2.0 cmと厚く，口縁部に向かって次第に薄くなる。高台は貼り付けではなく，粘土から挽きだしたものと思われる。推定口径 23.1 cm，復元高台径 13.2 cm，推定器高 7.05 cmである。ＳＸ13 出土の 49 に似るが，これよりもさらに大型である。

その他，土師質土器（皿など），瓦質土器の擂鉢，亀山焼の甕，須恵器系土器，備前焼の甕が表土・盛土から出土しているが，細片のため図示できなかった。

鉄製品類も盛土から出土しており，鉄釘 2 点，鉄滓 1 点（32.18 g）がある。

⑰I 10・11 区（第 42 図，図版 34）

土師器の壷（164），土師質土器の皿（165）・椀（166・167），東播系須恵器の擂鉢，亀山焼の甕が出土した。土師質土器は盛土からの出土が多く，亀山焼は表土及び盛土からの出土である。

164 は古墳時代の土師器の壺の口縁部である。内面は緩やかに外反するが，外面は「く」字状に外反する。

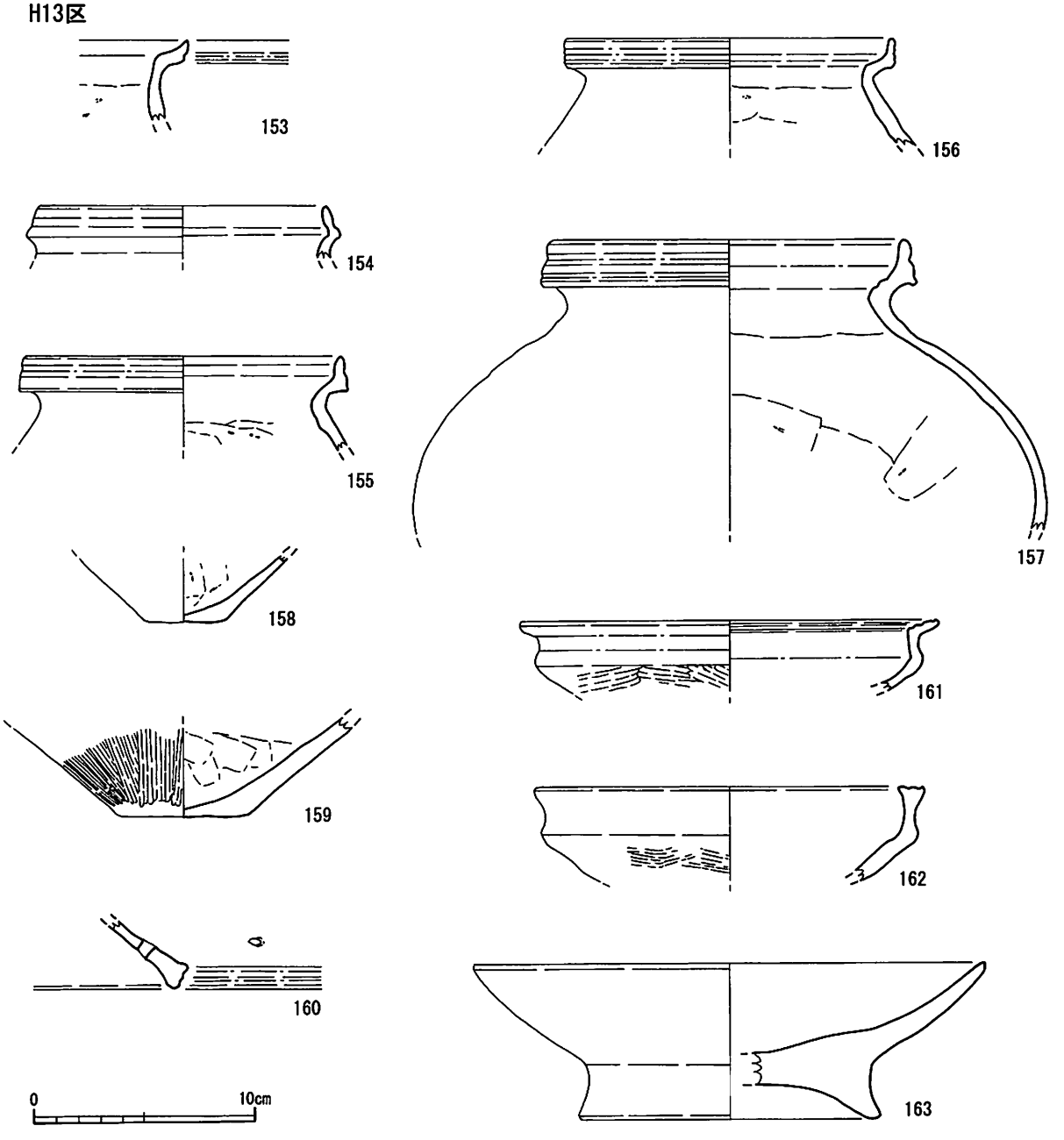
165 は土師質土器の皿である。体部はやや外反気味に立ち上がり，底部切り離しは回転ヘラ切りである。口径 6.2 cm，器高 1.3 cmである。

166・167は土師質土器の椀である。体部は内湾気味に立ち上がる。166は口径9.8㎝，器高3.15㎝，167は復元口径10.5㎝，器高2.8㎝である。

168・169は東播系須恵器の擂鉢である。ともに体部は直線的に立ち上がり，短く直立し端部を尖り気味に納める玉縁状の口縁部がつく。擂り目はない。

170は亀山焼の甕の胴部片である。外面に格子目タタキを施し，格子の単位は3㎜×4㎜である。

その他，瓦質土器の擂鉢，須恵器系土器が盛土から，備前焼の甕・瓦質土器の鍋が盛土及び第



第41図　1郭遺構外出土土器類実測図（3）（1：3）

２層から，平瓦片２点が第２層から出土したが，いずれも細片のため図示できなかった。

鉄製品は，盛土から鉄釘３点，用途不明鉄製品１点が出土した他に，鉄滓３点（29.40ｇ）が出土している。

⑱Ｉ12区（第42・59図，図版35・42）

盛土から土師質土器の鍋（171）が出土した。体部は直線的に立ち上がり，口縁部は強く外反する。口縁端部は平坦に納め，内面頸部に稜をもつ。

その他，盛土から土師質土器の皿が出土したが，細片のため図示できなかった。

また，表土から古銭（337），鉄釘１点が出土した。337は寛永通寶である。

⑲１郭第４次調査区（第42図，図版35）

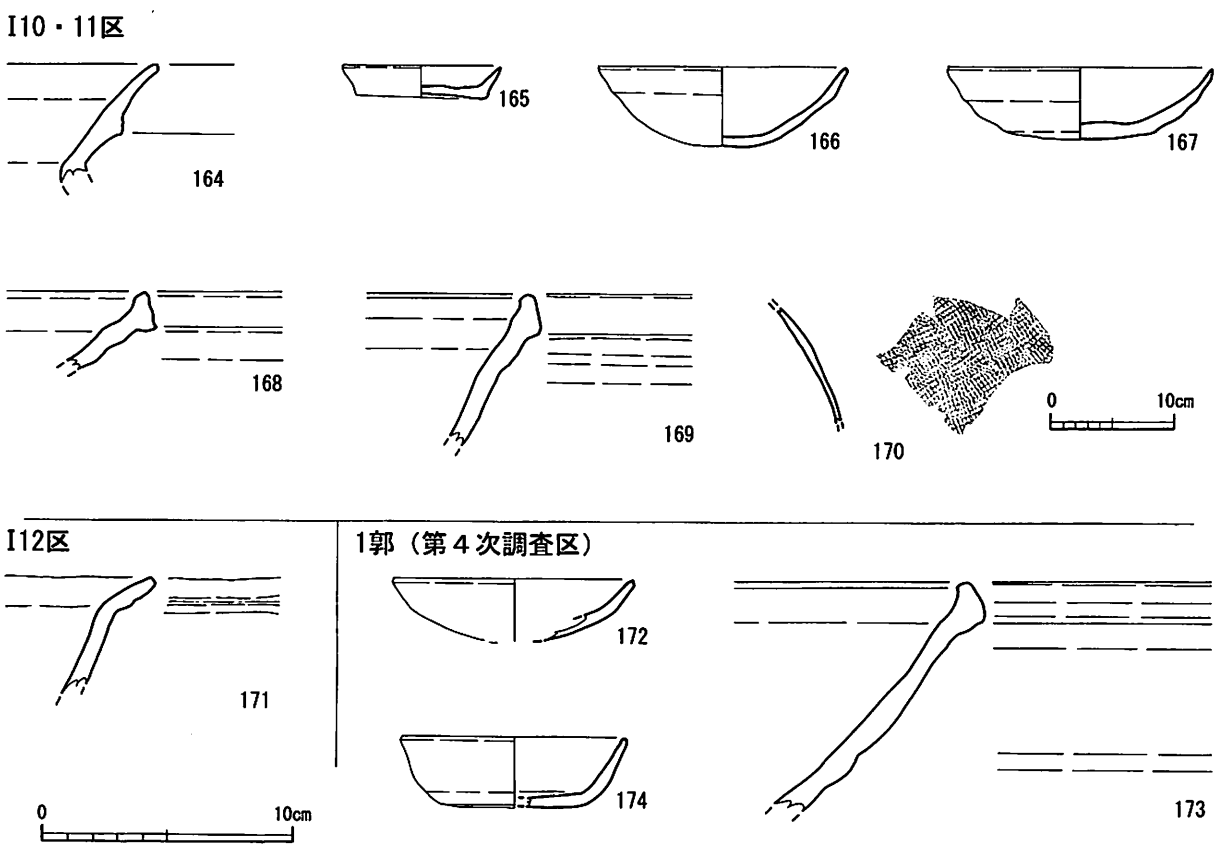
土師質土器の椀（172），東播系須恵器の擂鉢（173），白磁の皿（174）が出土した。

172は土師質土器の椀である。体部は内湾気味に立ち上がる。復元口径9.6㎝である。

173は東播系須恵器の擂鉢である。体部はやや内湾気味に立ち上がり，短く直立し端部を尖り気味に納める玉縁状の口縁部がつく。擂り目はない。

174は白磁の皿である。底部切り離しは回転ヘラ切りである。口縁端部と外面底部を除き，透明釉がかかる。復元口径8.8㎝，器高2.8㎝である。

⑳その他のグリッド



第42図　１郭遺構外出土土器類実測図（４）（1：3，170は1：6）

G10 区から土師質土器，不明鉄製品１点が出土した。

G14 区包含層・盛土から土師質土器（皿など），瓦質土器の鍋・擂鉢，須恵器系土器の甕，備前焼の甕，鉄釘１点，鉄滓 11 点（489.60ｇ）が出土した。

Ｈ９区の包含層から土師質土器の皿，備前焼の甕・擂鉢が出土した。

H10 区の包含層から土師質土器，瓦質土器の鍋，須恵器系土器，備前焼の甕，鉄釘３点が出土した。

Ｉ９区の盛土から土師質土器（皿など），備前焼の甕が出土した。

以上の遺物は，いずれも細片のため図示できなかった。

２　１郭東側切岸

１郭東側の切岸で平坦面２，通路１，土坑１を検出した。

（１）平坦面

①平坦面 10

検出遺構（第 43 図）

１郭東側切岸の中央部付近に位置する平坦面である。切岸が南北方向から北東－南西方向に向きを変えるコーナー部分にあたる。１郭東端との標高差は 1.5mである。平坦面は長さ 7.3m，幅 1.7mである。

出土遺物

遺物は出土していない。

②平坦面 11

検出遺構（第７・43 図）

１郭東側切岸の南部に位置する平坦面である。１郭東端との標高差は約６ｍである。北東－南西方向の細長い平坦面で，南西部に向かって次第に広くなる。平坦面は長さ 12.0m，幅 2.0mである。

出土遺物

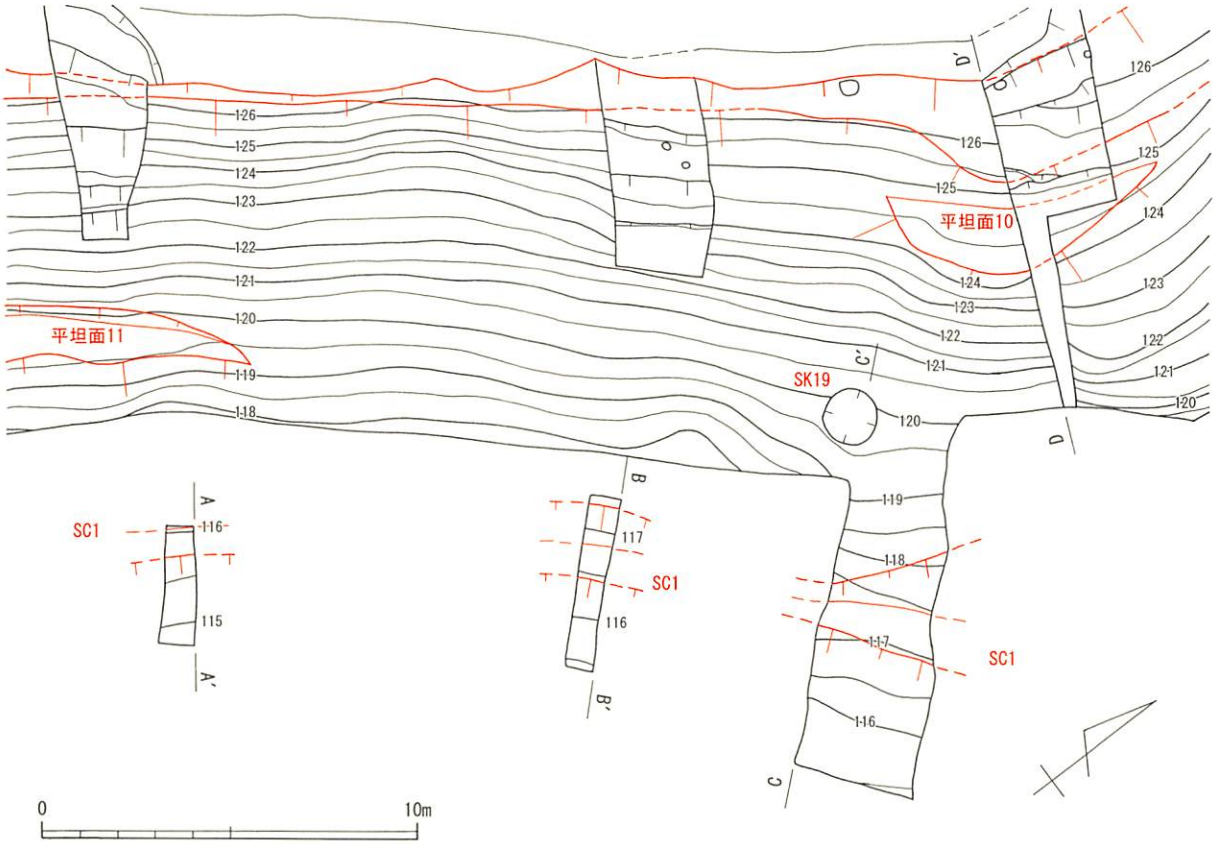
遺物は出土していない。

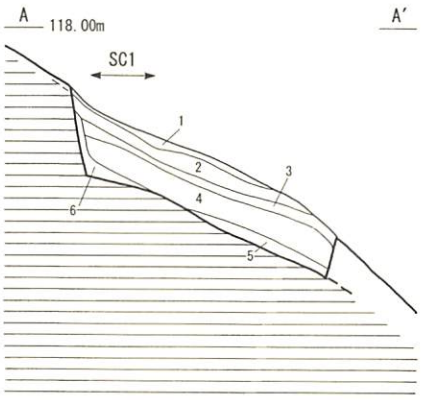
（２）通路

①ＳＣ１

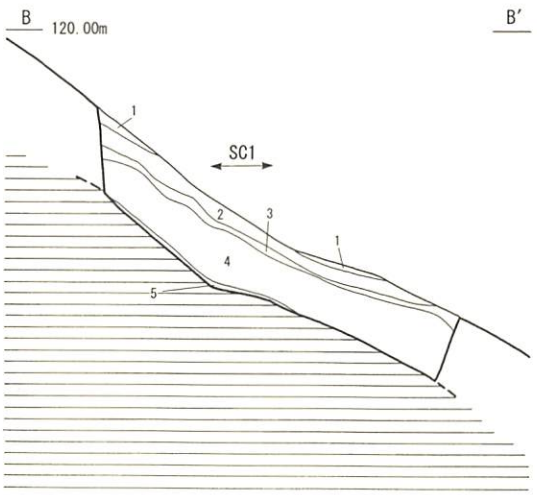
検出遺構（第 43 図）

１郭東側切岸のトレンチ調査によって確認した通路である。平坦面 10・11 よりも低い場所に位置し，１郭東端との標高差は約 10mである。等高線に沿って北東－南西方向に延び，検出した部分は，長さ 20.6m，幅 0.7～1.3mである。南側は１郭と南東尾根を結ぶ通路，あるいは南尾根まで続いていた可能性がある。北側は北東尾根の平坦面１まで続いていたものと思われる。





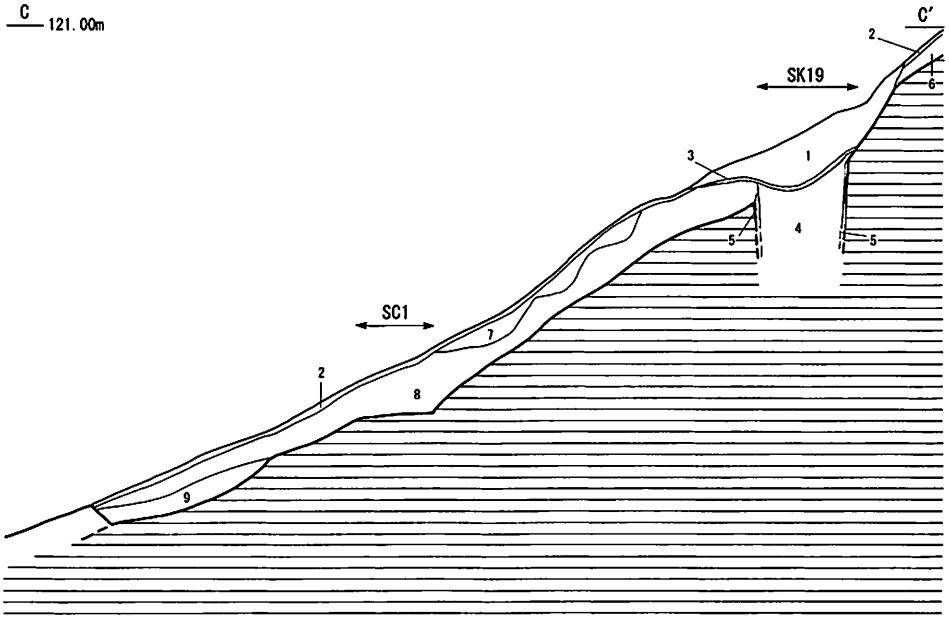
1　表土（腐葉土）
2　黄色砂質土（拳大の地山礫を含む）
3　黒褐色腐葉土（旧表土）
4　灰黄褐色砂質土（１cm程度の地山礫を含む）
5　黄褐色砂質土
6　浅黄砂礫土（地山礫を多く含む）



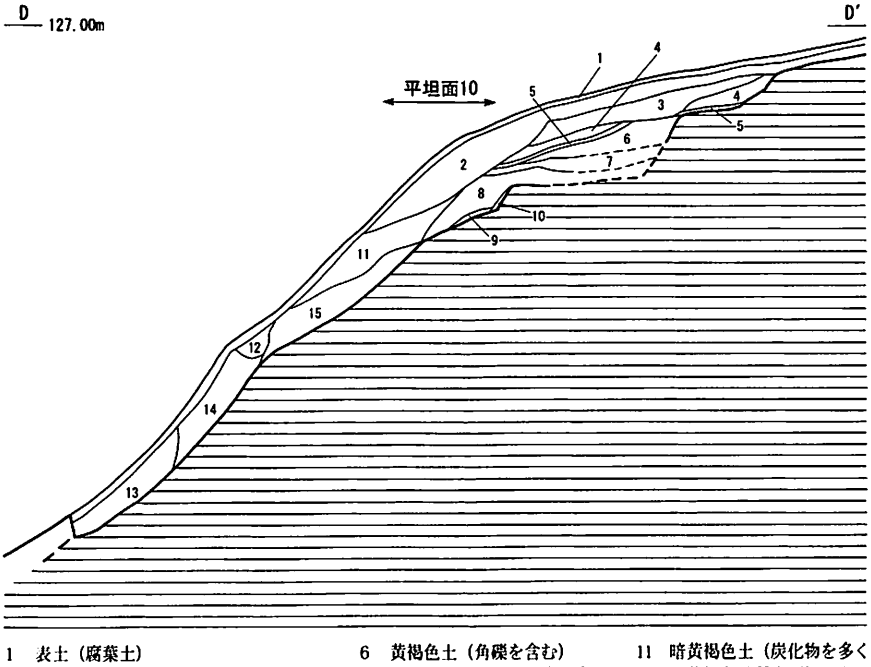
1　表土（腐葉土）
2　黄色砂質土
3　黒褐色腐葉土（旧表土）
4　灰黄褐色砂質土
5　黄橙色砂礫土

0　5m

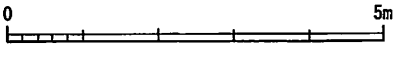
第43図　１郭東側切岸実測図（1：200），ＳＣ１土層断面図（1：100）



1　黄橙色砂質土
　(腐葉土を含む。崩落土)
2　表土（腐葉土）
3　黒色土
4　黒褐色砂質土
　(ブロック土・瓦などを含む)
5　黄色砂質土（漆喰）
6　黄色砂質土
7　暗灰黄砂質土（礫を少し含む）
8　黄色砂礫土（礫を多く含む）
9　黄橙色砂質土
　(灰黄色のブロックを少し含む)



1　表土（腐葉土）
2　明褐色土
3　灰黄褐色土（角礫を多く含む）
4　黄褐色土
5　暗黄褐色土（炭化物を多く含む部分有）
6　黄褐色土（角礫を含む）
7　明黄褐色土（角礫を多く含む）
8　暗黄褐色土
9　黄褐色土
10　灰黄褐色砂質土
11　暗黄褐色土（炭化物を多く含む）
12　灰黄褐色砂質土（根による攪乱）
13　浅黄橙色礫土（しまり有）
14　浅黄橙色礫土（しまり弱）
15　黄橙色砂礫土



第44図　1郭東側切岸土層断面図（1：100）

出土遺物

ＳＣ1付近から土師質土器（皿など），瓦質土器の鍋・擂鉢，亀山焼の甕，備前焼の甕が出土したが，いずれも細片のため図示できなかった。

（３）土坑

①ＳＫ19

検出遺構（第43図）

東側切岸が角度を変えるコーナー付近に位置する土坑である。平面形は円形で直径 1.4mである。壁全体に黄色砂質土（漆喰）を塗っており，埋土は黄褐色砂質土である。近現代の肥溜と判断した。

出土遺物

近現代と思われる瓦片が出土した。

（４）１郭東側切岸出土遺物（第45・50・51・58図，図版35～37・42）

①Ｈ14区

青磁の碗（175），白磁の皿（176）が出土した。

175 は青磁の碗である。直線的に立ち上がる外面に片刃彫りによる蓮弁を配す龍泉窯系の碗である。全体に暗緑色の釉を施す。

176 は白磁の皿？である。体部は内湾しながら立ち上がり，全面に透明釉を施す。小片のため皿と断定できない。その他，土師質土器（皿など），瓦質土器（鍋など），備前焼，鉄釘５点が出土したが，細片のため図示できなかった。

②Ｊ９区

盛土から土師質土器の椀（177），滑石製石鍋（204・205），古銭（304）が出土した。

177 は土師質土器の椀で，本城跡唯一の高台貼付けの椀である。体部は内湾気味に立ち上がり，口縁部でわずかに外反する。外面底部に断面台形の高台を貼付ける。復元口径 12.0 cm，高台径 5.0 cm，器高 3.25 cmである。

その他，土師質土器の皿，瓦質土器の鍋・火鉢，亀山焼の甕，備前焼の甕が出土したが，細片のため図示できなかった。

204 は滑石製の石鍋の口縁部，205 は底部である。

205 と同一個体の体部も出土したが，細片のため図示できなかった。

また，用途不明鉄製品１点が出土している。

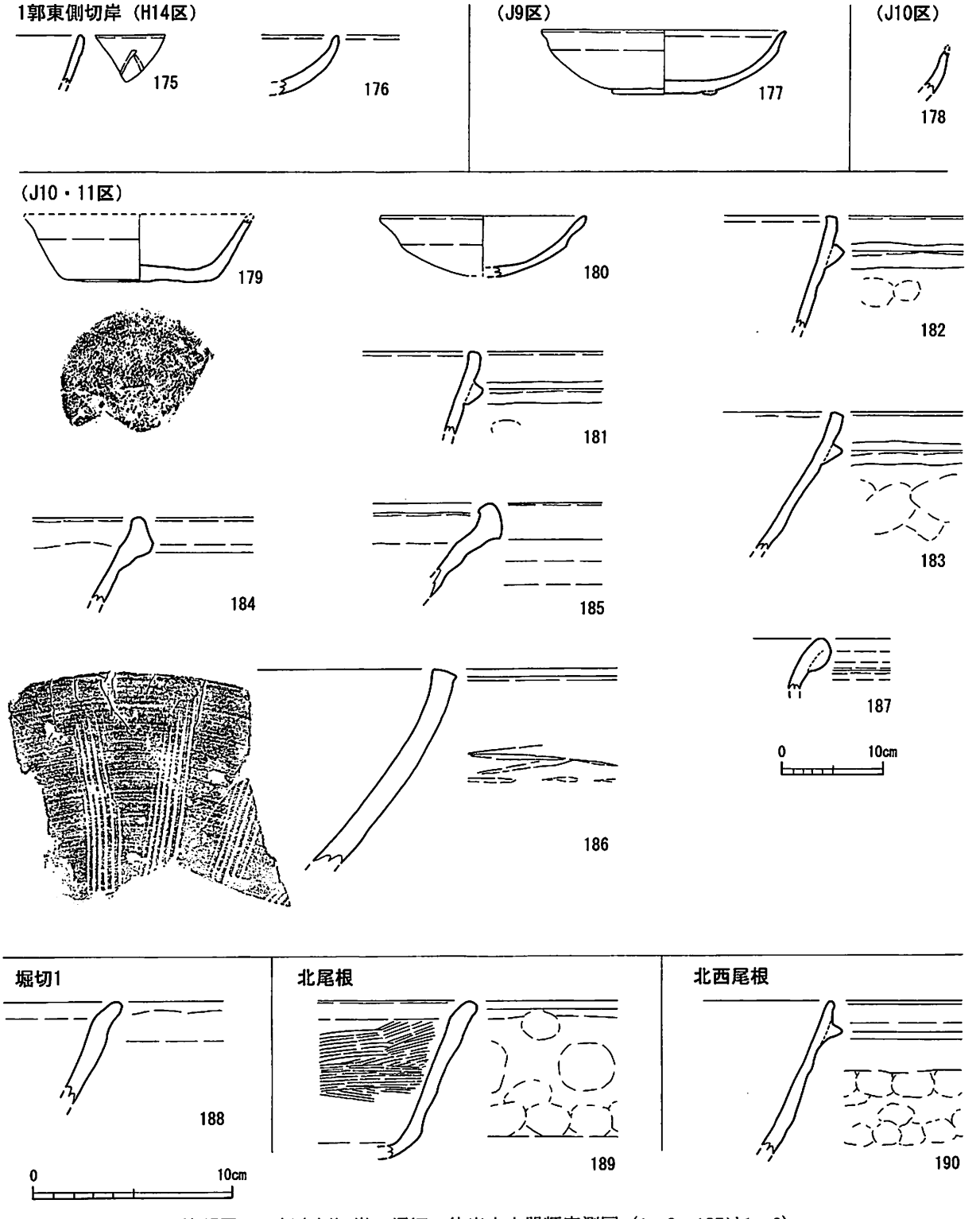
③Ｊ10区

天目茶碗（178）が出土した。体部は内湾気味に立ち上がり，口縁部でわずかに外反する。素地は淡茶灰色で，全体に黒褐色の釉を施す。胎土から中国産と考えられる。

その他，亀山焼の甕が出土したが，細片のため図示できなかった。

④J10・11区

土師質土器の杯（179）・椀（180），瓦質土器の鍋（181～183），東播系須恵器の擂鉢（184・185），備前焼の擂鉢（186）・甕（187），丸瓦（198），古銭（302）が出土した。



第45図　1郭東側切岸・堀切1他出土土器類実測図（1：3，187は1：6）

179 は土師質土器の杯である。体部は直線的に立ち上がり，口縁端部を欠損するが口縁部はわずかに外反するようである。底部は回転ヘラ切りで，板目痕が残る。復元底径 7.4 cm，器高は 3.3 cm程度と推定される。

180 は土師質土器の椀である。体部は内湾気味に立ち上がり，口縁部はやや外反する。復元口径 10.3 cm，器高 3.05 cmである。

181～183 は瓦質土器の鍋である。いずれも体部は斜めに直線的に立ち上がり，外面に断面三角形の突帯を貼付ける。口縁端部は平坦に近い。

184・185 は東播系須恵器の擂鉢である。いずれも体部は斜め上方に立ち上がり，短く直立し端部を尖り気味に納める玉縁状の口縁部がつく。擂り目はない。

186 は備前焼の擂鉢である。口縁部から体部にかけての破片である。体部は内湾気味に立ち上がり，口縁端部はやや強く外傾させて面を作る。外面体部にヘラ状工具による傷が残る。内面に縦方向の擂り目があり，単位は６条である。

187 は備前焼の甕である。口縁部は外反し，端部を折り曲げて丸い玉縁を形成している。玉縁は比較的幅広である。

その他，土師質土器の皿，瓦質土器の擂鉢，須恵器系土器，平瓦片が出土したが，細片のため図示できなかった。

３　北東尾根（第 46 図，図版 17）

1 郭から北東方向に延びる尾根で，平坦面３，その他の遺構１を検出した。いずれの平坦面も岩盤を削り込んで階段状に造っており，緩やかな傾斜をもっている。北東尾根は調査区外にさらに数 10m延びており，小規模な平坦面がいくつか存在する可能性がある。

（１）平坦面

①平坦面１

検出遺構（第 46 図，図版 18－ａ）

北東尾根上段の平坦面で，１郭北東端との標高差は 7.5mである。長さは約 17m，幅 8.0mである。南西の高所側に 0.2～0.5mの段差があり２段になっている。南端はＳＣ１につながり，西端はＳＣ２につながるものと思われる。

出土遺物

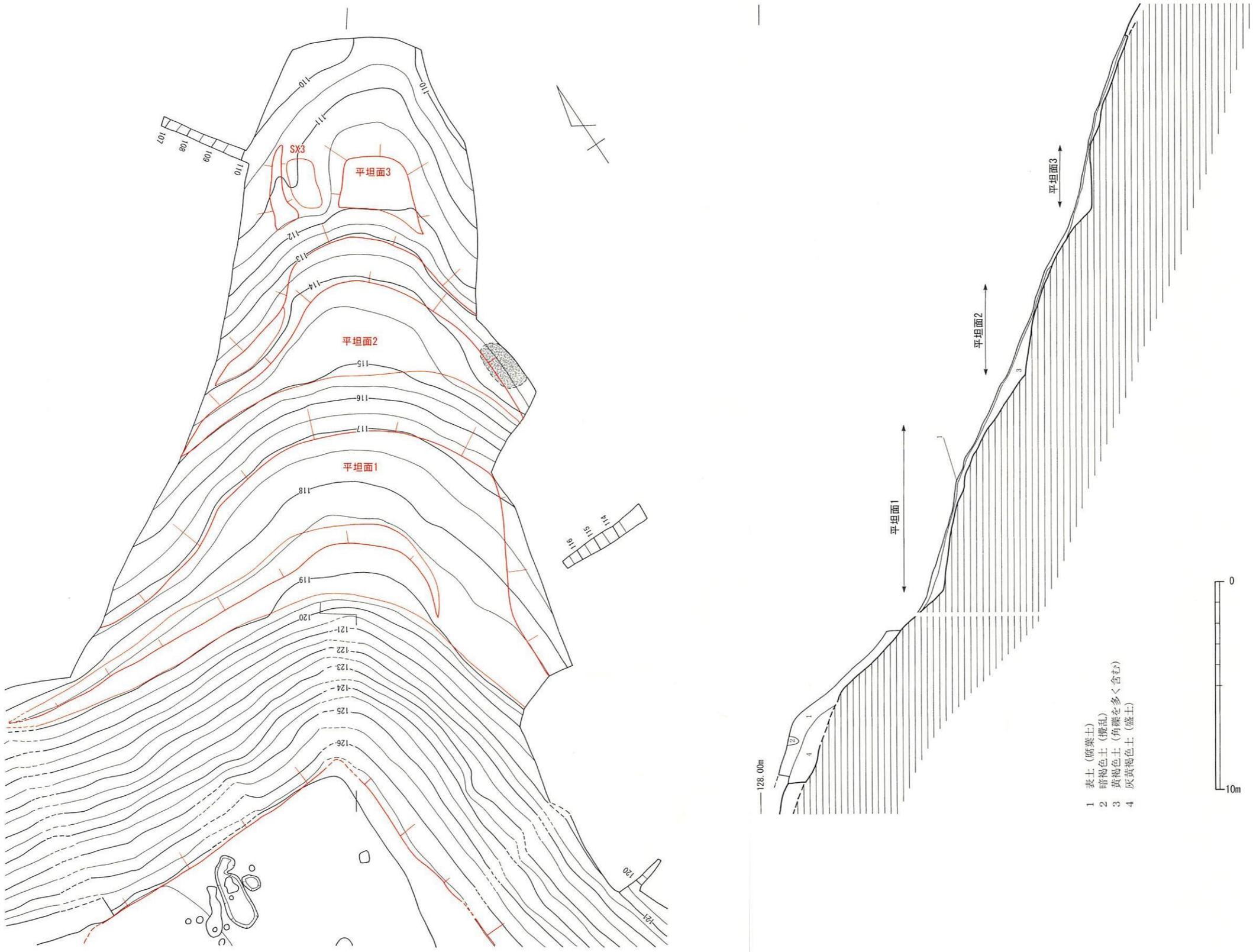
遺物は出土していない。

②平坦面２

検出遺構（第 46 図，図版 18－ｂ）

北東尾根中段の平坦面で，１郭北東端との標高差は 11.5m，平坦面１との標高差は２ｍである。長さは 16.8m，幅 4.5mである。

出土遺物



第46図　北東尾根遺構配置図（1：200）（アミ目は薬集中範囲）

遺物は出土していない。

③平坦面３

検出遺構（第46図，18－ｃ）

北東尾根下段の小規模な平坦面で，西側にＳＸ３がある。１郭北東端との標高差は14.5m，平坦面２との標高差は２ｍである。長さは4.3m，幅2.5mである。

出土遺物

付近から鉄釘１点が出土したが，細片のため図示できなかった。

（２）その他の遺構

①ＳＸ３

検出遺構（第46図）

最下段の平坦面３の西側にある遺構である。斜面を削って平坦面３を造り出した後，平坦面の西側を尾根方向に向かって，長さ3.6m，上端幅2.0～3.2m，下端幅1.1～1.4m，深さ0.6mほど掘り込んでいる。尾根方向に向かって掘り込んでいるため，堀切とは呼べず，短いながらも竪堀に近い遺構である。西側に上端の長さ4.1m，幅0.2～1.3mの平坦面があり，土塁状になっている。

出土遺物

遺物は出土していない。

（３）北東尾根出土遺物

Ｉ８区表土から土師質土器（皿など），瓦質土器の鍋，須恵器系土器，備前焼の甕，滑石製の石鍋体部片１点が出土した。いずれも細片のため図示できなかった。滑石製の石鍋には煤が付着している。また，鉄釘が５点，鉄滓１点（14.30ｇ）が出土している。

北東尾根トレンチＡの黄褐色土から土師質土器（皿など），瓦質土器の擂鉢，備前焼の甕が出土したが，細片のため図示できなかった。

４　北尾根・北西尾根（第47・48図，図版19－ａ・ｂ，22－ａ）

１郭から北及び北西に延びる尾根である。両者を明確に区別することができないので，まとめて記載する。ここでは堀切２，平坦面６，通路１，溝状遺構１，その他の遺構１を検出した。堀切・平坦面などはいずれも岩盤を削り込んで造っている。平坦面は緩やかな傾斜をもっている。

（１）堀切・土橋

①堀切１

検出遺構（第47・48図，図版20－ｃ，図版21）

１郭の北西に位置する堀切である。１郭と小山状の平坦面４の間に位置し，北東から南西方向

に掘り込んでいる。北尾根との間を画する施設であるが，完全に掘り切って遮断するのではなく，土橋を形成しており，北西尾根との間を結ぶ通路としている。堀切の深さは１～3.5m程度で，東側の長さ12.5m，幅5.7～7.5m，西側は調査区外に続いており，現状で長さ５m以上，幅５～８m程度である。土橋の長さ7.0m，幅は上端で0.6m，下端で4.7mである。

出土遺物（第45図，図版36）

遺物は西側表土から出土した。188 は瓦質土器の鉢である。体部は外傾して立ち上がり，口縁部は短く，緩やかに外反する。口縁端部は丸くおさめる。

その他，土師質土器（皿など），亀山焼の甕，備前焼の甕が出土したが，細片のため図示できなかった。また，鉄釘が３点出土している。

②堀切２

検出遺構（第47・48図，図版20－ａ・ｂ）

北西尾根の平坦面６の北側に位置する堀切である。平坦面７の南半部を東西方向に，長さ 4.2～6.9m，幅2.8～3.0m，深さ0.6mの規模で掘り込んでいる。西側は完全に掘り切っていないが，その地形から土橋とは考えにくいので堀切とした。堀切１に比べると，防御機能は弱いものと思われる。

出土遺物

遺物は出土していない。

（２）平坦面

①平坦面４

検出遺構（第47・48図，図版20－ｃ）

１郭の北側にある小山状の高まりである。最高所の標高は 124.2mで，１郭北端との標高差は４mである。規模は7.4m×6.5mで，１郭との間には堀切１及び土橋がある。なお，東側から堀切にかけて，ピットが並んでいるが，これはブドウ畑の支柱に伴う新しい穴である。

出土遺物

遺物は出土していない。

②平坦面５

検出遺構（第47・48図，図版19－ｃ）

北尾根の最上段に位置する平坦面である。１郭北端との標高差は11mである。南の高所側には北尾根と北西尾根・北東尾根を結ぶ通路ＳＣ２が隣接する。平坦面の規模は長さ18.2m，幅4.9mである。

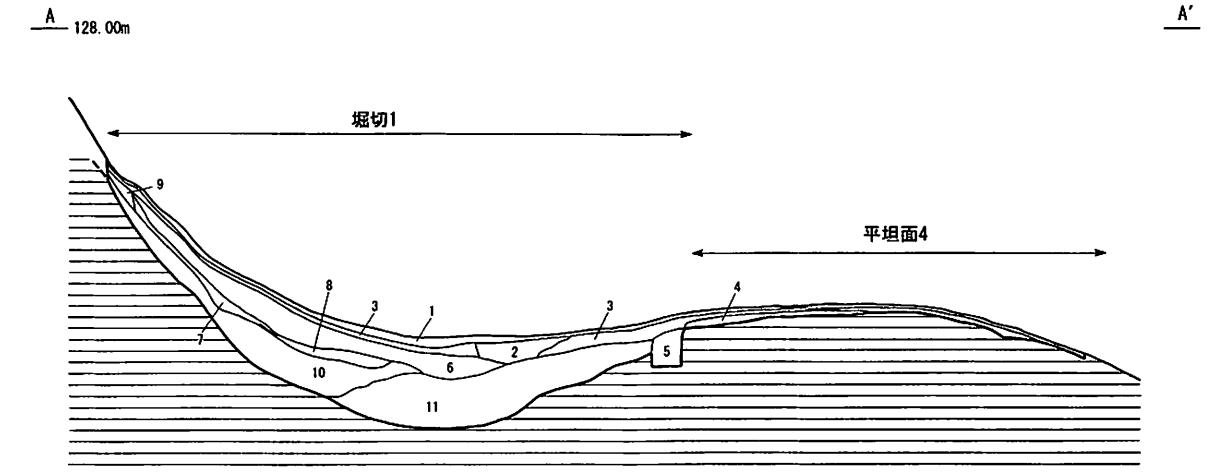
出土遺物

遺物は出土していない。

③平坦面６

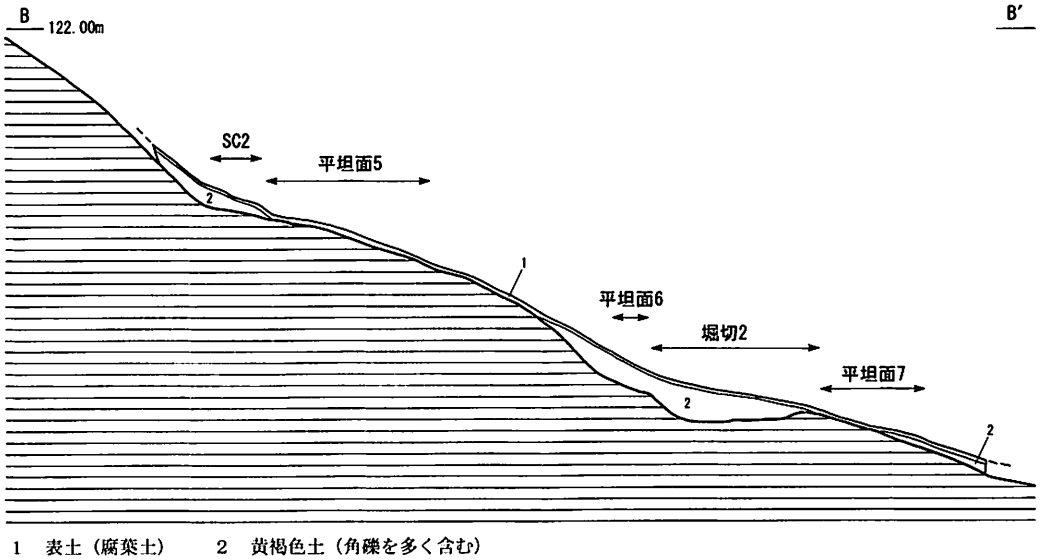
検出遺構（第47・48図）

第47図　北尾根・北西尾根遺構配置図（1：200）

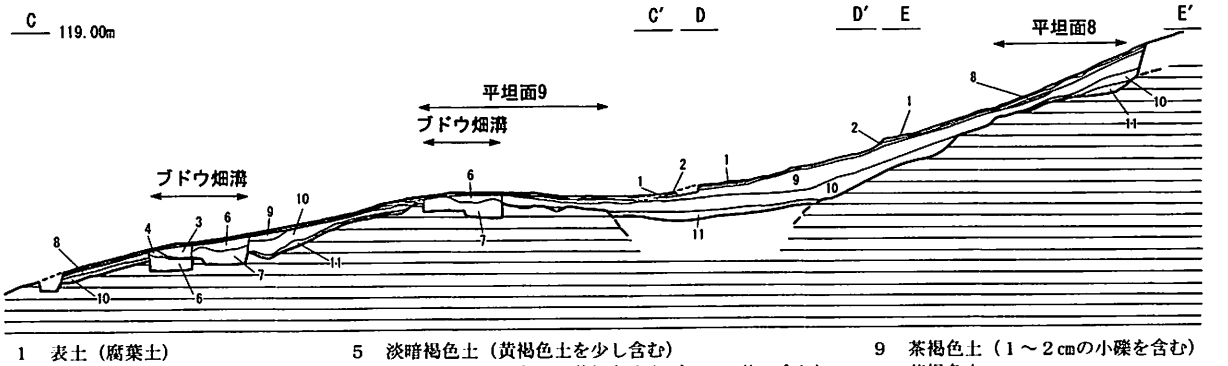


1　表土（腐葉土）
2　淡暗褐色土（ブドウ畑に伴う）
3　暗褐色土
4　橙褐色土
5　淡橙褐色土（ブドウ畑の支柱）
6　茶褐色土
7　暗褐色土（黄褐色土を少し含む）
8　褐色土
9　淡褐色土（暗褐色土を少し含む）
10　淡褐色土
11　淡灰褐色土（全体的に岩質）

0　5m



1　表土（腐葉土）　2　黄褐色土（角礫を多く含む）



1　表土（腐葉土）
2　暗褐色土
3　淡暗褐色土（黄褐色土を含む）
4　淡暗褐色土＋淡黄褐色土
5　淡暗褐色土（黄褐色土を少し含む）
6　淡褐色土（暗褐色土と黄褐色土をブロック状に含む）
7　淡暗褐色土
8　淡褐色土（暗褐色土を含む）
9　茶褐色土（1～2cmの小礫を含む）
10　茶褐色土
11　淡褐色土

0　10m

第48図　堀切1・平坦面4土層断面図（1：100），北尾根・北西尾根土層断面図（1：200）

北尾根の平坦面５と７の間にある細長い平坦面である。１郭との標高差 15.5m，平坦面５との標高差３ｍである。平坦面の規模は長さ 7.7m，幅 1.0mである。

出土遺物

遺物は出土していない。

④平坦面７

検出遺構（第 47・48 図，図版 20－ｂ）

北尾根の下段にある平坦面である。１郭との標高差 16.5m，平坦面６との標高差１ｍである。平坦面造成後に堀切２が造られている。平坦面の規模は長さ 9.2m，幅 6.3mである。

出土遺物

遺物は出土していない。

⑤平坦面８

検出遺構（第 47・48 図）

北西尾根の上段にある平坦面である。１郭北端との標高差 10m，平坦面４との標高差５ｍである。南西側は調査区外となるため調査していないが，平坦面の規模は，現状で長さ 9.7m，幅 6.2ｍである。平坦面の中央にＳＸ14 があり，東側には北西尾根と北尾根及び北東尾根を結ぶ通路ＳＣ２がある。南東の高所側に長さ 4.7m，幅 0.4mの小さな平坦面がある。また，中央から北側にかけて，ブドウ畑に伴う東西方向の溝が２条ある。

出土遺物

遺物は出土していない。

⑥平坦面９

検出遺構（第 47・48 図）

北西尾根の上段にある平坦面である。１郭北端との標高差 13m，平坦面８との標高差１ｍである。南西側は調査区外に続いている。また，北東側には深い落込みが見られる。中央から西側にかけて，ブドウ畑に伴う南北方向の溝が２条ある。本平坦面の規模は，現状で長さ 6.9m，幅 6.9ｍである。南西側に向かって次第に幅が狭くなる。

出土遺物

遺物は出土していない。

（３）通路

①ＳＣ２

検出遺構（第 47･48 図）

北尾根平坦面５の南の高所側に隣接する通路である。１郭北端との標高差は 11mである。北西尾根・北尾根・北東尾根という３つの尾根を結ぶ役割をもつと思われる。平坦面５との間にはわずかな段差がある。検出した部分の長さ約 27m，幅 0.7～1.9mで，東側が広くなっている。

出土遺物

遺物は出土していない。

（4）溝状遺構

①ＳＤ17

検出遺構（第47図）

北西尾根の平坦面８の南部に位置する溝状遺構である。東西方向に延び，西側は調査区外に続いている。現状で長さ1.25m，幅0.3m，深さ0.15mである。

出土遺物

遺物は出土していない。

（5）その他の遺構

①ＳＸ14

検出遺構（第47図）

北西尾根の平坦面８の中央部に位置する方形の遺構である。１郭で検出したＳＸ４～10と似ており，ブドウ畑に伴う新しい溝と直交するため，近現代の遺構の可能性がある。主軸は南東－北西方向で，北西部には方形の窪みが見られる。中央部はブドウ畑に伴う新しい溝によって切られている。現状で，長さ4.1m，幅2.2m，深さ0.2mである。

出土遺物

遺物は出土していない。

（6）北尾根・北西尾根出土遺物（第45図，図版36）

北尾根から瓦質土器の盤（189）が出土した。体部が斜め上方に直線的に立ち上がり，口縁部はやや外反する。口縁端部は丸く納めている。外面体部に指頭圧痕が残り，内面体部は横方向のハケ目である。

北尾根トレンチＢの上段から土師質土器が出土した。北尾根Ｅ６区から土師質土器の皿，Ｆ５区から備前焼の甕，Ｇ８区から土師質土器の皿，須恵器系土器，備前焼の甕が出土している。Ｈ８区から備前焼の甕が出土している。いずれも細片のため図示できなかった。

北西尾根から瓦質土器の鍋（190）が出土した。体部は斜めに直線的に立ち上がり，外面に断面三角形の突帯を貼り付ける。口縁端部は平坦に近い。その他，土師質土器（皿など）が表土から出土したが，細片のため図示できなかった。

北西尾根Ｄ６区表土から備前焼の甕，Ｅ７区表土から瓦質土器（鍋など），鉄釘１点が出土した。いずれも細片のため図示できなかった。

５　土器以外の遺物

（1）土製品（第49図，図版36）

191・192 は土錘である。191 はＳＢ２－Ｐ３，192 はトレンチ３から出土した。ともに管状土錘で，中央に径 0.1 cmの細い孔があり，紡錘形をしている。

193・194 は鞴の羽口である。193 はG12 区ピットから出土した小型のものである。熱を受け，表面が黒変している。194 はG12 区包含層から出土した。熱を受け，内面が赤変している。

（２）**瓦**（第 50 図，図版 36）

195 は軒丸瓦である。ＳK39 から出土した。瓦当面の文様は巴文である。内面の調整は不明である。

196～198 は丸瓦である。196 はＳK30，197 はH12 区，198 は１区東側切岸であるＪ10・11 区から出土した。いずれも凹面に布目痕がある。凸面の調整は 196 が格子目タタキであるが，197・198 は不明である。198 には玉縁部分が残る。

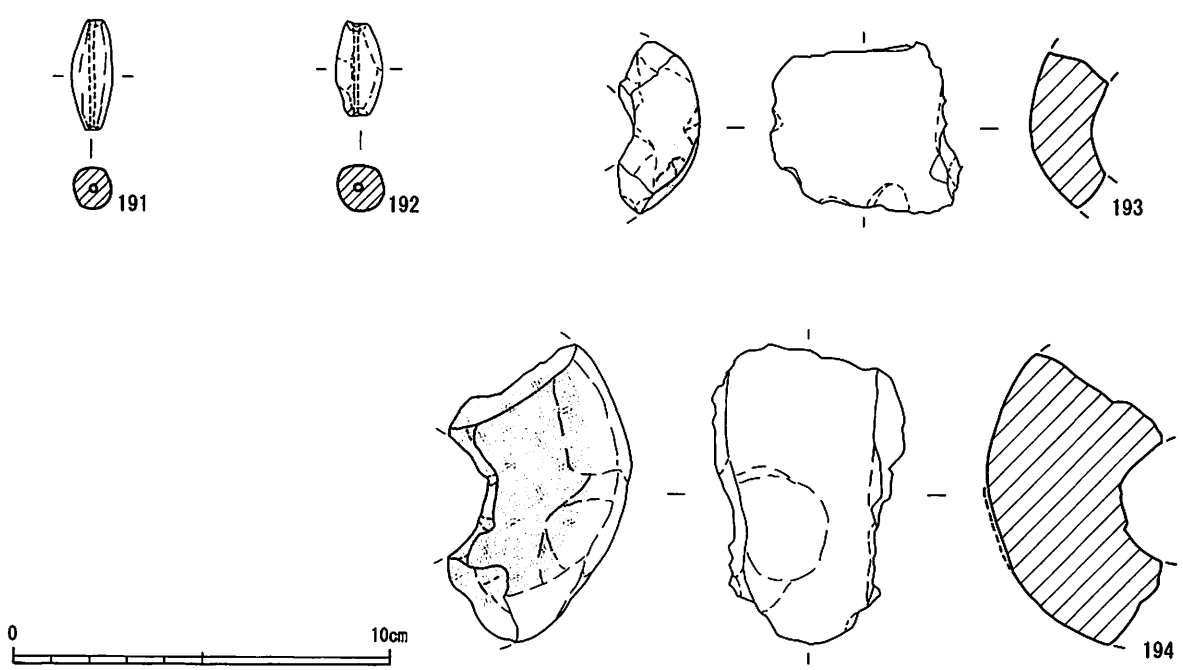
（３）**石製品**（第 51 図，図版 37）

199 はサイコロである。トレンチ１から出土した。一辺 1.5 cmで，「１の目」の面は大部分欠損しているが，他の面は一部欠けた部分もあるが，目を読み取ることができる。

200 は用途不明石製品である。トレンチ１から出土した。球状の石の一部を平らにし，径 0.9 cm，深さ 0.4 cmの円形の穴を穿ったものである。

201～203 は黒色の碁石と思われる。201 はＳD12，202・203 はトレンチ３から出土した。いずれも黒石で，全体を丁寧に磨き，形を丸くし，両面に平らにしている。

204･205 は滑石製の石鍋である。ともにＪ９区から出土した。304 は口縁部で，口径 35 cm前後と推定される。外面全体にススが付着している。再加工が行われ，その時に使用された鋸の刃跡



第49図　１郭周辺出土土製品実測図（1：2）

と思われる痕跡が残る。205 は底部である。底径 28 cm前後と推定される。一部残る外面体部にススが付着している。外面底部は平滑でなく，ススは付着していない。

206 は滑石製の石鍋の加工品である。ＳＫ39 から出土した。石鍋の体部を再加工したものと思われ，底径が 11.5 cmと推定される小型のものである。

207 は温石である。ＳＫ９から出土した。滑石製の石鍋の体部を再加工したものと思われる。中央に径 0.9 cmと推定される孔が穿たれている。

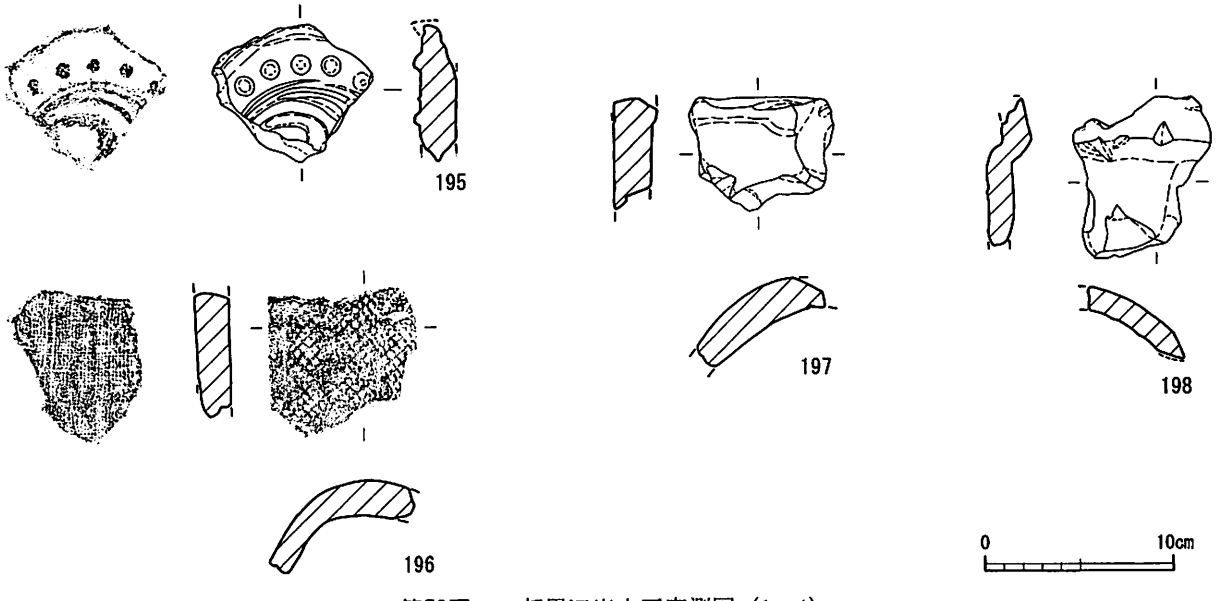
208・209 は砥石である。208 はＧ９区，209 はＦ12 区ピットから出土した。208 は両端部は未使用であるが，それ以外の４面を使用している。３条の溝をもつ面があり，先端が尖ったものを磨いたものと思われる。209 の断面は三角形に近く，３面を使用している。

（４）鉄製品（第 52～56 図，図版 37～41）

210～262 は鉄釘である。210～212 はＳＸ１，213～229 はＳＸ２，230～235 はＳＸ11，236 はＳＸ13，237 はＳＫ５，238 はＳＫ30，239 はＳＫ33，240～242 はＳＫ35，243～248 はＳＫ36，249 はＳＫ37，250 はＳＫ38，251～255 はＳＫ39，256～258 はＳＫ40，259・260 はＳＫ41，261 はＧ12 区ピット，262 はＨ11 区ピットから出土した。頭部が「Ｔ」字状，「Ｌ」字状になったものがあり，断面はいずれも長方形または方形で，厚さ 0.5～0.8 cmのものが多い。先端部が欠損しているものが多く，完形のものは少ないが，長さは４～６cmのものが多い。中には８cmを超える長いものもある。

263 は棒状鉄製品で，トレンチ３から出土した。幅が 1.25 cmと広いのに対し，厚さは頭部が 0.5 cm，それ以外が 0.3 cmと薄いため，釘ではないと思われる。

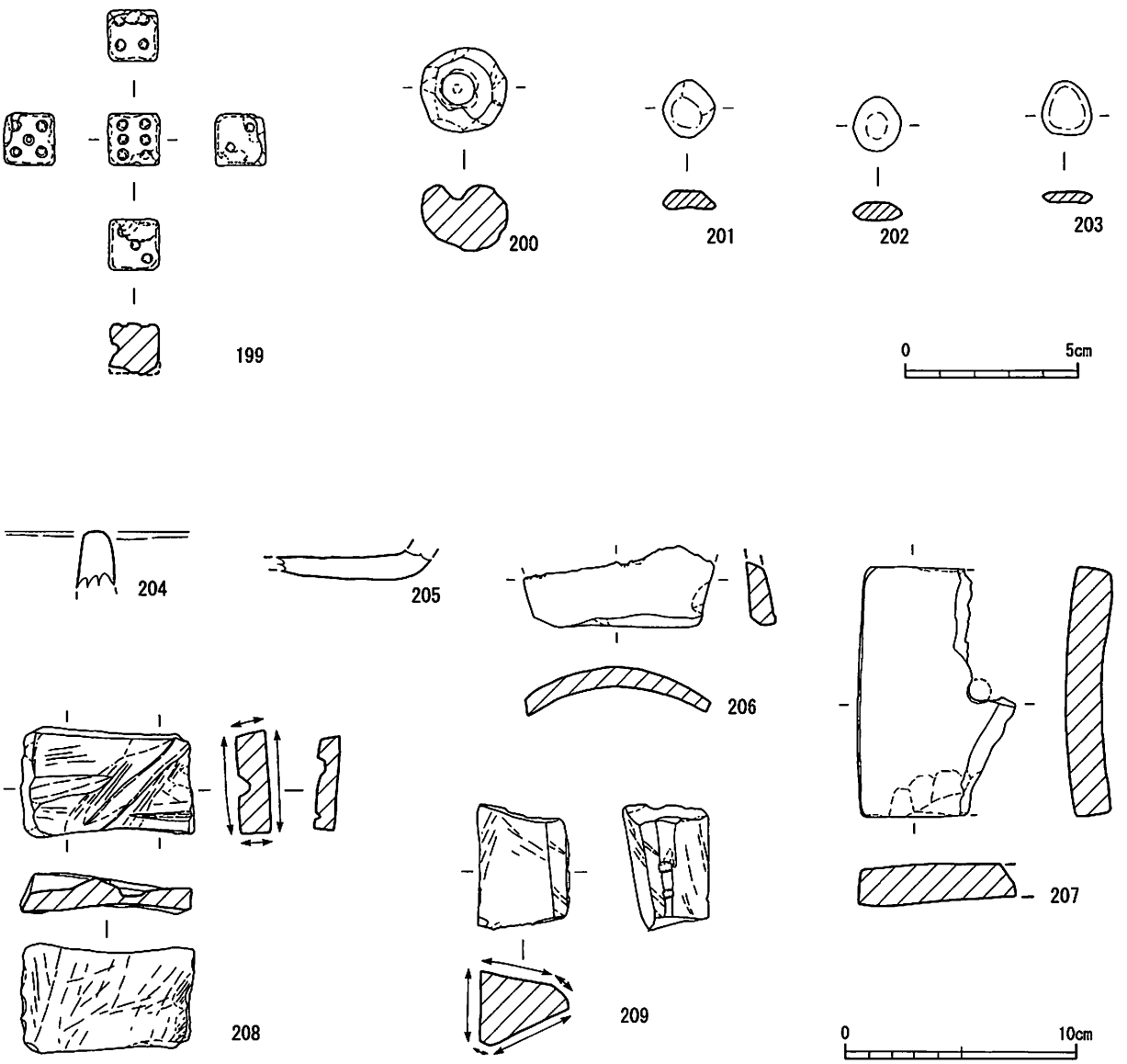
264 は鉄製リングである。Ｇ12 区から出土した。厚さは 0.35～0.8 cmと一定ではなく，また高さも一定ではない。全体的に端部付近が薄く，また低くなっている。両端部は密着せずにわずか



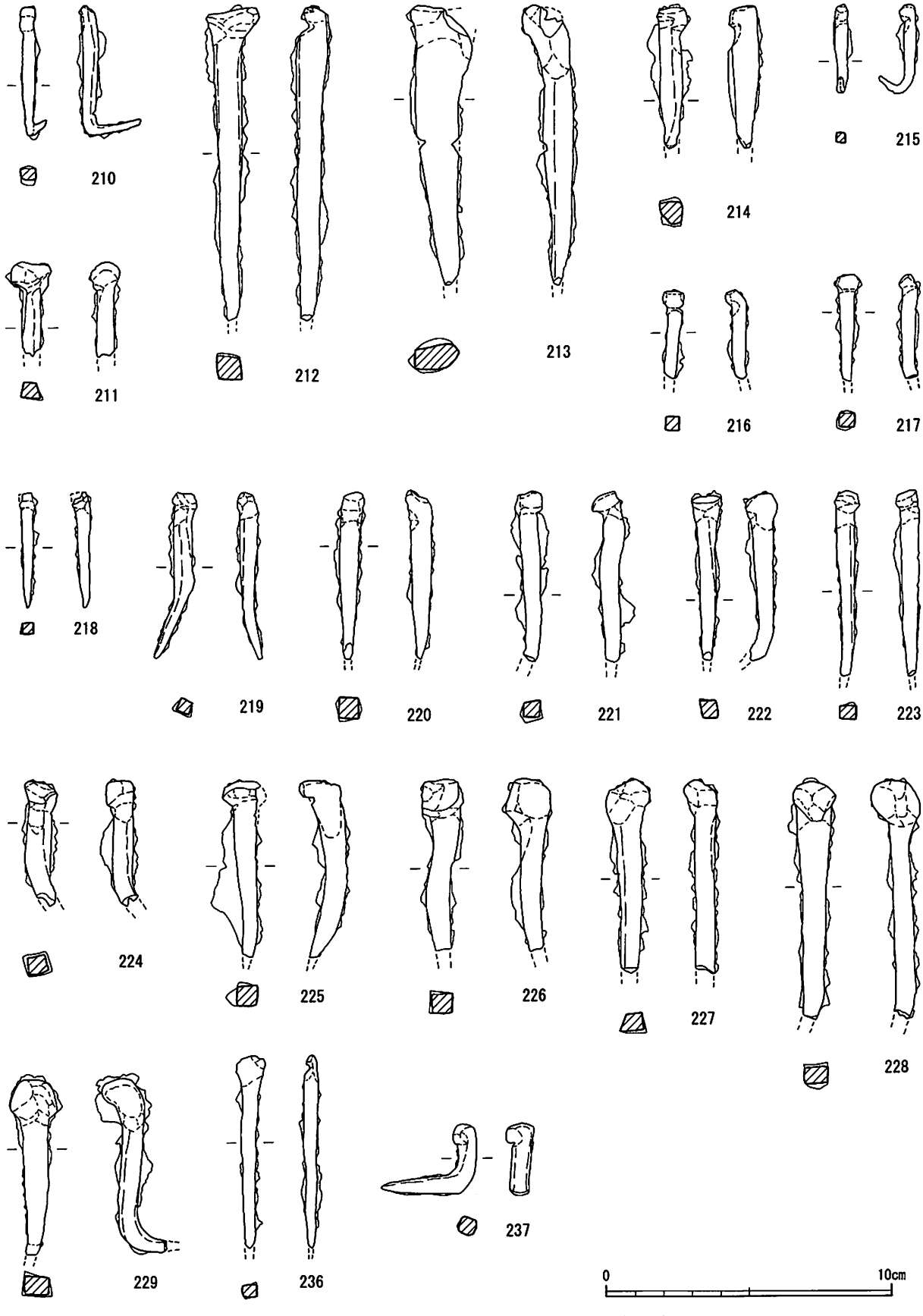
第50図　１郭周辺出土瓦実測図（1：4）

な隙間があり，「C」字状をなしている。

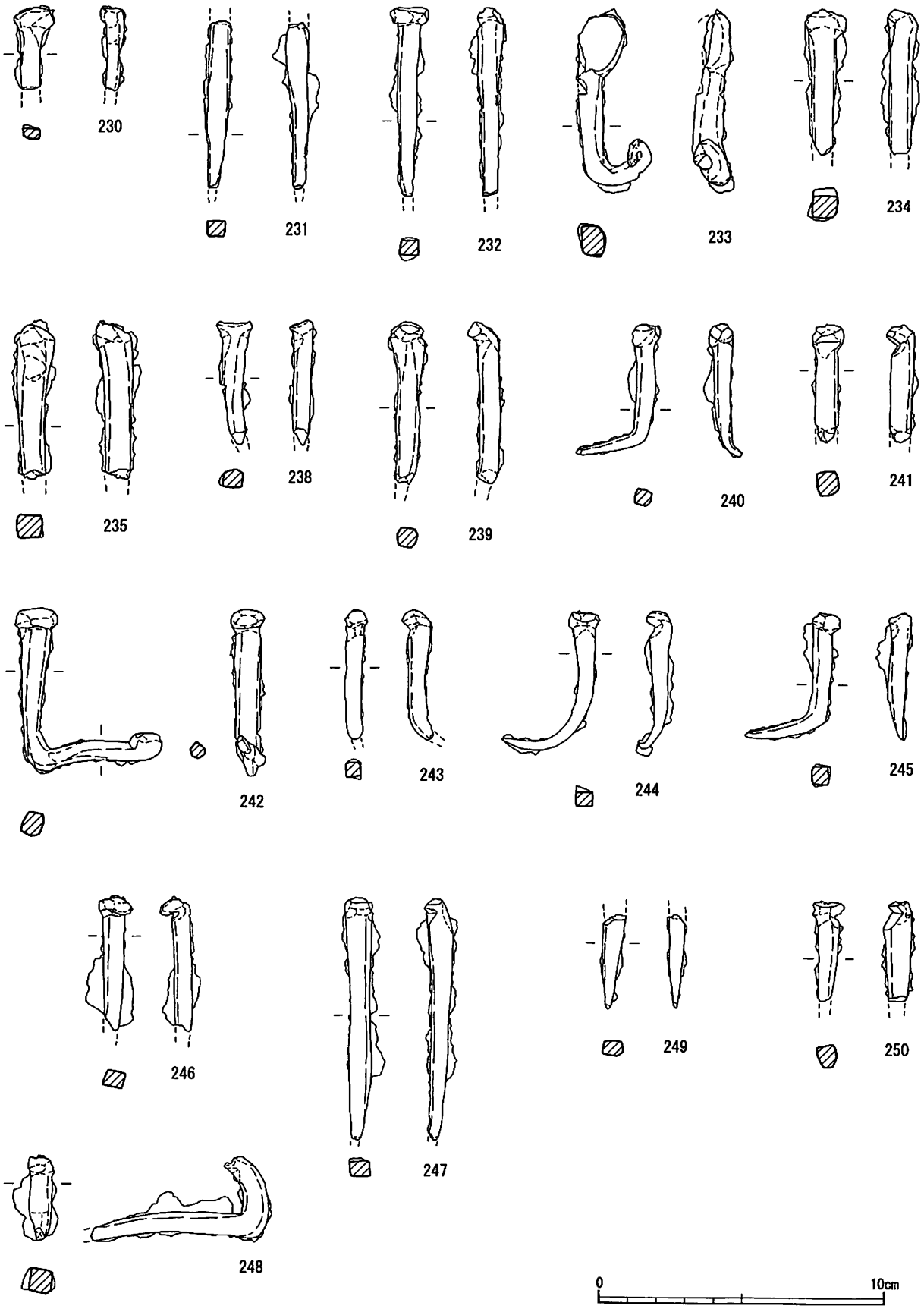
265～268・270は鉄製金具である。265はF10区，266・268・270はSK36，267はG12区から出土した。265は一方の側面中央付近がくびれており，下面両端部中央付近にピン状のものがつく飾り金具と考えられる。266は方形で，下面端部が縁状に厚くなっている。中央端部付近にある長径1.55㎝×短径1.3㎝の鋲で留めていたものと思われる。267は端部を直角に近い形に曲げている。もう一方の端部を欠損するが，「コ」字状であった可能性もある。下面に2つのピン状の突起がついている。268は菱形で，中央に径1.5㎝の鋲がある。飾り金具と思われる。270は細長い金具で，湾曲している。先端は細くなり，尖っている。断面は平坦ではなく，中央が高くなって稜線をもつ。内面端部と中央部につく2つのピン状のもので，何かに固定していたものと思われる。



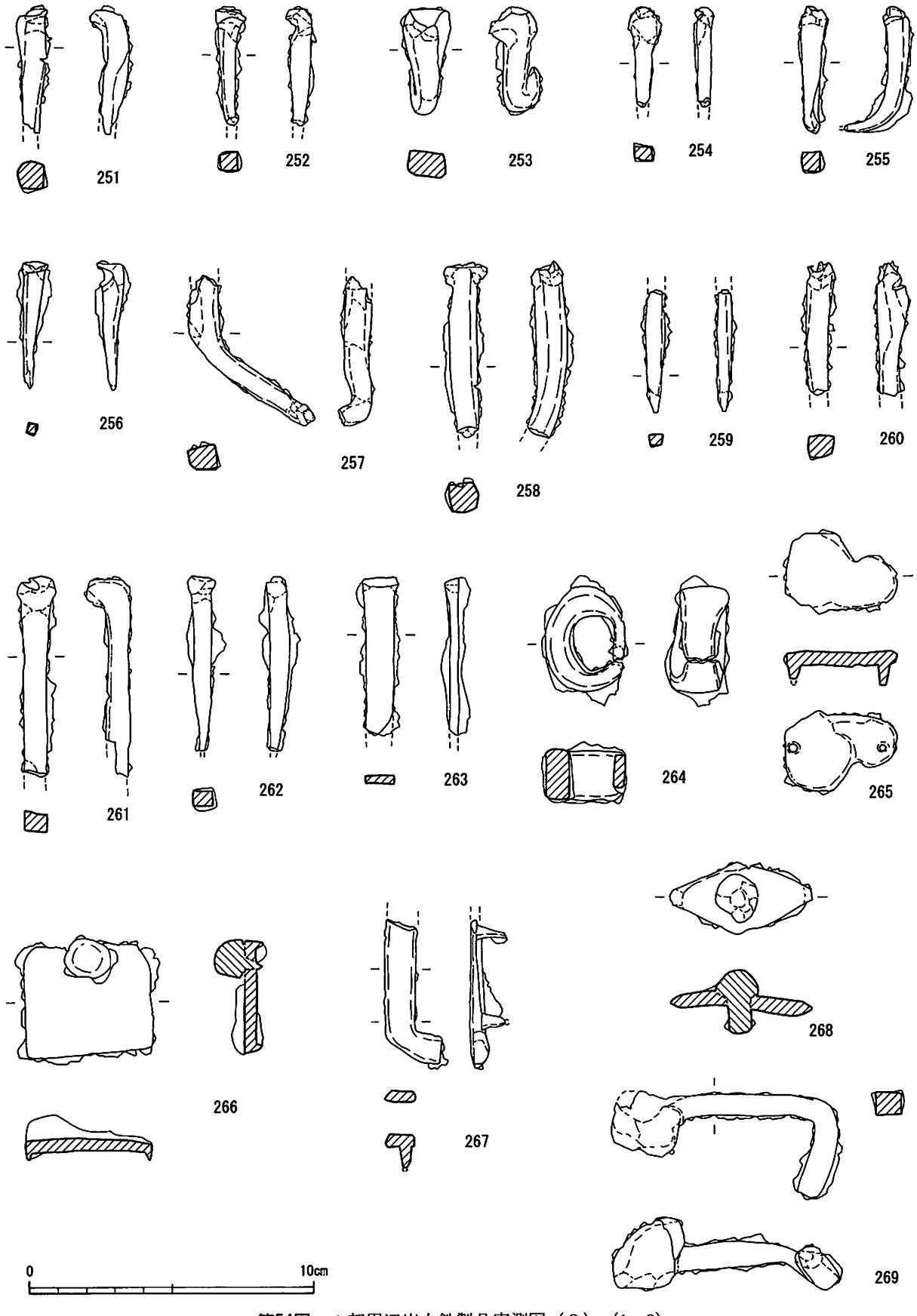
第51図　1郭周辺出土石製品実測図（1：2，204～209は1：3）



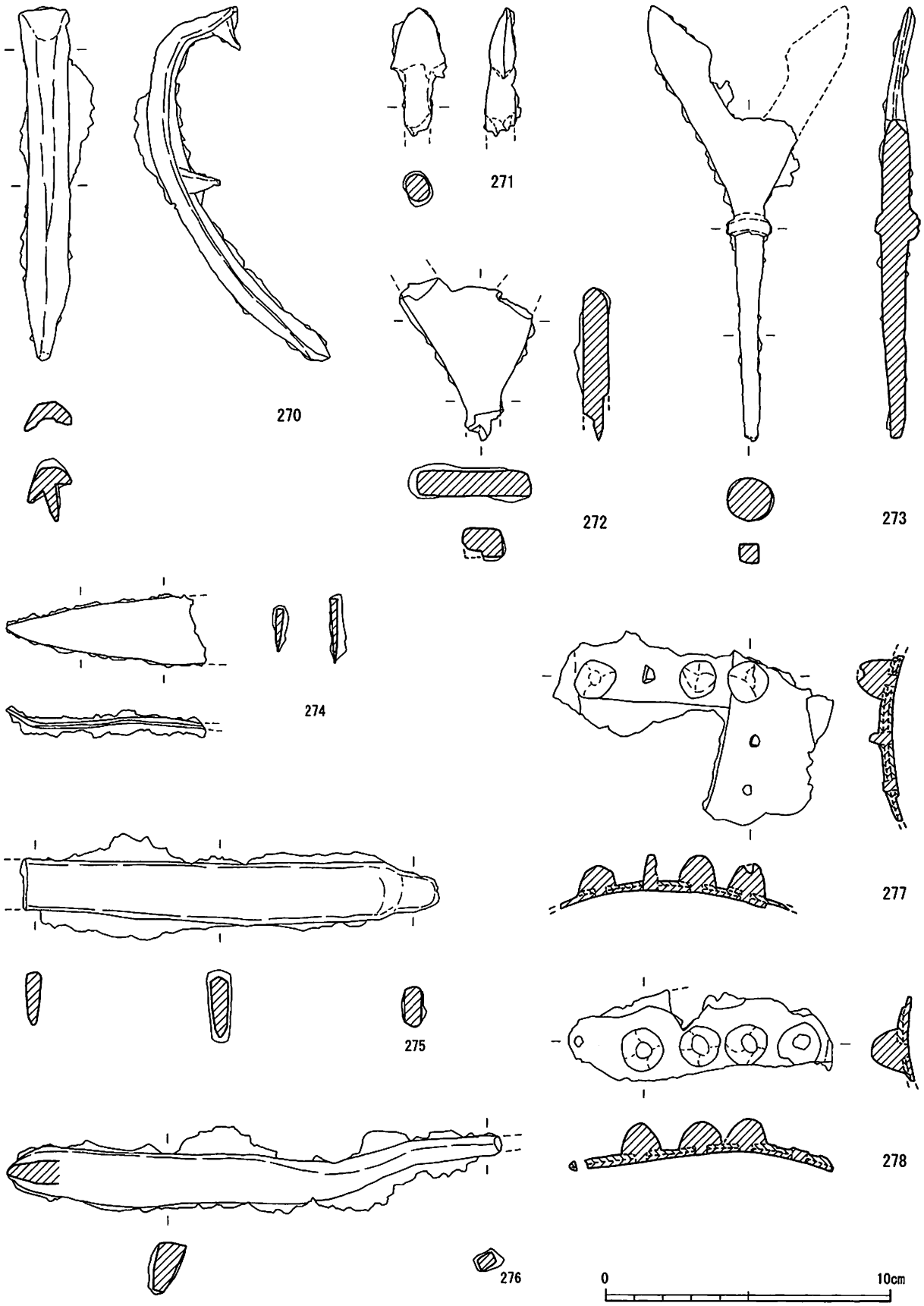
第52図　1郭周辺出土鉄製品実測図（1）（1：2）



第53図　1郭周辺出土鉄製品実測図（2）（1：2）



第54図　1郭周辺出土鉄製品実測図（3）（1：2）



第55図　1郭周辺出土鉄製品実測図（4）（1：2）

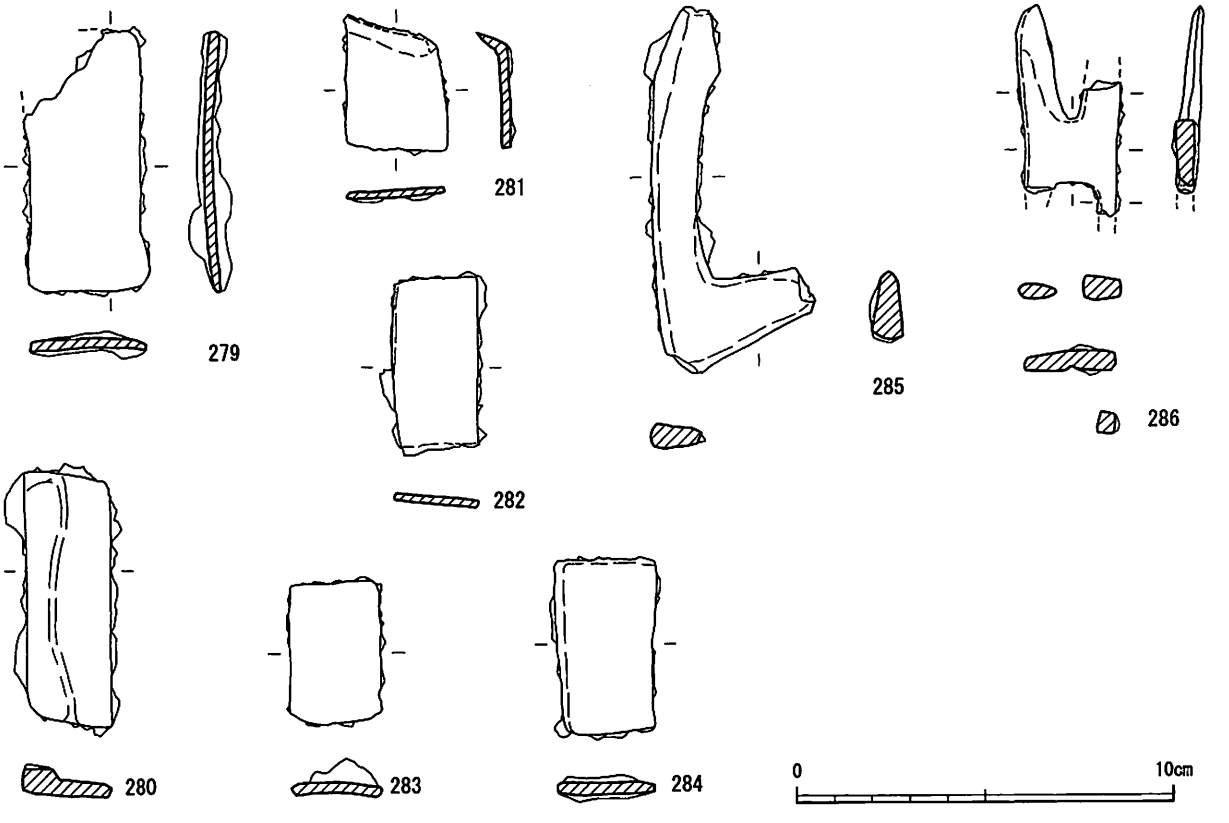
269 は鉄製掛金である。ＳＸ２から出土した。戸の掛金部分で，先端を曲げて「Ｌ」字状にしている。もう一方の端部は錆のため明確でないが，丸くなっていることから環状になっていると思われる。

271～273 は鉄鏃である。271 は G13 区，272 は G12 区ピット，273 はトレンチ１から出土した。271 は定角の鉄鏃である。三角形で，断面はラグビーボール状の身部に断面円形の茎部がつく。272・273 は雁股の鉄鏃である。272 は身部のみで，先端部を欠損する。273 は身部の片方の先端部を欠損するが，茎部も残っている。身部の断面は方形で，先端に向かうに従って次第に細く鋭くなる。身部と茎部の境は断面円形で，茎部の断面は方形である。

274・275 は刀状鉄製品である。274 はトレンチ１，275 はＳＫ36 から出土した。274 は厚さ３㎜と薄い刃部の一部で，切先に向かって次第に細くして尖らせている。275 は切先を欠損するが，刃部と茎部残存する。茎部は断面方形で，長さは 1.6 ㎝と短い。刃部は厚さ 0.6 ㎝で，刃は次第に細くなるが，あまり鋭く尖っていない。

277・278 は鉄製兜片である。277 はトレンチ３，278 はＳＸ１から出土した。いずれも厚さ 0.15 ㎝の鉄板を重ね合わせ，径 1.3～1.5 ㎝，高さ 0.7～1.0 ㎝の鋲を 0.2～0.5 ㎝間隔で使用して，繋ぎ合せたものである。277・278 は同一個体の可能性がある。

279～284 は板状鉄製品である。279 はＳＢ２ピット，281 はＳＫ５，282 はＳＫ35，280・283 はＳＫ36，284 はＦ９区から出土した。長さによって 3.6～3.8 ㎝，4.6～4.7 ㎝，6.7～6.9 ㎝の



第56図　１郭周辺出土鉄製品実測図（５）（1：2）

３つに分類できる。幅は 2.25～3.3 cmである。錆のため孔が確認されたものはないが，大きさからみて小札の未成品の可能性がある。

276・285・286 は用途不明鉄製品である。276・285 はＳＫ36，286 はＳＫ37 から出土した。276 は柄の部分と刃の部分に分かれ，柄の部分は細くなっている、刃部は先端と刃先がやや細くなっているが，刃物のように鋭く尖ってはいない。285 は「Ｌ」字状の鉄製品である。286 は「Ｈ」字状の鉄製品である。先端の２股に別れた部分の内側を尖らせて鋭くしていることから，鉄鏃など武器の可能性も考えられる。

（５）銅製品他（第 57 図，図版 41）

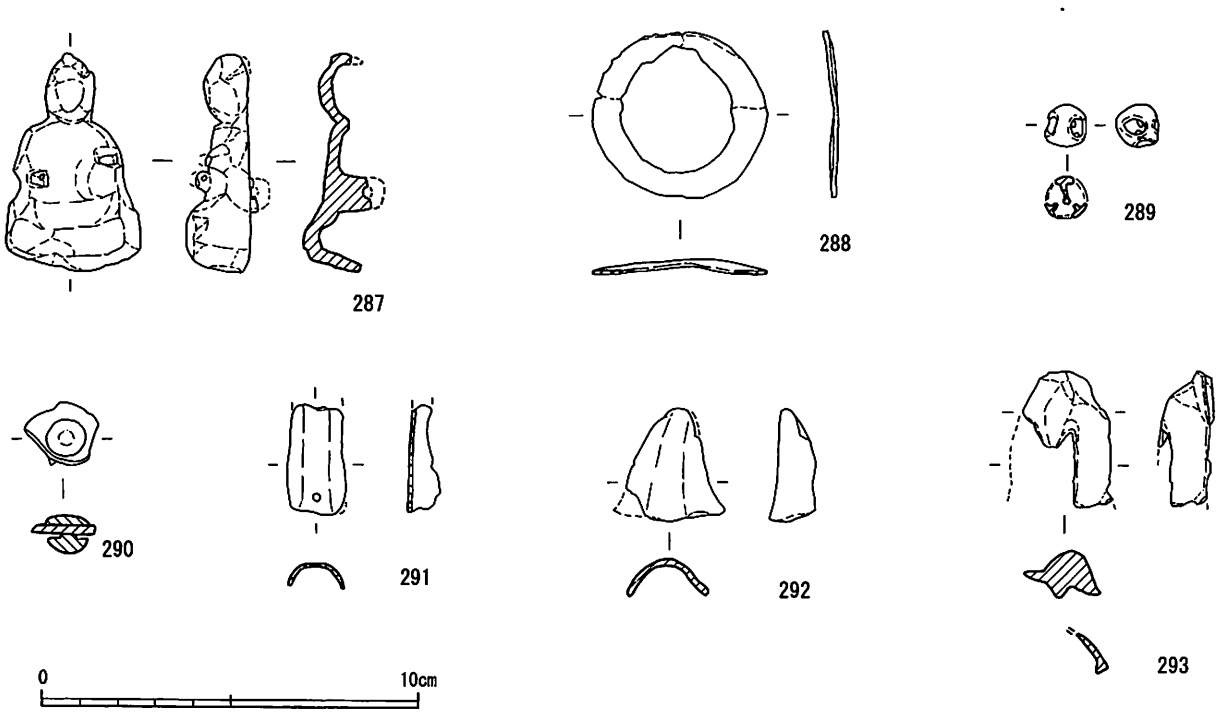
287 は銅製懸仏である。ＳＫ35 から出土した。坐像であるが，顔など不明瞭な部分が残る。両手先端を欠損しており，右手には径 0.15 cmの小孔がある。裏面に突起が有り，取付け用の径 0.3 cmの小孔があくが，突起の先端部は欠損している。

288 は銅製リングである。ＳＸ１から出土した。長径 4.6 cm×短径 4.4 cmの円形の薄板に，径 3.0 cmの穴をあけたものである。本来は平坦であったと思われるが，現在では折れ目がつき，形が歪んでいる。用途は不明である。

289 は鉛玉である。Ｆ12 区から出土した。径 1.1 cmの球形であるが，きれいな球形ではなく，表面に径約 0.5 cmの孔が４つあり，内面に径約 0.2 cmの孔が４つある。鉄砲玉と考えられる。

290 は銅製金具である。Ｇ12 区から出土した。厚さ 0.2 cmの板を加工したものであるが，周囲はすべて欠損している。径 1.0～1.2 cmの鋲がついている。

291～293 は用途不明銅製品である。291 はＧ12 区ピット，292 はＳＢ１ピット，293 はＨ11 区



第57図　１郭周辺出土銅製品他実測図（1：2）

ピットから出土した。291 は方形の薄板を曲げて，断面を「U」字状にしている。端部中央付近に径 0.15 cmの小孔がある。292 は三角形に近い薄板を曲げて加工したもので，断面は「U」字と「V」字の中間である。293 の平面形は砲弾型で，高さは 1.3 cmであるが，先端部が厚く，後部は薄くなっている。

（7）古銭（第 58・59 図，第 2 表，図版 42）

古銭は破片を含め，49 枚出土した[1]（第 2 表）。いずれも背面には文字や文様がないため，本書では背面の写真や拓影は掲載していない。49 枚のうち，寛永通寶が 2 枚，破片のため銘不明のものが 4 枚である。古銭が出土した代表的な遺構として，ＳＸ２（24 枚），ＳＫ35（６枚）をあげることができる。

294～299 は開元通寶（初鋳 621 年）である。294 はＳＢ２，295・296 はＳＸ２，297 はＳＫ35，298 はＦ11 区ピット，299 はトレンチ３から出土した。

300 は景徳元寶（初鋳 1004 年）である。ＳＸ２から出土した。

301・302 は祥符通寶（初鋳 1009 年）である。301 はＳＸ２，302 は１郭東側切岸から出土した。

303 は天聖元寶（初鋳 1023 年）である。書体は篆書で，ＳＸ２から出土した。

304 は景祐元寶（初鋳 1034 年）である。書体は篆書で，１郭北東側切岸のＪ９区から出土した。

305～311 は皇宋通寶（初鋳 1038 年）である。書体は 305・311 が篆書，306～310 は真書である。305 はＳＸ１，306～311 はＳＸ２から出土した。

312 は嘉祐元寶（初鋳 1056 年）である。書体は篆書で，ＳＸ２から出土した。

313 は嘉祐通寶（初鋳 1056 年）である。書体は真書で，ＳＫ35 から出土した。

314～317 は熙寧元寶（初鋳 1068 年）で，書体は 314～316 が真書，317 が篆書である。

第２表　１郭周辺遺構別出土古銭一覧表

遺構名	古銭銘	初鋳年	枚数	遺物番号	合計枚数
ＳＢ２	開元通寶	621年	1	294	2
	政和通寶	1111年	1	332	
ＳＸ１	皇宋通寶	1038年	1	305	2
	大観通寶	1107年	1	330	
ＳＸ２	開元通寶	621年	2	295, 296	24
	景徳元寶	1004年	1	300	
	祥符通寶	1009年	1	301	
	天聖元寶	1023年	1	303	
	皇宋通寶	1038年	6	306～311	
	嘉祐元寶	1056年	1	312	
	熙寧元寶	1068年	1	314	
	元豊通寶	1078年	2	319, 321	
	元祐通寶	1086年	2	325, 326	
	紹聖元寶	1094年	1	327	
	元符通寶	1098年	2	328, 329	
	大観通寶	1107年	1	331	
	政和通寶	1111年	1	333	
	宣和通寶	1119年	1	334	
	淳熙元寶	1174年	1	336	
ＳＸ11	宣和通寶	1119年	1	335	2
	不明（破片）	－	1	－	
ＳＫ13	不明（破片）	－	1	－	1
ＳＫ35	開元通寶	621年	1	297	6
	嘉祐通寶	1056年	1	313	
	熙寧元寶	1068年	2	315, 317	
	元豊通寶	1078年	1	322	
	元○通寶		1	324	
ＳＫ36	不明（破片）	－	1	－	1
ＳＫ37	不明（破片）	－	1	－	1
Ｆ９区	元豊通寶	1078年	1	320	1
Ｆ11区ピット	開元通寶	621年	1	298	1
Ｇ８区	熙寧元寶？	1068年	1	318	1
Ｇ９区	熙寧元寶	1068年	1	316	1
Ｇ12区	元豊通寶	1078年	1	323	2
	寛永通寶	－	1	338	
Ｉ12区	寛永通寶	－	1	337	1
トレンチ３	開元通寶	621年	1	299	1
１郭東側切岸	祥符通寶	1009年	1	302	1
Ｊ９区（切岸）	景祐元寶	1034年	1	304	1
合計					49

（なお，本書では銭貨の名称をできるかぎり銭文のとおり記載するよう心がけたたが，一部略字を使用したものもある。）

314はＳＸ２，315・317はＳＫ35，316はＧ９から出土した。また，318は銭文が不鮮明であるが，熙寧元寶と思われる。書体は篆書で，Ｇ８区から出土した。

319～323は元豊通寶（初鋳1078年）である。書体は319・320が行書，321～323が篆書である。319・321がＳＸ２，322がＳＫ35，320がＦ９区，323がＧ９区から出土した。また，324は欠損のため，「元○通寶」としか判読できないが，元豊通寶の可能性が高いと思われる。書体は篆書である。

325・326は元祐通寶（初鋳1086年）である。書体は325が行書で，326が篆書である。いずれもＳＸ２から出土した。

327は紹聖元寶（初鋳1094年）である。ＳＸ２から出土した。

328・329は元符通寶（初鋳1098年）である。書体は328が行書で，329が篆書である。いずれもＳＸ２から出土した。

330・331は大観通宝（初鋳1107年）である。330はＳＸ１，331はＳＸ２から出土した。

332・333は政和通寶（初鋳1111年）である。書体は332が分楷，333が篆書である。332がＳＢ１，333がＳＸ２から出土した。

334・335は宣和通寶（初鋳1119年）である。書体は334が篆書，335が分楷である。334がＳＸ２，335がＳＸ11から出土した。

336は淳熙元寶（初鋳1174年）である。書体は真書で，ＳＸ２から出土した。

337・338は寛永通寶である。338は約１／２の残存で，「寛○○寶」としか判読できない。337がＩ12区，338がＧ12区から出土した。年代的に城に伴う遺物ではない。

各古銭の重量については第12表に記載しているが，破片については，ＳＸ11出土のものが1.15ｇ，ＳＫ13出土のものが1.98ｇ，ＳＫ36出土のものが1.20ｇ，ＳＫ37出土のものが0.38ｇである。なお，ＳＫ35からも破片0.13ｇが出土しているが，322または324の一部と思われる。

その他，出土点数には含めていないが，トレンチ３の明褐色土から大正11年発行の桐１銭青銅貨が出土している。

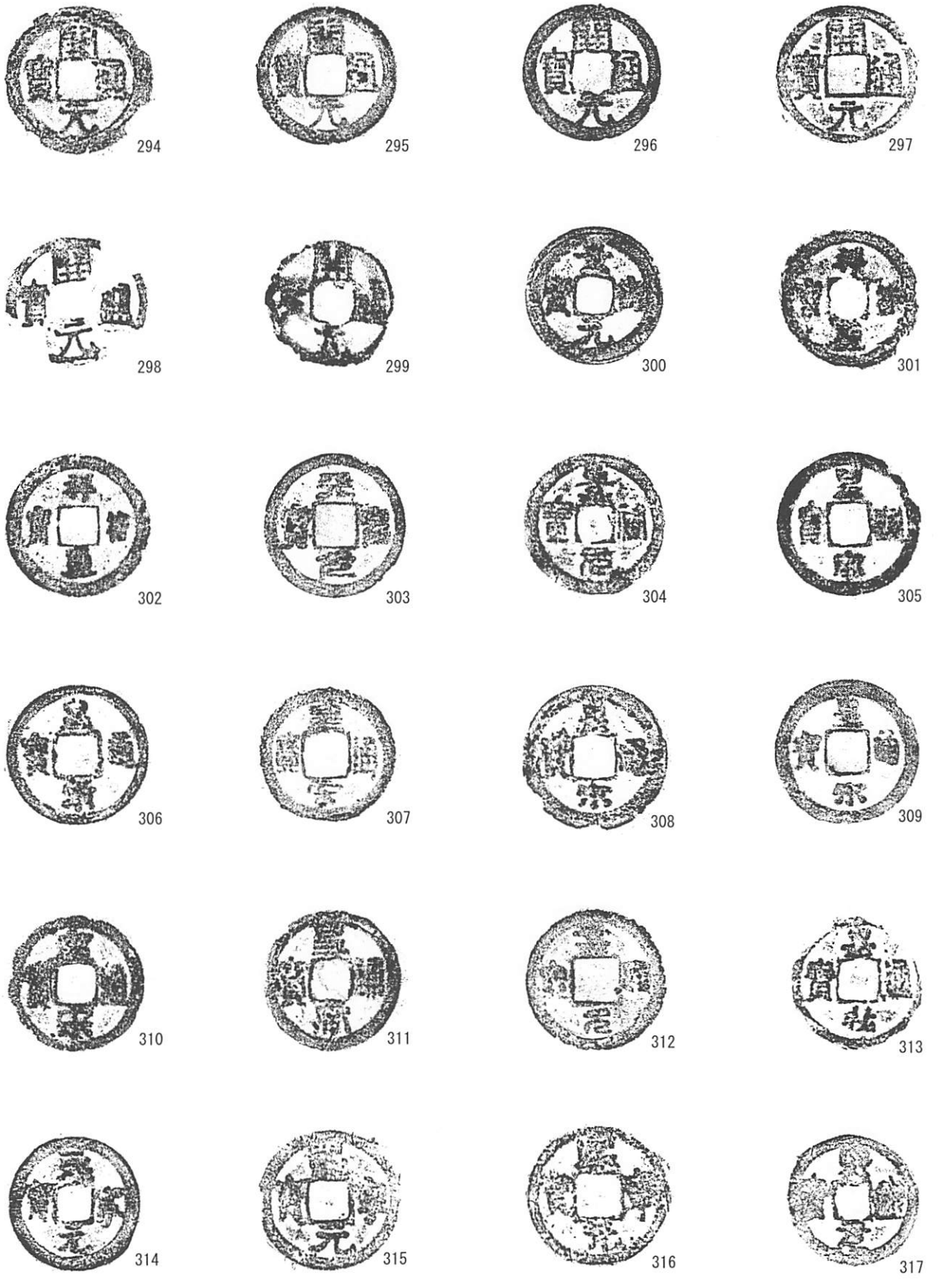
（８）その他の遺物（図版41）

図示はしていないが，339・340はＳＫ36から出土した漆紙である。淡黒褐色の漆が付着している。339は5.8㎝×6.3㎝，340は6.4㎝×6.4㎝の大きさである。ともに２回以上折り畳まれ，墨書の痕跡は認められない。

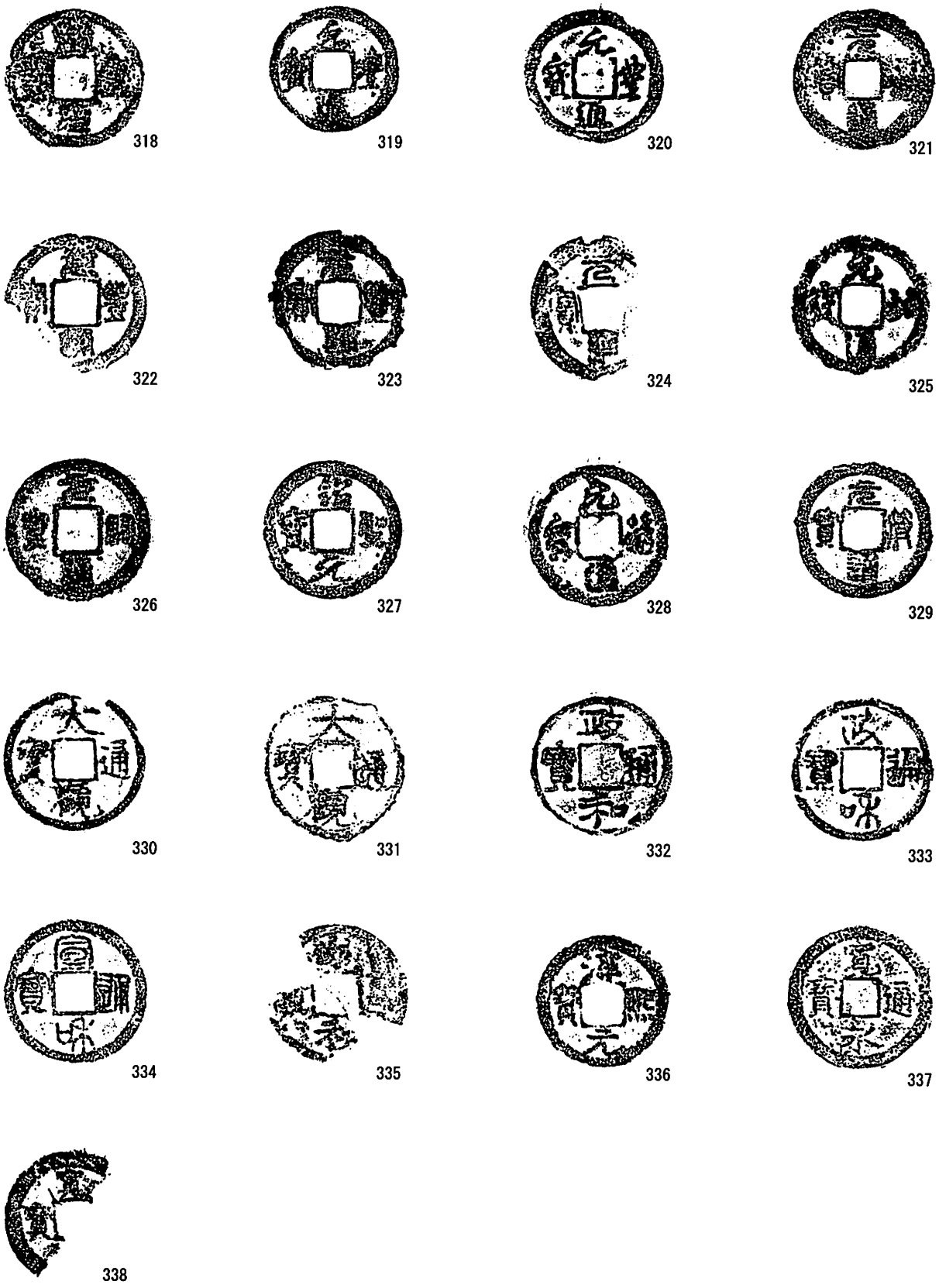
１区東側切岸Ｊ９区から巻貝の殻が出土した。アカニシと推定される。また，ＳＸ１からも貝殻の小片が出土している。

註

（１）古銭の分類については，次の文献を参考にした。
兵庫埋蔵銭調査会『中世の出土銭－出土銭の調査と分類－』　1994年



第58図　１郭周辺出土古銭拓影（１）（原寸）



第59図　1郭周辺出土古銭拓影（2）（原寸）

第３表　１郭周辺出土土器類観察表１

遺物番号	出土遺構	種別・器種	計測値	調　整	色　調	胎　土	備　考
1	ＳＢ２	青白磁・梅瓶（底部）	復元底径：10.5cm	外面：高台畳付ーヘラケズリ，その他ー回転ナデ 内面：不明（釉がかかる）	釉：淡青白色 素地：灰白色	精緻	内外面とも体部に施釉。内面に粘土付着。96と同一個体の可能性
2	ＳＢ４	土師質土器・皿	口径：6.0～6.2cm 器高：1.5cm	外面：体部ー回転ナデ，底部ー回転糸切り？ 内面：回転ナデ	外面：淡黄褐色 内面：淡黄灰色	砂粒を多く含む	
3	ＳＢ４	土師質土器・杯	復元口径：11.8cm 器高：3.0cm	外面：体部ー回転ナデ，底部ーヘラ切り 内面：体部ー回転ナデ，底部ーナデ	外面：淡黄白色 内面：淡黄褐色	細砂を含む	外面底部に板目圧痕有
4	ＳＢ４	土師質土器・椀	復元口径：9.7cm 器高：3.05cm	外面：体部ー回転ナデ，底部ー未調整 内面：見込中央ーナデ，その他ー回転ナデ	淡黄褐色	砂粒を含む	口縁端部にスス付着
5	ＳＸ１	土師質土器・皿	口径：6.2cm 現存器高：1.25cm	外面：体部ー回転ナデ，底部ー不明 内面：体部ー回転ナデ	淡赤褐色	細砂を含む	
6	ＳＸ１	土師質土器・皿	口径：6.0～6.4cm 器高：1.05cm	外面：体部：回転ナデ，底部ー不明 内面：体部ー回転ナデ，底部ーナデ	淡橙褐色	砂粒を含む	
7	ＳＸ１	土師質土器・皿	推定口径：5.5cm 推定器高：0.95cm	外面：体部ー回転ナデ，底部ー回転糸切り 内面：底部中央ー雑なナデ，その他ー回転ナデ	淡赤褐色	砂粒を含む	円形板を雑に加工したもの 非実用品
8	ＳＸ１	土師質土器・皿	口径：6.1cm 器高：0.75cm	外面：体部ー回転ナデ，底部ー回転糸切り 内面：底部中央ーナデ，その他ー回転ナデ	淡赤褐色	砂粒を含む	内面底部は中央が高くなる 非実用品
9	ＳＸ１	土師質土器・皿	口径：6.7cm 器高：1.65cm	外面：体部ー回転ナデ，底部ー回転ヘラ切り 内面：底部中央ーナデ，その他ー回転ナデ	橙褐色	砂粒を含む	
10	ＳＸ１	土師質土器・皿	底径：6.4cm	外面：体部ー回転ナデ，底部ー回転糸切り 内面：不明	外面：淡橙褐色 内面：橙褐色	細砂を含む	
11	ＳＸ１	土師質土器・杯	口径：8.8cm 器高：2.3cm	外面：体部ー回転ナデ，底部ー不明 内面：底部中央ーナデ，その他ー回転ナデ	外面：淡黄白色 内面：黄白色	砂粒を含む	外面底部を若干窪ませる
12	ＳＸ１	土師質土器・椀	口径：8.0～8.3cm 器高：1.95cm	外面：体部ー回転ナデ？，底部ー未調整 内面：底部中央ーナデ，その他ー回転ナデ？	淡黄白色	細砂を含む	焼成不良 全体的に摩滅が著しい
13	ＳＸ１	土師質土器・椀	口径：8.1～8.3cm 器高：2.25cm	外面：不明 内面：底部中央ーナデ，その他ー回転ナデ	淡黄白色	細砂を含む	焼成不良 外面は摩滅が著しい
14	ＳＸ１	土師質土器・椀	口径：8.3～8.6cm 器径：2.4cm	外面：体部ー回転ナデ，底部ー未調整 内面：底部中央ーナデ，その他ー回転ナデ	外面：淡黄褐色 内面：淡黄灰色	砂粒を含む	
15	ＳＸ１	土師質土器・椀	口径：8.2～8.7cm 器高：2.35cm	外面：不明 内面：底部中央ーナデ，その他ー回転ナデ	淡黄白色	細砂を含む	形が歪む
16	ＳＸ１	土師質土器・椀	口径：9.0～9.4cm 器高：2.4cm	外面：体部ー回転ナデ，底部ー未調整 内面：底部中央ーナデ，その他ー回転ナデ	外面：橙褐色 内面：淡黄褐色	砂粒を含む	外面底部を若干窪ませる 口縁部にスス付着
17	ＳＸ１	土師質土器・椀	復元口径：9.2cm	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	外面：淡黄灰色 内面：淡橙褐色	細砂を含む	内外面とも黒斑有 口縁部にスス付着
18	ＳＸ１	土師質土器・椀	復元口径：8.8cm 器高：2.4cm	外面：体部ー回転ナデ，底部ー未調整 内面：底部中央ーナデ，その他ー回転ナデ	外面：淡黄白色 内面：淡黄灰色	細砂を含む	内面は丁寧な仕上げ
19	ＳＸ１	土師質土器・椀	口径：8.4cm 器高：2.2cm	外面：体部ー回転ナデ？，底部ー未調整 内面：底部中央ーナデ，その他ー回転ナデ	外面：淡黄白色 内面：淡黄灰色	細砂を含む	焼成やや不良
20	ＳＸ１	土師質土器・椀	口径：9.0cm 器高：2.25cm	外面：不明 内面：底部中央ーナデ，その他ー回転ナデ	外面：淡黄白色 内面：淡黄灰色	細砂・水晶を含む	焼成不良
21	ＳＸ１	土師質土器・椀	口径：8.7～9.3cm 器高：2.2cm	外面：体部ー回転ナデ，底部ー未調整 内面：底部中央ーナデ，その他ー回転ナデ	淡灰褐色	細砂を含む	外面底部を窪ませる
22	ＳＸ１	土師質土器・椀	復元口径：8.8cm 器高：2.2cm	外面：体部ー回転ナデ，底部ー未調整 内面：底部中央ーナデ，その他ー回転ナデ	淡橙褐色	砂粒を含む	外面底部を若干窪ませる 外面に黒斑有
23	ＳＸ１	土師質土器・椀	復元口径：9.7cm 器高：2.15cm	外面：体部ー回転ナデ，底部ー未調整 内面：底部中央ーナデ，その他ー回転ナデ	淡黄灰色	砂粒を含む	外面底部を窪ませる
24	ＳＸ１	土師質土器・椀	復元口径：8.9cm 器高：2.5cm	外面：口縁部ー回転ナデ，その他ー不明 内面：底部中央ーナデ，その他ー回転ナデ	外面：淡橙褐色 内面：橙褐色	細砂を含む	
25	ＳＸ１	土師質土器・椀	口径：8.3cm 器高：2.4cm	外面：不明 内面：底部中央ーナデ，その他ー回転ナデ	淡黄灰色	砂粒を含む	焼成やや不良 外面は摩滅が著しい
26	ＳＸ１	土師質土器・椀	口径：8.5～8.9cm 器高：2.4cm	外面：体部ー回転ナデ，底部ー未調整 内面：底部中央ーナデ，その他ー回転ナデ	淡黄灰色	砂粒を含む	
27	ＳＸ１	土師質土器・椀	口径：8.7cm 器高：2.4cm	外面：体部ー回転ナデ，底部ー未調整 内面：底部中央ーナデ，その他ー回転ナデ	外面：淡黄灰色 内面：淡黄白色	細砂を含む	内面は丁寧な仕上げ 外面底部を若干窪ませる
28	ＳＸ１	土師質土器・椀	口径：9.1～9.3cm 器高：2.7cm	外面：不明 内面：底部中央ーナデ？，その他ー回転ナデ？	外面：淡黄白色 内面：淡黄灰色	細砂を含む	外面底部を若干窪ませる 全体的に摩滅が著しい
29	ＳＸ１	土師質土器・椀	口径：8.9～9.2cm 器高：2.7cm	外面：不明 内面：体部ー回転ナデ，底部ーナデ	淡黄白色	細砂を多く含む	外面底部を窪ませる 外面は摩滅が著しい
30	ＳＸ１	土師質土器・椀	口径：8.6～8.9cm 器高：2.9cm	外面：体部ー回転ナデ，底部ー未調整 内面：体部ー回転ナデ，底部ーナデ	淡黄白色	細砂を多く含む	外面底部を若干窪ませる
31	ＳＸ１	土師質土器・椀	口径：9.6cm 器高：3.5cm	外面：体部ー回転ナデ，底部ー未調整 内面：体部ー回転ナデ，底部ーナデ	淡黄白色	細砂を含む	外面底部を若干窪ませる 内面に黒斑有。外面は摩滅する
32	ＳＸ１	土師質土器・椀	口径：9.45～9.7cm 器高：3.4cm	外面：体部ー回転ナデ？，底部ー未調整 内面：体部ー回転ナデ，底部ーナデ	外面：淡黄白色 内面：淡黄灰色	粗砂を含む	外面底部を窪ませる
33	ＳＸ１	瓦質土器・鍋		外面：体部ー不明，その他ーヨコナデ 内面：ヨコナデ	淡黒灰色。外面一部は灰褐色	砂粒を含む	外面に突帯を貼り付ける
34	ＳＸ１	常滑焼・甕		外面：ヨコナデ？ 内面：ユビオサエ後ナデ	外面：淡褐色 内面：淡茶色	砂粒を含む	肩部に銭のスタンプ文 内面及び断面にスス付着
35	ＳＸ２	土師質土器・皿	復元口径：6.2cm 底径：1.25cm	外面：体部ー回転ナデ，底部ー回転ヘラ切り 内面：底部中央ーナデ？，その他ー回転ナデ	暗褐色	細砂を含む	内面に炭化物付着
36	ＳＸ２	土師質土器・杯	復元口径：13.0cm 器高：3.0cm	外面：体部ー回転ナデ，底部ー不明 内面：回転ナデ	外面：淡赤褐色 内面：淡黒褐色	細砂を多く含む	
37	ＳＸ２	瓦質土器・鍋		外面：体部ー指頭圧痕，口縁部ーヨコナデ 内面：不明	外面：淡黒褐色 内面：灰褐色	砂粒を含む	外面に突帯を貼り付ける 外面休部に若干スス付着
38	ＳＸ２	瓦質土器・鍋		外面：体部ー指頭圧痕，口縁部ーヨコナデ 内面：体部ー不明，口縁部ーヨコナデ	外面：淡灰色 内面：淡黒灰色	砂粒を含む	外面に突帯を貼り付ける 断面は淡黒褐色

第４表　１郭周辺出土土器類観察表２

遺物番号	出土遺構	種別・器種	計測値	調　整	色　調	胎　土	備　考
39	ＳＸ２	瓦質土器・鍋		外面：口縁部－ヨコナデ，体部－指頭圧痕 内面：口縁部－ヨコナデ，体部－不定方向のナデ	外面：暗灰褐色 内面：淡黒褐色	砂粒を含む	外面に突帯を貼り付ける 外面体部にスス付着
40	ＳＸ２	瓦質土器・鍋		外面：口縁部－ヨコナデ，体部－指頭圧痕 内面：口縁部－ヨコナデ，体部－ヨコナデ中心	外面：暗灰色 内面：淡灰色	砂粒を含む	外面に突帯を貼り付ける 外面体部に若干スス付着
41	ＳＸ２	東播系須恵器・擂鉢		外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	灰色	細砂を含む	擂り目無
42	ＳＸ２	東播系須恵器・擂鉢		外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	淡青灰色	粗砂を含む	片口が付く。片口付近に粘土付着 擂り目無
43	ＳＸ２	亀山焼・甕（胴部）		外面：格子目タタキ 内面：ナデ？	外面：暗灰色 内面：灰色	細砂を含む	格子の単位は３㎜×３㎜
44	ＳＸ２	亀山焼・甕（胴部）		外面：格子目タタキ 内面：ヨコナデを中心としたナデ	外面：淡灰色 内面：灰色	細砂を含む	格子の単位は３㎜×３㎜
45	ＳＸ２	備前焼・甕（胴部下半）		外面：胴部－縦の雑なナデ・指頭圧痕，底部－ナデ 内面：ヨコナデ，斜め方向のナデも混じる	淡紫褐色	粗粒を含む	内面に粘土接合痕が残る
46	ＳＸ２	備前焼・甕（口縁部）		外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	外面：淡紫褐色 内面：淡褐色	砂粒を含む	口縁部及び体部上面に自然釉
47	ＳＸ２	青磁・鍔皿		外面：不明（釉がかかる） 内面：不明（釉がかかる）	釉：淡緑色 素地：淡灰白色	精緻	口縁端部を除き施釉。外面に蓮弁と思われる文様。二次焼成
48	ＳＸ２	青磁・碗		外面：不明（釉がかかる） 内面：不明（釉がかかる）	釉：淡緑色 素地：淡灰白色	精緻	全面に釉がかかる 内面に印花文
49	ＳＸ13	土師器・椀	復元口径：16.9cm 推定器高：6.35cm	外面：体部－回転ナデ，底部－不明 内面－不明	外面：淡赤褐色 内面：暗黄灰色	砂粒を含む	高台がつく大型の椀 内外面とも黒斑有。内面摩滅
50	ＳＸ13	瓦質土器・擂鉢		外面：体部－不明，口縁部－回転ナデ 内面：細かいハケ目	外面：淡灰白色 内面：淡灰褐色	砂粒を含む	焼成やや不良 内面に６条？の擂り目
51	ＳＸ13	白磁・碗		外面：不明（釉がかかる） 内面：不明（釉がかかる）	釉：淡青灰色 素地：淡灰白色	精緻	口縁端部を除き釉がかかる 器壁が薄い。皿の可能性有
52	ＳＫ２	土師質土器・皿	底径：6.8cm	外面：体部－回転ナデ，底部－回転糸切り 内面：体部－回転ナデ，底部－不明	灰白色	砂粒を含む	焼成不良
53	ＳＫ５	土師質土器・椀	復元口径：9.8cm 現存器高：3.8cm	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	黄灰色。内面一部と断面は淡黒褐色	細砂を含む	全体的に丁寧な作り 外面底部を潜ませた椀と思われる
54	ＳＫ５	瓦質土器・鍋		外面：ヨコナデ 内面：口縁部－ヨコナデ，体部－不明	淡灰褐色，断面は淡黒褐色	砂粒を含む	外面に突帯を貼り付ける 焼成やや不良
55	ＳＫ５	瓦質土器・鍋		外面：体部－指頭圧痕，口縁部－ヨコナデ 内面：不明	灰褐色	砂粒を含む	外面に突帯を貼り付ける
56	ＳＫ５	東播系須恵器・甕（胴部）		外面：平行タタキ 内面：上部－ハケ目，下部－指頭圧痕	外面：淡黒灰色 内面：淡灰色	粗砂を含む	壺の可能性有
57	ＳＫ11	備前焼・擂鉢		外面：体部－回転ナデ，底部－雑なナデ 内面：体部下部－ヨコナデ，体部上部－自然釉	外面：淡黒灰色 内面：淡褐色	砂粒を含む	内面に擂り目。ＳＫ８出土破片と接合。137と同一個体の可能性有
58	ＳＫ11	亀山焼・甕（胴部）		外面：格子目タタキ 内面：ナデ？	外面：灰色 内面：暗灰色	細砂を含む	格子の単位は３㎜×３㎜
59	ＳＫ11	備前焼・甕（底部～胴部）	復元底径：34.8cm	外面：胴部－ハケ目，ナデ，底部－ケズリ後ナデ 内面：胴部－粗いハケ目，底部－ナデ？	淡紫褐色 内面一部黄灰色	粗砂を含む	ＳＫ８から同一個体と思われる破片が出土
60	ＳＫ12	土師質土器・椀	口径：9.0cm 器高：2.55cm	外面：不明 内面：底部中央－ナデ，その他－回転ナデ	淡黄褐色	砂粒を多く含む	外面底底を若干潜ませる 焼成やや不良。外面摩滅
61	ＳＫ14	備前焼・甕（底部）	復元底径：44.3cm 現存器高：12.5cm	外面：胴部－ヘラケズリ，ナデ，底部－ナデ 内面：胴部－ナデ，底部－回転ナデ	淡灰色	粗粒を含む	
62	ＳＫ21	陶器・擂鉢		外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	赤褐色	細砂・小礫を含む	備前焼系。内面に９条単位の擂り目。17世紀以降
63	ＳＫ25	備前焼・擂鉢		外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	暗褐色 断面は暗赤褐色	砂粒を含む	内面に縦方向の擂り目。焼成ややを不良。１11区出土破片と接合
64	ＳＫ27	土師質土器・椀	口径：9.2cm 器高：2.45cm	外面：体部－回転ナデ，底部－未調整 内面：見込中央－ナデ，その他－回転ナデ	淡赤褐色	砂粒を含む	
65	ＳＫ27	備前焼・甕（口縁部）		外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	外面：淡紫褐色 内面：淡褐色	砂粒を含む	
66	ＳＫ28	備前焼・甕（口縁部～肩部）	復元口径：26.1cm	外面：回転ナデ 内面：胴部－ヨコナデ，頸部・口縁部－回転ナデ	暗灰色。口縁部は淡赤灰色	砂粒を含む	外面及び口縁端部に淡緑褐色の自然釉。H11区出土破片と接合
67	ＳＫ30	土師質土器・椀	復元口径：10.3cm 器高：2.25cm	外面：体部－回転ナデ，底部－未調整 内面：見込中央－ナデ，その他－回転ナデ	外面：淡黄褐色 内面：暗黄灰色	細砂を含む	底部を若干潜ませる 内面底部から体部にかけ黒斑有
68	ＳＫ30	白磁・壺？		外面：不明（釉がかかる） 内面：回転ナデ	釉：淡青灰色 素地：淡灰色	精緻	外面全体に釉がかかる。内面は釉がかからない部分がある
69	ＳＫ33	土師質土器・皿	口径：5.6cm 器高：1.05cm	外面：不明 内面：不明	淡赤褐色	細砂を含む	焼成やや不良。摩滅が著しい 全体的に雑な作り
70	ＳＫ33	土師質土器・杯	口径：10.0～10.6cm 器高：3.3cm	外面：体部－回転ナデ，底部－回転ヘラ切り後ナデ 内面：体部－回転ナデ，底部－不明	外面：淡橙褐色 内面：橙褐色	砂粒を含む	形が歪んでいる
71	ＳＫ33	土師質土器・杯	口径：10.7cm 器高：3.35cm	外面：体部－回転ナデ，底部－回転ヘラ切り 内面：体部－回転ナデ，底部－ナデ	橙褐色	砂粒を含む	
72	ＳＫ33	土師質土器・椀	口径：8.7～9.2cm 器高：2.8cm	外面：不明 内面：不明	外面：淡黄灰色 内面：淡灰色	粗砂を多く含む	全体的に摩滅している 焼成不良
73	ＳＫ35	陶器・小壺		外面：回転ナデ 内面：ヨコナデ	外面：淡黄褐色 内面：淡褐色	細砂を含む	備前焼？。外面に３・４条の沈線。胎土は淡灰色で，外面に自然釉
74	ＳＫ36	土師質土器・皿	口径：6.0cm 器高：1.15cm	外面：体部－回転ナデ，底部－回転ヘラ切り 内面：底部中央－ナデ，その他－回転ナデ	橙褐色	砂粒・小礫を含む	外面底部に板目痕有
75	ＳＫ36	土師質土器・皿	口径：5.9cm 器高：1.2cm	外面：体部－回転ナデ，底部－回転ヘラ切り？ 内面：不明	橙褐色	粗砂を含む	焼成やや不良 内面は摩滅している
76	ＳＫ36	土師質土器・皿	口径：6.2cm 器高：0.9cm	外面：不明 内面：不明	外面：淡黄褐色 内面：橙褐色	砂粒を含む	焼成やや不良 全体的に摩滅が著しい

第５表　１郭周辺出土土器類観察表３

遺物番号	出土遺構	種別・器種	計測値	調　整	色　調	胎　土	備　考
77	ＳＫ36	土師質土器・皿	口径：6.5cm 器高：1.2cm	外面：体部－回転ナデ，底部－回転ヘラ切り 内面：底部中央－ナデ，その他－回転ナデ	淡橙褐色	砂粒を含む	外面底部に板目痕がかすかに残る 全体的に丁寧な作り
78	ＳＫ36	土師質土器・皿	底径：5.3～5.8cm	外面：体部－回転ナデ，底部－回転ヘラ切り？ 内面：底部中央－ナデ，その他－回転ナデ	橙褐色	砂粒を含む	
79	ＳＫ36	瓦質土器・鍋		外面：口縁部－ヨコナデ，体部－不明 内面：口縁部－ヨコナデ，体部－不明	灰白色	細砂を含む	外面に突帯を貼り付ける
80	ＳＫ36	亀山焼・甕 （口縁部・胴部）	復元口径：34.5cm	外面：格子目タタキ 内面：胴部－ナデ？，口縁部－ヨコナデ	淡黒灰色。胴部内面は淡灰白色	砂粒を含む	焼成やや不良 格子の単位は４㎜×４㎜
81	ＳＫ36	備前焼・甕 （口縁部～肩部）		外面：口縁部－回転ナデ，肩部－不明 内面：口縁部－回転ナデ，肩部－ヨコナデ	外面：暗灰色 内面：灰色	粗砂を含む	ＳＫ37・39，Ｆ９区出土の破片と接合
82	ＳＫ37	白磁・水注？	高台径：4.8cm	外面：高台－ヘラによる削り出し，体部－釉かかる 内面：不明（釉がかかる）	釉：透明 素地：灰白色	精緻	高台及び外面底部は露胎 底を粘土で接ぐ
83	ＳＫ37	瓦質土器・火鉢		外面：不明 内面：不明	淡黄灰色	粒粒を含む	外面に２条の突帯と連続する円形文を貼り付ける。焼成不良
84	ＳＫ37	東播系須恵器・擂鉢		外面：体部－不明，口縁部－回転ナデ 内面：体部－指頭圧痕状窪み，口縁部－回転ナデ	外面：淡黄灰色 内面：淡灰褐色	砂粒を含む	擂り目無
85	ＳＫ38	瓦質土器・鍋		外面：体部－不明，口縁部－ヨコナデ 内面：体部－不明，口縁部－ヨコナデ	暗灰褐色	砂粒を多く含む	外面に突帯を貼り付ける 焼成やや不良
86	ＳＫ39	土師質土器・皿	口径：6.3cm 器高：1.75cm	外面：体部－回転ナデ，底部－回転糸切り？ 内面：不明	外面：淡橙褐色 内面：淡灰白色	砂粒を含む	内面は摩滅している
87	ＳＫ39	土師質土器・皿	推定口径：7.0cm 推定器高：1.9cm	外面：体部－不明，底部－回転ヘラ切り？ 内面－不明	淡橙褐色	砂粒・小礫を含む	内面は摩滅している
88	ＳＫ39	土師質土器・杯	復元口径：10.8cm 器高：3.55cm	外面：不明 内面：不明	淡黒褐色	砂粒を含む	焼成やや不良 全体的に摩滅している
89	ＳＫ39	土師質土器・杯	復元口径：10.2cm 器高：3.1cm	外面：体部－回転ナデ，底部－回転糸切り 内面：見込－底部，体部－回転ナデ	淡黄褐色 一部灰白色	砂粒を含む	焼成不良
90	ＳＫ39	土師質土器・鉢	推定口径：13.5cm	外面：体部－一部指頭圧痕，口縁部－ヨコナデ 内面：暗褐色の漆が全面に付着しているため不明	淡赤褐色	細砂を含む	口縁部片と体部片に接点がないため，器高不明
91	ＳＫ39	瓦質土器・鍋		外面：体部－不明，口縁部－ヨコナデ 内面：体部－不明，口縁部－ヨコナデ	暗茶灰色 断面は黒色	砂粒を含む	外面に突帯を貼り付ける
92	ＳＫ39	瓦質土器・擂鉢		外面：体部－不明，口縁部－ヨコナデ 内面：体部－不明，口縁部－ヨコナデ	外面：暗灰褐色 内面：暗黄灰色	砂粒を含む	内面に擂り目有。６条単位？ 焼成やや不良
93	ＳＫ39	古瀬戸・卸皿	器高：2.8cm	外面：体部－回転ナデ，底部－回転糸切り 内面：体部－回転ナデ	淡黄灰色	砂粒を含む	底部一部を除き淡緑黄色の釉かかる。内面底部の格子状の卸目
94	ＳＫ39	亀山焼・甕 （胴部）		外面：格子目タタキ 内面：不明	外面：灰白色 内面：淡灰白色	砂粒を含む	焼成やや不良 格子の単位は４㎜×４㎜
95	ＳＫ40	土師質土器・鍋	口径：32.2～33.5cm 器高：14.9cm	外面：体部－ハケ目，底部－不明，口縁部－回転ナ 内面：体部－ハケ目，底部－不明，口縁部－回転ナ	外面：暗橙褐色 内面：橙褐色	砂粒を含む	ＳＫ36出土破片と接合。外面にススス付着。底部に黒斑有。形が歪む
96	ＳＤ11	青白磁・梅瓶		外面：不明（釉がかかる） 内面：横方向のケズリ。釉無	釉：淡青灰色 素地：灰白色	精緻	外面に渦巻文を陰刻 １と同一個体の可能性
97	ＳＤ12	古瀬戸・入子	復元口径：7.6cm 器高：2.5cm	外面：体部－回転ナデ，底部－回転糸切り 内面：回転ナデ	淡灰色	細砂を含む	口縁部に輪花。内面底部に使用時の内面底部に使用時の擦痕
98	Ｈ11区ピット	土師質土器・皿	口径：6.1cm 器高：1.35cm	外面：体部－回転ナデ，底部－回転ヘラ切り後ナデ 内面：底部中央－ナデ，その他－回転ナデ	外面：橙褐色 内面：淡赤褐色	緻密	全体的に丁寧な作り 底部外面に板目痕有
99	Ｈ９区ピット	土師質土器・皿	復元口径：6.4cm 器高：1.2cm	外面：体部－回転ナデ，底部－不明 内面：底部中央－ナデ，その他－回転ナデ	外面：淡橙褐色 内面：淡赤褐色	緻密	
100	Ｈ９区ピット	土師質土器・椀	口径：8.2cm 器高：2.3cm	外面：体部－回転ナデ，底部－未調整 内面：底部中央－ナデ？，その他－回転ナデ	外面：黄白色 内面：淡黄白色	細砂を含む	底部外面をわずかに窪ませる
101	Ｇ12区ピット	土師質土器・椀	口径：8.4～9.1cm 器高：2.5cm	外面：体部－回転ナデ，底部－未調整 内面：底部中央－ナデ，その他－回転ナデ	外面：黄白色 内面：淡黄白色	細砂を含む	形が歪んでいる
102	Ｆ10区ピット	瓦質土器・鍋	復元口径：29.0cm	外面：体部上部－指頭圧痕，口縁部－ヨコナデ 内面：体部－不明，口縁部－ヨコナデ	外面：赤褐色 内面：淡赤褐色	砂粒を含む	外面に突帯を貼り付ける 焼成不良。二次焼成
103	トレンチ１	弥生土器・甕		外面：胴部－ハケ目，頸部－ヨコナデ， 内面：胴部－ヘラケズリ，頸部・口縁部－ヨコナデ	淡赤褐色	砂粒を含む	外面口縁部に３条の凹線 104と同一個体の可能性有
104	トレンチ１	弥生土器・甕 （底部）	底径：3.5cm	外面：胴部－ヘラミガキ，底部－不明 内面：指頭圧痕	淡赤褐色	砂粒を含む	外面に黒斑有 103と同一個体の可能性有
105	トレンチ１	土師質土器・椀	復元口径：9.5cm 器高：2.9cm	外面：体部－回転ナデ，底部－未調整 内面：回転ナデ	外面：橙褐色 内面：淡褐色	砂粒を含む	内外面に漆状のものが付着 底部を窪ませる
106	トレンチ１	柱状高台土師器	台部径：6.5cm	外面：体部－回転ナデ，底部－回転糸切り後ナデ 内面：体部－回転ナデ，底部－ナデ	外面：淡黄褐色 内面：淡橙褐色	細砂を含む	
107	トレンチ２	土師質土器・皿	口径：6.9cm 器高：1.3cm	外面：体部－回転ナデ，底部－回転ヘラ切り？ 内面：底部中央－ナデ，その他－回転ナデ	橙褐色	粗砂を含む	
108	トレンチ２	土師質土器・皿	口径：6.7cm 器高：1.0cm	外面：体部－回転ナデ？，底部－回転ヘラ切り 内面：底部中央－ナデ？，体部－回転ナデ？	暗橙褐色	砂粒を含む	外面底部に板目痕有 焼成やや不良
109	トレンチ２	瓦質土器・擂鉢	復元口径：29.7cm	外面：体部－指頭圧痕，口縁部－ヨコナデ 内面：ヨコナデ	外面：灰白色 内面：淡灰褐色	砂粒を含む	内面に４条単位の擂り目
110	トレンチ２	瓦質土器・火鉢 （胴部）		外面：不明，菊花文のスタンプ 内面：ヨコナデ？	淡橙褐色。外面一部暗橙褐色	細砂を含む	焼成やや不良
111	トレンチ２	東播系須恵器・擂鉢		外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	外面：淡灰白色 内面：淡灰色	砂粒を含む	焼成不良
112	トレンチ２	古瀬戸・卸皿		外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	淡灰色 釉は淡黄緑色	緻密	外面体部の一部を除き釉がかかる
113	トレンチ２	備前焼・甕 （口縁部）		外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	外面：淡紫褐色 内面：褐色	粗粒を含む	
114	トレンチ２	白磁・四耳壺 （肩部）		外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	釉：透明 素地：淡灰色	精緻	全面に釉がかかる 肩部に耳を貼り付ける

第６表　１郭周辺出土土器類観察表４

遺物番号	出土遺構	種別・器種	計測値	調　整	色　調	胎　土	備　考
115	トレンチ３	土師質土器・皿	口径：5.2cm 器高：0.8cm	外面：体部－回転ナデ，底部－回転糸切り？ 内面：回転ナデ	外面：橙褐色 内面：淡橙褐色	細砂を含む	浅く非実用的な皿
116	トレンチ３	土師質土器・皿	口径：6.0cm 器高：1.1cm	外面：体部－回転ナデ，底部－回転ヘラ切り？ 内面：底部中央－ナデ，その他－回転ナデ	淡橙褐色	砂粒を含む	外面底部に板目痕有
117	トレンチ３	土師質土器・皿	推定口径：5.8cm 推定器高：1.4cm	外面：体部－回転ナデ，底部－ヘラ切り 内面：底部中央－ナデ，その他－回転ナデ	淡赤褐色	砂粒を含む	
118	トレンチ３	土師質土器・皿	口径：6.5cm 現存器高：1.35cm	外面：体部－回転ナデ？，底部－回転ヘラ切り 内面：底部中央－不明，その他－回転ナデ？	淡橙褐色	細砂を含む	外面底部に板目痕有 焼成やや不良
119	トレンチ３	土師質土器・皿	口径：7.0cm 器高：1.4cm	外面：体部－回転ナデ，底部－回転ヘラ切り後ナデ 内面：底部中央－ナデ，その他－回転ナデ	暗橙褐色	砂粒を多く含む	外面底部に板目痕有
120	トレンチ３	土師質土器・杯	復元底径：7.2cm	外面：体部－回転ナデ，底部－回転ヘラ切り 内面：回転ナデ	外面：淡橙褐色 内面：淡赤褐色	砂粒を含む	
121	トレンチ３	土師質土器・杯	口径：10.4～11.0cm 器高：3.5cm	外面：体部－回転ナデ，底部－回転ヘラ切り 内面：底部－ナデ，体部－回転ナデ	淡赤褐色	砂粒・小礫を含む	
122	トレンチ３	土師質土器・椀	口径：9.3cm 器高：2.4cm	外面：体部－回転ナデ，底部－未調整 内面：底部中央－ナデ，その他－回転ナデ	外面：黄白色 内面：淡黄灰色	砂粒を含む	
123	トレンチ３	土師質土器・椀	復元口径：10.0cm 器高：2.6cm	外面：体部－回転ナデ？，底部－未調整 内面：底部中央－ナデ，その他－回転ナデ	淡黄褐色。内面一部淡橙褐色	砂粒を含む	全体的に摩滅が著しい
124	トレンチ３	土師質土器・椀	口径：9.6～9.8cm 器高：3.3cm	外面：体部－回転ナデ，底部－未調整 内面：底部中央－ナデ，その他－回転ナデ	外面：淡灰白色 内面：淡黄白色	精良	
125	トレンチ３	土師質土器・椀	復元口径：10.7cm	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	淡橙褐色	砂粒を含む	外面に黒斑有
126	トレンチ３	土師質土器・椀	口径：8.7～9.1cm 器高：2.95cm	外面：体部－回転ナデ，底部－未調整 内面：底部中央－ナデ，その他－回転ナデ	外面：淡黄灰色 内面：淡黄白色	砂粒を含む	形がかなり歪む 外面底部を窪ませる
127	トレンチ３	土師質土器・椀	口径：9.3cm 器径：3.0cm	外面：体部－回転ナデ？，底部－未調整 内面：見込中央－ナデ，その他－回転ナデ？	暗黄灰色 一部淡黄褐色	細砂を含む	外面底部を窪ませる 内面にスス付着
128	トレンチ３	東播系須恵器・擂鉢	復元口径：22.8cm	外面：回転ナデ，体部に指頭圧痕が残る 内面：体部－不明，口縁部－回転ナデ	淡赤褐色，口縁部は淡灰色	砂粒を含む	焼成不良。二次焼成 擂り目無
129	トレンチ３	備前焼・甕（口縁部）		外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	外面：淡黒褐色 内面：淡灰褐色	砂粒を含む	
130	トレンチ３	青磁・碗	復元口径：17.2cm	外面：不明（釉がかかる） 内面：不明（釉がかかる）	釉：淡緑色 素地：淡灰色	精緻	全体に釉がかかる 外面体部に蓮弁文。貫入有
131	トレンチ３	青磁・碗		外面：不明（釉がかかる） 内面：不明（釉がかかる）	釉：淡緑色 素地：淡灰白色	精緻	全体に厚さ0.5mmの釉がかかる。 内外面に文様。外面はラマ式蓮弁文
132	F11区	土師質土器・皿	口径：5.5cm 器高：0.95cm	外面：体部－回転ナデ，底部－切り離し後ナデか？ 内面：底部中央－ナデ，その他－回転ナデ	淡赤褐色	細砂を含む	全体的に丁寧な作り
133	G８区	土師質土器・椀	口径：9.4cm 推定器高：3.1cm	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	外面：淡橙褐色 内面：橙褐色	砂粒を含む	
134	G８区	瓦質土器・鍋		外面：体部－指頭圧痕，口縁部－回転ナデ 内面：体部－不明，口縁部－回転ナデ	外面：黄灰色 内面：暗褐色	砂粒を含む	外面に突帯を貼り付ける
135	G９区	土師質土器・鍋		外面：体部－ハケ目？，口縁部－回転ナデ 内面：体部－不明，口縁部－回転ナデ	淡黄褐色	細砂を含む	
136	G９区	瓦質土器・擂鉢		外面：体部－不明，口縁部－ヨコナデ 内面：体部－不明，口縁部－ヨコナデ	外面：淡黄灰色 内面：淡黒褐色	砂粒を含む	焼成やや不良 内面に擂り目無
137	G９区	備前焼・擂鉢		外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	外面：淡黒灰色 内面：淡褐色	砂粒を含む	口縁部・内面に淡黄褐色の自然釉 内面に11条単位の擂り目
138	ＳＸ２	瓦質土器・鍋		外面：体部－指頭圧痕，口縁部－ヨコナデ 内面：体部－不明，口縁部－ヨコナデ	外面：黄灰色 内面：淡黄灰色	砂粒を含む	外面に突帯を貼り付ける 外面にスス付着。焼成やや不良
139	G11区	土師質土器・皿	口径：6.7～6.9cm 器高：1.4cm	外面：体部－回転ナデ，底部－回転糸切り 内面：底部－ナデ，体部－回転ナデ	淡黄灰色	細砂を含む	
140	G11区	土師質土器・皿	口径：7.2cm 器高：1.7cm	外面：体部－回転ナデ，底部－回転ヘラ切り 内面：底部中央－ナデ，その他－回転ナデ	淡黄白色	砂粒を含む	
141	H11区	土師質土器・皿	復元口径：12.9cm 器高：2.05cm	外面：体部－回転ナデ，底部－回転ヘラ切り 内面：体部－回転ナデ，底部－ナデ	淡橙褐色	細砂を含む	外面底部に板目痕有
142	G12区	柱状高台土師器	口径：10.2cm 器高：4.7cm	外面：体部－回転ナデ，底部－回転糸切り後ナデ？ 内面：体部－回転ナデ，底部－ナデ	外面：淡黄灰色 内面：淡黄褐色	細砂を含む	底径6.4cmの台がつく 丁寧な作り
143	G12区	瓦質土器・鍋		外面：体部－不明，口縁部－ヨコナデ 内面：体部－不明，口縁部－ヨコナデ	外面：淡黒褐色 内面：茶灰色	砂粒を多く含む	外面に突帯を貼り付ける 外面体部にスス付着。焼成不良
144	G12区	瓦質土器・鍋		外面：体部－指頭圧痕，口縁部－ヨコナデ 内面：体部－ハケ目，口縁部－ヨコナデ	外面：暗灰褐色 内面：淡灰褐色	砂粒を含む	外面に突帯を貼り付ける 外面体部にスス付着
145	G12区	瓦質土器・鍋		外面：体部－指頭圧痕，口縁部－ヨコナデ 内面：体部－ハケ目，口縁部－ヨコナデ	外面：暗灰褐色 内面：淡灰褐色	砂粒を含む	外面に突帯を貼り付ける。外面体部のスス付着。口径33.7cm程度？
146	G12区	土師質土器・鍋		外面：体部－不明，口縁部－ヨコナデ 内面：ヨコナデ	外面：淡茶灰色 内面：淡茶褐色	細砂を含む	外面にスス付着 外面に突帯がつかない
147	G12区	瓦質土器・擂鉢		外面：体部－不明，口縁部－回転ナデ 内面：体部－不明，口縁部－回転ナデ	淡灰褐色	細砂を多く含む	内面に擂り目有 焼成やや不良
148	G13区	土師質土器・椀	口径：9.1cm 器高：2.85cm	外面：口縁部－回転ナデ，その他－不明 内面：見込－ナデ，体部－回転ナデ	淡黄灰色	砂粒を含む	
149	G13区	瓦質土器・擂鉢	復元口径：36.0cm 現存器高：10.1cm	外面：体部－指頭圧痕，口縁部－ヨコナデ 内面：体部－不明，口縁部－ヨコナデ	淡黒灰色 一部灰褐色	砂粒を含む	内面に擂り目有。焼成不良 G14区出土破片と接合
150	H11区	瓦質土器・擂鉢		外面：体部－不明，口縁部－ヨコナデ 内面：体部－不明，口縁部－ヨコナデ	外面：灰褐色 内面：淡灰褐色	砂粒を多く含む	内面に擂り目有 焼成やや不良
151	H11区	常滑焼・甕（口縁部）		外面：不明（自然釉がかかる） 内面：ヨコナデ	釉：緑褐色 内面：黒褐色	砂粒を含む	外面に緑褐色の釉がかかる 断面は暗灰褐色
152	H12区	白磁・四耳壺（体部）		外面：回転ナデ，透明釉がかかる 内面：回転ナデ，淡青灰色釉がかかる	釉：透明 素地：淡灰白色	精緻	全面に釉がかかる 内面に粘土付着

第７表　１郭周辺出土土器類観察表５

遺物番号	出土遺構	種別・器種	計測値	調　整	色　調	胎　土	備　考
153	H13区	弥生土器・甕		外面：胴部－不明，頸部－ヨコナデ 内面：胴部－ヘラケズリ？，口縁部－ヨコナデ	外面：淡赤褐色 内面：淡黄褐色	砂粒を含む	口縁部に１条の浅い凹線
154	H13区	弥生土器・甕	復元口径：12.9cm	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	淡赤褐色	砂粒を含む	口縁部に１条の浅い凹線
155	H13区	弥生土器・甕	復元口径：14.2cm	外面：ヨコナデ 内面：胴部－ヘラケズリ，頸部・口縁部－ヨコナデ	淡赤褐色	砂粒・小礫を含む	口縁部に１条の浅い凹線
156	H13区	弥生土器・甕	復元口径：14.7cm	外面：胴部－不明，頸部－ヨコナデ 内面：胴部－ヘラケズリ？，口縁部－ヨコナデ	外面：淡黄褐色 内面：淡赤褐色	砂粒を含む	口縁部に３条の浅い凹線
157	H13区	弥生土器・甕	復元口径：15.9cm	外面：体部－不明，頸部－ヨコナデ 内面：胴部－ヘラケズリ，頸部・口縁部－ヨコナデ	外面：淡黄褐色 内面：淡橙褐色	砂粒を含む	口縁部に２条の浅い凹線 胴部が大きく張る
158	H13区	弥生土器・甕（底部）	底径：3.7cm	外面：不明 内面：ヘラケズリ？	外面：赤褐色 内面：淡赤褐色	砂粒を含む	外面にスス付着？
159	H13区	弥生土器・甕（底部）	復元底径：5.9cm	外面：胴部－ヘラケズリ，底部－不明 内面：ヘラケズリ？	外面：淡黄褐色 内面：淡赤褐色	細砂を含む	外面に黒斑有
160	H13区	弥生土器・高杯（脚部）		外面：不明 内面：不明	外面：淡赤褐色 内面：黄褐色	粗砂を含む	脚端部に２条の浅い凹線 脚部に円孔有。焼成やや不良
161	H13区	弥生土器・鉢	復元口径：18.7cm	外面：体部－ヘラミガキ，頸部・口縁部－ヨコナデ 内面：ヨコナデ？	淡赤褐色。外面一部淡黄褐色	細砂を含む	口縁部に３条の浅い凹線
162	H13区	弥生土器・鉢	復元口径：17.5cm	外面：体部－ヘラミガキ，頸部・口縁部－ヨコナデ 内面－ヨコナデ？	淡赤褐色	砂粒を含む	口縁部に２条の浅い凹線
163	H13区	土師器・椀	推定口径：23.1cm 推定器高：7.05cm	外面：不明 内面：不明	外面：淡橙褐色 内面：暗茶灰色	砂粒を含む	大型の高台付碗。全体に摩滅が著しい。焼成やや不良
164	H10・11区	土師器・壺（口縁部）		外面：ヨコナデ？ 内面：ヨコナデ？	赤褐色。内面一部淡黒褐色	砂粒を含む	全体的に摩滅している
165	H10・11区	土師質土器・皿	口径：6.2cm 器径：1.3cm	外面：体部－回転ナデ，底部－回転ヘラ切り 内面：見込中央－ナデ，その他－回転ナデ	淡橙褐色	粗砂を多く含む	
166	H10・11区	土師質土器・椀	口径：9.8cm 器高：3.15cm	外面：体部－回転ナデ，底部－未調整 内面：体部－回転ナデ，底部－ナデ	外面：淡橙褐色 内面：暗灰褐色	砂粒を多く含む	
167	H10・11区	土師質土器・椀	復元口径：10.5cm 器高：2.8cm	外面：体部－回転ナデ，底部－未調整 内面：底部中央－ナデ，その他－丁寧なナデ	淡黄白色	細砂を含む	
168	H10・11区	東播系須恵器・擂鉢		外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	外面：淡灰色 内面：暗灰褐色	砂粒を含む	口縁部は暗灰褐色 擂り目無
169	H10・11区	東播系須恵器・擂鉢		外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	灰色。口縁部は淡黒褐色	砂粒を含む	擂り目無
170	H10・11区	亀山焼・甕（胴部）		外面：格子目のタタキ 内面：ナデ	灰色 外面一部暗灰色	細砂を含む	外面数か所に淡黄褐色の付着物有 格子の単位は３㎜×４㎜
171	I 12区	土師質土器・鍋		外面：体部－不明，口縁部－ヨコナデ 内面：体部－不明，口縁部－ヨコナデ	外面：黄褐色 内面：淡黄褐色	砂粒を含む	外面体部にスス付着 断面は淡黒褐色
172	１郭	土師質土器・椀	復元口径：9.6cm	外面：不明 内面：不明	外面：黄灰色 内面：淡黄灰色	砂粒を含む	全体に摩滅が著しい 焼成不良
173	１郭	東播系須恵器・擂鉢		外面：回転ナデ 内面：体部－ナデ，口縁部－回転ナデ	淡灰色	細砂を含む	擂り目無 焼成不良
174	１郭	白磁・皿？	復元口径：8.8cm 器高：2.8cm	外面：体部－回転ナデ，底部－回転ヘラ切り 内面：不明（釉がかかる）	釉：透明 素地：白色	精緻	口縁端部・外面底部除き釉かかる
175	東切岸H14区	青磁・碗		外面：不明（釉がかかる） 内面：不明（釉がかかる）	釉：暗緑色 素地：淡灰白色	精緻	外面に蓮弁文 全体に釉がかかる
176	東切岸H14区	白磁・皿		外面：不明（釉がかかる） 内面：不明（釉がかかる）	釉：透明 素地：淡青灰色	精緻	全体に釉がかかる
177	東切岸Ｊ９区	土師質土器・椀（貼付高台）	復元口径：12.0cm 器高：3.25cm	外面：不明 内面：不明	淡赤褐色	砂粒を多く含む	径5.0cmの高台を貼り付ける 焼成不良。全体的に摩滅
178	東切岸Ｊ10区	陶器・天目茶碗		外面：不明（釉がかかる） 内面：不明（釉がかかる）	釉：黒褐色 素地：淡茶灰色	緻密	全体に釉がかかる 中国産と推定される
179	Ｊ10・11区	土師質土器・杯	復元底径：7.4cm	外面：体部－回転ナデ，底部－回転ヘラ切り 内面：底部中央－不明，その他－回転ナデ	淡橙褐色	砂粒を多く含む	外面底部に板目痕有 焼成やや不良
180	Ｊ10・11区	土師質土器・椀	復元口径：10.3cm 器高：3.05cm	外面：体部－不明，口縁部－回転ナデ 内面：体部－回転ナデ，底部－ナデ	外面：淡灰褐色 内面：灰褐色	砂粒を含む	
181	Ｊ10・11区	瓦質土器・鍋		外面：体部－指頭圧痕，口縁部－ヨコナデ 内面：体部－不明，口縁部－ヨコナデ	外面：淡黒褐色 内面：暗黄灰色	砂粒を多く含む	外面に突帯を貼り付ける
182	Ｊ10・11区	瓦質土器・鍋		外面：体部－指頭圧痕，口縁部－ヨコナデ 内面：体部－不明，口縁部－ヨコナデ	淡黒褐色	細砂を含む	外面に突帯を貼り付ける
183	Ｊ10・11区	瓦質土器・鍋		外面：体部－指頭圧痕，口縁部－ヨコナデ 内面：体部－不明，口縁部－ヨコナデ	外面：淡黒褐色 内面：淡黒灰色	砂粒を含む	外面に突帯を貼り付ける
184	Ｊ10・11区	東播系須恵器・擂鉢		外面：体部－不明，口縁部－回転ナデ 内面：体部－不明，口縁部－回転ナデ	淡灰色	砂粒を含む	擂り目無
185	Ｊ10・11区	東播系須恵器・擂鉢		外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	灰色 口縁は淡黒褐色	砂粒・小礫を含む	擂り目無
186	Ｊ10・11区	備前焼・擂鉢		外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	外面：淡黄灰色 内面：暗黄灰色	砂粒・小礫を含む	外面にヘラ状工具による傷。内面に６条単位の擂り目。焼成不良
187	Ｊ10・11区	備前焼・甕（口縁部）		外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	外面：淡紫灰色 内面：淡褐色	砂粒を含む	
188	堀切１	瓦質土器・鉢		外面：体部－不定方向ナデ，口縁部－ヨコナデ 内面：ヨコナデ	外面：灰褐色 内面：淡灰白色	砂粒を含む	断面は淡黒褐色
189	北尾根	瓦質土器・盤		外面：体部－指頭圧痕，口縁部－ヨコナデ 内面：体部－ハケ目，口縁部－ヨコナデ	灰褐色	粗砂を含む	
190	北西尾根	瓦質土器・鍋		外面：体部－指頭圧痕，口縁部－ヨコナデ 内面：体部－不明，口縁部－ヨコナデ	外面：淡黄灰色 内面：黄灰色	砂粒を含む 多く含む	外面に突帯を貼り付ける 外面体部にスス付着

第８表　１郭周辺出土土製品・瓦計測表　　（　）は現状値

遺物番号	出土遺構	種　別	長　さ	幅	厚　さ	重　量	備　考
191	ＳＢ２	土錘	2.9cm	1.1cm	—	3.25 g	淡橙灰色。ナデによる整形。中央に径１mmの孔
192	トレンチ３	土錘	2.5cm	1.25cm	—	3.52 g	淡橙褐色。ナデによる整形？。中央に径１mmの孔
193	G12区ピット	鞴の羽口	(5.1cm)	(4.5cm)	(2.15cm)	41.51 g	橙褐色。熱により黒変
194	G12区	鞴の羽口	(5.1cm)	(7.85cm)	(5.85cm)	150.95 g	淡茶灰色。熱により赤変
195	ＳK39	軒丸瓦	(8.5cm)	(7.2cm)	2.35cm	91.70 g	橙褐色。瓦当面は巴文。内面調整不明
196	ＳK30	丸瓦	(8.1cm)	(7.8cm)	1.8cm	149.08 g	淡黒褐色。凸格子目叩き。凹面布目痕
197	H12区	丸瓦	(5.95cm)	(7.5cm)	2.25cm	116.39 g	暗褐色。凸面調整不明。凹面布目痕
198	１郭東側切岸	丸瓦	(8.5cm)	(7.25cm)	1.5cm	104.31 g	暗茶灰色。凸面調整不明。凹面布目痕

第９表　１郭周辺出土石製品計測表　　（　）は現状値

遺物番号	出土遺構	種　別	長　さ	幅	厚　さ	重　量	備　考
199	トレンチ１	サイコロ	1.5cm	1.5cm	1.5cm	6.34 g	石英？
200	トレンチ１	不明	2.5cm	2.4cm	1.9cm	14.32 g	花崗岩？。径0.9cm，深さ0.4cmの孔
201	ＳD12	碁石	1.65cm	1.5cm	0.5cm	1.71 g	石材不明
202	トレンチ３	碁石	1.5cm	1.35cm	0.5cm	1.96 g	石材不明
203	トレンチ３	碁石	1.55cm	1.4cm	0.3cm	1.01 g	石材不明
204	Ｊ９区	石鍋加工品	9.7cm	2.2cm	1.6cm	50.99 g	滑石。口縁部使用。外面にスス付着
205	Ｊ９区	石鍋	9.0cm	6.6cm	1.2cm	98.75 g	滑石。底部。外面にスス付着
206	ＳK39	石鍋加工品	8.2cm	3.45cm	1.0cm	43.33 g	滑石。体部を加工したもの
207	ＳK９	温石	10.5cm	(6.9cm)	1.7cm	236.69 g	滑石。石鍋体部加工。径0.9cmの孔
208	Ｇ９区	砥石	7.5cm	4.8cm	1.5cm	74.27 g	粘板岩？。４面を使用。
209	F12区ピット	砥石	5.4cm	4.0cm	3.4cm	93.27 g	粘板岩？。断面三角で，３面使用

第10表　1郭周辺出土金属製品計測表1　　（　）は現状値

遺物番号	出土遺構	種　別	長　さ	幅	厚　さ	重　量	備　考
210	ＳＸ１	鉄釘	—	0.5cm	0.6cm	4.81g	完形
211	ＳＸ１	鉄釘	(3.3cm)	0.65cm	0.65cm	(5.63g)	先端部欠損
212	ＳＸ１	鉄釘	(11.0cm)	1.0cm	1.0cm	(28.22g)	先端部わずかに欠損
213	ＳＸ２	鉄釘	(9.8cm)	2.0cm	1.1cm	(32.67g)	頭部及び先端部わずかに欠損
214	ＳＸ２	鉄釘	(5.0cm)	0.8cm	0.9cm	(9.65g)	先端部欠損
215	ＳＸ２	鉄釘	—	0.4cm	0.4cm	1.87g	完形。先端部が曲線的に曲がる
216	ＳＸ２	鉄釘	(3.0cm)	0.5cm	0.5cm	(2.18g)	先端部欠損
217	ＳＸ２	鉄釘	(3.7cm)	0.55cm	0.5cm	(3.07g)	先端部欠損
218	ＳＸ２	鉄釘	4.0cm	0.4cm	0.45cm	(1.40g)	頭部の一部わずかに欠損
219	ＳＸ２	鉄釘	5.8cm	0.65cm	0.6cm	5.66g	完形。先端部が少し曲がる
220	ＳＸ２	鉄釘	(5.8cm)	0.7cm	0.7cm	(7.05g)	先端部わずかに欠損
221	ＳＸ２	鉄釘	(5.9cm)	0.6cm	0.75cm	(9.69g)	先端部欠損
222	ＳＸ２	鉄釘	(5.75cm)	0.7cm	0.7cm	(7.55g)	先端部欠損。少し曲がる
223	ＳＸ２	鉄釘	(6.45cm)	0.65cm	0.6cm	(6.44g)	先端部欠損
224	ＳＸ２	鉄釘	(4.3cm)	0.9cm	0.7cm	(8.82g)	先端部欠損。少し曲がる
225	ＳＸ２	鉄釘	(6.2cm)	0.8cm	1.0cm	(14.57g)	先端部わずかに欠損。少し曲がる
226	ＳＸ２	鉄釘	(5.9cm)	1.0cm	0.8cm	(15.67g)	先端部欠損
227	ＳＸ２	鉄釘	(6.7cm)	1.0cm	0.7cm	(12.82g)	先端部欠損
228	ＳＸ２	鉄釘	(8.2cm)	1.2cm	0.7cm	(18.21g)	先端部欠損
229	ＳＸ２	鉄釘	—	0.9cm	0.7cm	(16.60g)	先端部欠損。直角に曲がる。
230	ＳＸ11	鉄釘	(2.9cm)	0.7cm	0.6cm	(4.65g)	先端部欠損
231	ＳＸ11	鉄釘	(5.9cm)	0.7cm	0.75cm	(10.18g)	頭部及び先端部欠損
232	ＳＸ11	鉄釘	(6.6cm)	0.75cm	0.8cm	(9.94g)	先端部欠損
233	ＳＸ11	鉄釘	—	0.9cm	1.0cm	(13.78g)	頭部表面剥離。曲線的に曲がる
234	ＳＸ11	鉄釘	(4.1cm)	0.9cm	0.9cm	(12.83g)	先端部欠損
235	ＳＸ11	鉄釘	(5.4cm)	1.1cm	1.0cm	(16.55g)	先端部欠損
236	ＳＸ13	鉄釘	(6.65cm)	0.6cm	0.5cm	(5.26g)	先端部わずかに欠損
237	ＳＫ５	鉄釘	—	0.6cm	0.7cm	4.90g	完形。直角に曲がる
238	ＳＫ30	鉄釘	(4.4cm)	0.8cm	0.65cm	(5.34g)	先端部欠損
239	ＳＫ33	鉄釘	(5.6cm)	1.0cm	0.7cm	(10.48g)	先端部欠損
240	ＳＫ35	鉄釘	—	0.6cm	0.6cm	4.96g	完形。直線的に曲がる
241	ＳＫ35	鉄釘	(4.1cm)	0.75cm	0.8cm	(7.40g)	先端部欠損
242	ＳＫ35	鉄釘	—	1.05cm	0.9cm	(17.26g)	ほぼ完形。直角に曲がる
243	ＳＫ36	鉄釘	(4.5cm)	0.6cm	0.75cm	(5.28g)	先端部欠損。少し曲がる
244	ＳＫ36	鉄釘	—	0.7cm	0.7cm	5.95g	完形。曲線的に曲がる。
245	ＳＫ36	鉄釘	—	0.65cm	0.6cm	7.46g	完形。直線的に曲がる。
246	ＳＫ36	鉄釘	(4.6cm)	0.75cm	0.6cm	(9.26g)	先端部欠損
247	ＳＫ36	鉄釘	(8.45cm)	0.9cm	0.85cm	(14.45g)	先端部欠損
248	ＳＫ36	鉄釘	—	0.7cm	0.9cm	(17.14g)	先端部欠損。直角に曲がる。
249	ＳＫ37	鉄釘	(3.3cm)	0.75cm	0.55cm	(2.73g)	頭部欠損
250	ＳＫ38	鉄釘	(3.5cm)	0.75cm	0.95cm	(4.79g)	先端部欠損
251	ＳＫ39	鉄釘	(4.4cm)	1.0cm	0.9cm	(7.21g)	先端部欠損
252	ＳＫ39	鉄釘	(4.15cm)	0.65cm	0.7cm	(5.75g)	先端部欠損
253	ＳＫ39	鉄釘	—	1.4cm	0.95cm	(14.78g)	先端部欠損。曲線的に曲がる
254	ＳＫ39	鉄釘	(3.5cm)	0.6cm	0.5cm	(3.84g)	先端部欠損
255	ＳＫ39	鉄釘	—	0.75cm	0.75cm	(5.79g)	先端わずかに欠損。曲線的に曲がる
256	ＳＫ40	鉄釘	4.45cm	0.7cm	0.7cm	5.74g	完形
257	ＳＫ40	鉄釘	—	1.0cm	0.9cm	(12.42g)	頭部欠損。直線的に曲がる
258	ＳＫ40	鉄釘	(6.2cm)	0.95cm	1.1cm	(14.61g)	先端部欠損
259	ＳＫ41	鉄釘	(4.3cm)	0.7cm	0.5cm	(3.53g)	頭部欠損

第11表　1郭周辺出土金属製品計測表２　　（　）は現状値

遺物番号	出土遺構	種　別	長　さ	幅	厚　さ	重　量	備　考
260	ＳＫ41	鉄釘	(4.65cm)	0.85cm	1.1cm	(7.50ｇ)	先端部欠損。頭部も欠損の可能性有
261	Ｇ12区ピット	鉄釘	(7.0cm)	1.0cm	0.9cm	(15.62ｇ)	先端部欠損
262	Ｈ11区ピット	鉄釘	(6.1cm)	0.6cm	0.65cm	(8.93ｇ)	先端部わずかに欠損
263	トレンチ３	棒状鉄製品	(5.55cm)	1.25cm	0.5cm	(10.20ｇ)	先端部欠損。頭部が厚くなる
264	Ｇ12区	鉄製リング	3.7cm	2.8cm	1.9cm	24.37ｇ	厚さ0.35～0.8cmの板を曲げたもの
265	Ｆ10区	鉄製金具	3.9cm	2.8cm	1.2cm	(10.26ｇ)	厚さ0.4cmの板を加工。ピンで留める
266	ＳＫ36	鉄製金具	4.4cm	3.8cm	1.2cm	36.36ｇ	厚さ0.4cmの板を加工し，鋲を付ける
267	Ｇ12区	鉄製金具	(5.0cm)	2.0cm	1.3cm	(8.79ｇ)	厚さ0.4cmの板を加工。ピンで留める
268	ＳＫ36	鉄製金具	5.0cm	2.5cm	2.25cm	17.70ｇ	厚さ0.5cmの板を加工し，鋲を付ける
269	ＳＸ２	鉄製掛金	7.9cm	3.7cm	0.85cm	29.64ｇ	後部に環が付く
270	ＳＫ36	鉄製金具	12.4cm	1.5cm	1.9cm	57.52ｇ	内面に２つピン状のものが付く
271	Ｇ13区	鉄鏃	(4.5cm)	1.9cm	1.0cm	(9.55ｇ)	軸部欠損
272	Ｇ12区ピット	鉄鏃	(5.7cm)	(4.7cm)	0.95cm	(30.01ｇ)	先端部及び軸部欠損
273	トレンチ１	鉄鏃	15.2cm	復元7.0cm	1.6cm	(45.28ｇ)	先端部片側欠損
274	トレンチ１	刀状鉄製品	(7.0cm)	(2.4cm)	0.3cm	(10.89ｇ)	刃を作り出しているが，全体に薄い
275	ＳＫ36	刀状鉄製品	(14.6cm)	2.1cm	0.6cm	(103.17ｇ)	先端部欠損。刃部は鋭くない
276	ＳＫ36	不明鉄製品	(17.3cm)	1.85cm	0.9cm	(92.50ｇ)	先端を少し尖らせるが，鋭くはない
277	トレンチ３	鉄製兜片	(9.8cm)	(5.9cm)	1.4cm	(34.34ｇ)	厚さ0.15cmの板を鋲で繋ぎ合わせる
278	ＳＸ１	鉄製兜片	(9.2cm)	(3.1cm)	1.3cm	(25.65ｇ)	厚さ0.15cmの板を鋲で繋ぎ合わせる
279	ＳＢ１	板状鉄製品	6.9cm	3.3cm	0.25cm	(19.33ｇ)	一部欠損
280	ＳＫ36	板状鉄製品	6.7cm	2.25cm	0.7cm	20.85ｇ	厚さが一定ではない
281	ＳＫ５	板状鉄製品	3.6cm	2.7cm	0.25cm	7.21ｇ	斜めに折れ曲がる
282	ＳＫ35	板状鉄製品	4.7cm	2.25cm	0.2cm	7.47ｇ	
283	ＳＫ36	板状鉄製品	3.8cm	2.5cm	0.3cm	11.13ｇ	
284	Ｆ９区	板状鉄製品	4.6cm	2.7cm	0.3cm	13.73ｇ	
285	ＳＫ36	不明鉄製品	(9.7cm)	4.3cm	0.8cm	(36.69ｇ)	端部一部欠損。Ｌ字状
286	ＳＫ37	不明鉄製品	(5.55cm)	(2.6cm)	0.65cm	(9.85ｇ)	先端を２つに分け，尖らせる
287	ＳＫ35	銅製懸仏	5.75cm	3.6cm	1.7cm	33.33ｇ	取り付けのための孔有
288	ＳＸ１	銅製リング	4.6cm	4.4cm	0.4cm	3.67ｇ	厚さ0.1cmの板を加工。若干曲がる
289	Ｆ12区	鉛玉	1.1cm	1.1cm	1.1cm	3.94ｇ	数か所孔有
290	Ｇ12区	銅製金具	(1.95cm)	(1.65cm)	1.0cm	(6.92ｇ)	厚さ0.2cmの板を加工。鋲が付く
291	Ｇ12区ピット	不明銅製品	(2.9cm)	1.5cm	0.85cm	(1.72ｇ)	厚さ0.1cmの板を加工。小孔有
292	ＳＢ１	不明銅製品	2.95cm	(2.65cm)	1.2cm	(7.15ｇ)	
293	Ｈ11区ピット	不明銅製品	(3.6cm)	(2.3cm)	1.3cm	(7.60ｇ)	

第12表　１郭周辺出土古銭一覧表

遺物番号	出土遺構	銭　種	直径	重量	備考
294	ＳＢ２	開元通寶	2.55cm	(2.20ｇ)	初鋳621年。端が一部欠ける
295	ＳＸ２	開元通寶	2.4cm	3.57ｇ	初鋳621年
296	ＳＸ２	開元通寶	2.4cm	3.24ｇ	初鋳621年
297	ＳＫ35	開元通寶	2.45cm	2.18ｇ	初鋳621年
298	Ｆ11区ピット	開元通寶	—	(1.20ｇ)	初鋳621年。欠損部があるため径不明
299	トレンチ３	開元通寶	2.2cm	(2.17ｇ)	初鋳621年。端がかなり欠ける
300	ＳＸ２	景徳元寶	2.3cm	3.06ｇ	初鋳1004年
301	ＳＸ２	祥符通寶	2.4cm	3.46ｇ	初鋳1009年
302	１郭東側切岸	祥符通寶	2.5cm	2.99ｇ	初鋳1009年
303	ＳＸ２	天聖元寶	2.45cm	3.40ｇ	初鋳1023年。篆書
304	Ｊ９区(切岸)	景祐元寶	2.45cm	3.45ｇ	初鋳1034年。篆書
305	ＳＸ１	皇宋通寶	2.5cm	(2.77ｇ)	初鋳1038年。篆書。端が一部欠ける
306	ＳＸ２	皇宋通寶	2.4cm	3.70ｇ	初鋳1038年。真書
307	ＳＸ２	皇宋通寶	2.3cm	1.46ｇ	初鋳1038年。真書
308	ＳＸ２	皇宋通寶	2.5cm	2.08ｇ	初鋳1038年。真書
309	ＳＸ２	皇宋通寶	2.5cm	3.47ｇ	初鋳1038年。真書
310	ＳＸ２	皇宋通寶	2.35cm	2.60ｇ	初鋳1038年。真書
311	ＳＸ２	皇宋通寶	2.4cm	3.41ｇ	初鋳1038年。篆書
312	ＳＸ２	嘉祐元寶	2.4cm	3.69ｇ	初鋳1056年。篆書
313	ＳＫ35	嘉祐通寶	2.3cm	(1.96ｇ)	初鋳1056年。真書。端が一部欠ける
314	ＳＸ２	熙寧元寶	2.3cm	4.05ｇ	初鋳1068年。真書
315	ＳＫ35	熙寧元寶	2.45cm	(3.38ｇ)	初鋳1068年。真書。端が一部欠ける
316	Ｇ９区	熙寧元寶	2.45cm	2.81ｇ	初鋳1068年。真書
317	ＳＫ35	熙寧元寶	2.3cm	3.26ｇ	初鋳1068年。篆書
318	Ｇ８区	熙寧元寶？	2.35cm	2.02ｇ	篆書
319	ＳＸ２	元豊通寶	2.2cm	2.48ｇ	初鋳1078年。行書
320	Ｆ９区	元豊通寶	2.3cm	1.78ｇ	初鋳1078年。行書
321	ＳＸ２	元豊通寶	2.4cm	3.30ｇ	初鋳1078年。篆書
322	ＳＫ35	元豊通寶	2.4cm	(2.36ｇ)	初鋳1078年。篆書。一部欠損
323	Ｇ12区	元豊通寶	2.3cm	(1.63ｇ)	初鋳1078年。篆書。端が一部欠ける
324	ＳＫ35	元豊通寶？	2.4cm	(1.76ｇ)	篆書。一部欠損
325	ＳＸ２	元祐通寶	2.3cm	3.10ｇ	初鋳1086年。行書
326	ＳＸ２	元祐通寶	2.4cm	3.38ｇ	初鋳1086年。篆書
327	ＳＸ２	紹聖元寶	2.35cm	3.39ｇ	初鋳1094年
328	ＳＸ２	元符通寶	2.4cm	3.70ｇ	初鋳1098年。行書
329	ＳＸ２	元符通寶	2.3cm	3.19ｇ	初鋳1098年。篆書
330	ＳＸ１	大観通寶	2.4cm	(2.56ｇ)	初鋳1107年
331	ＳＸ２	大観通寶	2.4cm	3.32ｇ	初鋳1107年
332	ＳＢ２	政和通寶	2.4cm	2.19ｇ	初鋳1111年。分楷
333	ＳＸ２	政和通寶	2.4cm	3.48ｇ	初鋳1111年。篆書
334	ＳＸ２	宣和通寶	2.4cm	3.11ｇ	初鋳1119年。篆書
335	ＳＸ11	宣和通寶	—	(1.20ｇ)	初鋳1119年。分楷
336	ＳＸ２	淳熙元寶	2.2cm	1.80ｇ	初鋳1174年。真書
337	Ｉ12区	寛永通寶	2.45cm	2.93ｇ	
338	Ｇ12区	寛永通寶	2.3cm	(1.04ｇ)	約１／２欠損

V　遺構と遺物（南東尾根）

1　平坦面

尾根頂部中央に，長さ 18.9m，幅 7.4m，高さ約 1.5mの小山を削り残しており，その周囲で平坦面５箇所を確認した。

（1）平坦面１（第 60 図，図版 46－ａ）

尾根頂部小山の西側の平坦面である。小山の南側で平坦面２とつながっている。長さ約 19m，幅 1.6～3.4mである。小山の北端あたりから北側の尾根頂部にかけては，尾根線から東西両方向に向かって緩やかに下っており，人工的に造成した痕跡は見られない。この部分が平坦面１・２の北端と考えられる。平坦面１の北端（ＳＸ２の北側）で，高さ 0.2～0.3mの段差を形成しており，一段下がった平坦面１で土師質土器の椀（342）が出土した。

平坦面の中央で，焼土面ＳＸ２を検出した。

（2）平坦面２（第 60 図，図版 46－ｂ）

尾根頂部小山の東側の平坦面である。小山の南側で平坦面１とつながっている。小山の北端あたりが平坦面の北端と考えられ，長さ約 20m，幅 6.4～8.6mの比較的広い平坦面である。東斜面の角度は 60°と急傾斜で，切岸をなしている。

平坦面の南半で土坑ＳＸ１と溝状遺構ＳＤ１を検出した。

（3）平坦面３（第 60 図，図版 46－ｃ）

平坦面２の南側（尾根先端側）に，低く緩やかな傾斜の段差を介して存在する平坦面である。東側と南側が調査区外へ続いており，現状で長さ約 13m，幅 6.4mである。平坦面１とは南に緩やかに下る幅 2.0mの通路状部分でつながっている。平坦面１・３の西斜面は傾斜角度が 35～40°と比較的急な傾斜で切岸状を呈する。

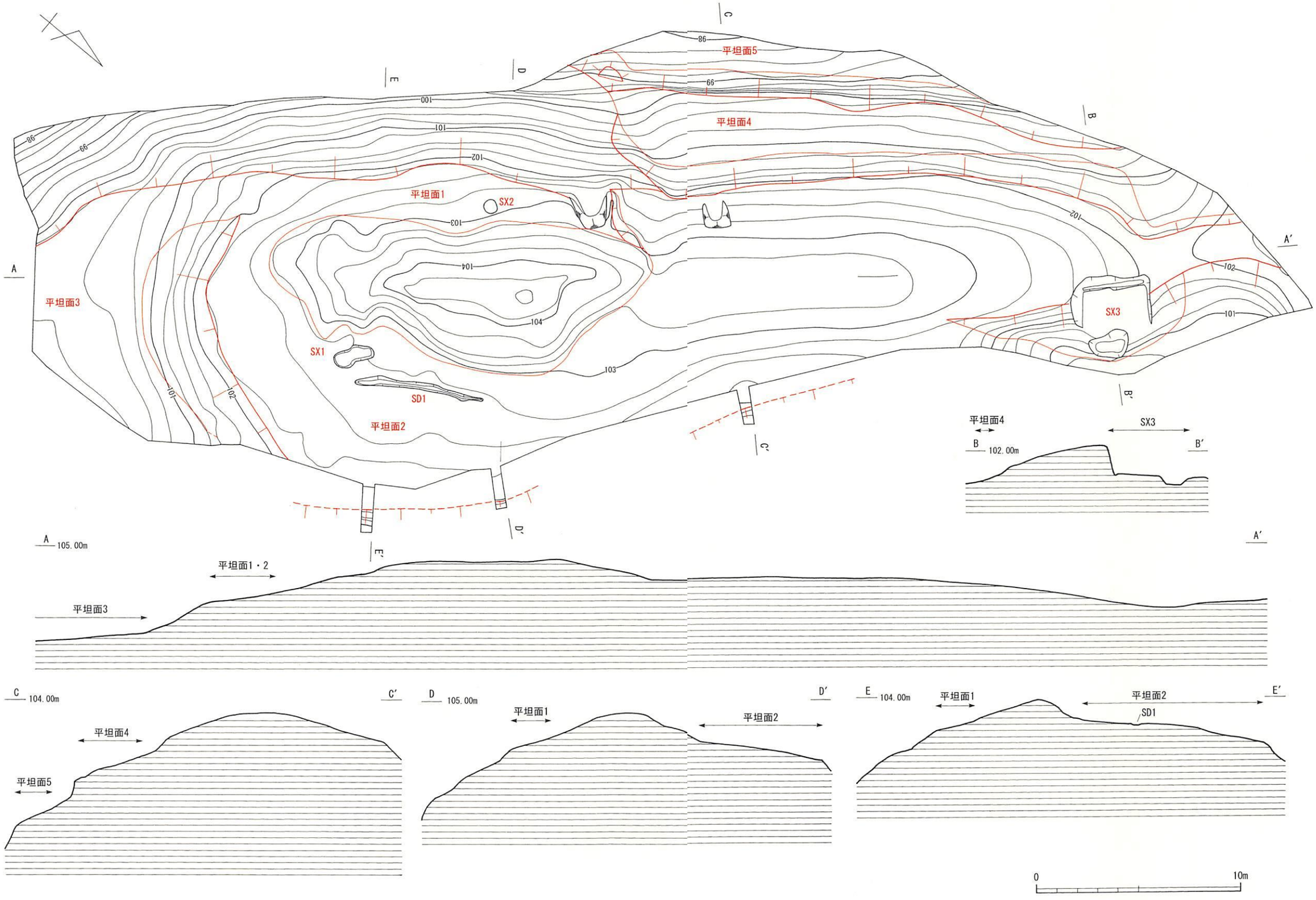
（4）平坦面４（第 60 図，図版 47－ａ・ｂ）

尾根の北西部に位置する平坦面である。尾根頂部とは緩やかな段差を介し，その標高差は約３ｍである。形態は帯状で，長さ約 21m，幅 3.6mである。東から西に緩やかに傾斜している。

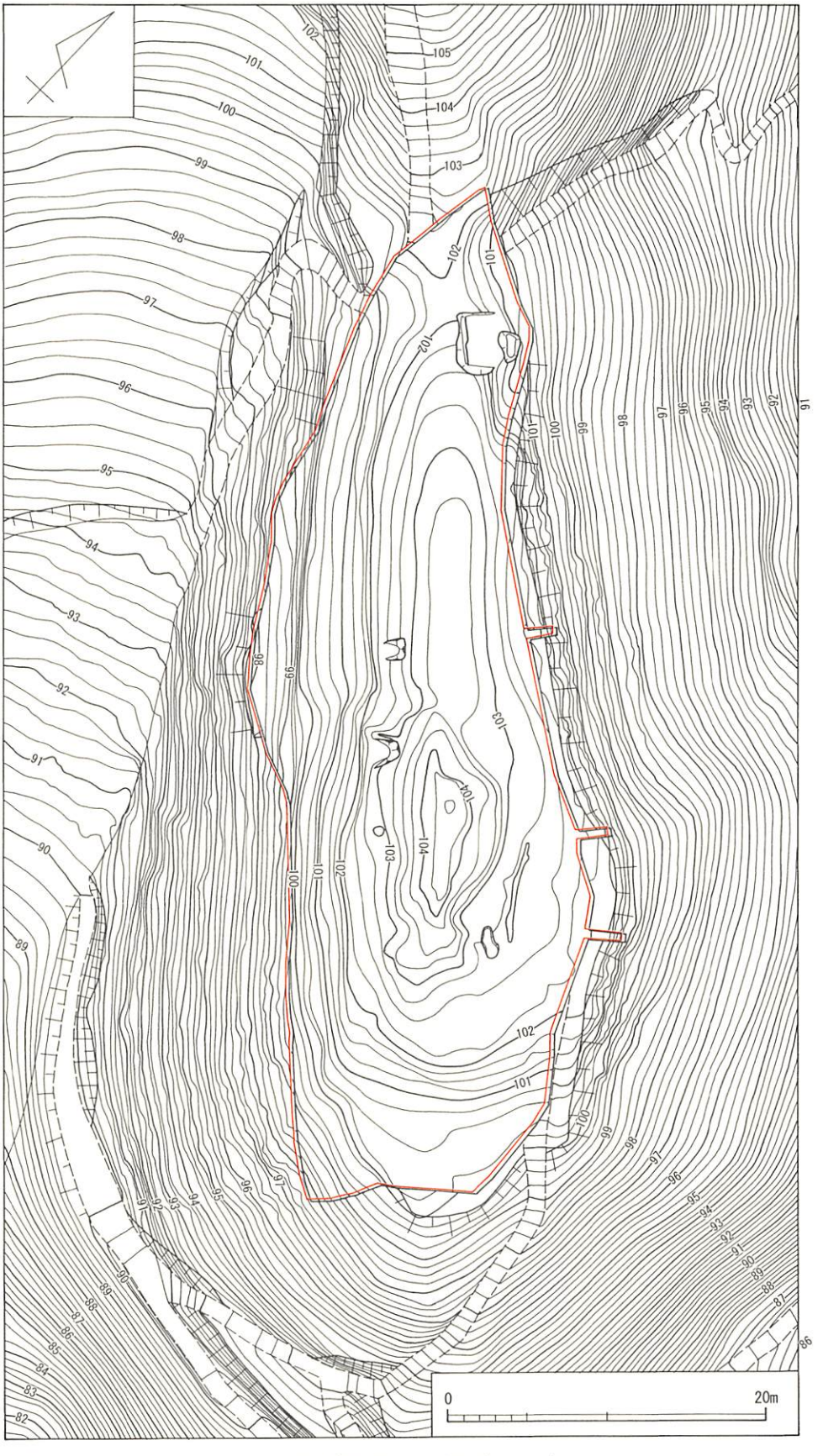
遺物は瓦や陶磁器類が若干出土しているが，遺構に伴う可能性は低く，後世のものと見られる。

（5）平坦面５（第 60 図，図版 47－ｂ）

平坦面４の北西に位置する平坦面である。尾根頂部との標高差５ｍ，平坦面４との標高差 1.2ｍで，平坦面４との間には傾斜角度 60°の急斜面となる。形態は帯状で，東側が調査区外となり，現状で長さ約 16m，幅 1.2～1.8mである。東から西に緩やかに傾斜している。平坦面の西斜面は



第60図　南東尾根遺構配置図（1：200）



第61図　南東尾根地形図（1：400）

傾斜角度約60°と急峻な崖状で切岸をなしている。

2　溝状遺構

（1）ＳＤ１（第64図，図版48－ａ）

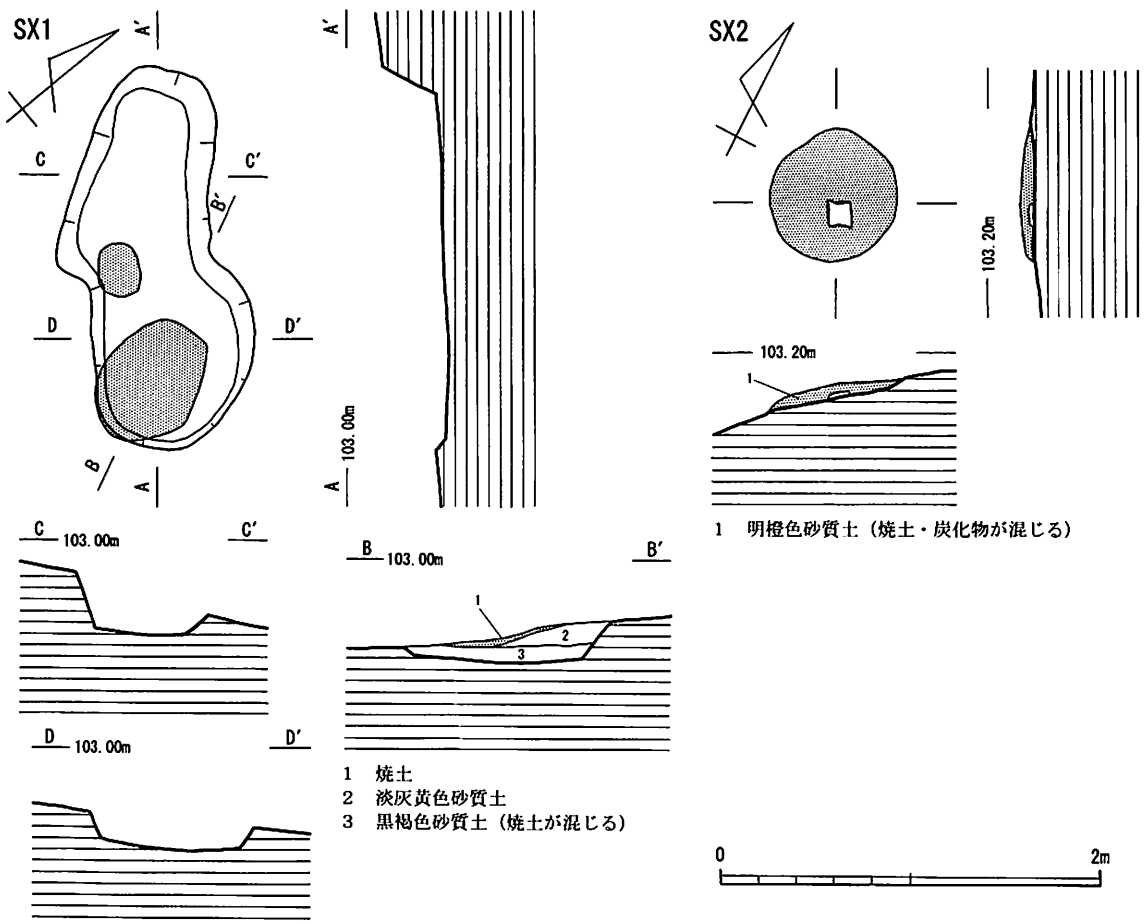
平坦面２の南半に位置する南北方向の溝状遺構である。南0.6mにはＳＸ１がある。長さ6.36m，幅0.15～0.52m，深さ0.04cmの浅い溝である。底面は北から南に向かって下っている。

3　その他の遺構

（1）ＳＸ１（第62図，図版47－ｃ，48－ａ）

平坦面２の南半に位置する土坑である。平面形は不整楕円形で，南東部に焼土を伴う。長径2.02m，短径0.87m，深さ0.31mである。焼土は２か所あり，中央南寄りのものが長径0.29m，短径0.23m，南側のものが長径0.70m，短径0.52m，厚さ0.04mである。

（2）ＳＸ２（第62図，図版48－ｂ・ｃ）



第62図　南東尾根ＳＸ１・２実測図（1：40）
（アミ目は焼土範囲）

平坦面１のほぼ中央で検出した焼土面である。平面形は円形で，長径 0.70m，短径 0.67m，厚さ 0.08mである。

中央付近の焼土下から平瓦（344・345）が出土した。

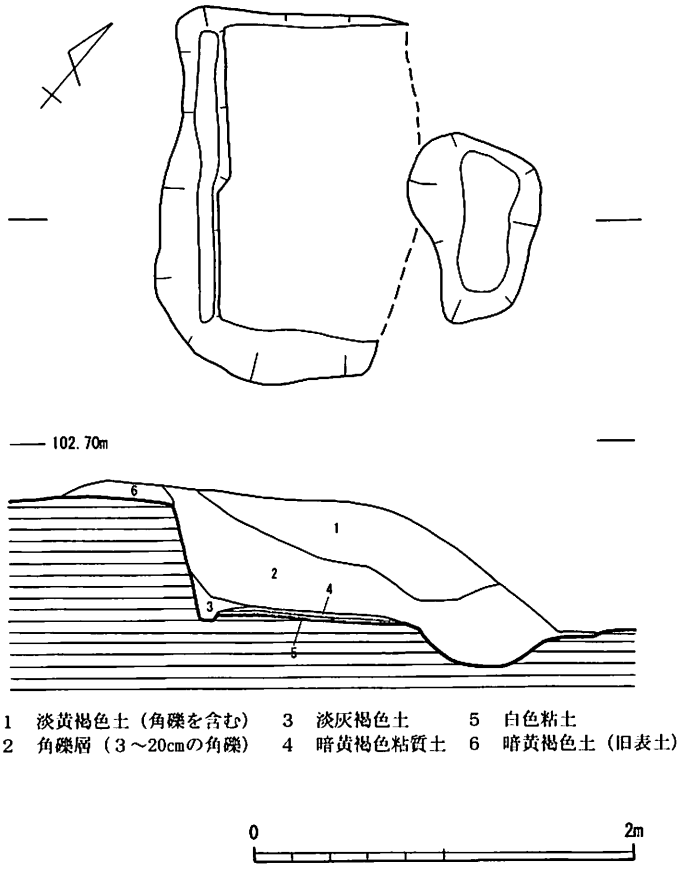
（３）ＳＸ３（第 63 図，図版 49）

尾根北部東側に位置する遺構である。平面形は長方形で，東側が斜面にかかり，底面が流れていると考えられ，現状で長さ 3.89m，幅 2.75mである。底面には約５㎝の厚さの白色粘土を貼っている。また山側である西側壁際には，長さ 3.07m，幅 0.16～0.26m，深さ 0.06 ㎝の溝が掘られている。底面は山側である西側から谷側である東側に向かってわずかに傾斜している。東側には不整形の長径 2.01m，短径 1.40m，深さ 0.37mの土坑が接している。

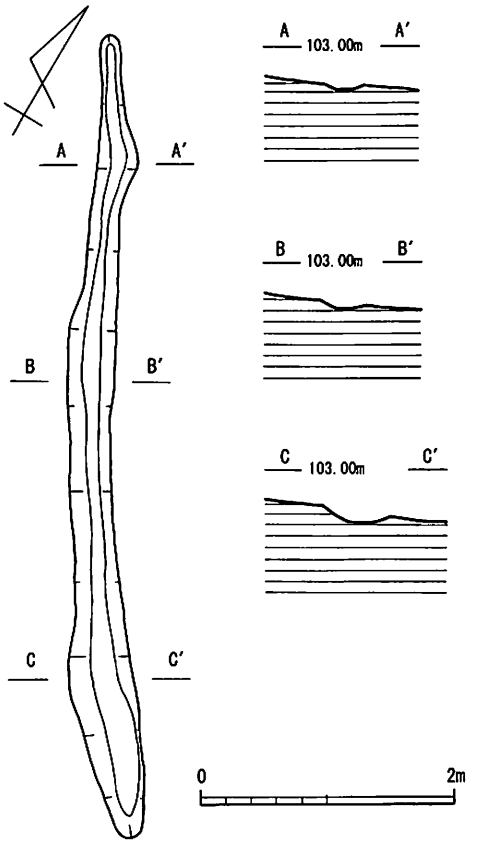
遺物は鉄釘や用途不明銅製品（346）が出土している。鉄釘は細片のため，図示できなかった。

4　遺物（第 65 図，図版 50）

土師質土器の椀（342），瓦質土器の鍋（343），平瓦（344・345），用途不明銅製品（346）が出



第63図　南東尾根ＳＸ３実測図（1：40）



第64図　南東尾根ＳＤ１実測図（1：60）

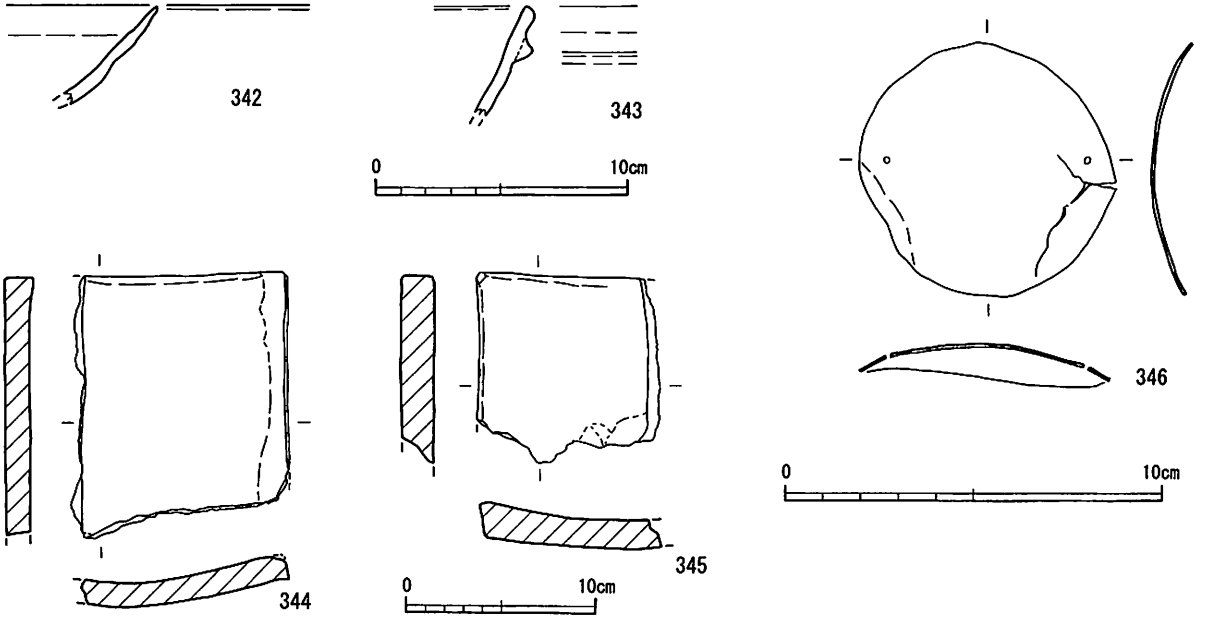
土した。

342 は平坦面１から出土した土師質土器の椀である。体部は直線的に立ち上がる。口径 16 cm前後の大型品と推定されるが，形に歪みがあるため，正確な数値は不明である。

343 は小山西斜面から出土した瓦質土器の鍋である。体部は直線的に立ち上がり，外面に突帯を貼り付ける。

344・345 はＳＸ２から出土した平瓦である。調整は凹面・凸面ともナデと思われる。

346 はＳＸ３から出土した用途不明銅製品である。皿状円盤で，一部ひび割れや変形した部分もあるが，ほぼ完形である。両端付近に径 1.5 mmの小孔があることから，皿を伏せた状態で何かに取り付けていたものと思われる。



第65図　南東尾根出土遺物実測図（1：3，344・345は1：4，346は1：2）

第13表　南東尾根出土土器類観察表

遺物番号	出土遺構	種別・器種	計測値	調　整	色　調	胎　土	備　考
342	平坦面1	土師質土器・椀		外面：体部下部－不明，その他－回転ナデ 内面：体部下部－不明，その他－回転ナデ	淡茶灰色	砂粒を含む	口径16cm前後の大型品と推定される。焼成やや不良
343	尾根頂部小山	瓦質土器・鍋		外面：体部－不明，口縁部－ヨコナデ 内面：不明	淡黄灰色 断面は淡黒褐色	細砂を含む	外面に突帯を貼り付ける 焼成不良

第14表　南東尾根出土瓦・銅製品計測表　　（　）は現状値

遺物番号	出土遺構	種　別	長　さ	幅	厚　さ	重　量	備　考
344	ＳＸ２	平瓦	(9.9cm)	(9.5cm)	1.8cm	248.68 g	淡黒灰色。凹面・凸面ともナデ？
345	ＳＸ２	平瓦	(13.9cm)	(11.2cm)	1.5cm	352.27 g	淡黒灰色。凹面・凸面ともナデ？
346	ＳＸ３	皿状銅製品	径6.6cm	高さ1.3cm	0.1cm	12.97 g	小孔が有り，何かに取り付けたもの

Ⅵ まとめ

家ノ城跡は，14世紀中葉を中心とする中世の山城である。ここでは調査成果を整理して，本遺跡について若干の考察を行い，まとめとしたい。

（1）南東尾根について

第1・2次発掘調査を実施した南東尾根では，小規模な平坦面5箇所などを検出したが，建物跡や堀切・竪堀などの山城に通常見られる防御施設は確認できなかった。しかし，平坦面2・3の東斜面は急峻で切岸をなし，平坦面1・3～5の西斜面は切岸状を呈している。また，平坦面3は木梨川の谷に面した丘陵の先端にあり，谷の交通をおさえる位置にあることや，南東尾根は1郭から尾根続きであることなどから，これらの平坦面や急斜面が山城の造成に伴うものである可能性は高いといえる。

ＳＸ３は簡便な構造ではあるが，底面に粘土を貼り，集水地点に隣接して落ち込みがあることなどから，水を集める施設であったと推測できる。

（2）１郭周辺の遺構について

１郭では多くの遺構を検出した。１郭の中央が高く残り，櫓台などがあった可能性もある。建物跡は５棟復元できたが，多くのピット，礎石と思われる上面が平らな石があることから，本来の建物数はさらに多かったものと思われる。建物の建替え，後世の削平により，失われた柱穴や礎石があるものと推測される。本書では，確実と思われる建物跡５棟のみを掲載した。

建物跡は重なっているものも多く，建物の主軸方向はＳＢ１・２・５が北東－南西方向で，ＳＢ３・４が南北方向である。建物跡の変遷は，ＳＢ１→ＳＢ４→ＳＢ５，ＳＢ２→ＳＢ３で，３時期の移り変わりが考えられる。同時期に建てられた建物は主軸を揃えるのが一般的であるため，主軸方向の違いや建物の重複から，ＳＢ１・２→ＳＢ３・４→ＳＢ５という変遷も考えられる。

底に粘土を貼った長方形土坑が６基検出されている。水と関係があるものと思われる。丘陵頂部であるため，井戸を掘っても水が湧かない。また，地山の岩盤が広がる部分が多く，そのままでは水が溜まらないことから，土坑の底に粘土を貼って水を溜めていた可能性が高い。長方形土坑も主軸方向の違いや重複から２時期以上が考えられる。主軸方向はＳＫ２・４が南北方向，ＳＫ８が東西方向，ＳＫ５・11が北東-南西方向，ＳＫ12が北北東-南南西方向である。重複から想定される時期差はＳＫ11→ＳＫ８・９である。さらに，長方形土坑の中には建物跡と重なるものもあり，ＳＸ２・ＳＢ２→ＳＫ５→ＳＢ３という３時期の遺構の変遷が確認できる。これらのことから建物跡と同じく，主軸が北東－南西方向（ＳＫ５・11）→主軸が南北あるいは東西方向（ＳＫ２・４・８）へと変遷したことが考えられる。なお，曽川１号遺跡Ｊ地区[1]では底面及び壁面に漆喰を塗った近世から現代にかけての土坑が数多く検出されており，水溜と考

えられている。本城跡でもＳＫ21の底面及び壁面に漆喰が塗られており，17世紀以降と見られる備前焼系の擂鉢が出土している。このことから中世の水溜は粘土を貼っていたが，近世以降は粘土にかわって漆喰を使用するようになったことが考えられる。

１郭北部中央で検出した３基並ぶ円形土坑（ＳＫ10・13・14）は，ＳＫ14の底面に備前焼の甕が据え置かれていることから水甕であった可能性もある。しかし，３基は一直線に並ぶのではなく，中心線がずれていることから，同時期に存在したのではなく，時期が異なる可能性がある。

（３）出土遺物について

本城跡から比較的まとまった量の遺物が出土した。[2] 多量の土師質土器の皿・椀，青磁の水注？，白磁の四耳壺，青白磁の梅瓶，鉄鏃・兜片などの武具類，鉄滓，鞴の羽口，炉壁など特徴的な遺物が出土している。さらに，中世だけではなく，弥生時代から近現代の遺物まで出土している。ここでは代表的な遺物について若干の考察を行う。

① 弥生土器

弥生土器が１郭のH13区から10点，トレンチ１から２点出土している。弥生時代後期中葉（備後Ｖ－２様式）を中心とする。遺構を確認することはできなかったが，弥生時代の遺跡があり，城の造成時に壊されたものと思われる。

② 柱状高台土師器

柱状高台土師器が２点（106・142）出土した。[3] ともに遺構からの出土ではないが，椀形で，下に円盤状の台がつく。柱状というよりは，椀に円盤状の台を取り付けた器形である。底部切り離し技法はいずれも回転糸切りである。柱状高台については八峠興氏の論考があり，分類や年代・使用方法などについて考察が行われている。[4]

柱状高台は広島県内でこれまでに富士神社南[5]（鵜子原遺跡）（山県郡北広島町大朝），須倉遺跡[6]（同町有田），曽川２号遺跡[7]（尾道市御調町大町）の３遺跡で出土している。富士神社南，須倉遺跡出土のものは皿形で，台部は円柱状で垂直方向に立ち上がる。切り離しはいずれも回転糸切りである。富士神社南は窯道具が出土していることから窯跡と考えられている。多量の土器が出土しているが，その内の一部が報告書の付編として掲載されている。底部に焼成前穿孔が行われているもの８点，底部に穿孔されていないもの５点が掲載されている。須倉遺跡では底部に焼成前穿孔が行われているものが３点出土している。曽川２号遺跡では４点出土しており，皿形で台部は内傾して立ち上がる。底部の穿孔はない。切り離しは回転糸切りである。灯明・儀式などの補助的な器として使用され，他の土器とともに一括して土坑に廃棄されたと考えられている。

八峠氏は11世紀に柱状高台が成立し，12世紀末から13世紀前半に上部が皿状から杯（椀）状に変化し，その後衰退すると考えている。このことから本城跡出土のものは城に伴うものではなく，築城以前のものと考えられる。時期としては八峠氏が指摘するように12世紀末～13世紀の可能性が高い。柱状高台の形態としてはさまざまなものがあるが，その用途は日常生活に使用さ

れたものではなく，儀式に使用されたものと考えられる。時代は異なるかもしれないが，古瀬戸の仏供に本城跡出土の柱状土師器とよく似た形態のものがある。本城跡出土のものは仏具ではないにしろ，祭祀を含む儀式に使われた可能性がある。

なお，本城跡から高台の付いた大型の土師器の椀が２点（49・163）出土している。大型の土師器の椀も出土例は少ないことから日常生活に使用された可能性は低く，柱状高台土師器と同様の性格をもって儀式に使用された可能性が高いと思われる。

このように柱状高台土師器や大型の土師器の椀の出土からみて，周囲がよく見渡せるこの丘陵頂部（山頂）は城が造られる以前から儀式が行われるような地政学上重要な場所であった可能性がある。このことから，地域の有力者がこの場所を押えることはこの地域を支配するうえで大きな意義があったと考えられる。

③ 土師質土器

本城跡から土師質土器が多数出土している。備後地域の中世土器は，草戸千軒町遺跡での成果が基準となっている。[8] 底部の切離し技法が確認できるものは，皿 25 点のうち回転糸切りのものが８点，回転ヘラ切りのものが 17 点で，杯７点のうち回転糸切りのものが１点，回転ヘラ切りのものが６点である。皿・杯ともに回転ヘラ切りのものが圧倒的に多い。近隣の調査では，いずれも本城跡の北側にあたる御調町内の末近城跡の皿は回転糸切り，牛の皮城跡の皿はほとんどが回転ヘラ切りで，曽川１号遺跡の皿は回転ヘラ切り，曽川２号遺跡の皿は回転ヘラ切りで，杯は回転糸切りであることが報告されている。近隣の遺跡でも回転ヘラ切りの皿が多いことがわかる。皿は１点（H11 区出土 141）のみ口径 12.9 ㎝，器高 2.05 ㎝の大型のものがあるが，残りは口径 5.5～7.2 ㎝，器高 0.75～1.9 ㎝の小型のものである。141 は皿ＡⅡで草戸Ⅳ期後半（15 世紀末～16 世紀初頭）に位置付けられる。

草戸Ⅱ期になると無高台の椀Ａが加わる。Ⅱ期は椀の口径の小型化や高台が付く椀Ｂの出土量の減少などにより，Ⅱ期前半（14 世紀前半の古い段階），Ⅱ期後半（14 世紀前半の新しい段階～14 世紀中葉）に分けられる。Ⅱ期後半はさらに古段階，新段階，新段階，最新段階に細分されている。椀Ｂの出土量は次第に減って２期後半最新段階にはほとんど出土しなくなる。本城跡の土師質土器椀Ｂは，Ｊ９区の東切岸から出土した 177 のみで，復元口径 12.0 ㎝と比較的大型で，他の土師質土器よりも古い可能性がある。しかし，高台が粘土紐を貼り付けただけの雑な作りのため断定はできない。外面底部中央を大きく窪ませた土師質土器椀Ｃの可能性があるものはいくつかあるが，確実なものはＳＸ１出土の 32 のみである。口径 9.7 ㎝，器高 3.4 ㎝である。外面底部中央をわずかに窪ませたものは多くあるが，器高が低く椀Ａの範疇に入るものが多い。椀Ａのうち口径がわかるものは 41 点で，口径 8.2～10.5 ㎝，器高 1.95～3.8 ㎝で，口径の平均 9.25 ㎝である。ＳＸ１から椀Ａが 20 点まとまって出土しており，その平均は 8.92 ㎝である。ＳＸ１以外の平均が 9.57 ㎝であり，ＳＸ１の椀Ａが小型であることがわかる。草戸Ⅱ期後半最新段階の椀Ａの口径は 9.2～9.6 ㎝程度であることから本城跡の土師質土器の大部分はこの時期に位置づけることができよう。

草戸Ⅱ期後半の暦年代を示す資料としては，尾道市浄土寺阿弥陀堂亀腹出土の土師質土器[9]があり，阿弥陀堂造営の貞和元（1345）年を前後する時期に比定されている。椀Ａが 25 点出土しており，口径の平均値 9.5～9.6 ㎝程度である。これは草戸Ⅱ期後半最新段階に相当する寸法規格であることから，Ⅱ期後半最新段階は 14 世紀中葉と考えられている。

なお，草戸Ⅲ期（15 世紀前半～中葉）になると椀が消滅し，大小の皿の組み合わせが出現する。本城跡では大型の皿がほとんどないことから 15 世紀前半には城としての機能は失われていた可能性が高い。

④ 瓦質土器

備後地域（広島県東部）で多く出土する土師質土器の鍋が本城跡では少なく，瓦質土器の鍋が多い。瓦質土器の鍋は外面に突帯を貼り付けており，草戸千軒町遺跡の分類では鍋Ｆにあたる。安芸地域（広島県西部）から出土することが多く，数量的には少ないが草戸千軒町遺跡や尾道遺跡でも鎌倉時代後期以降出土している。

ＳＸ13 出土の瓦質土器の擂鉢（50）は口縁端部を平坦にし，内側に突出することから防長系の可能性がある。14 世紀以降の遺物と考えられる。

⑤国産陶器

国産陶器としては，備前焼が最も多く出土しており，甕と擂鉢がある。甕の口縁部の玉縁は幅広でなく丸い。擂鉢の口縁端部の平坦面も幅広ではなく，口縁部を平らに切った形状である。間壁忠彦氏編年[10]のⅢ期にあたり，13 世紀代と考えられる。本城跡よりも古いもので，伝世品が使用された可能性がある。

常滑焼の出土量は少なく，破片数で９点，図示できたものは２点である。口縁部の拡張はそれほど大きくない。草戸千軒町遺跡の貯蔵容器は「Ⅱ期後半になると備前の比率が急速に高くなり，それに追われるように亀山・常滑の比率は低下してくる。」との指摘[11]があり，本城跡でもそれを反映して常滑焼の出土量が少ないものと思われる。

瀬戸焼は３点出土している。古瀬戸の入子が１点，古瀬戸の卸皿が２点である。ＳＤ17 出土 97 の入子は前期様式で[12]13 世紀代，ＳＫ39 出土 93 の卸皿は中期様式で 14 世紀前半，トレンチ２出土 112 の卸皿は口縁端部が内側が突出していることから 93 より新しく，後期様式で 14 世紀中頃から後半と考えられる。

擂鉢は瓦質土器，東播系須恵器，備前焼の３種類が認められ，当時の流通を考えるうえで貴重な資料である。なお，東播系須恵器には内面に擂り目がないが，擂り目がある鉢と同じ用途に使用されたと思われ擂鉢に含めた。

⑥輸入陶磁器

輸入陶磁器の出土点数は少なく，そのなかで口縁部が残存するものはさらに少ない。ＳＸ２出土 47 は内外全面に施釉され，口縁部を鍔状に折り曲げる皿で，森田・横田編年[13]の龍泉窯系青磁Ⅲ類の碗・皿に相当するものと思われる。トレンチ３出土 130 は片彫りによる蓮弁文を巡らせる青磁碗で，森田・横田編年の龍泉窯系青磁碗Ⅰ－５類に相当する。H14 区１郭東側切岸出土 175 も

第15表　1郭遺構別中世土器類組成表

上段は数量(点)，下段は重量(g)

		SB1		SB2		SB3		SB4		SX1		SX2		SX5		SX9		SX11		SX12		SX13	
土器	土師質土器	8	88.9%	16	80%	1	100%	8	80.0%	188	80.0%	134	70.2%			1	100%	4	28.6%	15	93.7%	12	70.6%
		41.60	52.9%	140.65	35.6%	23.90	100%	161.80	56.2%	2273.03	28.9%	1547.87	27.7%			6.18	100%	26.22	11.1%	161.90	65.9%	128.81	44.1%
	瓦質土器			1	5.0%					1	0.4%	13	6.8%	1	100%			8	57.1%	1	6.3%	2	11.7%
				36.51	9.2%					41.69	0.5%	819.78	14.7%	7.70	100%			143.15	60.7%	83.94	34.1%	44.13	15.1%
	小計	8	88.9%	17	85.0%	1	100%	8	80.0%	189	80.4%	147	77.0%	1	100%	1	100%	12	85.7%	16	100%	14	82.3%
		41.60	52.9%	177.16	44.8%	23.90	100%	161.80	56.2%	2314.72	29.4%	2367.65	42.4%	7.70	100%	6.16	100%	169.37	71.8%	245.84	100%	172.94	59.2%
国産陶器	亀山焼			1	5.0%							3	1.6%										
				164.16	41.6%							253.37	4.5%										
	東播系須恵器											5	2.6%										
												188.89	3.4%										
	須恵器系土器											3	1·6%										
												20.31	0.4%										
	備前焼	1	11.1%					2	20.0%	38	16.2%	27	14.1%					2	14.3%			2	11.8%
		37.08	47.1%					126.19	43.8%	3851.98	49.0%	2705.76	48.5%					66.55	28.2%			114.92	39.4%
	常滑焼									6	2.5%												
										1683.25	21.4%												
	瀬戸焼																						
	不明																						
	小計	1	11.1%	1	5.0%			2	20.0%	44	18.7%	38	19.9%					2	14.3%			2	11.8%
		37.08	47.1%	164.16	41.6			126.19	43.8%	5535.23	70.4%	3168.33	56.8%					66.55	28.2%			114.92	39.4%
輸入陶磁器	青磁			1	5.0%					2	0.9%	2	1.0%										
				3.27	0.8%					13.61	0.2%	22.95	0.4%										
	白磁																					1	5.9%
																						4.19	14.4%
	青白磁			1	5.0%							4	2.1%										
				50.60	12.8%							21.92	0.4%										
	小計			2	10.0%					2	0.9%	6	3.1%									1	5.9%
				53.87	13.6%					13.61	0.2%	44.87	0.8%									4.19	14.4%
計		9点		20点		1点		10点		235点		191点		1点		1点		14点		16点		17点	
		78.68 g		395.19 g		23.90 g		287.99 g		7863.56 g		5580.85 g		7.70 g		6.18 g		235.92 g		245.84 g		292.05 g	

上段は数量(点)，下段は重量(g)

		SK1		SK2		SK5		SK8		SK9		SK11		SK12		SK13		SK14		SK15		SK16	
土器	土師質土器	15	100%	4	80.0%	30	63.8%	6	75.0%	4	66.7%	11	55.0%	1	50.0%	3	100%	3	15.8%			1	100%
		219.82	100%	82.91	67.2%	361.77	27.6%	49.49	26.7%	18.99	4.0%	100.28	2.6%	59.15	46.5%	49.14	100%	33.20	0.7%			2.64	100%
	瓦質土器			1	20.0%	7	14.9%																
				40.54	32.8%	234.80	17.9																
	小計	15	100%	5	100%	37	78.7%	6	75.0%	4	66.7%	11	55.0%	1	50.0%	3	100%	3	15.8%			1	100%
		219.82	100%	123.45	100%	596.57	45.5%	49.49	26.7%	18.99	4.0%	100.28	2.6%	59.15	46.5%	49.14	100%	33.20	0.7%			2.64	100%
国産陶器	亀山焼					1	2.1%					1	5.0%										
						12.27	0.9%					42.91	1.1%										
	東播系須恵器					3	6.4%																
						91.52	7.0%																
	須恵器系土器											2	10.0%										
												21.45	0.6%										
	備前焼					5	10.7%	2	25.0%	2	33.3%	6	30.0%	1	50.0%			16	84.2%	1	100%		
						606.78	46.2%	135.93	73.3%	449.92	96.0%	3621.01	95.7%	67.99	53.5%			4871.21	99.3%	625.29	100%		
	常滑焼																						
	瀬戸焼																						
	不明																						
	小計					9	19.2%	2	25.0%	2	33.3%	9	45.0%	1	50.0%			16	84.2%	1	100%		
						710.57	54.1%	135.93	73.3%	449.92	96.0%	3685.37	97.4%	67.99	53.5%			4871.21	99.3%	625.29	100%		
輸入陶磁器	青磁					1	2.1%																
						5.75	0.4%																
	白磁																						
	青白磁																						
	小計					1	2.1%																
						5.75	0.4%																
計		15点		5点		47点		8点		6点		20点		2点		3点		19点		1点		1点	
		219.82 g		123.45 g		1312.89 g		185.42 g		468.91 g		3785.65 g		127.14点		49.14 g		4904.41 g		625.29 g		2.64 g	

上段は数量(点)，下段は重量(g)

		SK22		SK25		SK27		SK28		SK30		SK31		SK32		SK33		SK35		SK36		SK37	
土器	土師質土器	1	25.0%	6	54.5%	9	90.0%	2	33.3%	30	57.7%	1	100%	1	100%	22	95.7%	24	85.7%	90	67.2%	14	51.9%
		2.60	4.2%	37.77	9.1%	77.84	56.9%	9.07	1.3%	481.01	29.1%	2.83	100%	13.89	100%	385.99	87.1%	272.68	80.1%	955.28	33.7%	193.17	30.9%
	瓦質土器									2	3.9%									15	11.2%	5	18.5%
										33.92	2.1%									216.62	7.6%	127.07	20.3%
	小計	1	25.0%	6	54.5%	9	90.0%	2	33.3%	32	61.6%	1	100%	1	100%	22	95.7%	24	85.7%	105	78.4%	19	70.4%
		2.60	4.2%	37.77	9.1%	77.84	56.9%	9.07	1.3%	517.93	31.2%	2.83	100%	13.89	100%	385.99	87.1%	272.68	80.1%	1171.90	41.3%	320.24	51.2%
国産陶器	亀山焼			1	9.1%					1	1.9%							1	3.6%	13	9.7%	1	3.7%
				16.31	3.9%					13.88	0.9%							30.59	9.0%	262.28	9.3%	61.60	9.9%
	東播系須恵器																					1	3.7%
																						37.65	6.0%
	須恵器系土器							1	15.7%	3	5.8%							1	3.6%			1	3.7%
								7.95	1.1%	38.54	2.3%							7.10	2.1%			16.53	2.6%
	備前焼	2	50.0%	3	27.3%	1	10.0%	3	50.0%	15	28.8%					1	4.3%	1	3.6%	13	9.7%	4	14.8%
		38.51	62.1%	206.83	49.9%	59.00	43.1%	700.01	97.6%	1055.36	63.5%					57.06	12.9%	18.15	5.3%	1303.91	46.0%	177.52	28.4%
	常滑焼			1	9.1%																		
				154.01	37.1%																		
	瀬戸焼																						
	不明																	1	3.6%				
																		11.93	3.5%				
	小計	2	50.0%	5	45.5%	1	10.0%	4	66.7%	19	36.5%					1	4.3%	4	14.3%	26	19.4%	7	25.9%
		38.51	62.1%	377.15	90.9%	59.00	43.1%	707.96	98.7%	1107.78	66.7%					57.06	12.9%	67.77	19.9%	1566.19	55.3%	293.30	46.9%
輸入陶磁器	青磁	1	25.0%																	2	1.5%		
		20.88	33.7%																	12.45	0.4%		
	白磁									1	1.9%									1	0.7%	1	3.7%
										35.22	2.1%									83.60	3.0%	11.63	1.9%
	青白磁																						
	小計	1	25.0%							1	1.9%									3	2.2%	1	3.7%
		20.88	33.7%							35.22	2.1%									96.05	3.4%	11.63	1.9%
計		4点		11点		10点		6点		52点		1点		1点		23点		28点		134点		27点	
		61.99g		414.92g		136.84点		717.03g		1660.93g		2.83g		13.89g		443.05g		340.45g		2834.14g		625.17g	

上段は数量(点)，下段は重量(g)

		SK38		SK39		SK40		SK41		SD2		SD4		SD11		SD12		SD13					
土器	土師質土器	6	85.7%	74	69.1%	17	100%	13	68.4%	1	100%	5	83.3%			2	40.0%	1	50.0%				
		64.42	69.3%	941.35	57.2%	803.23	100%	167.31	54.6%	2.52	100%	68.10	96.7%			16.48	21.1%	9.93	6.1%				
	瓦質土器	1	14.3%	14	13.1%			4	21.1%			1	16.7%										
		28.52	30.7%	220.64	14.0%			116.99	38.2%			2.32	3.3%										
	小計	7	100%	88	82.2%	17	100%	17	89.5%	1	100%	6	100%			2	40.0%	1	50.0%				
		92.94	100%	1171.34	71.2%	803.23	100%	284.39	92.8%	2.52	100%	70.42	100%			16.48	21.1%	9.93	6.1%				
国産陶器	亀山焼			16	15.0%			1	5.3%							1	20.0%						
				312.77	19.0%			11.93	3.9%							28.64	36.6%						
	東播系須恵器																						
	須恵器系土器																						
	備前焼			2	1.9%													1	50.0%				
				103.60	6.3%													151.98	93.9%				
	常滑焼																						
	瀬戸焼			1	0.9%											1	20.0%						
				57.03	3.5%											28.47	36.4%						
	不明							1	5.3%														
								10.07	3.3%														
	小計			19	17.8%			2	10.5%							2	40.0%	1	50.0%				
				473.40	28.8%			22.00	7.2%							57.11	73.0%	151.98	93.9%				
輸入陶磁器	青磁															1	20.0%						
																4.63	5.9%						
	白磁																						
	青白磁													1	100%								
														21.14	100%								
	小計													1	100%	1	20.0%						
														21.14	100%	4.63	5.9%						
計		7点		107点		17点		19点		1点		6点		1点		5点		2点					
		92.94g		1644.74g		808.23g		306.3g		2.52g		70.42点		21.14g		78.22g		161.91g					

蓮弁文を巡らせる青磁の碗であるが，蓮弁が幅広のものから沈線に近くなっており，130 よりも新しいものと思われる。１郭４次調査区出土 174 は口縁部の釉を掻き取る口禿の白磁で横田・森田編年の白磁Ⅸ類の碗・皿に相当すると思われる。その他，ＳＢ２出土１・ＳＤ11 出土 96 の青白磁の梅瓶，ＳＫ36 出土 82 の青磁の水注と思われるもの，トレンチ２出土 114・H11 区出土 152 の白磁四耳壺，Ｊ10 区１郭東側切岸出土 178 の天目茶碗なども出土している。数は少ないがこうした奢侈品が出土している。

第16表　１郭周辺中世土器類組成表

		点数		重量(g)	
土器	土師質土器	2099	73.1%	24910.40	34.1%
	瓦質土器	203	7.1%	5654.68	7.8%
	小計	2302	80.2%	30565.08	41.9%
国産陶器	亀山焼	94	3.3%	2241.12	3.1%
	東播系須恵器	18	0.6%	754.96	1.0%
	須恵器系土器	38	1.3%	521.55	0.7%
	備前焼	359	12.5%	35721.82	48.9%
	常滑焼	9	0.3%	2297.87	3.2%
	瀬戸焼	3	0.1%	93.39	0.1%
	不明	10	0.4%	120.65	0.2%
	小計	531	18.5%	41751.36	57.2%
輸入陶磁器	青磁	16	0.6%	149.98	0.2%
	白磁	12	0.4%	419.18	0.6%
	青白磁	8	0.3%	97.19	0.1%
	天目	1	0.0%	5.15	0.0%
	小計	37	1.3%	671.50	0.9%
計		2870		72987.94	

⑦土器類の組成

１郭周辺出土の中世土器類の組成を，第 15 表は遺構毎，第 16 表は全体についてまとめたものである。出土点数とともに，重量についても記してみた。一般的に備前焼などの陶器は大きい製品が多く，重量があることから，点数による比率と重量による比率ではかなり差が出る傾向にある。全体の出土点数を見ると土師質土器が 80.2%と圧倒的に多いのに対し，重量では国産陶器が 57.2%と半数以上を占める。これに対し，輸入陶磁器は出土点数で 1.3%，重量で 0.9%にしかすぎない。青磁と白磁の比率はそれほど違いはなく，少数ながら青白磁，天目も出土している。

⑧金属製品

本城跡から，鉄製品を中心に多くの金属製品が出土している。鉄鏃・兜片の出土は，山城の性格を物語るものである。なお，鉛玉が出土しているが，城よりも新しいものと考えられる。

中国地方の中世城館跡から検出された鍛冶遺構や鍛冶関連遺物については，小都隆氏によってまとめられており[14]，広島県内でも多くの中世城館跡で，鍛冶遺構や鍛冶関連遺物が報告されている。本城跡では，多くの鉄釘が出土しているが，すべて建物に使用されていたとは考えにくく，鋳直して別の鉄製品を作っていた可能性が考えられる。ＳＢ１の柱穴上で検出した焼土４は，その形状から鍛冶炉と考えられ，ＳＢ１の建物が無くなった後，その跡地で鍛冶が行われたようである。また，遺跡内から鞴の羽口，炉壁，鉄滓が出土しており，鍛冶を行っていたことを示す資料である。

（４）城の時期・性格について

備前焼・瀬戸焼・磁器などは 13 世紀代と思われるものが出土しているが，日常生活に使用される土師質土器は 13 世紀代のものは出土していない。陶磁器類は伝世されることも多く，古い時代のものが使用されることはよくある。また，15 世紀と思われる土師質土器も出土していない。草戸千軒町遺跡のⅡ期後半最新段階（14 世紀中葉）に相当する土師質土器が中心であることから，本城跡は 14 世紀中葉の城跡で，短期間しか使用されていないものと思われる。しか

し，建物は何回かの建て替えが行われている。二次焼成を受けた土器類が比較的多く，炭・焼土層が広がる部分もある。鍛冶作業や日常の煮炊きに伴うというより，火事にあったことを物語るものと思われる。短期間のうちに何度か建替えが行われたことは，火事による焼失と関係がある可能性も考えられる。

先述したように，建物跡は主軸方向の違いや重複から，ＳＢ１・２→ＳＢ３・４→ＳＢ５という変遷も考えられる。そうであれば，当初は２間×４間のＳＢ１，２間×３間のＳＢ２という２棟の庇をもつ比較的大規模な建物が同時存在し，後にＳＢ３・４という倉庫と推定される総柱の建物跡２棟が同時存在したことになる。同じ用途の建物が２棟同時存在することに疑念はあるが，建替えによって城の機能が大きく変わったことも考えられる。最終的には，城としての機能のほかに，鍛冶炉と考えられる焼土や鉄滓などの出土から鍛冶関係の作業場としても利用されたものと思われる。

本城跡は南北朝時代に杉原氏によって築城されたと伝えられ，約１km北側にはその本拠城とされる鷲尾山城跡が存在する。文政８（1825）年に完成した広島藩の地誌である『芸藩通志』によると，鷲尾山城の城主は杉原信平で，家ノ城跡の城主はその弟為平とされる。『福山志料』所収の建武３年(1336)「足利尊氏袖判下文」によると，多々良浜の戦い（筑前国，現在の福岡市東区）の功績によって，杉原信平に木梨荘の地頭職が与えられている。木梨荘は尾道市木ノ庄町木梨を中心としたかなり広い荘域であったと考えられている。信平は杉原氏の庶流であったが，次第に勢力を拡大し，杉原氏一族の中でも有力な地位を占めることになったようである。

本城跡が所在する場所は，独立丘陵で周囲を見渡すことができる。現在でも城跡の北側に東西を結ぶ道路，東側には南北を結ぶ道路があり，古くから交通の要衝であったものと思われる。城が築かれる以前に柱状高台土師器や大型土師器椀を使用して祭祀が行われたと考えられることからも，この地は地政学上重要な場所であったものと推察される。１郭西側は土坑中心なのに対し，東側に建物跡が集中していることから，東が正面であったものと思われる。１郭の中でも空間による性格・用途の違いがあったようである。本城跡で中心となる郭は１郭から南尾根にかけて連なっており，南と東を意識した城ということができる。なお，北西に土橋を伴う堀切があり，登城路の１つであったものと思われる。

小都隆氏によれば，城は「14 世紀に緊急時に臨時的に楯籠ることを想定した小規模城として現れ，15～16 世紀には国人領主の本拠となった中・大規模城が多く造られる。」とされている。[19] 本城跡は，山城としては早い段階の，しかも大規模な城跡であるといえる。

山城跡では比較的小規模な建物が検出されることが多いが，本城跡では庇を持つ比較的大規模な建物跡が検出され，土師質土器の皿などがまとまって出土していることから，それを使用した饗宴が行われた可能性が高い。また，奢侈品と考えられる輸入陶磁器も出土している。このことから館としての機能があったものと思われる。土師質土器などから 14 世紀中葉を中心とする城跡とすれば，時期的には杉原信平・為平兄弟がそれぞれ城を築いた時期と一致す

る。最終的に城主を特定することは困難であるが，城の規模や検出遺構・出土遺物などからみて，かなりの有力者が造った城と考えられ，出土遺物の時期や鷲尾城との位置的な関係などから，鷲尾城と密接な関わりをもって築城された城の１つと考えられる。以上のように今回の調査によって，この地域の城館研究や歴史的な様相を考えるうえで良好な資料が得られた。

註

（1）財団法人広島県教育事業団『曽川１号遺跡（G～J地区)』　2008年

（2）出土土器類については，広島県立歴史博物館鈴木康之氏のご教示を得た。

（3）柱状高台土師質土器と呼ばれることが多いが，古代末から中世初期の遺物と考えられるため，土師質土器ではなく，土師器とした。同様に本遺跡出土の高台付大型椀についても，古代末の時期である可能性も考えて，土師質土器ではなく，土師器と表記した。

（4）八峠興「柱状高台考」『中世土器研究論集－中世土器研究会 20 周年記念論集－』　中世土器研究会　2001年

（5）潮見浩「大朝町・千代田町の遺跡・遺物」『龍岩・古保利・上春木埋蔵文化財発掘調査報告書』　龍岩・古保利埋蔵文化財発掘調査団　1976年

（6）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『千代田流通団地造成事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書　Ⅲ』1998年

（7）財団法人広島県教育事業団『牛の皮城跡・曽川２号遺跡』　2005年

（8）鈴木康之「土師質土器の編年」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告』Ⅴ　広島県教育委員会　1996年

（9）篠原芳秀「尾道市浄土寺所蔵の土師質土器」『草戸千軒』No. 114　広島県草戸千軒町遺跡調査研究所　1982年

(10) 間壁忠彦「備前焼」『考古学ライブラリー』60　ニュー・サイエンス社　1991年

(11) 鈴木康之「土器・陶磁器の出土傾向」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告』Ⅴ　広島県教育委員会　1996年

(12) 藤澤良祐『中世瀬戸窯の研究』　高志書院　2008年

(13) 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4　九州歴史資料館　1978年

(14) 小都隆『中世城館跡の考古学的研究』　渓水社　2005年

(15) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『三太刀遺跡（Ⅰ)』　2003年

(16) 広島県教育委員会『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』　1977年

(17) 広島県教育委員会『恵下城跡発掘調査概報』　1978年

(18) 塚土古墳発掘調査団『朝日ゴルフクラブ広島コース建設予定地内遺跡発掘調査概報』　1989年

(19) 註(14)と同じ

図版１

a　家ノ城跡発掘調査後遠景
（北東上空から）

b　第３・４次調査区調査後
全景（北上空から）

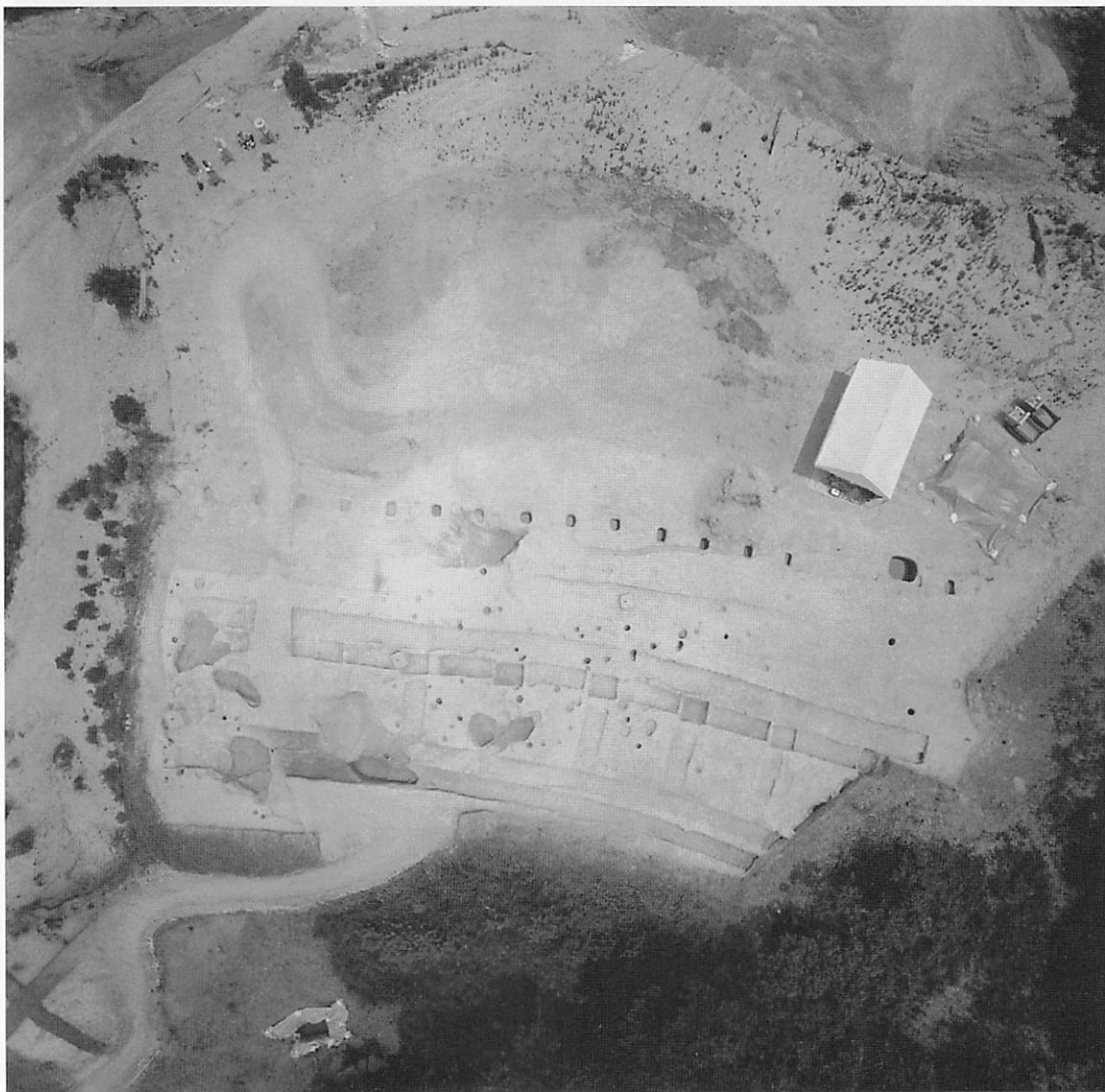
図版２

a　第３・４次調査区調査後
全景（直上から）

b　１郭東半部（第３・４次
調査区）完掘全景
（北上空から）

図版３

a　第５次調査区調査後全景
（北西上空から）



b　1郭西半部（第５次調査区）完掘全景
（直上から，上が東）

図版４

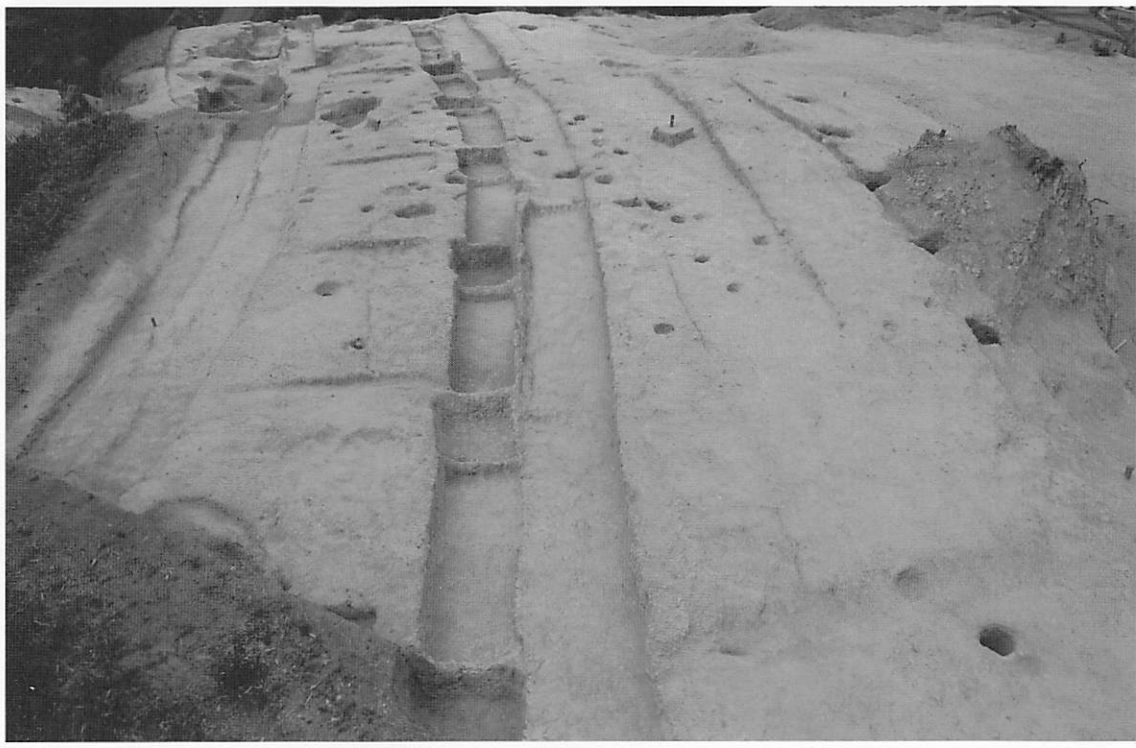
a　第５次調査前遠景
（北東から）

b　第５次調査前近景
（北東から）

c　第５次調査後近景
（北から）

図版５

a　１郭東半部（第３・４次調査区）完掘状況（南から）



b　1郭西半部（第５次調査区）完掘状況（南西から）

c　1郭西半部（第５次調査区）完掘状況（南東から）

図版６

a　ＳＢ１全景
（北東から）

b　ＳＢ１西側根石列検出状況（北東から）

c　ＳＢ２・ＳＸ２検出状況
（西から）

a　ＳＸ２・ＳＫ５土層断面
（南西から）

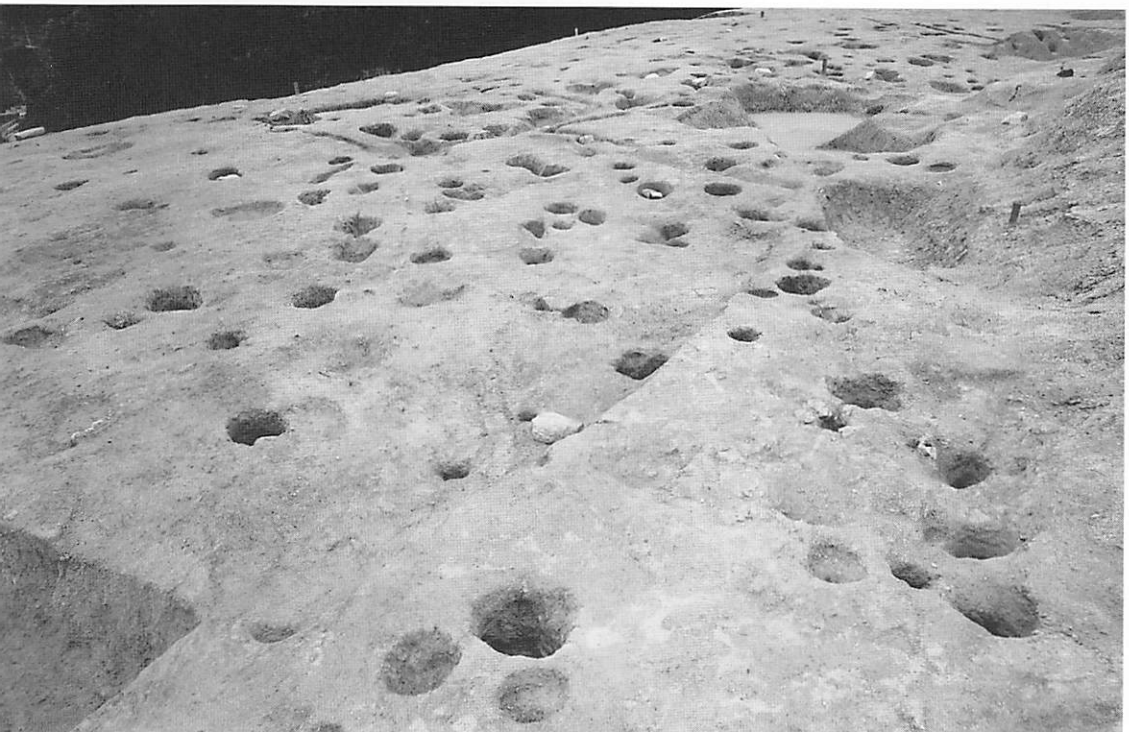
b　焼土１検出状況
（南西から）

c　焼土２検出状況
（南から）

図版８

a　ＳＢ３全景
（北から）

b　ＳＢ３全景
（北から）



c　ＳＢ４全景
（北から）

a　焼土４・ＳＢ１-Ｐ２
土層断面（南西から）

b　焼土４完掘全景
（北西から）

c　ＳＢ５・ＳＸ１検出状況
（北から）

図版10

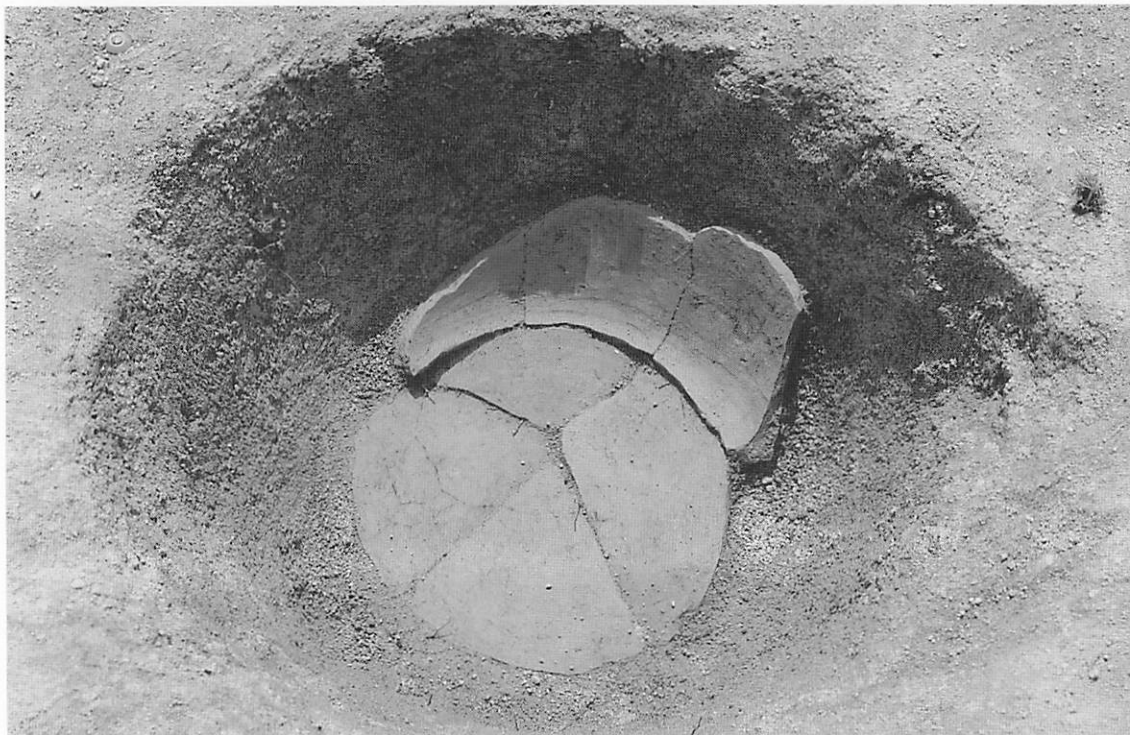
a　ＳＡ１全景
（南東から）

b　ＳＫ２粘土部分半裁
（南から）

c　ＳＫ８礫検出状況
（南から）

a　ＳＫ９礫検出状況
（東から）

b　ＳＫ10・13・14完掘状況
（南西から）



c　ＳＫ14遺物出土状況
（西から）

図版12

a　ＳＫ11検出状況
（北東から）

b　ＳＫ12礫検出状況
（西から）

c　ＳＫ21完掘状況
（南東から）

a　ＳＫ25礫検出状況
（南から）

b　ＳＫ32完掘状況
（北西から）

c　ＳＫ33遺物出土状況
（東から）

図版14

a　ＳＫ33・34完掘状況
（西から）

b　ＳＫ32完掘状況
（北西から）

c　ＳＫ33遺物出土状況
（東から）

a　ＳＫ36・37完掘状況
（東から）

b　ＳＫ38完掘状況
（南東から）

c　ＳＫ39完掘状況
（北西から）

図版16

a　ＳＫ40完掘状況
（南東から）

b　ＳＫ41・42完掘状況
（南東から）

c　ＳＸ12・13完掘状況
（北から）

a　北東尾根完掘状況
（西から）

b　北東尾根完掘状況
（南西から）

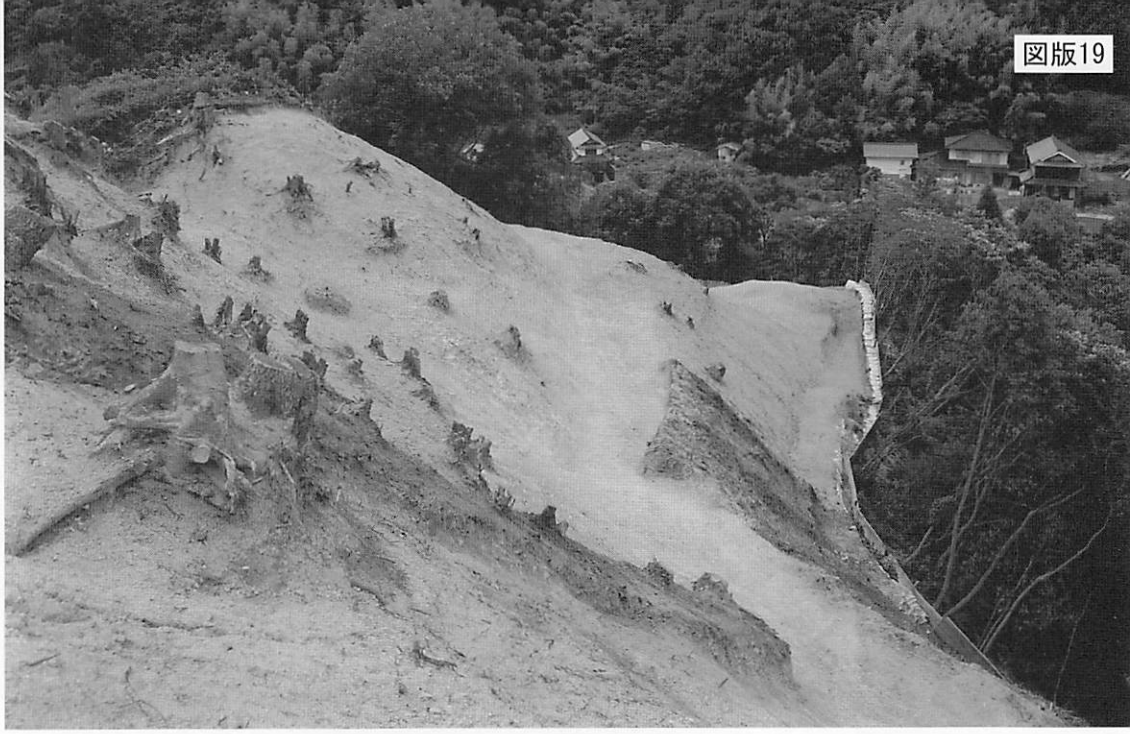
c　北東尾根完掘状況
（北から）

図版18

a　北東尾根平坦面１土層断面（東から）

b　北東尾根平坦面２土層断面（東から）

c　北東尾根平坦面３土層断面（東から）



a　北尾根完掘状況
（東から）

b　北尾根完掘状況
（南から）

c　北尾根平坦面５土層断面
（東から）

図版20

a　北尾根堀切２土層断面
（東から）

b　北尾根堀切２・平坦面７
完掘状況（南から）

c　北側平坦面４・土橋完掘
状況（南東から）

a　堀切１土橋部分
（北東から）

b　堀切1土層断面
（北東から）

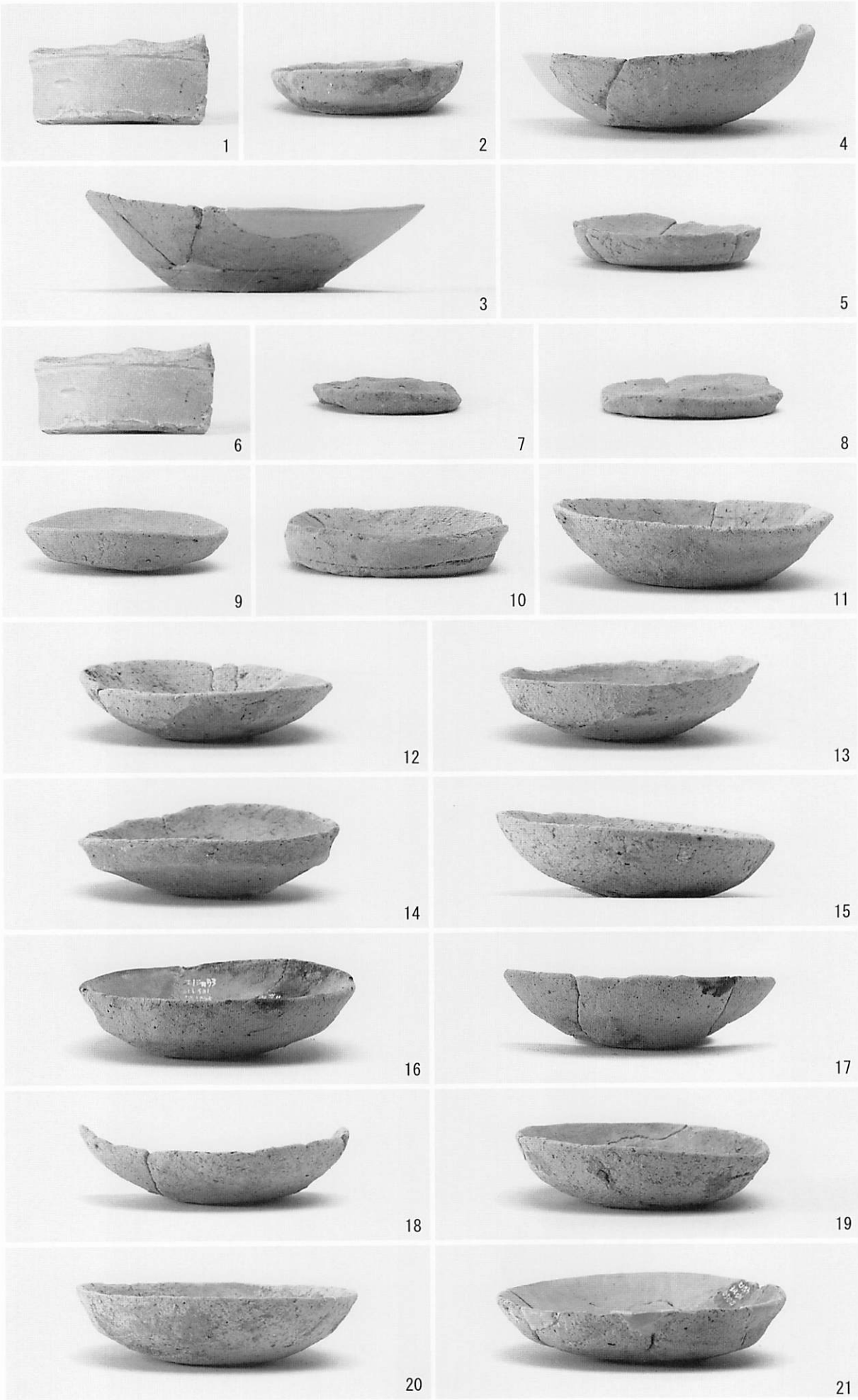
c　堀切１北東部
（北東から）

図版22

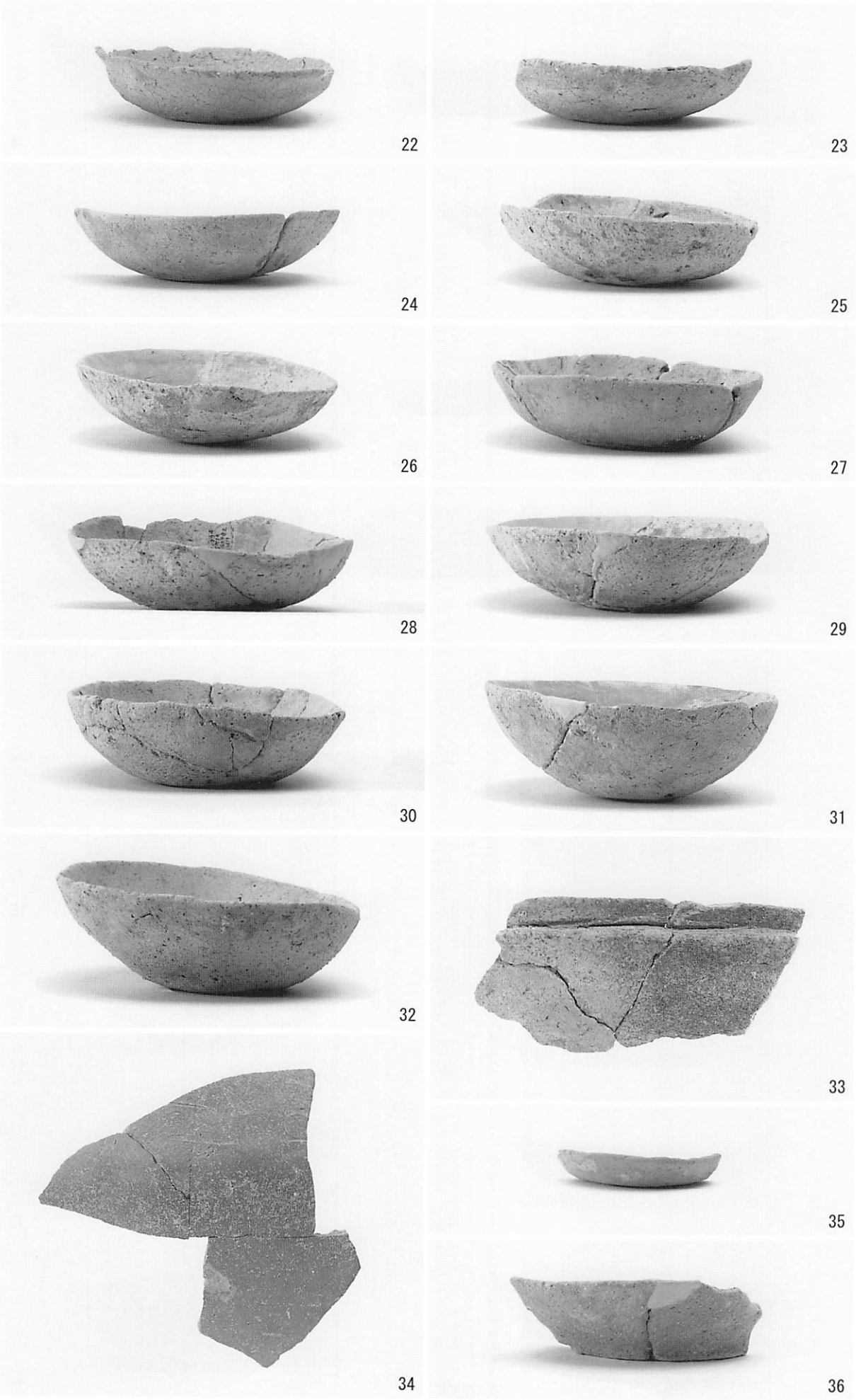
a　北西尾根完掘状況
（南東から）

b　1郭西半部調査風景
（南西から）

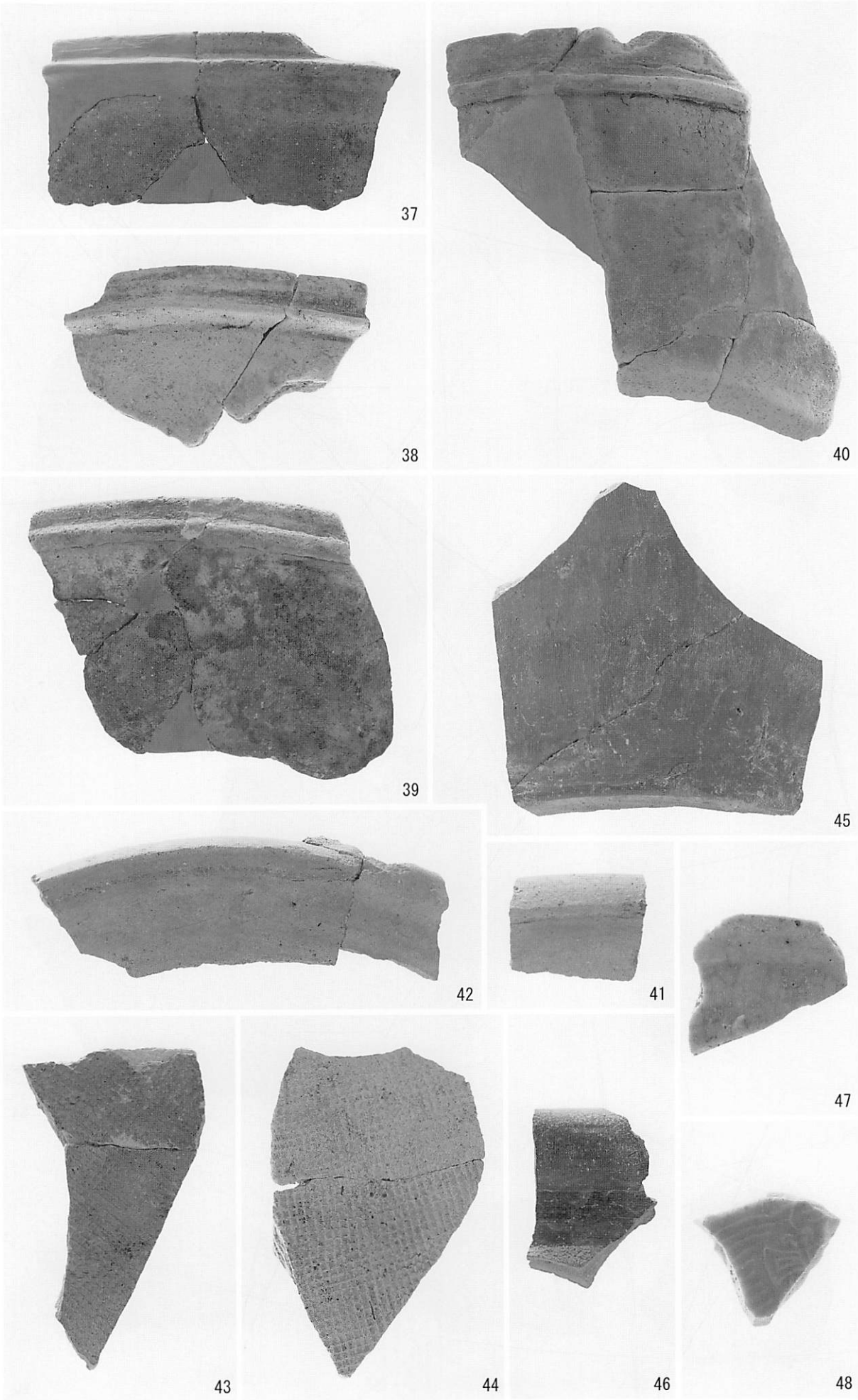
c　家ノ城跡から鷲尾山城を
望む（南から）



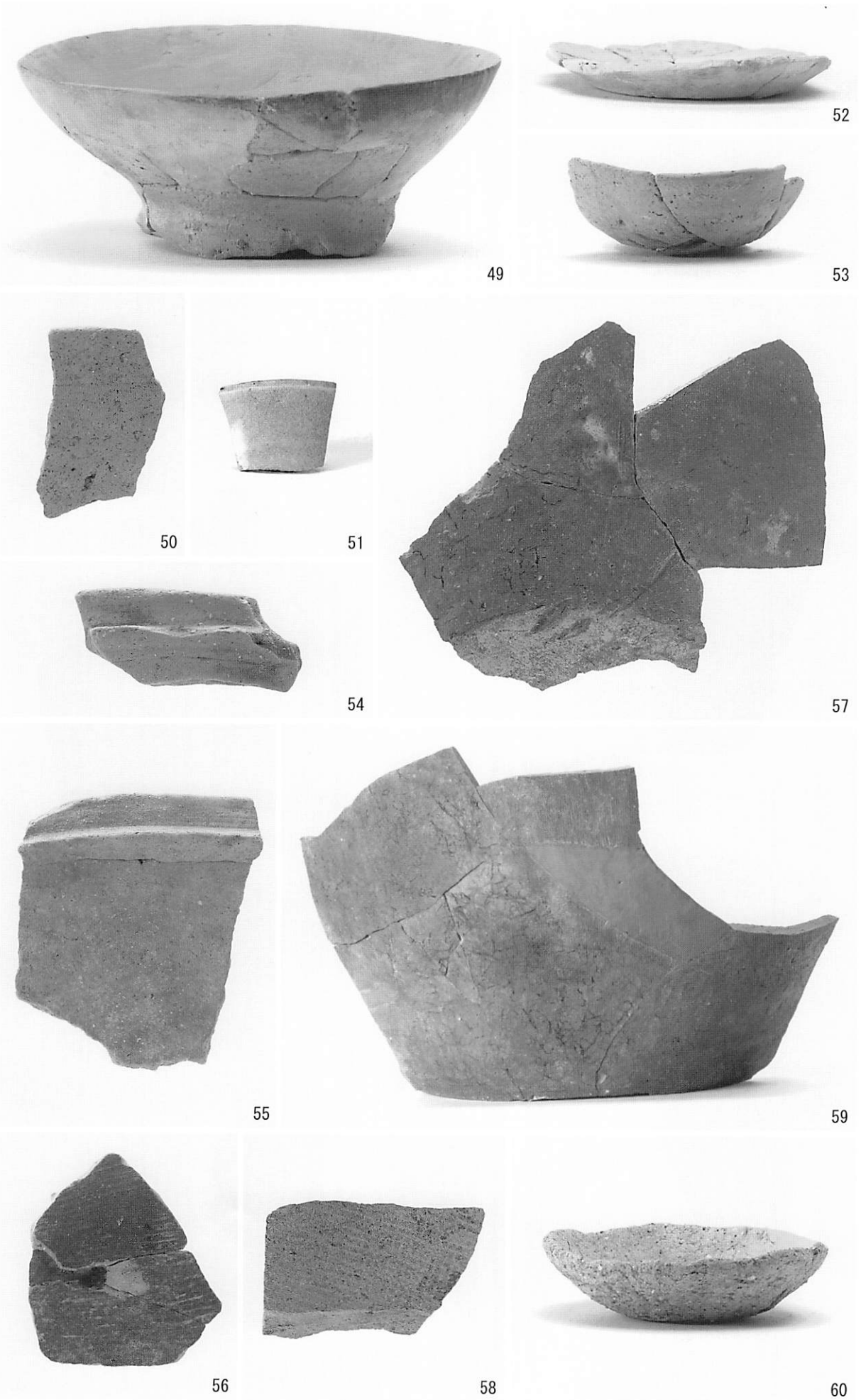
1郭周辺出土土器類（1）（ＳＢ２・４，ＳＸ１）



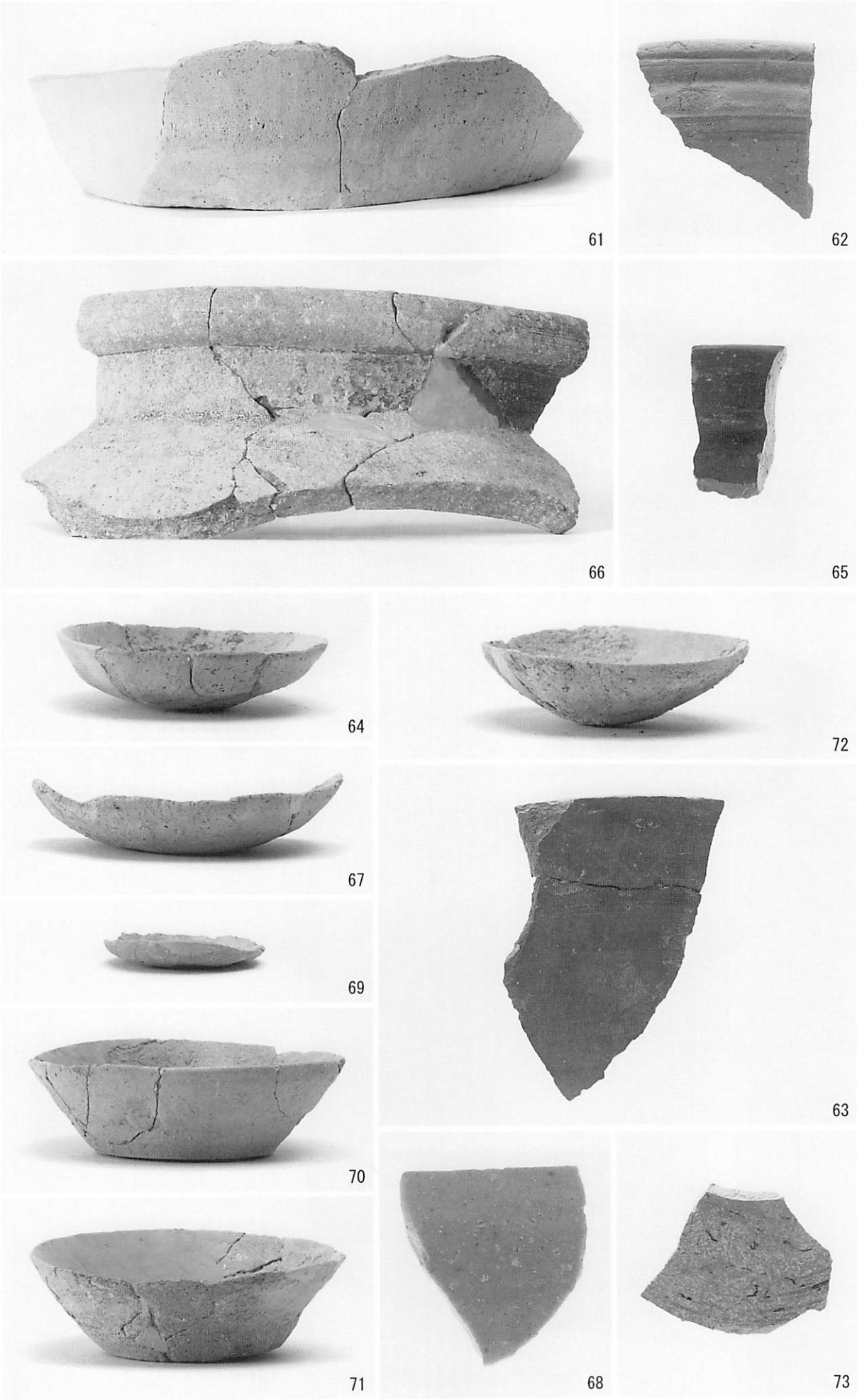
1郭周辺出土土器類（2）（ＳＸ１・２）



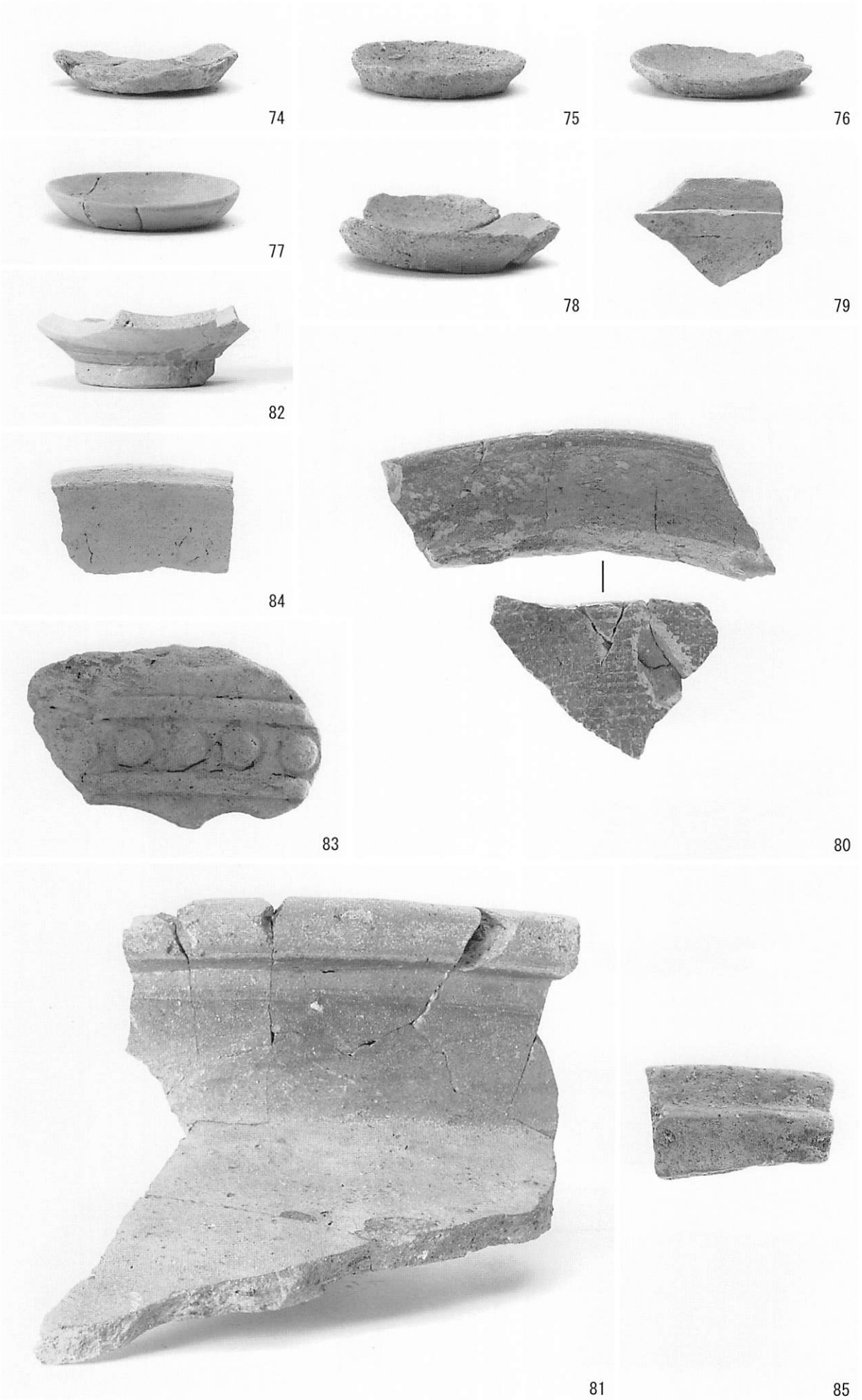
1郭周辺出土土器類（3）（ＳＸ２）



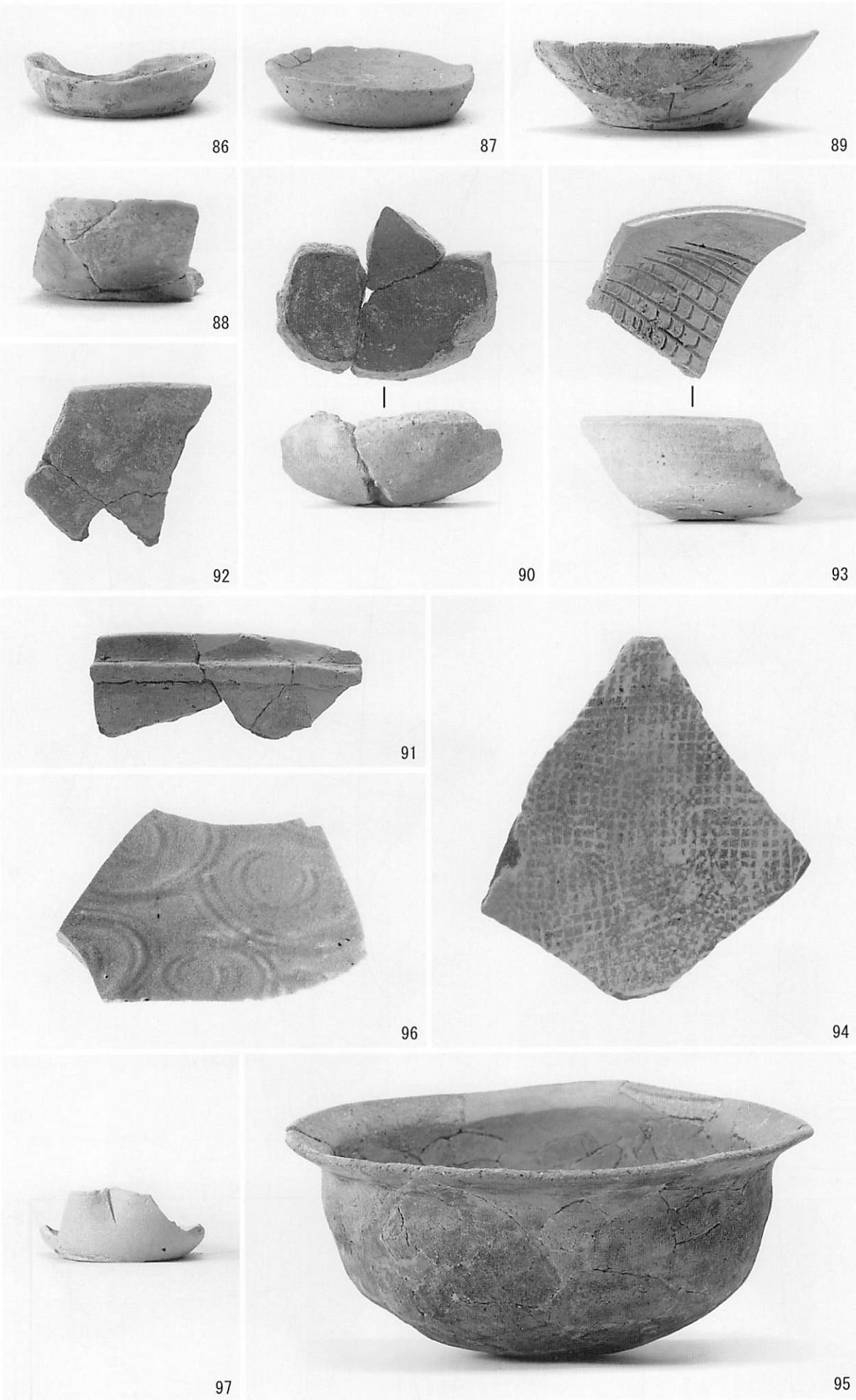
1郭周辺出土土器類（4）（ＳＸ13，ＳＫ２・５・11・12）



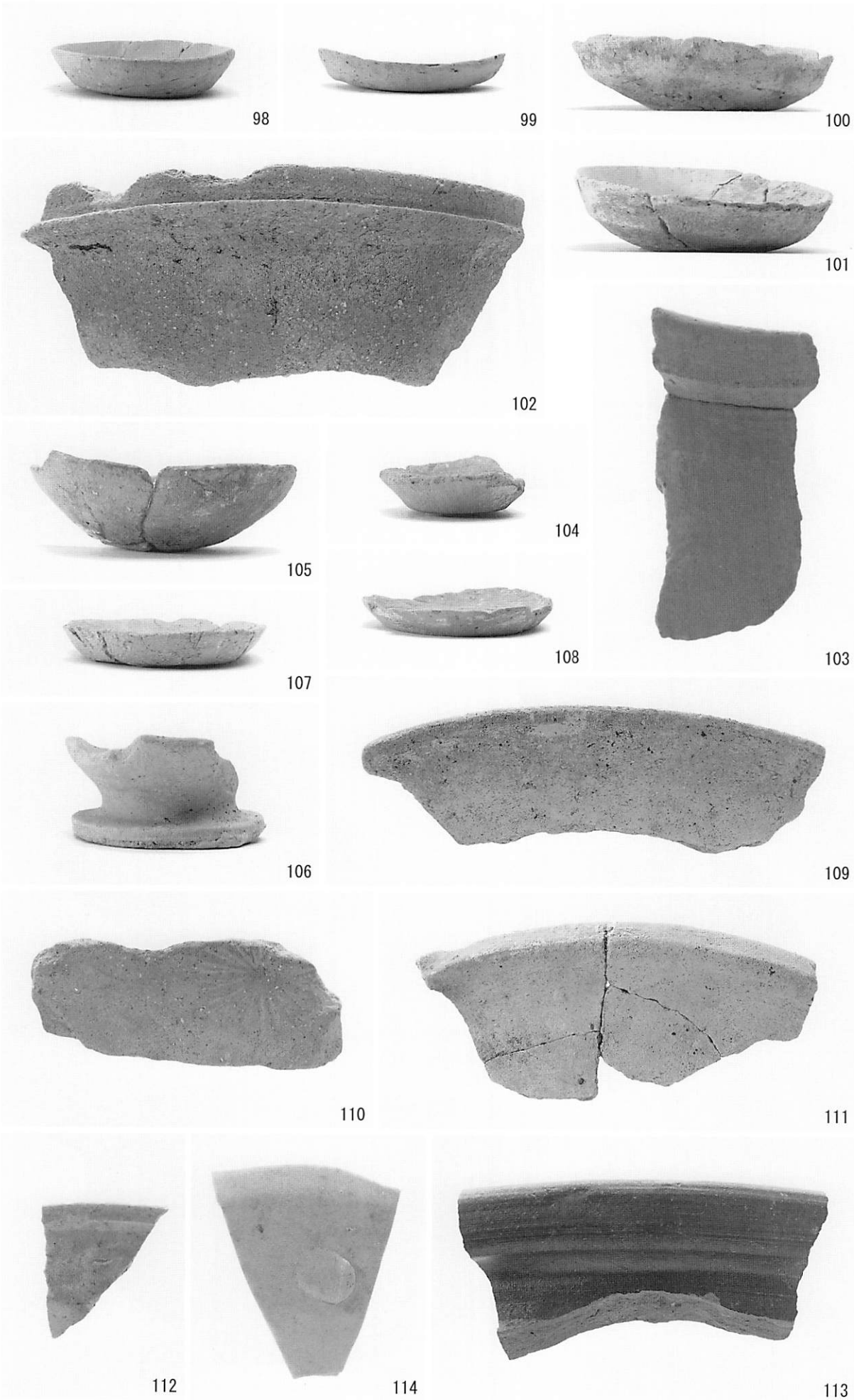
1郭周辺出土土器類（5）（ＳＫ14・21・25・27～30・33・35）



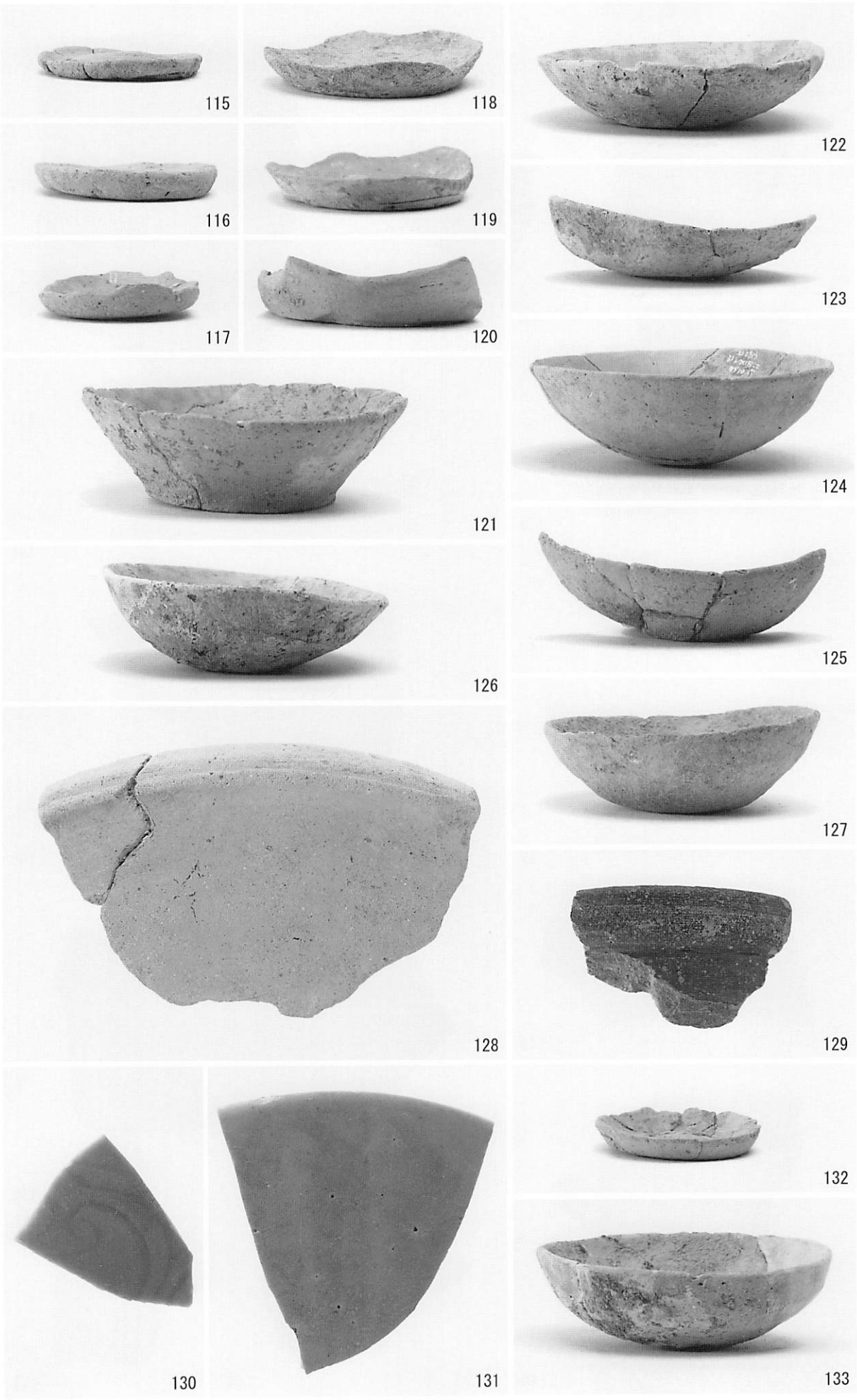
1郭周辺出土土器類（6）（ＳＫ36～38）



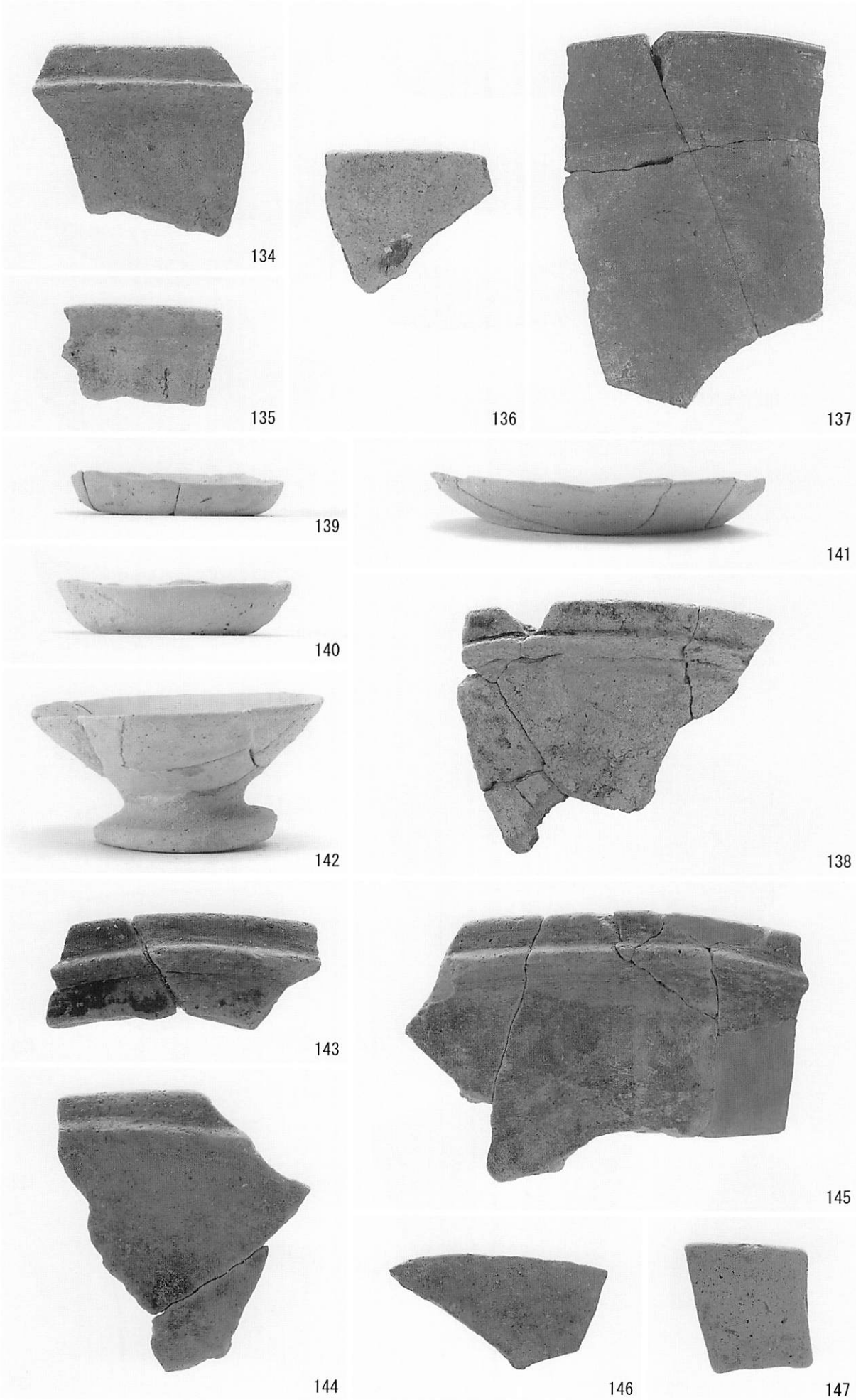
1郭周辺出土土器類（7）（ＳＫ39，ＳＤ11・12）



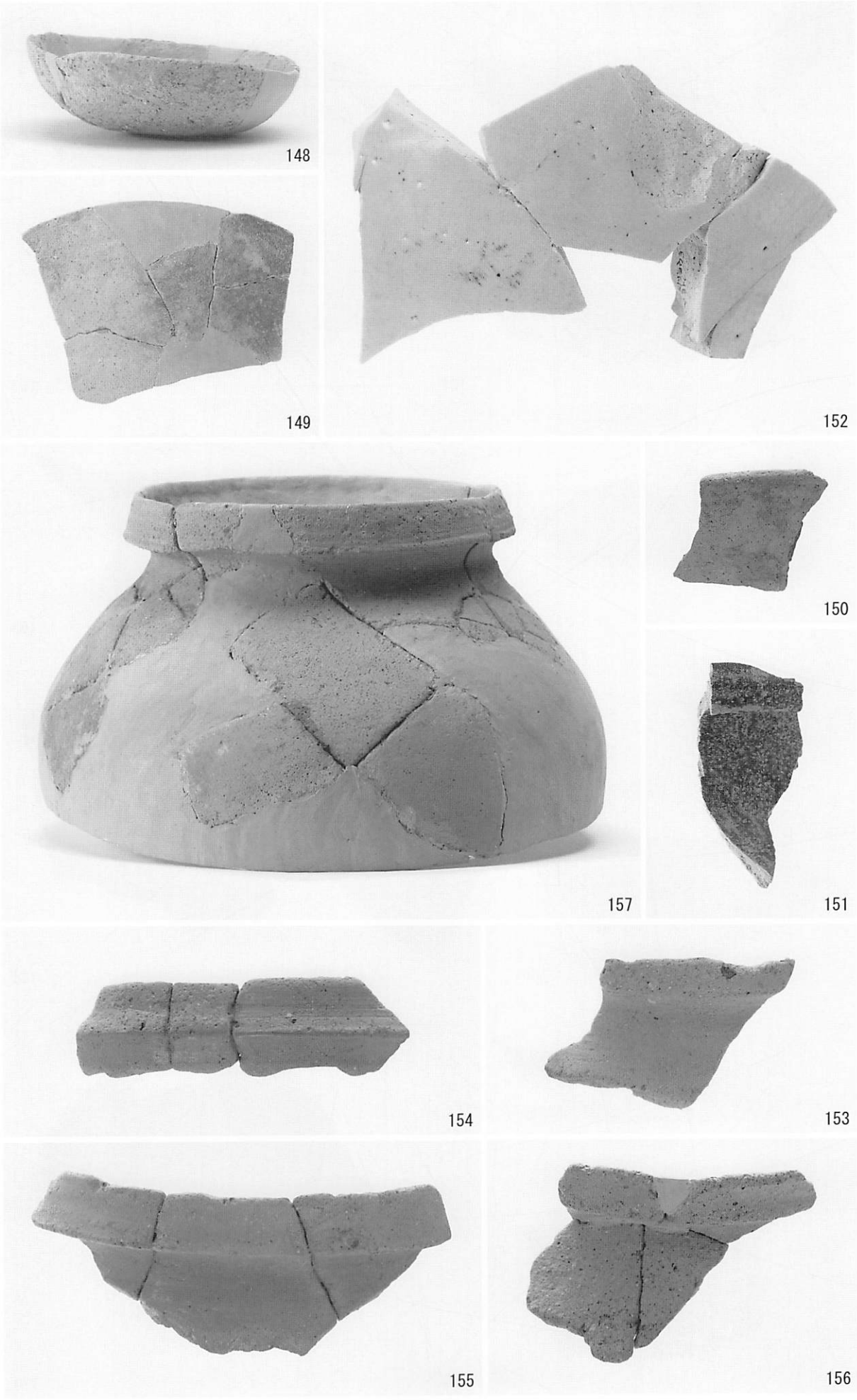
1郭周辺出土土器類（8）（1郭ピット，トレンチ1・2）



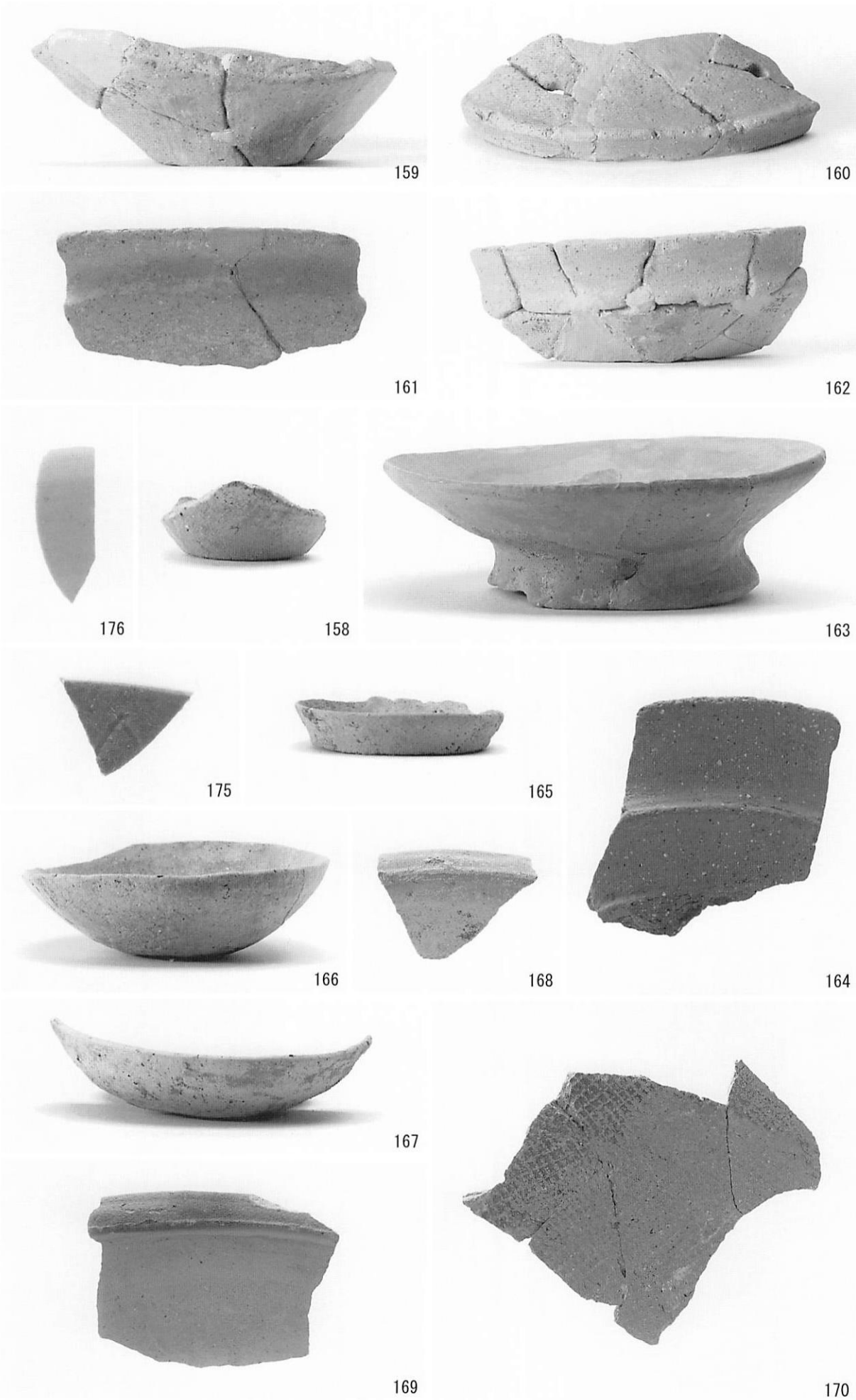
1郭周辺出土土器類（9）（トレンチ3，F7，G8区）



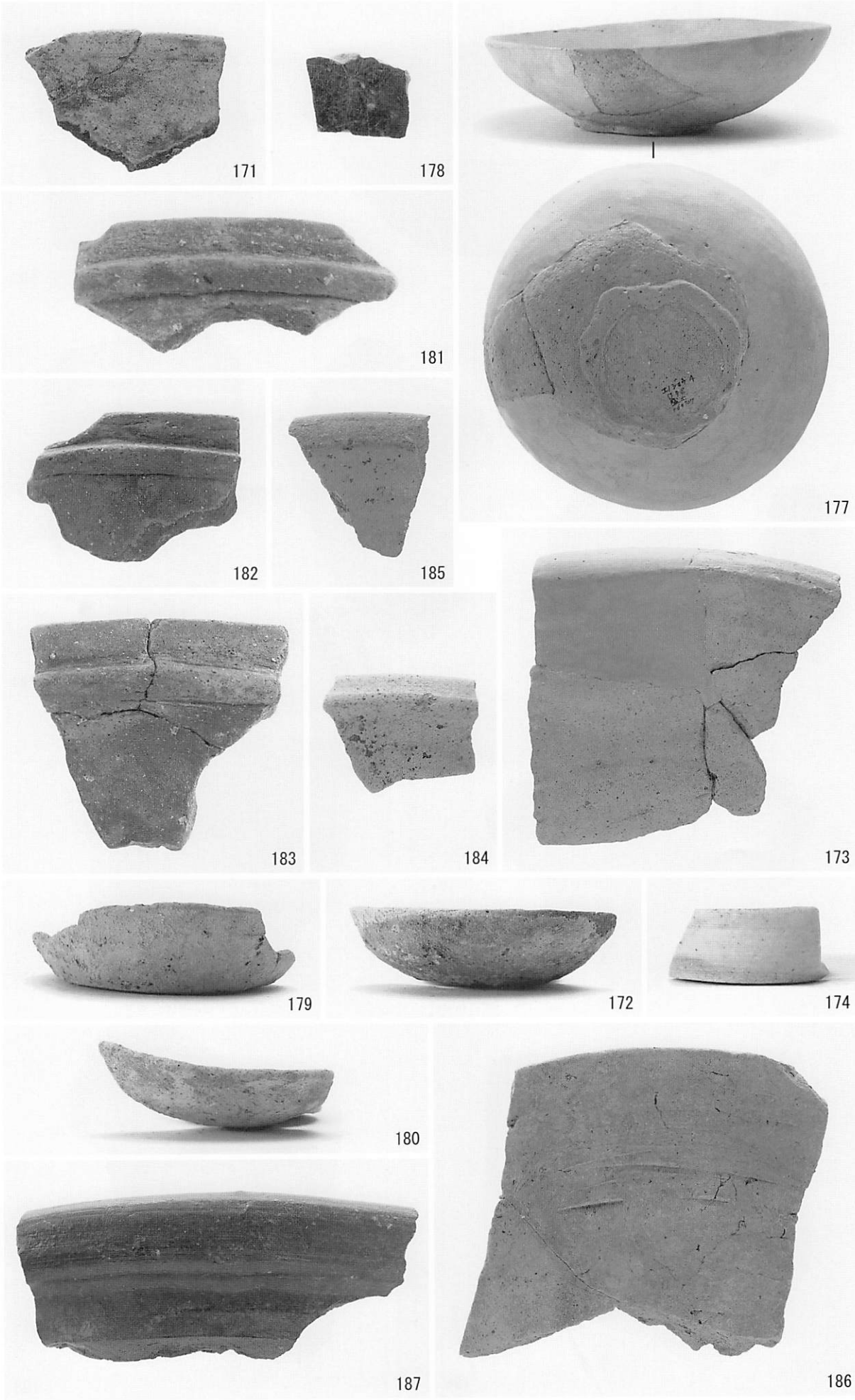
1郭周辺出土土器類（10）（G８～12区）



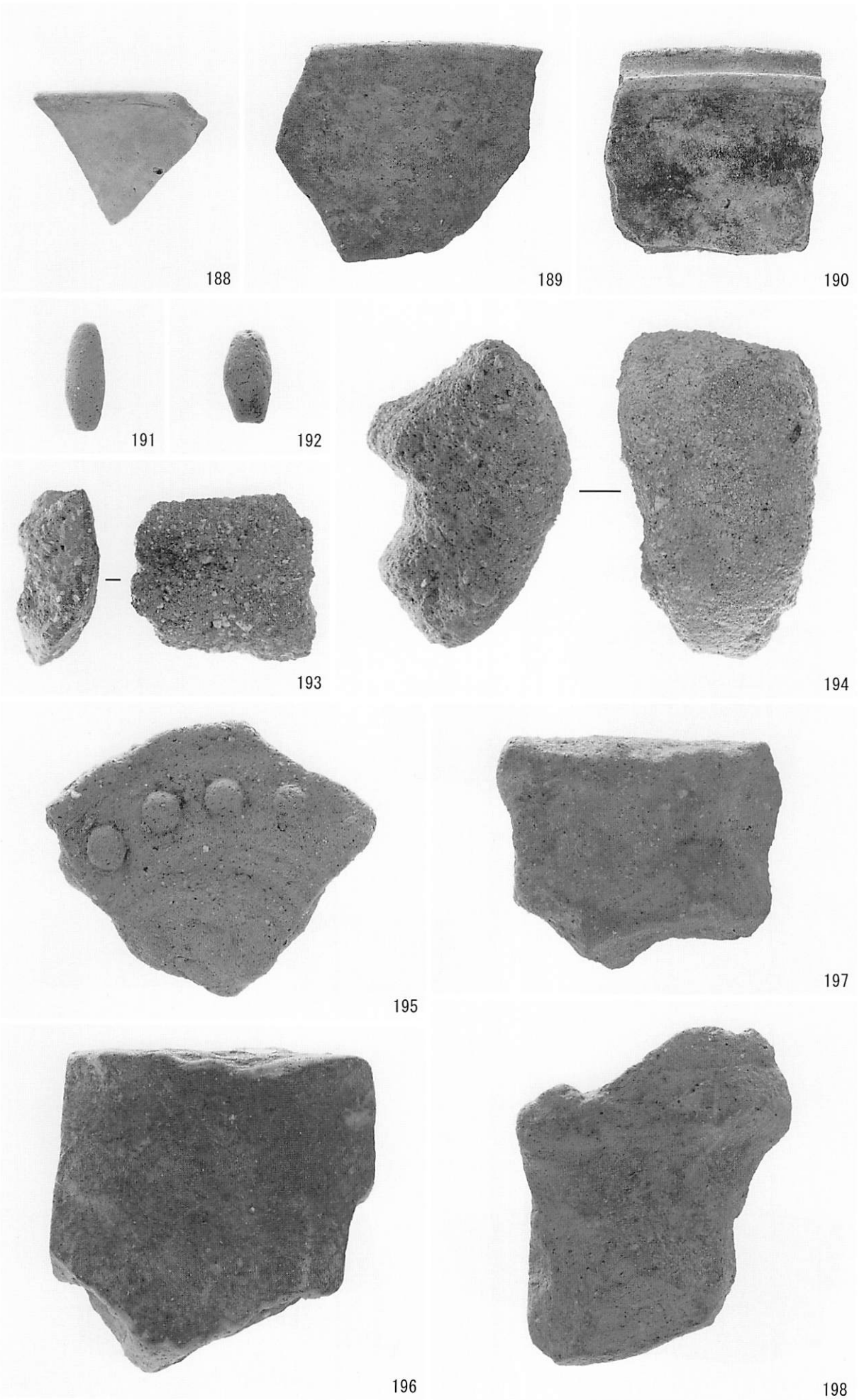
1 郭周辺出土土器類（11）（G 13，H 11・13 区）



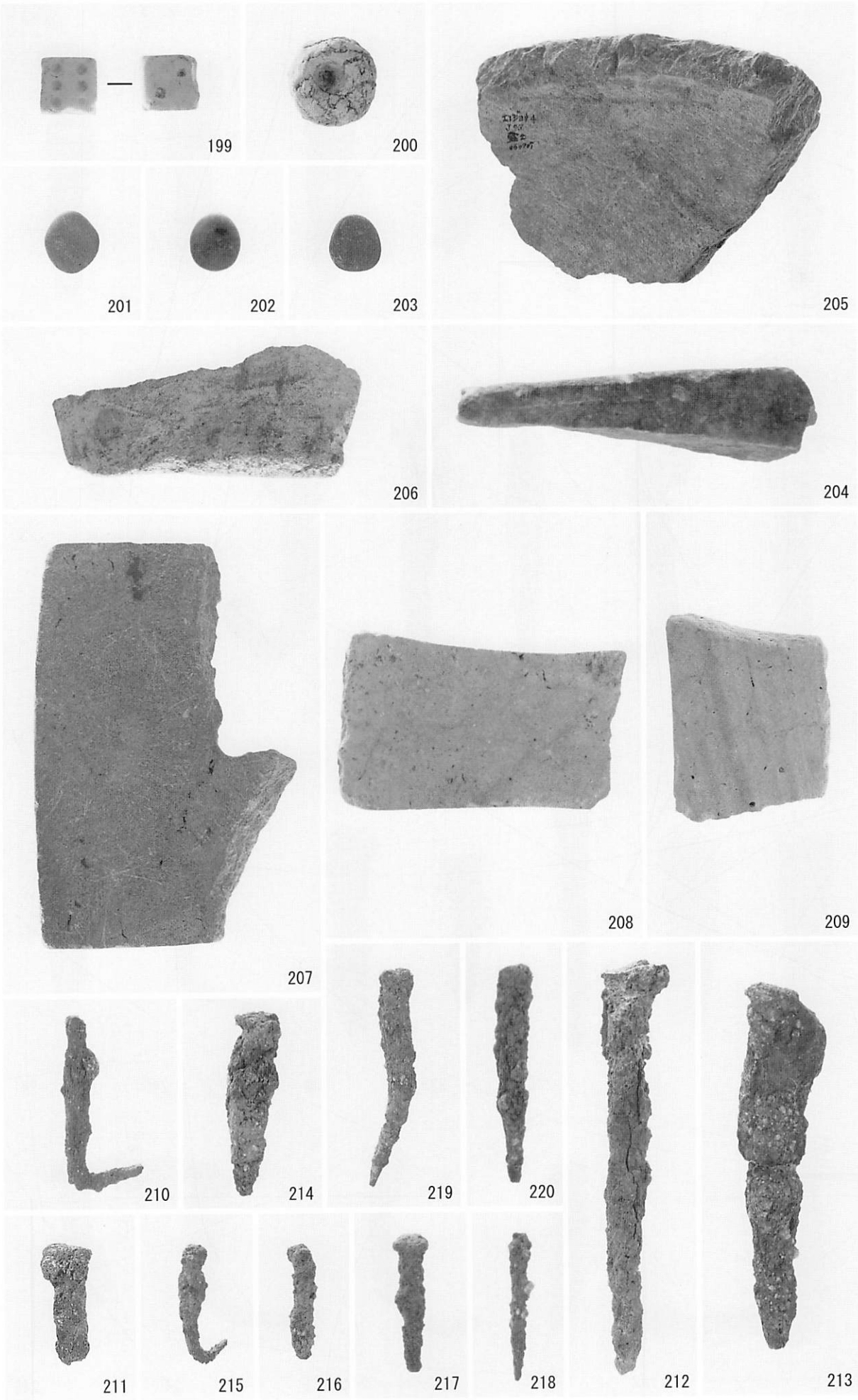
1郭周辺出土土器類（12）（H 13・14，Ⅰ 10・11 区）



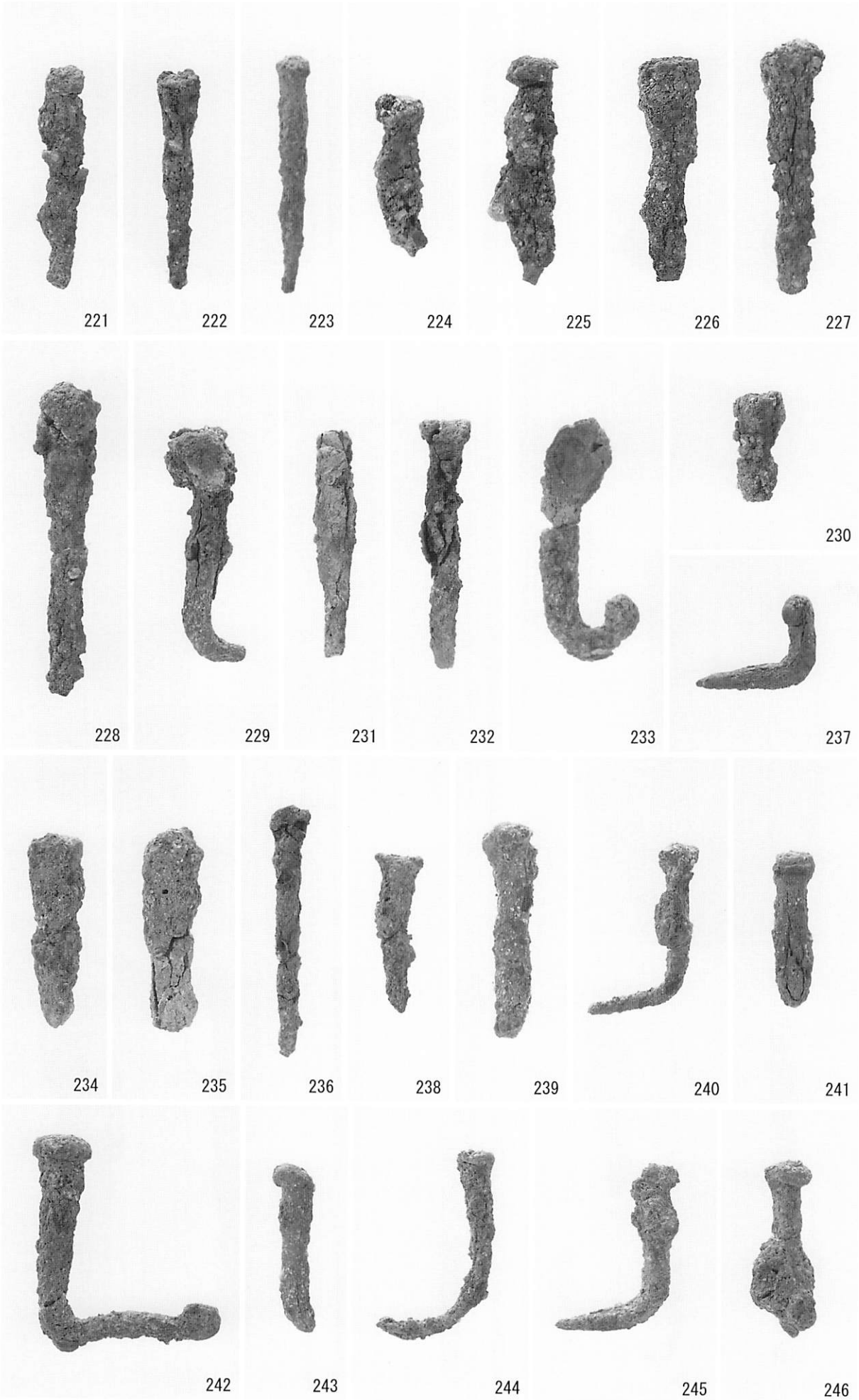
1郭周辺出土土器類（13）（Ⅰ 12，Ｊ９・10区，１郭第４次調査区，１郭東側切岸）



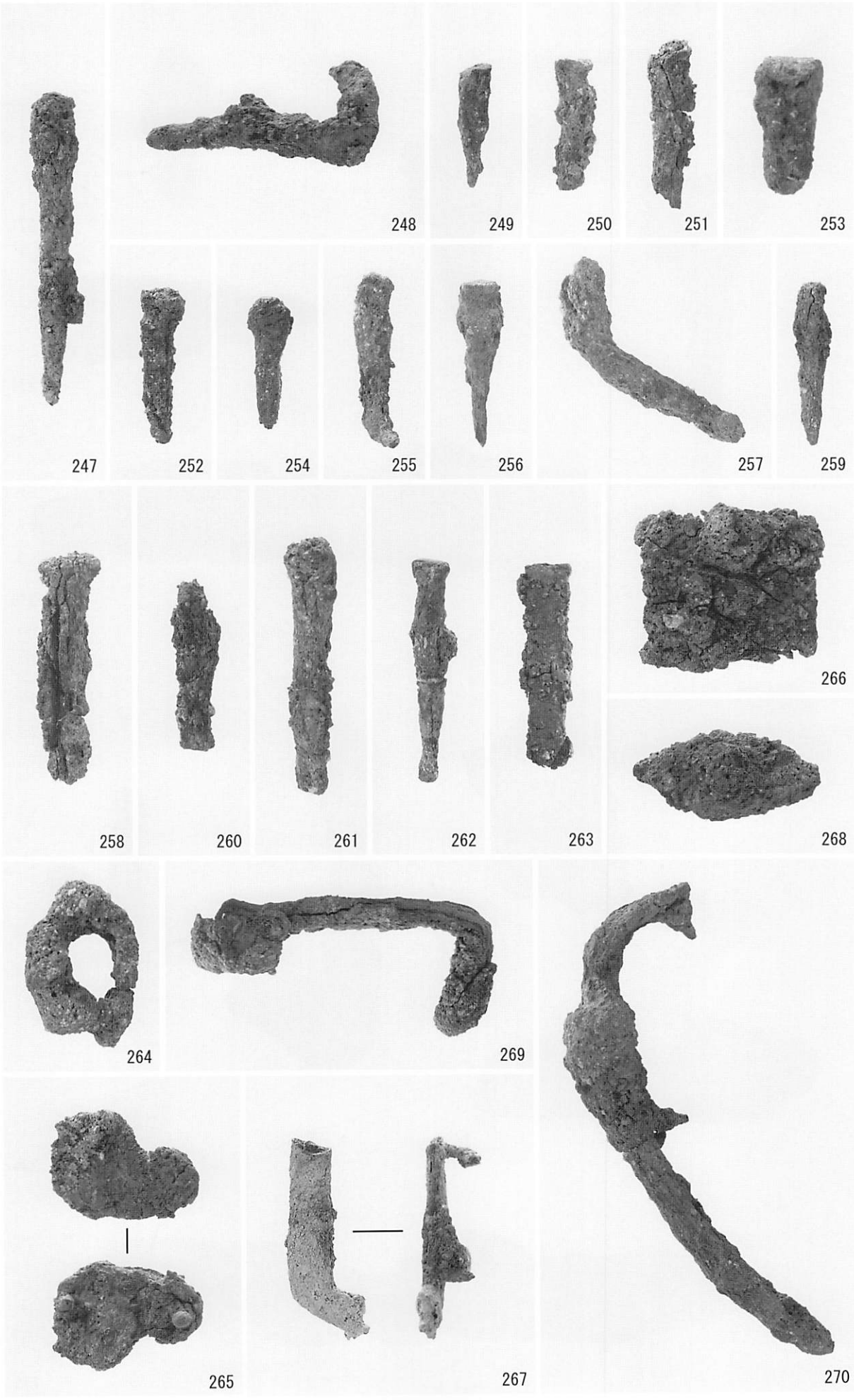
1郭周辺出土土器類（14）（堀切1，北尾根，北西尾根），1郭周辺出土土製品，1郭周辺出土瓦



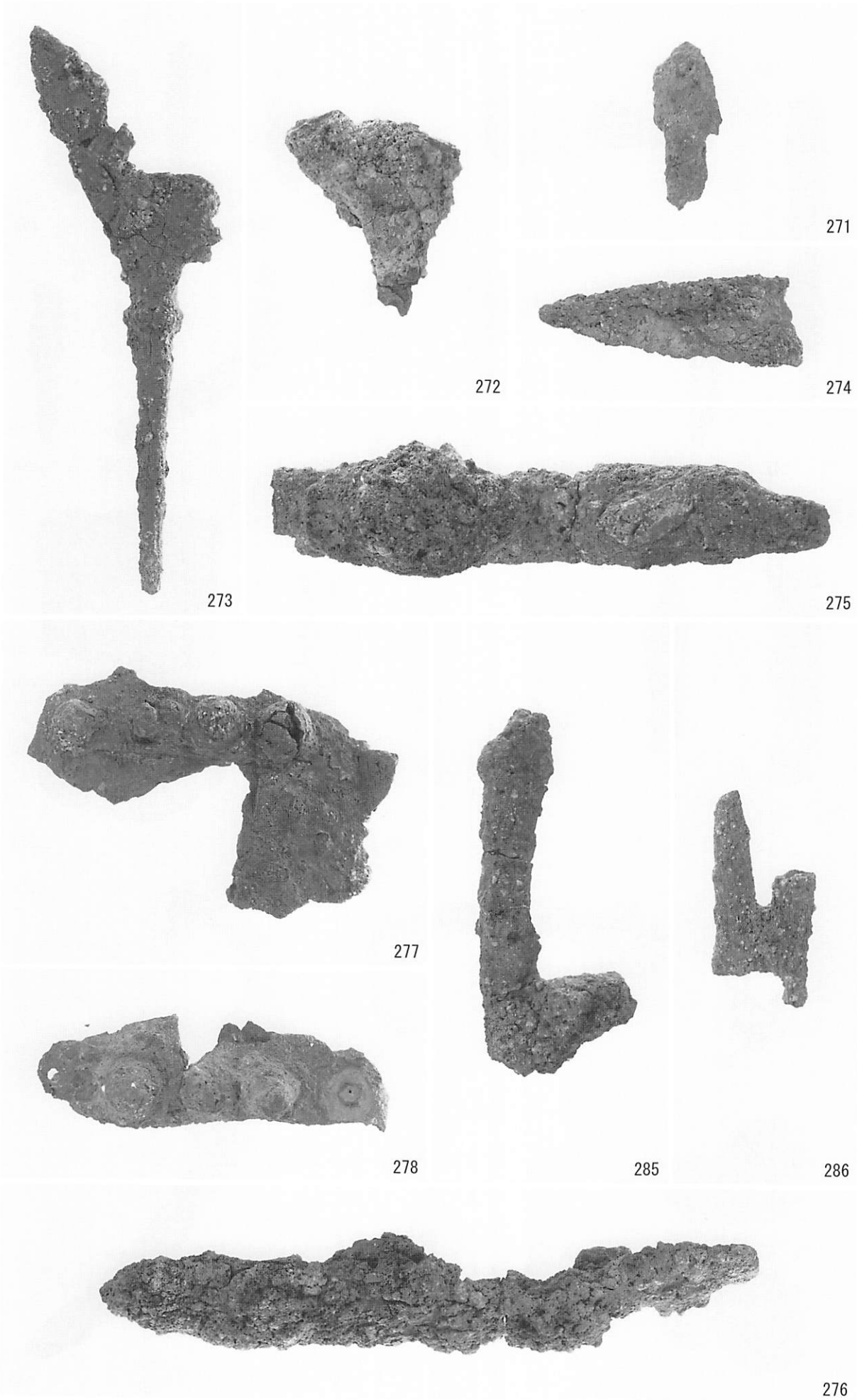
1郭周辺出土石製品，1郭周辺出土鉄製品（1）


221
222
223
224
225
226
227
228
229
231
232
233
230
237
234
235
236
238
239
240
241
242
243
244
245
246

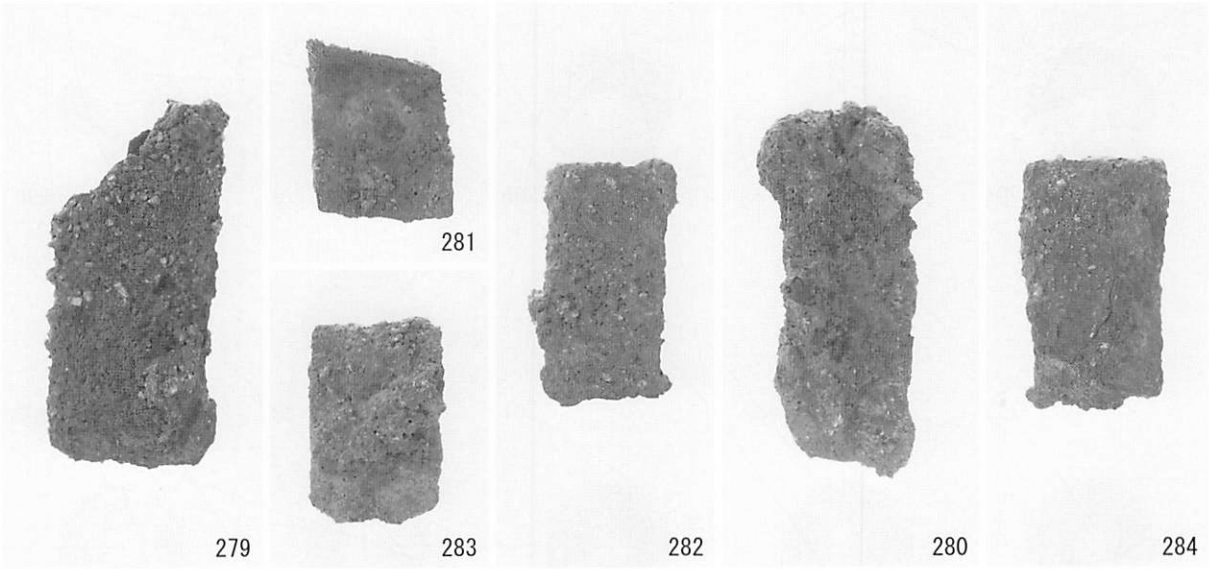
1郭周辺出土鉄製品（2）

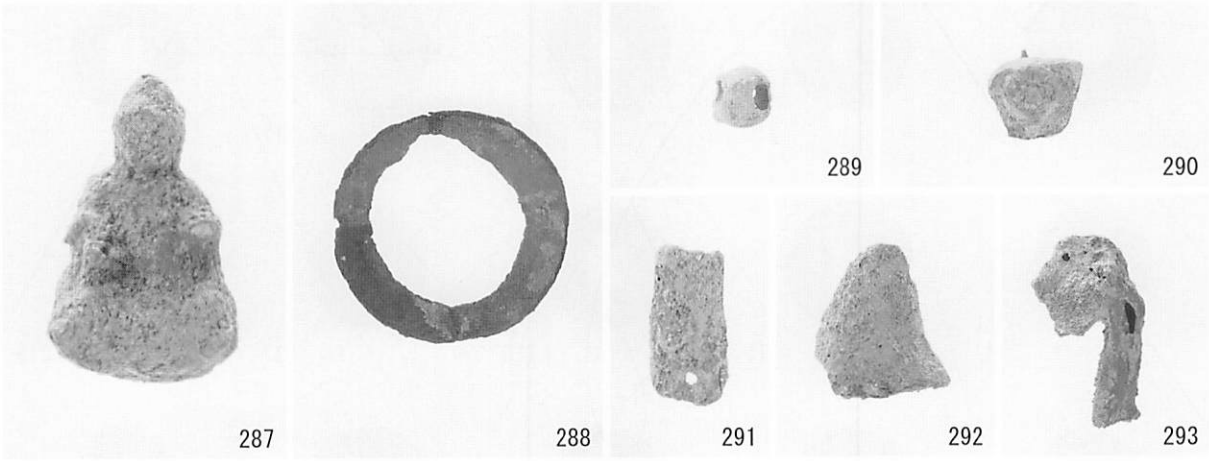

247
248
249
250
251
253
252
254
255
256
257
259
258
260
261
262
263
266
268
264
269
265
267
270

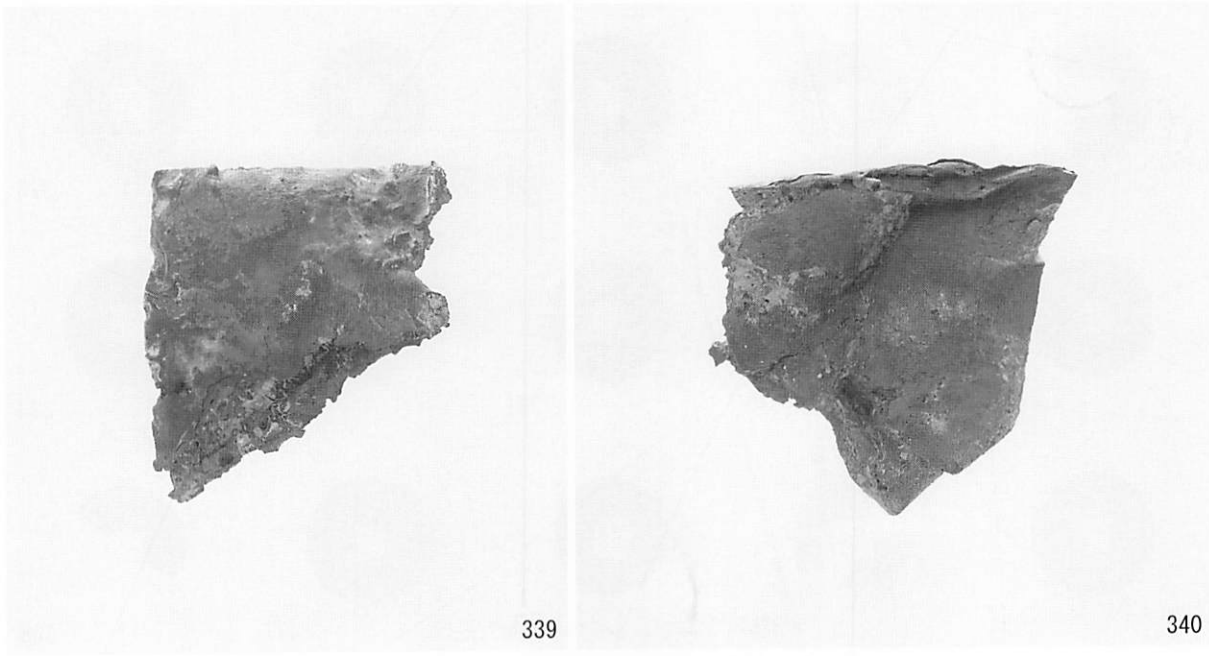
1郭周辺出土鉄製品（3）



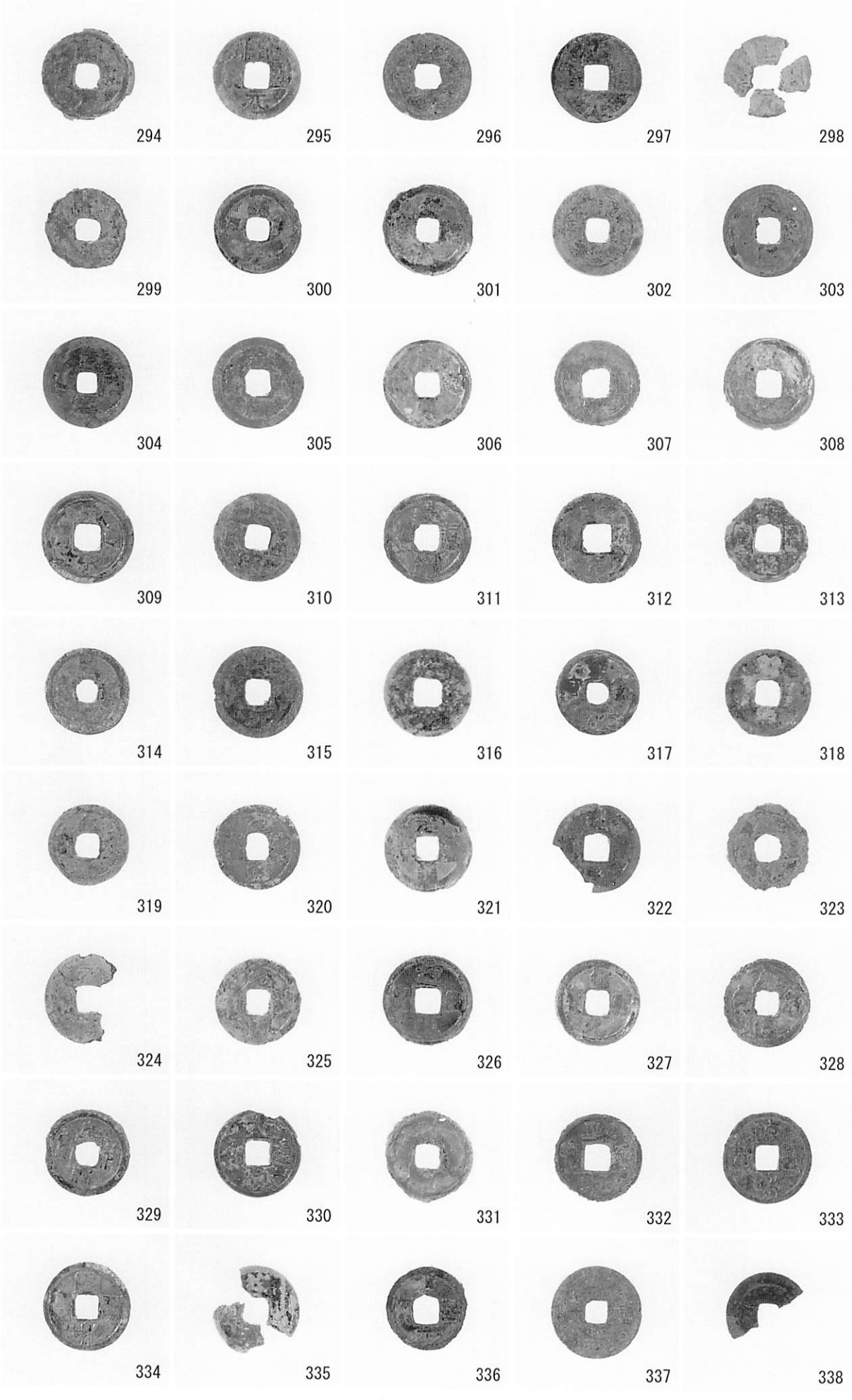
1 郭周辺出土鉄製品（4）







1郭周辺出土鉄製品（5），1郭周辺出土銅製品，1郭周辺出土漆紙


294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338

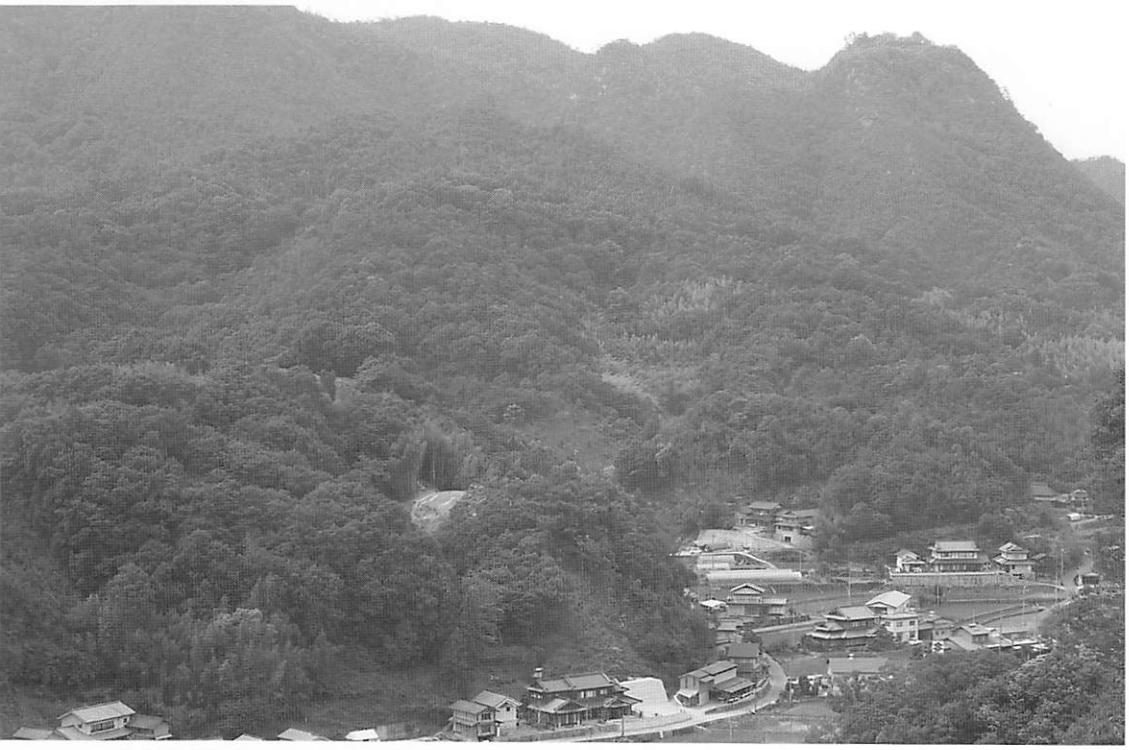
1 郭周辺出土古銭

a　南東尾根南半部（第１次調査区）調査後遠景（南上空から）

b　南東尾根南半部（第１次調査区）完掘全景（南東上空から）

図版44

a　家ノ城跡（第２次調査後）
遠景
（北・鷲尾山城跡から）



b　南東尾根北半部（第２次
調査区）調査後遠景
（南から）

c　南東尾根南半部（第１次
調査区）完掘全景
（北から）

a　南東尾根南半部（第１次調査区）完掘全景（南から）

b　南東尾根北半部（第２次調査区）完掘全景（北から）

c　南東尾根北半部（第２次調査区）完掘全景（南から）

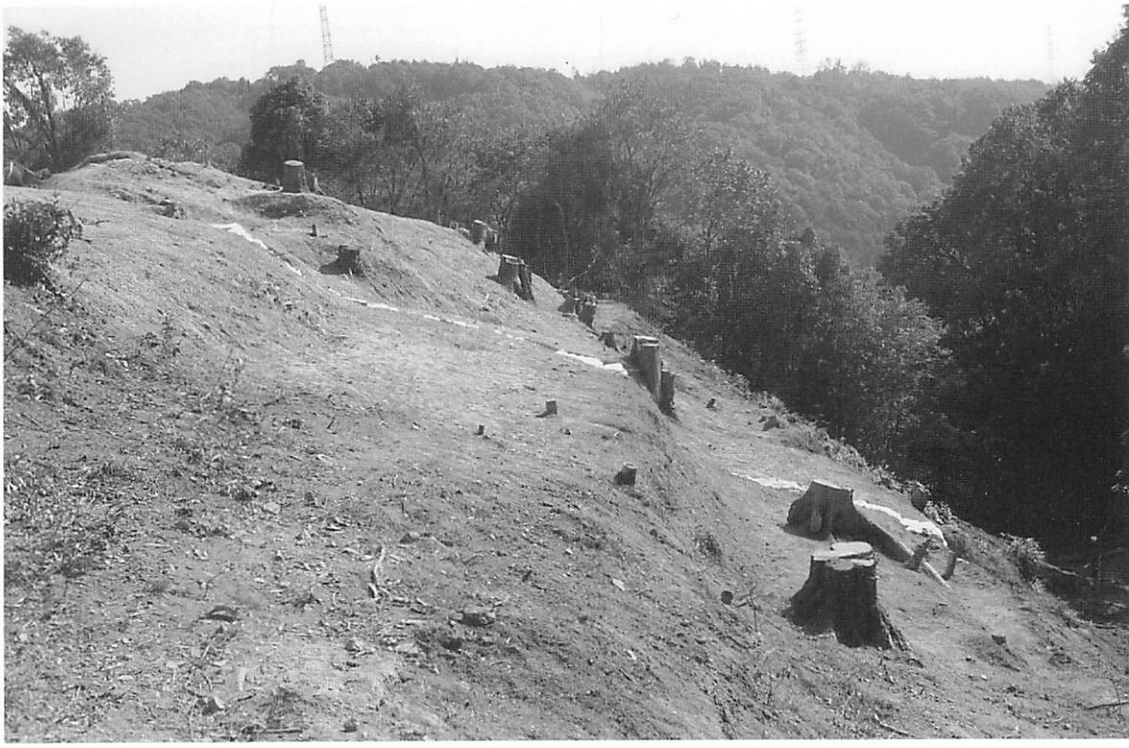
図版46

a　南東尾根平坦面１
（北から）

b　南東尾根平坦面２
（北から）

c　南東尾根平坦面３
（北東から）

a　南東尾根平坦面４
（北から）



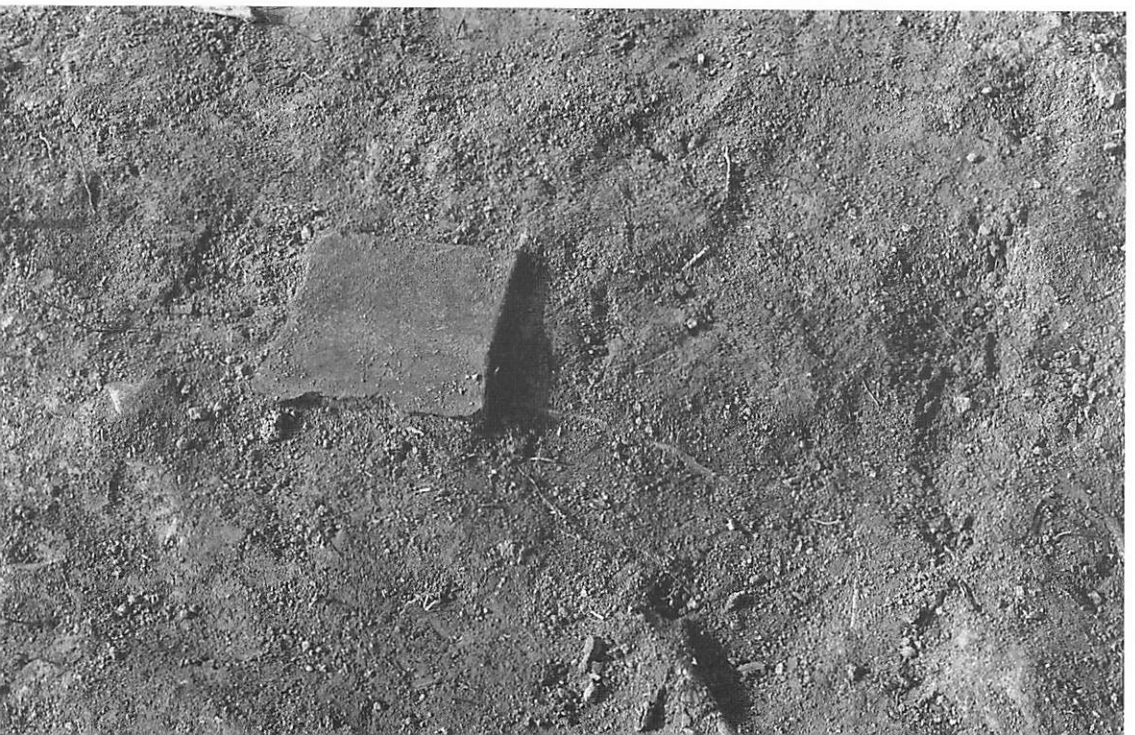
b　南東尾根平坦面４・５
（北から）

c　南東尾根ＳＸ１完掘状況
（東から）

図版48

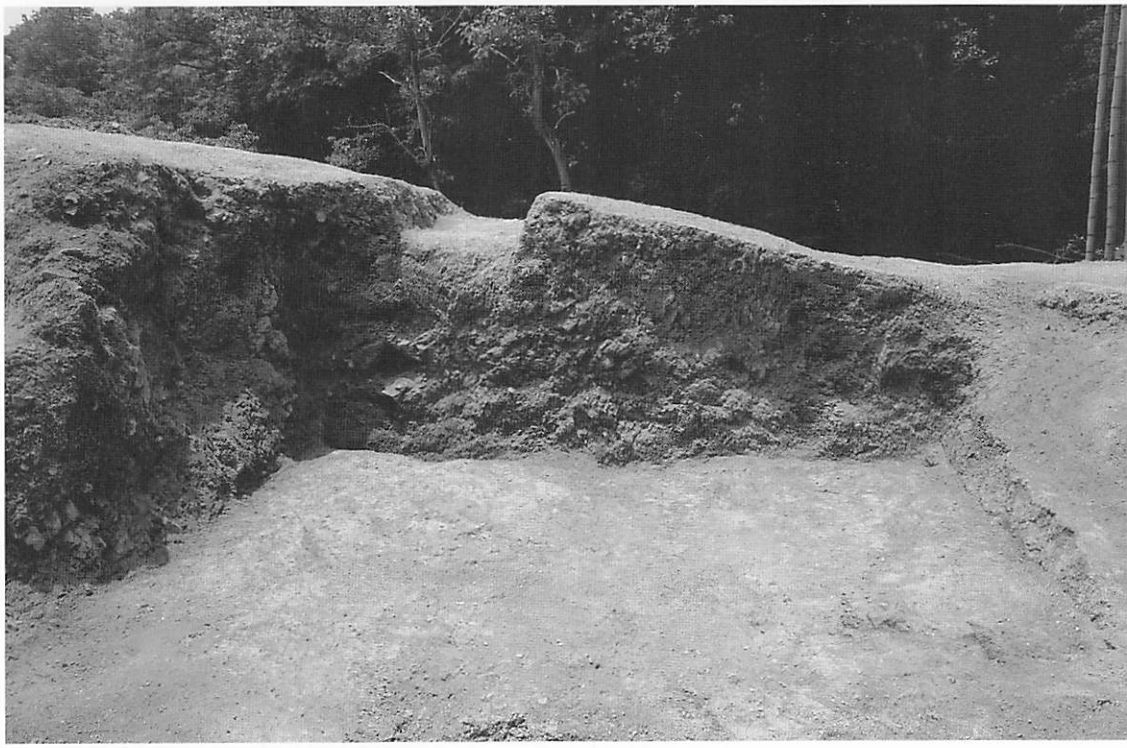
a　南東尾根ＳＤ１・ＳＸ１
完掘状況（北から）

b　南東尾根ＳＸ２土層断面
（東から）



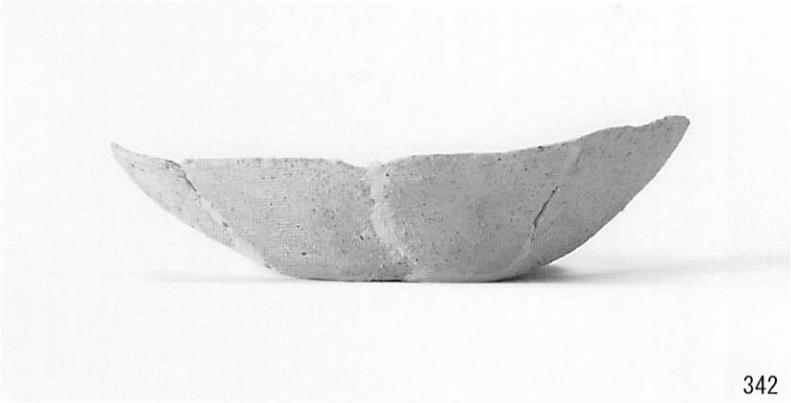
c　南東尾根ＳＸ２瓦出土状
況（東から）

a　南東尾根ＳＸ３土層断面
（南東から）

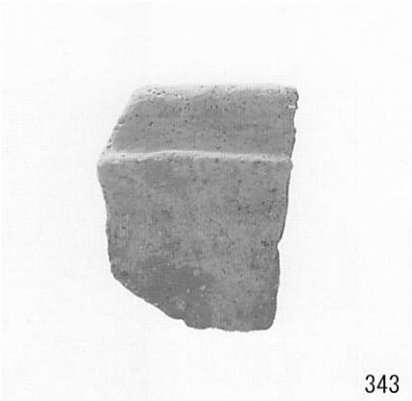


b　南東尾根ＳＸ３完掘状況
（北東から）

c　南東尾根ＳＸ３完掘状況
（北西から）

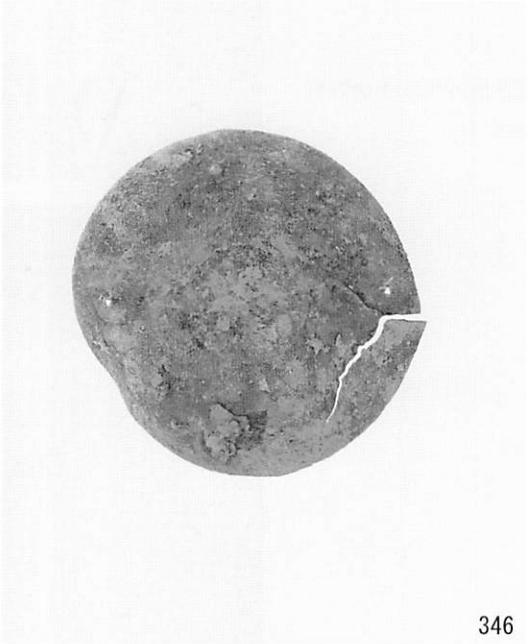


342

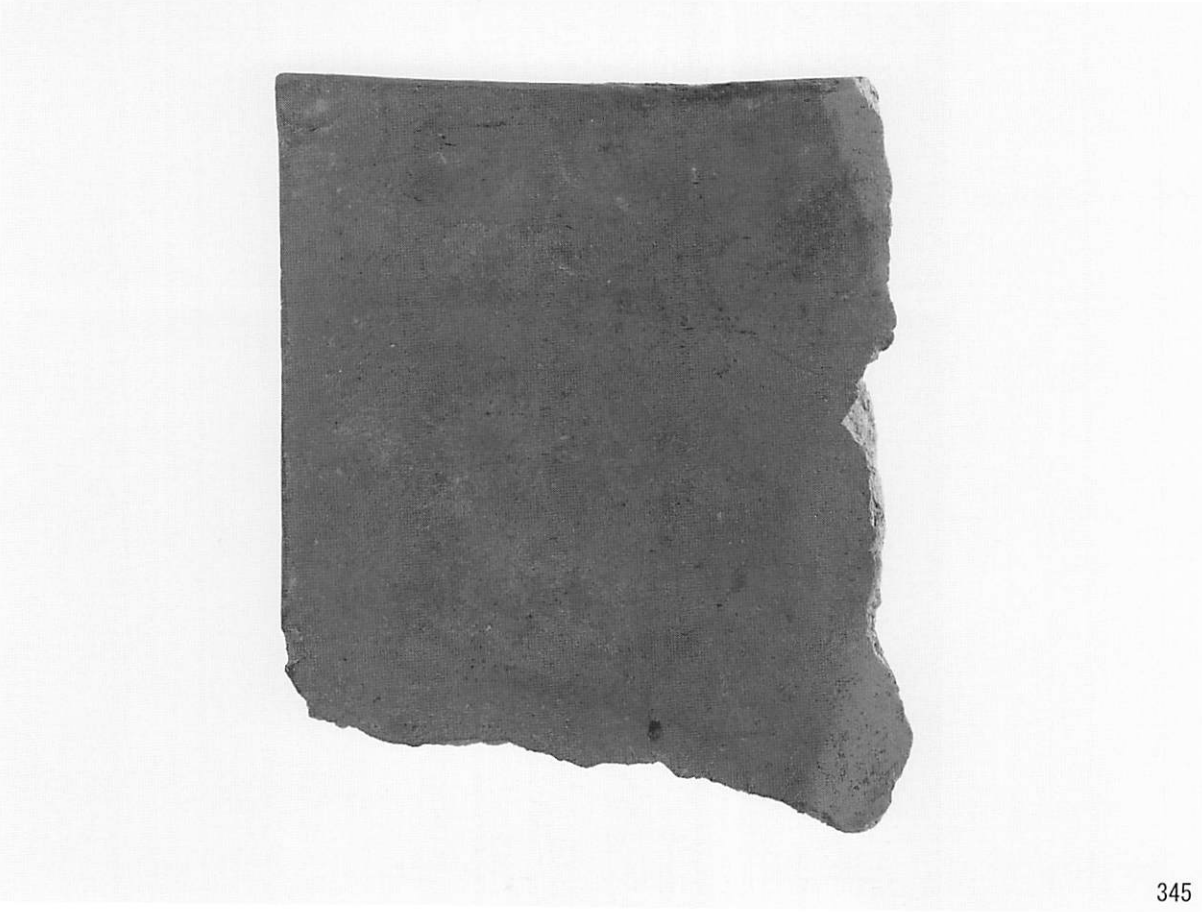


343

344



346



345

南東尾根出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	ちゅうごくおうだんじどうしゃどうおのみちまつえせんけんせつにともなうまいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこく　17
書名	中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（17）
副書名	家ノ城跡
巻次	17
シリーズ名	財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書
シリーズ番号	第40集
編著者名	岩本　芳幸
編集機関	財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室
所在地	〒733-0036　広島県広島市西区観音新町四丁目８番49号　　ＴＥＬ082-295-5751
発行年月日	2012年3月5日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	発掘原因
えのじょうあと 家ノ城跡	ひろしまけんおのみちし 広島県尾道市 きのしょうちょうきなし 木ノ庄町木梨	34205	34205-25	３４° ２８′ ２５″	１３３° １１′ ２２″	20030916～ 20031031	900	記録保存調査
						20040517～ 20040611	450	
						20051017～ 20051111	400	
						20060417～ 20060721	3,518	
						20070416～ 20070615	1,052	

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
家ノ城跡	山城跡	中世	建物跡５ 平坦面17 堀切２ 土坑38	土師質土器，瓦質土器，東播系須恵器，陶磁器，鉄鏃，兜片，銅製懸仏，古銭	14世紀中頃を中心とする，山城としては早い段階の大規模な城跡。庇を伴う大規模な建物跡や倉庫と推定される総柱の建物跡を検出。

要　約	本城跡は北から南に延びる独立丘陵の尾根上に郭を形成している。北側にあたる最高所平坦面（１郭）とその周辺，及び南東尾根の調査を実施した。１郭は標高126～130ｍで，周囲との標高差は38～68ｍである。長さ約60ｍ，幅約45メートルの広い平坦面であり，５棟の建物跡を検出したが，そのうち庇を伴う建物跡が２棟，倉庫と推定される総柱の建物跡が２棟である。土師質土器がまとまって出土しており，14世紀中頃を中心とする山城である。山城としては早い段階の大規模な城跡である。長期には使用されておらず，短期間のうちに数度の建て替えが行われているようである。１郭の北側には土橋を伴う堀切がある。１郭周辺の尾根及び南東尾根で平坦面を確認した。遺物は１郭を中心に土師質土器の皿・杯・椀・鍋の他，瓦質土器の鍋・火鉢・擂鉢，東播系須恵器の甕・擂鉢，亀山焼の甕，備前焼の甕・擂鉢，常滑焼の甕，古瀬戸の入子・卸皿，青磁の皿・碗，白磁の皿・椀・四耳壺・水注？，青白磁の梅瓶などが出土した。また，鉄釘・鉄鏃・兜片などの鉄製品，懸仏などの銅製品，古銭なども出土した

財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書40集

中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告(17)
家 ノ 城 跡

発行日　平成24(2012) 年3月5日
編　集　財団法人　広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室
〒733-0036　広島市西区観音新町四丁目8番49号
TEL(082)295-5751　FAX(082)291-3951
発　行　財団法人　広島県教育事業団
印　刷　株式会社エル・コ